
女鑑
第十六年

中形浴衣地新柄陳列會

來る六月一日より開會

豫て弊店に於て懸賞を以て募集致候中形浴衣地圖案により新に染め上げ候中形類をも陳列仕候間御來觀の程奉願上候

東京日本橋區駿河町

三越呉服店

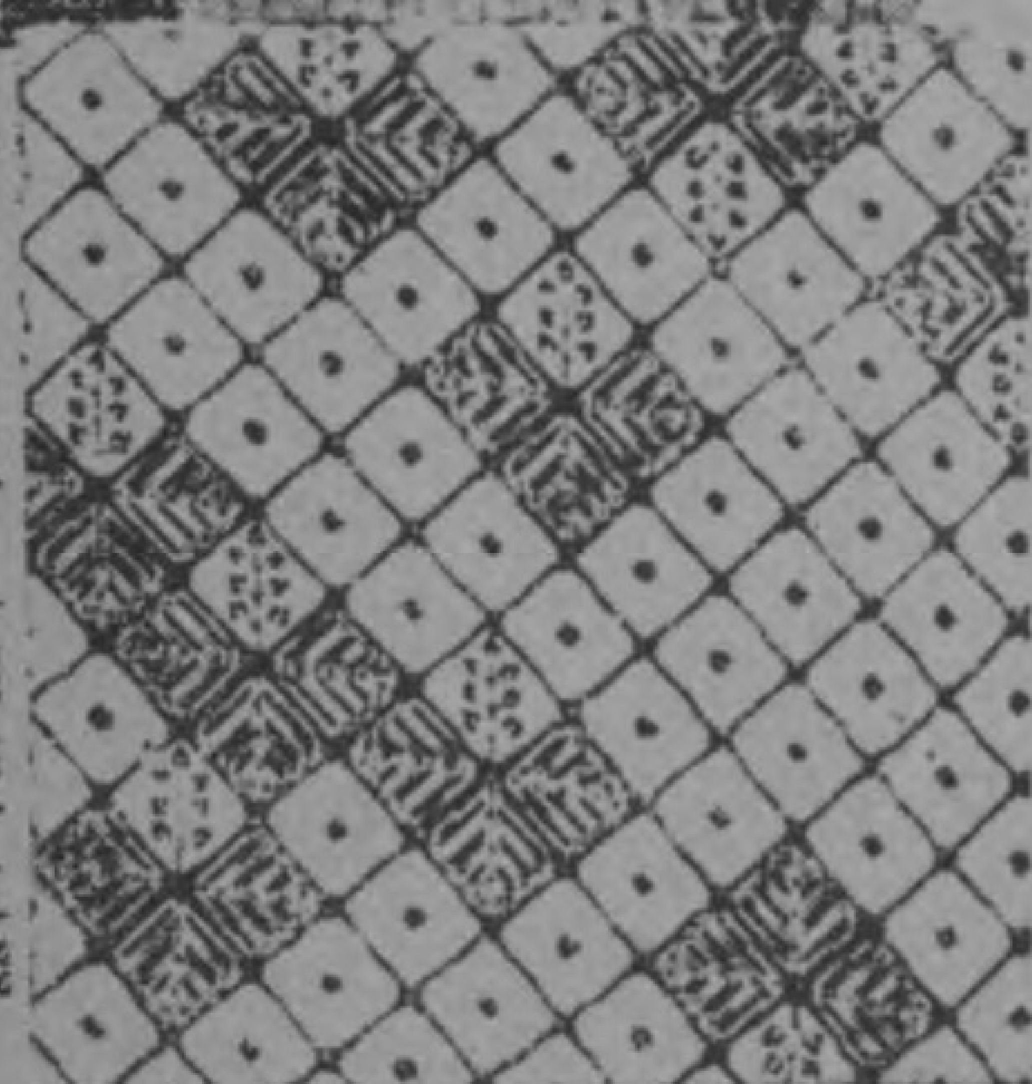
（新柄眞岡中形浴衣地の内）



（い）一反 一圓六十五錢



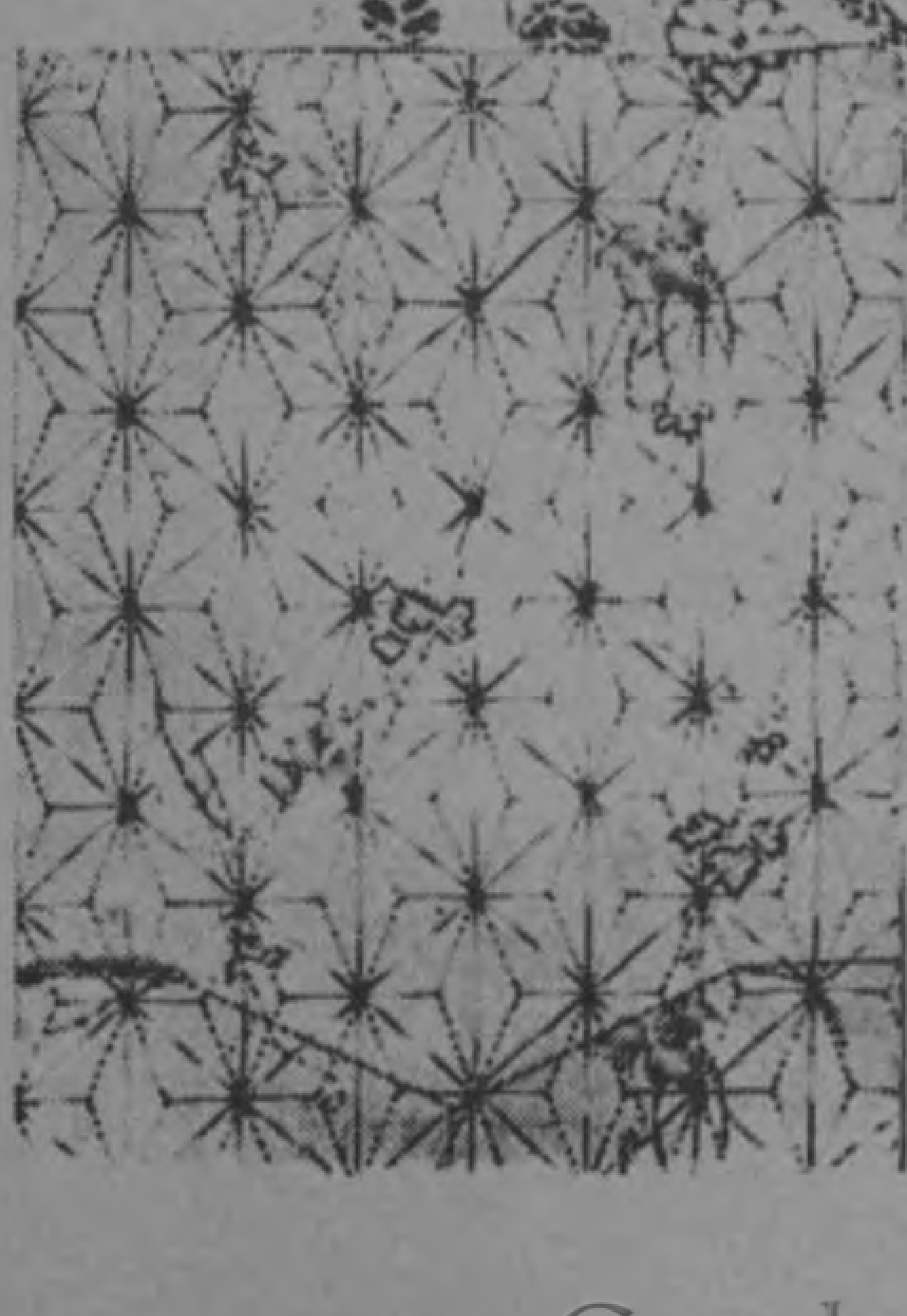
（ろ）一反 一圓四十錢



（は）一反 一圓七十五錢



（に）一反 一圓五十五錢



（ほ）一反 一圓四十錢

（圖は何れも尺幅と御了承被下度候）

西洋酒食料品
罐詰食器具類
●注文の際は多少に不拘迅速配達可仕候



清酒世界長壜詰
發賣元

日本橋區堀江町四丁目
(照降町通り)

高橋商店

電話浪花一五六二番

女鑑 第十六年第七號 目次

論說……一

夏は來れり、夏は來れり、撤兵期間に就て、
神聖なる文字
婦人に希望の二三　子爵 秋元興朝
予の良妻賢母論　男爵 細川潤次郎
人知らずして慍らず　麹町女學校學監 小川直子
兒童敎育……又一說

家庭……二

家庭所感　女子美術學校長 佐藤靜子
元氣よき家庭　女子師範學校敎諭 嘉悦孝子
稀有の慈善家　折柴閑主人
郵便切手の起源……小兒病と現今の注意……撮影後の
取扱方……美術家の三注意

社會……五

京阪地方の天地　學習院敎授女學部長 下田歌子
英國人夫婦の關[illegible]　淺田稻子

韓國婦人の風俗　看々小史
幸福なる岩佐家……靖國神社大祭と愛國婦人會……[illegible]
特なる老婆……韓國下婢……婦人の職業

文藝……三八

山僻如太古　文學博士 小杉榲邨
旅のつと　侯爵夫人 鍋島榮子
夏の旅　小出粲
折にふれて　佐々木信綱
胡蝶の日記(四)　白井千代梅
五月雨　喜久本游洲
今昔の鏡　桐畑今桂子

家事……四八

食物に就て　醫學博士 高木兼寛
豆類の滋養分　醫學士 三宅秀
乳の話　醫學士 牧忍
家庭理科　山下謙堂
子供の遊戯下　高橋久野
初夏の臺所　梅岡女史

商界に於ける女傑……宇都宮の貞婦……本年流行の單物地

小説……七七
東京土産……愛水 散士
遣唐式部（懸賞小説二等）……山田 和歌子
學子……（片岡浦子）

美術……八〇
紀念繪葉書に就て 齋藤 松州
宗教と音樂 女子音樂學校長 山田 源一郎
有樂流炭手前 東京裁縫女學校教師 田畑 夏子
神經質頭痛の療法……女鑑新聞……茶に招かれたる時

雑録……一〇一
勤勉の德 文學士 常磐 梢丘
今村裁判長を訪ふ 中川 愛氷
珽子内親王 三島 汀月
平時の覺悟 橘 絲子
應接時間 山田 素表
緑陰閑話 甲賀 女史

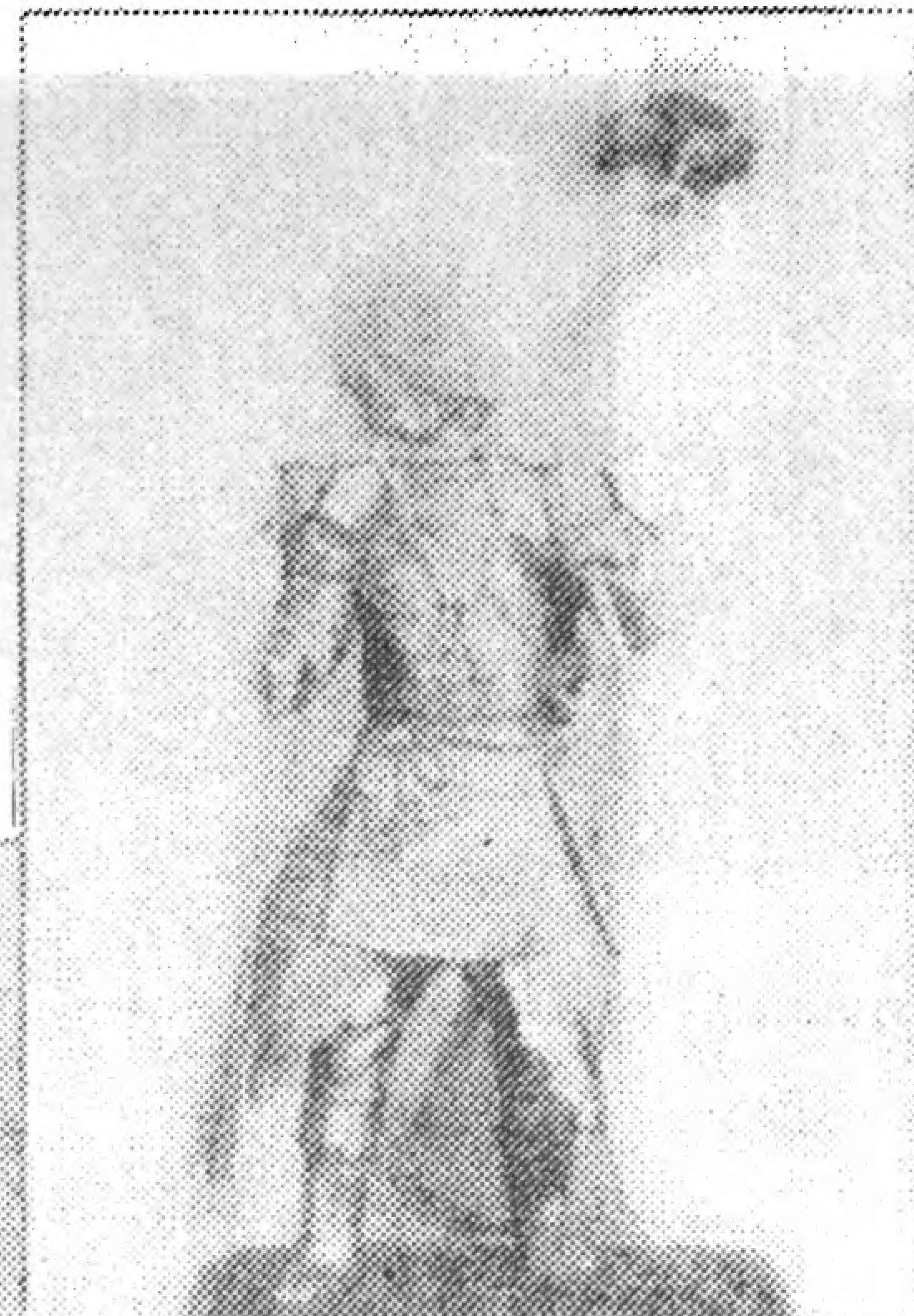
烈婦阿??の傳 介洞 散史
夏窓雑感 ?? 女史
新島の婦人 ?見 秋水
所謂新許法の實驗……婦人の探檢家……操行に就て聞けること……家庭上に就て聞ける事……女子??の況……橿原神宮の由來

學校……一二六
女子の教育 東京府視學 御園生金太郎
女子美術學校 舜水 女史
女醫學校の擴張……女子體操講習會……遊泳女子講習會……女學生と自炊會……韓國貴族女學校設立……珍しき老女學生……清國今後の女子教育……清國派遣女教師養成所……郵便貯金振替の事

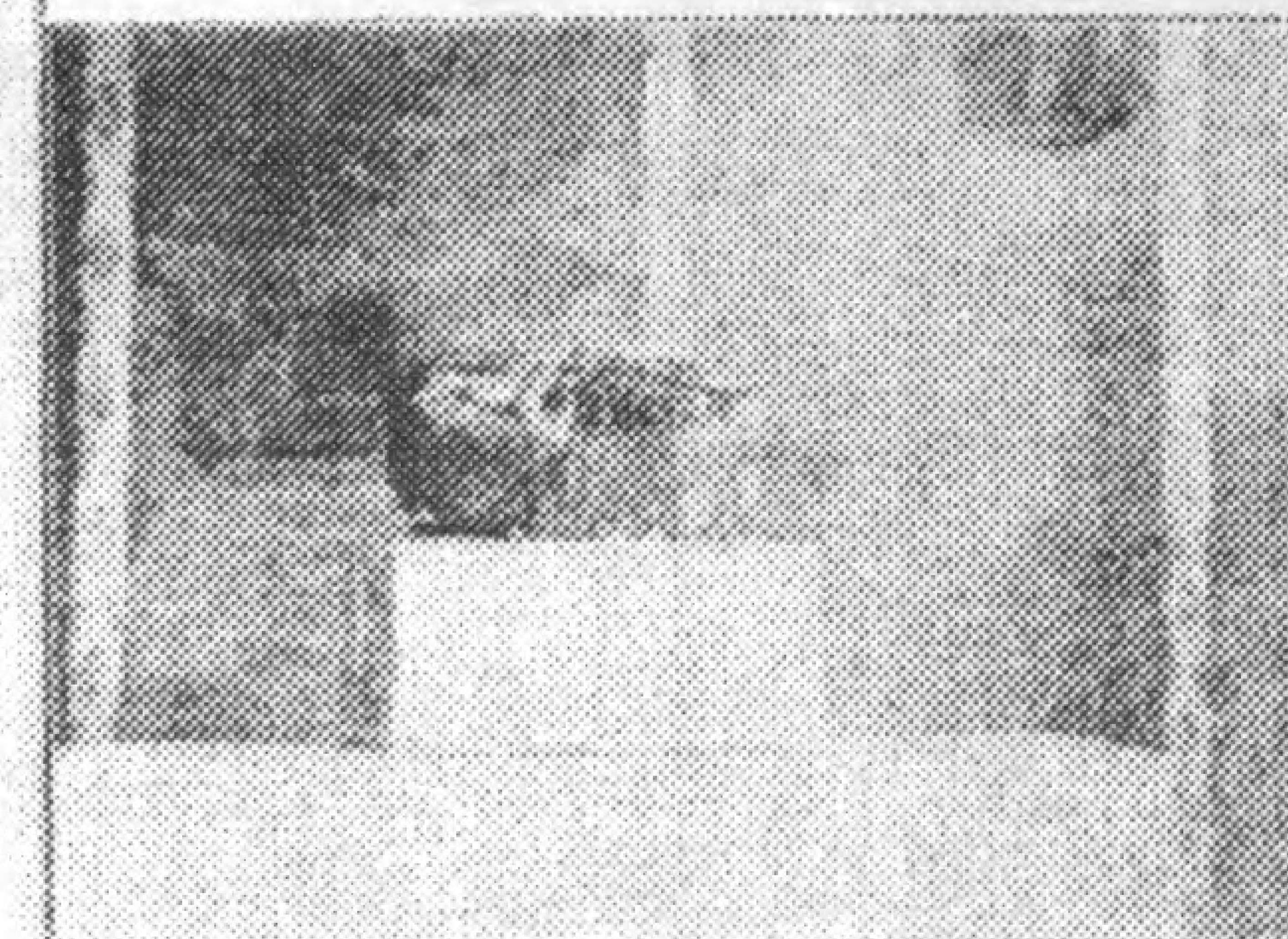
詞藻……一五〇
郭公、遠山松……男爵 千秋文學士撰
短文、和歌、新體詩、俳句 編輯局同人選

口繪
▽大和橿原神宮▽凱旋大觀兵式▽宮城前芝生の鹵獲砲陳列▽戰役紀念繪葉書▽佐竹侯爵並同令夫人▽小笠原子爵並同令夫人▽女子美術學校教室▽夏の箱根

神武天皇御銅像

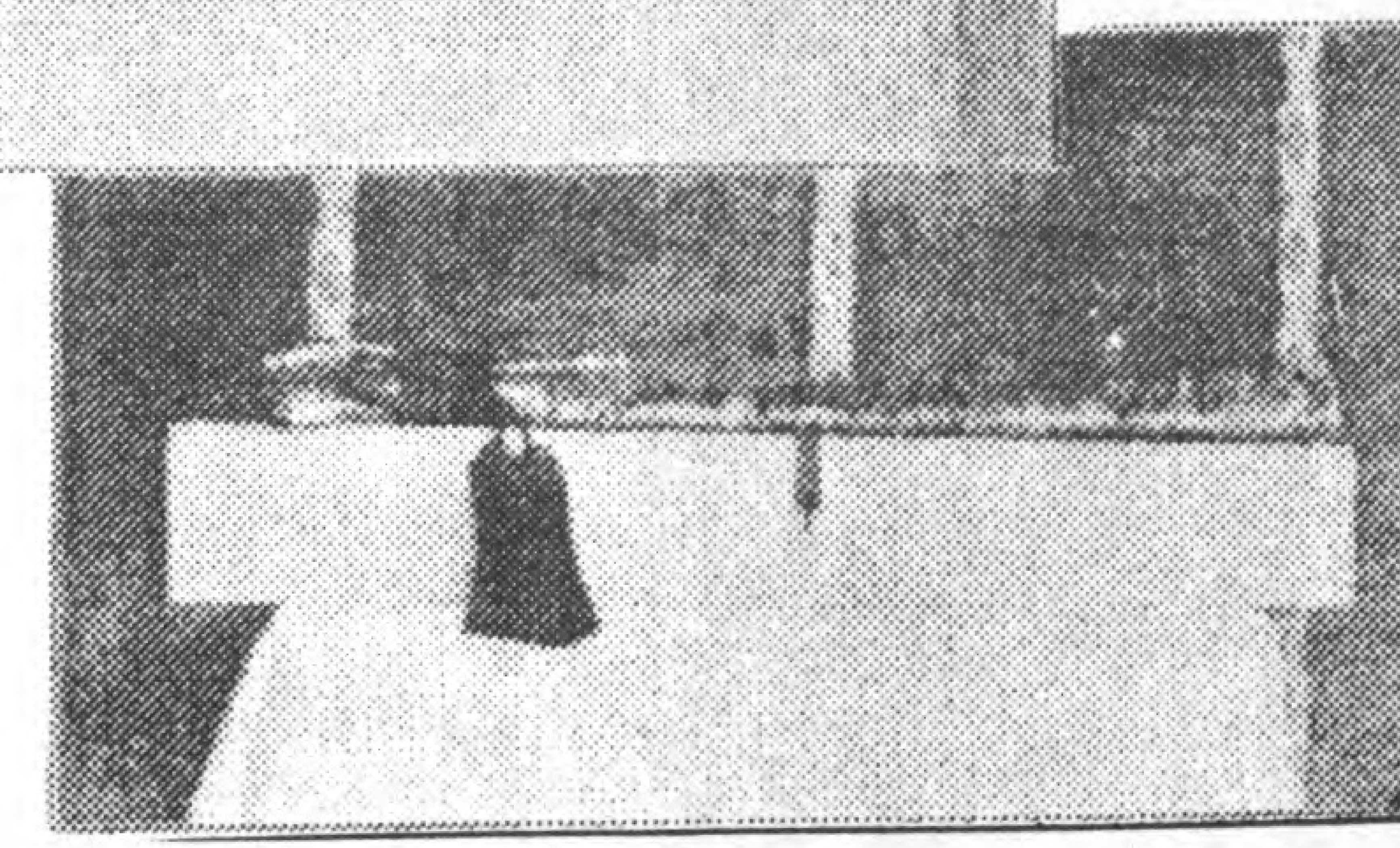


御寶物（皇后陛下御寄進の御鏡



神宮正門



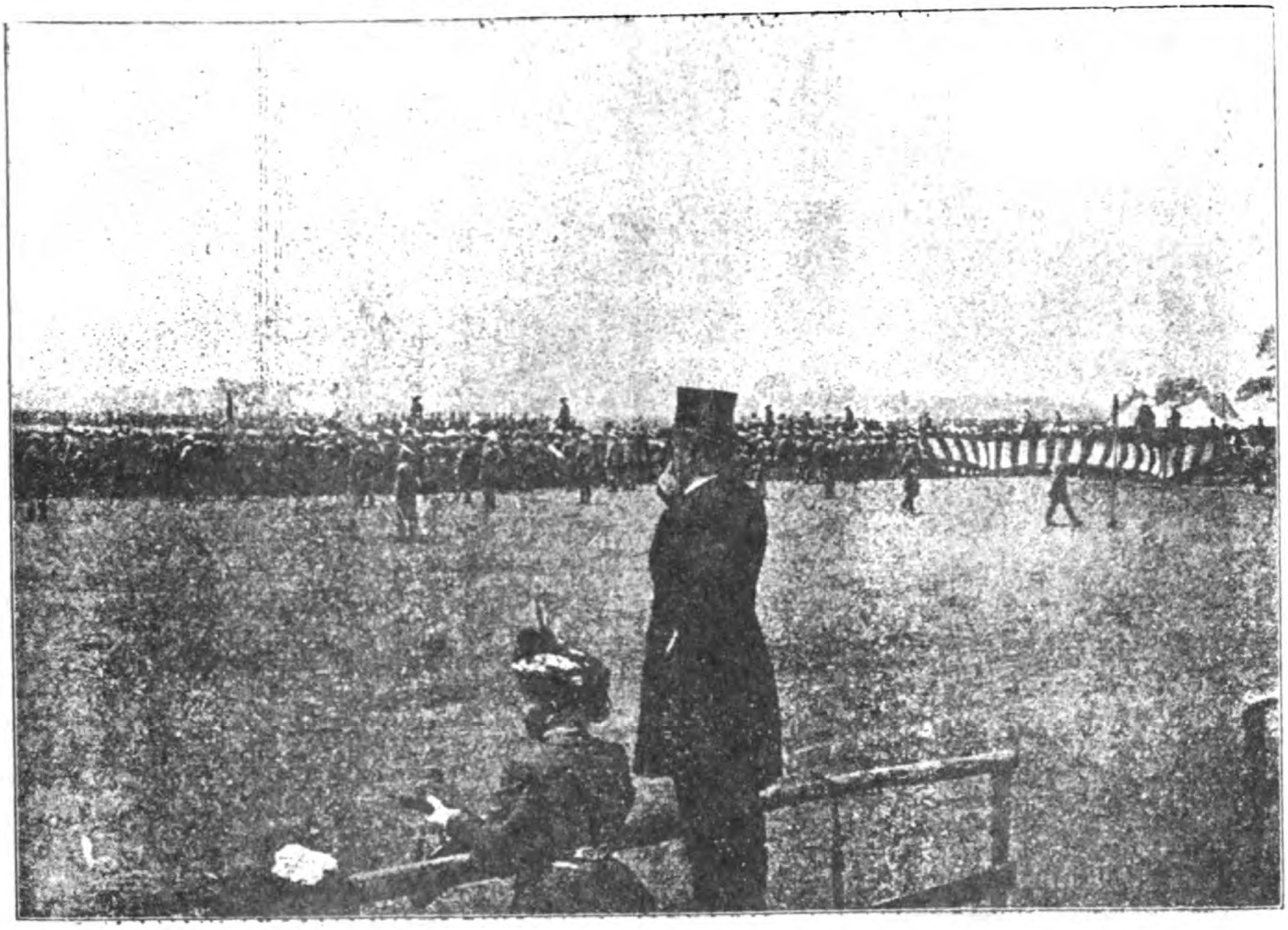


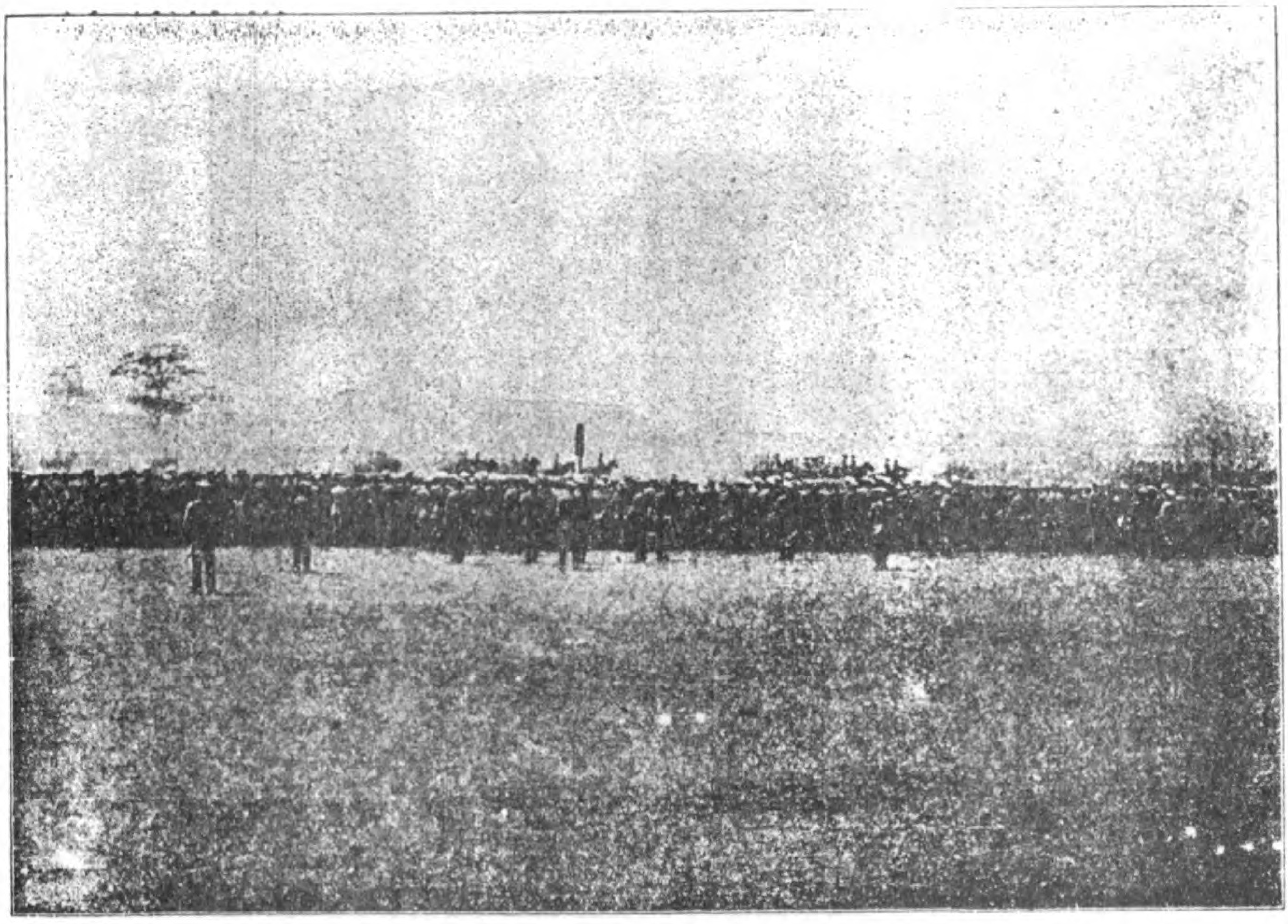
御寶物（陛下御寄進の御劍）



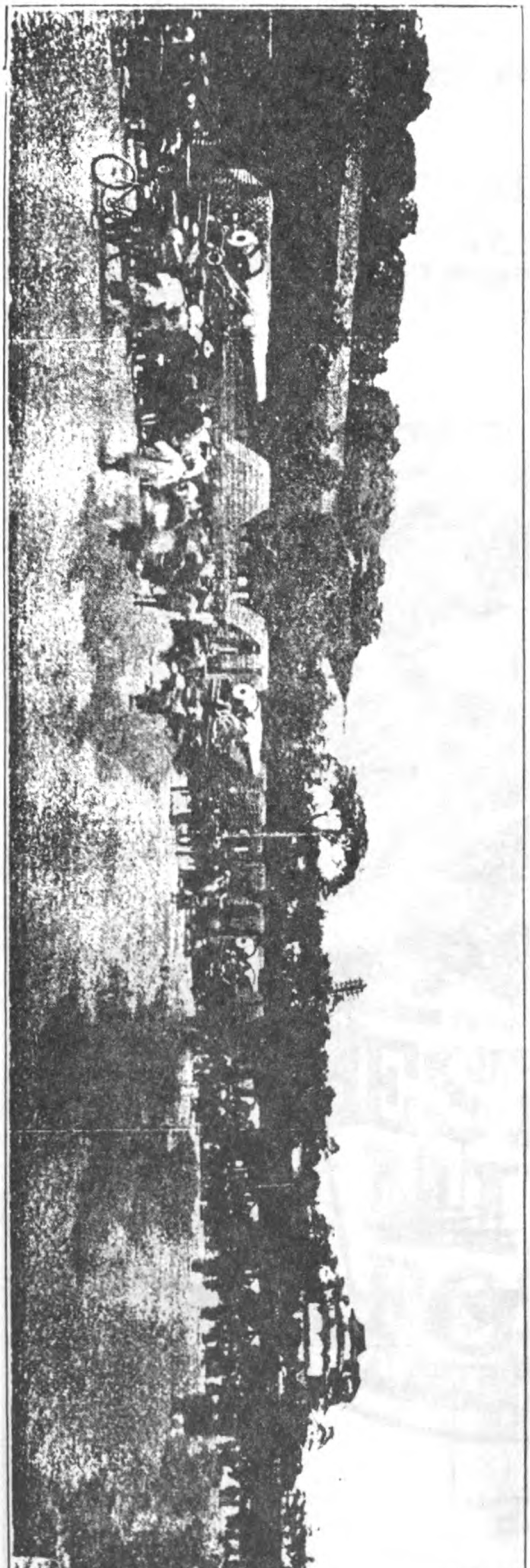
神苑鏡の池

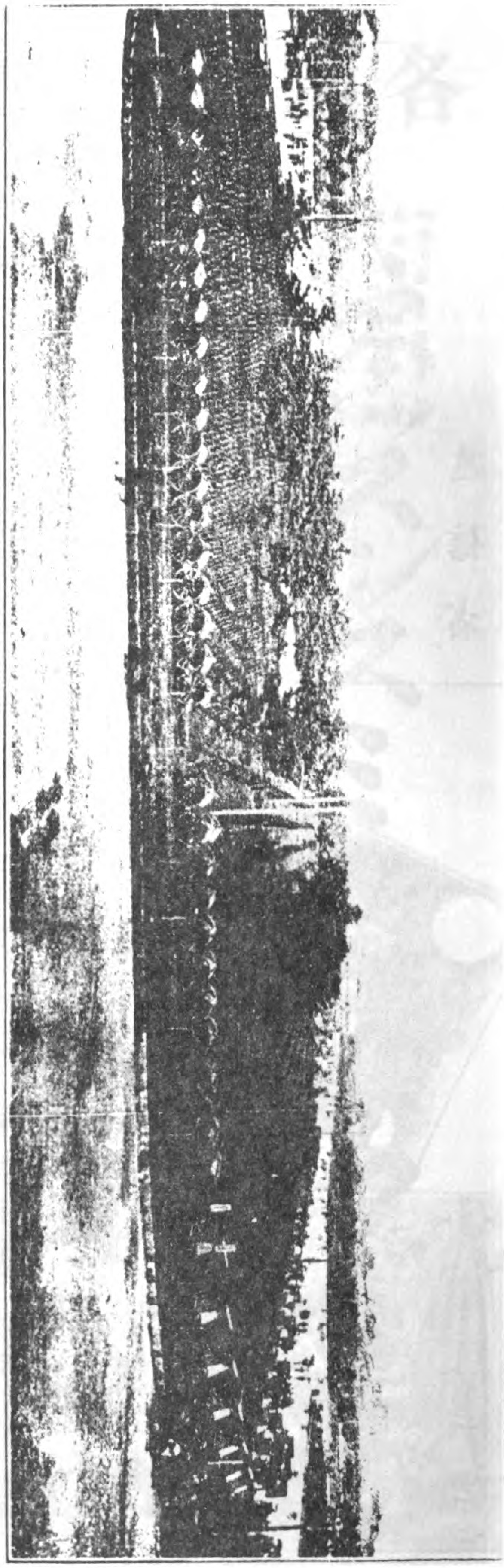
凱旋大觀兵式





徳川男爵撮影





列國艦提督の生芝前城宮

戰役紀念繪葉書



國語漢文界之二大寶典

文學博士内海弘藏著●

讀書作文辭典

本書は主として世の學生諸子が讀書と作文とに資せむが爲に著されたる特殊の辭書にして實用的ならむことを期するとともに又よくその根本的ならむことをつとめられたりすなはちその語彙は主としてこれを現時の學校にて讀まれつゝある讀本の上より拾ひ來りしかしてこれをその意義の上よりその意趣の上より丁寧に適切に解釋せられたり難語熟語成語故事有職に關する語より地名人名書名格言俚諺術語の類に至るまであまねく皆こゝに網羅せらる殊に本書がその特色として誇るべきは一語の下にあまねくその同意語反意語類語をあはせのせて以て學生諸子にその比較攻究の便を與へたるにあり稿を起してよりこゝに四年有半著者の苦心以て見るべきなり本書一たび出でゝ庶幾くば世の學生諸子をしてその意識的なる國語の智識を身に體するの實を完うせしむることを得むか

兩書内容見本 御入用の向は御一報次第送呈●

洋布製新式薄表紙美本四六判形舶來紙印刷
語數貳萬有餘●紙數一千三百頁索引附
定價金壹圓五拾錢
小包料金拾五錢

特價金壹圓貳拾錢●壹萬部限 要送料

文學博士三島中洲監修 池田蘆洲輯著

故事熟語辭典

本書は

一 普通の故事熟語の外に官職制度文體詩體書體書法詩句俚諺名數佛語俗語略字古字類字等を掲げ材料は極めて多方面に渉り

二 毎項意義出處の二欄を置きて之を説明し更に考異使用辨疑探原轉用條論の各欄ありて之を詳説せり

三 十三經二十四史諸子百家の書凡五百餘種の解題と其の參考書とを載せて讀書者の燈明臺となる

四 文字を以て説述し難き點は圖書又は表を掲げ百聞は一見に若かざるの感あらしむ

五 解釋は平易を旨として何人にも一讀の下に瞭然たることを得せしむ

六 最も索引に意を用ひ字音索引字書索引國語索引の三種を附したれば如何なる方面よりも容易に引き出すことを得

七 如上の外特色極めて多し讀書作文に志せる士は必ず一本を座右に置きて應急搜索の用に供せられよ

洋布製新式薄表紙美本四六判形舶來紙印刷
語數壹萬有餘●紙數一千二百頁索引三種附
定價金壹圓五拾錢
小包料金拾五錢

兩書共滿數後斷然復價

特價金壹圓貳拾錢●壹萬部限 要送料

兩書共製本既製

發兌元 東京市日本橋區本石町三丁目 大阪市東區備後町四丁目 寶文館

村井弦齋夫婦大に助力せらる

大好評

婦人世界

實用專一

六月三日發行　毎月一回　第六號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九拾錢　一年分一圓七拾五錢

口繪

◎伏見若宮妃殿下并若宮姫宮◎ナポレオンの家庭（珍品）◎愛國婦人會第五回總會光景◎名流最近の新婚寫眞（三組）◎名媛の筆跡◎滿洲の美人◎

彩色石版

徒然（つれづれ）……中澤弘光

庭の若葉　川面義雄

繪手本

紫陽花…跡見花蹊

春日の神鹿　中澤弘光

婦人の日常生活法

村井弦齋

▲容色は如何に整ふべきか
▲髮の油は何を用ふべきか
▲髮は如何に洗ふべきか
▲白粉は如何に用ふべきか
▲顏は如何に剃るべきか
▲心は如何に洗ふべきか
▲朝飯は如何に支度すべきか
▲菓物は如何に用ふべきか
▲朝の飲料は何を用ふべきか

▲髮は如何に梳るべきか
▲櫛は如何に用ふべきか
▲フケは如何に取るべきか
▲白粉は何を用ふべきか
▲婦人の美は如何に保つべきか
▲朝飯前は如何に過すべきか
▲朝飯には何が宜きか
▲何の食物が皮膚の色を白くするか
▲牛乳は如何に飲むべきか

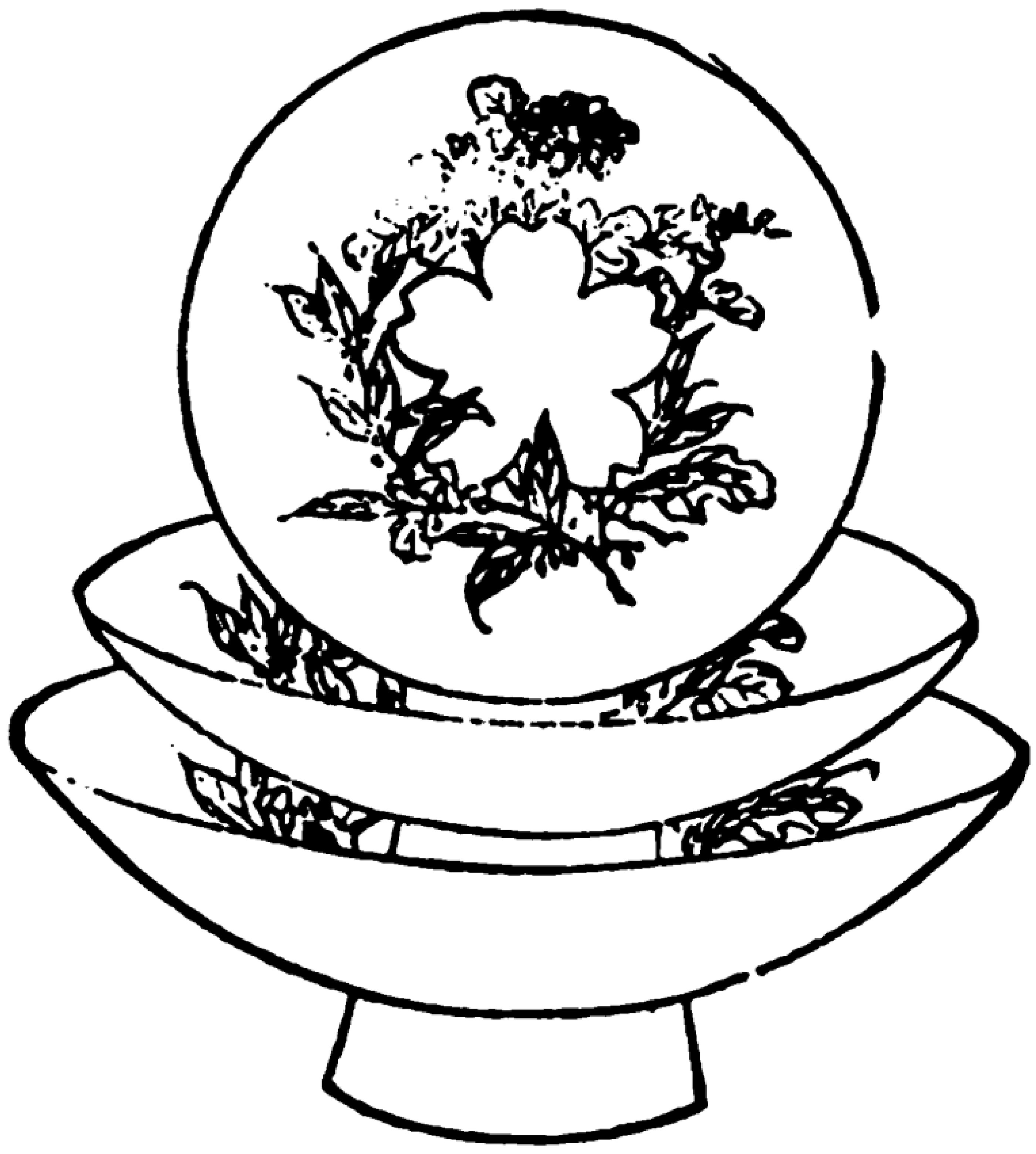
右は村井弦齋氏が全國婦人の為に心血を濺いで起草されたる實用的大文字

◎娘の結婚に就き母親の心得
◎田尻博士の家庭◎嫁入道具
◎家庭用器具の新形　理學博士 鶴田賢次
◎寡婦の鑑小川房子刀白……
◎小兒の病氣を知る法　ドクトル 加藤照麿

◎弦齋夫人の苺料理談　天麩羅 葛煮 ケーキ 菓子……
◎婦人と指輪◎蚊と衛生……
◎子宮内膜炎の話…伊庭醫學士
◎苺の話恩田農學士◎豆腐の話牧農學士◎女子と體育（井口あくり）◎襁褓乾燥器◎小説◎流行◎讀者文藝…

發兌元　東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社（電話新橋八七四番）　賣捌各地書店

金銀盃類



尙又各種紀念徽章類
嶄新なる意匠を用ひ
何程多數の御注文に
ても迅速に特別廉價
を以て調進仕候

東京市下谷池の端仲町
宮内省御用達　玉寶堂
電話下谷　特九六五番
　　　　　一二四四番

佐竹侯と同令夫人





小笠原伯と同令夫人



女子美術學校教室

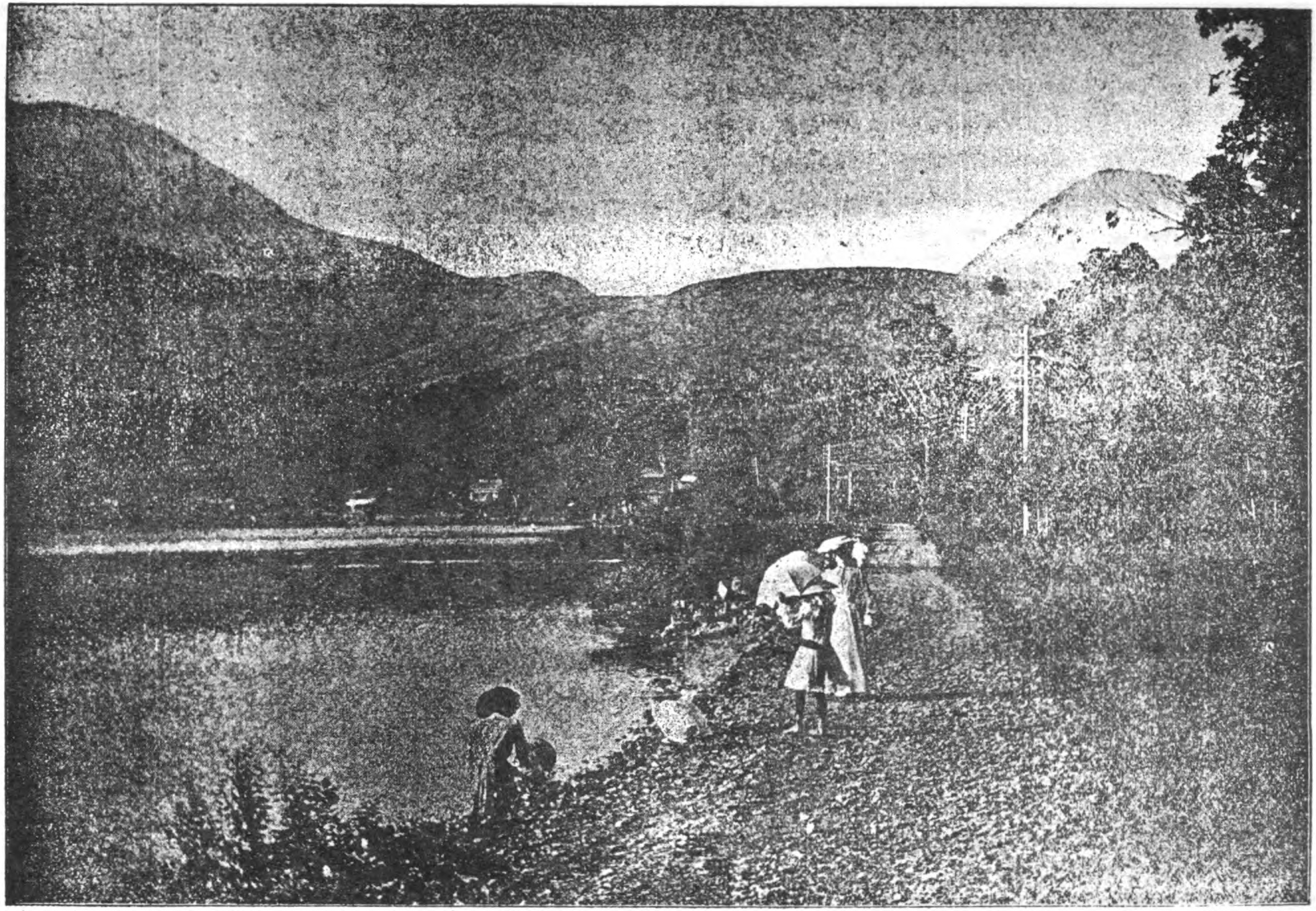


繪畫の教授



繪畫の展覽

夏の箱根



徳川男爵撮影

第五回博覽會褒狀受領

定價 壹袋壹錢
罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居桝形の登録商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也

東京淺草區黑船町
梅素亭謹製
電話 下谷 二三四


有隣
生命保険株式會社
東京日本橋區南茅場町四十四
電話特浪花一四一 浪花一一八○


ヒゲタ印醬油
HICETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
田中玄蕃



第十六年　女鑑　第七號

夏は來れり　夏は來れり

文明は造物主の豫算を狂はせて、春秋の花を咲かせ、秋梅の實を結ばせることも、さまで不思議のことにあらずなりて、冬の筍孝行の種にならず、夏の女盛り女郎花咲くといふ世の中になりたれば、何時より夏に入りしかは、四邊の景物にては知り難くなりたれど、若葉を吹く風漸く肌に快くなりて、けふより一重の衣を身に纒ふやうになりたれば、夏らしき夏はこれより初まるなるべし、愛すべき夏よ、人の心も夏の如くなれかし、事に當つては金石をも溶すべく、草木もしほれしむべく、而してえならぬ松風の調、池にやどれる月影の、底の心のすゞしさを、身にはしめて、

廢兵慰問に就て

凱旋大觀兵式の盛んなりしにつけて、靖國神社招魂祭の盛んなりしを思はゞ、幾萬の將士が、忠戰勇鬪の狀、眼前に往來して、喜悲の念こもごも起るを奈何にせん、而して一は畏くも　天皇陛下の御前に於て凱歌を奏し、一は畏くも　天皇陛下の御親祭を辱うせらる、生者は益々忠を勵むべく、死者は瞑して千載に勇を傳ふべし、

さるにても吾人の同情の念に堪へぬは、忠戰勇鬪を身體に紀念したる、廢兵諸君の身上なり、諸君の中には、廢兵となるも、家裕に、交廣くして、身體精神ともに、比較的安らかなるものあるべし、されど向ふ疵一つさへ武士の勳章として誇るに足るべきを、身體殆んど餘す所なき迄に負傷したるものにして、朝夕の生計にも困み、氣焔のあがるには餘りに距離の遠きもあるべし、身既に自由を缺げば、他に不足なきものにして、猶不足をのみ感せらるべきを、身は廢兵となり、家は貧に苦むに至つては、實に寸時も棄置くべからざる慘事也、人は大觀兵式に狂奔する時、人は大招魂祭に涙拜する時、亦忠ひを大に茲に馳せざる可らず、

而して多くの廢兵中、前述の如き悲境にあるもの尠からず、而もそれに對する慰問の道は、甚だ開けざるが如し、此時に於て、代議士山根國手は、廢兵慰問會を起し、世の同情に訴へて、此點に於て遺憾なからしめんことを期せらる、まことに其時と其事を得たるものにて、君の性行と、其の事業は、其の成功を疑はしめざる也、

云ふまでもなく、廢兵は我等に代つて、今日の不幸を見たる人々なり、我等同胞はこの不幸を慰むる義務

あるなり、もしこの不幸者を慰むる道に於て缺ぐる所あらば、我等の同胞は不人情の連帶者たるを免れざるなり、速かに慰問せよ、而して之を永續せよ、また之を慰問するに敬意を以てせよ、報恩の如くせよ、吾人は廢兵といふさへ、既に禮を失する如く感せらるゝ也。

仁慈の心に富める我女鑑愛讀者諸孃は、定めて記者と感を同うせらるゝなるべし、幸に廢兵慰問會は起れり、願くば一臂の力を同會に與へて仁慈の涙を廢兵と稱する、敬すべき不幸者の上に濺がれんことを、

神聖なる文字

神聖といふ文字大に流行して、近時其全盛を極む、勞働神聖、藝術神聖、戀愛神聖、その他神聖は橫行して目を突くほど也、人の此世に生れては、少くも此三つを神聖なるものにして、勞働せざるべからず、藝術も研かざる可らず、戀愛も可なり、

然るに神聖呼ばゝりをするもの、あまり神聖ならぬが多し、勞働は神聖なるが故に、如何なるものを撰ぶも可なり、されどその仕方によりては不神聖ともなるべければ、勞働をすれば、直に神聖なるものと云ふは早計也、殊に戀愛に至つては、神聖呼ばゝりする事甚だ危險なり、戀愛の美は貞節ともなりて、神聖とも云ふべけれど、下手に戀愛すれば、頗る不神聖の出來事あるに至るべし、殷鑑遠からず、野口事件に見よ、神聖とはかく恐ろしきものにや、

正しき道を踏みて此世を渡らば、殊更に神聖と斷らずとも、勞働をすれば、その勞働は直に神聖となるべく、藝術を研きなば、その藝術は直に神聖となるべく、戀愛をすれば、その戀愛は直に神聖となるべし、決して神聖は、なまけもの、うはきもの、の道具に使ふべき文字にあらざる也、



婦人に希望の二三

子爵　秋元興朝

婦人の讀物に就ては、今日の時勢、何でも廣く見るに限るのであるが、もし讀む方がよいか、讀まぬ方がよいかといへば、小説ならば、文學を以て世に立つものは別問題として、普通多數に向つては、まづ讀まぬ方がよからうと思ふ、個人本位主義の方針から行けば、戀愛神聖を稱へるも結構であらう、併し吾人の希望する良妻賢母とは少し風變りとなり、戀愛鼓吹は具體的に寒心すべき結果を見ることであるから、擇んで讀むやうにすれば害はないが、理想と境遇の高所にある人の外は、まづ讀まぬといふ方が安全の策らしく思ふ、

そこで如何なる物を讀めばよいかと云へば、これは婦人に特に希望することで、外國語を學ぶことである外國語といへば際限のない事であるが、先つ差當つて英佛二ヶ國の語でよからうと思ふ、上流の婦人で外國人とも交際をする、また外交家の夫人などは、素より外國語を學んで置かねばならぬことであるが、それほど直接必要を感ずる人でなくとも、追々我日本も評判が高くなつて、觀光ばかりでなく、日本を慕うて渡來する外國人が次第に多くなる事であらうから、商賣をするにしても、大に外國語を學んで置くこと

の利益を認められるのである、それも外國語を學ぶに、あまり天才の乏しい人は、學ぶ本人もそれほど利益もあるまいが、社會もまた不得策である、全體語學の上に於ては、男子より婦人の方が、外國人が日本語を學ぶにしても、著しく成績がよい、即ち婦人が一體に語學に於ける天才を有つて居るといふても宜からうと思ふので、時間に餘裕のある限り、婦人の小説を讀まるゝといふに正反對で、語學研究を希望するのである、

次の希望は、今急に行はるゝ事とも思はれぬが、宿題として提出して置かう、戰勝後の日本へ、觀光其他にて渡來する外國人を相手の利益はといへば、ホテルを建てるといふことも第一に指を折るべきものであらう、さてこのホテルに外國人を止めて見て、何が外國人を樂ましむるものぞと云へば、さし當つて、その樂ませる仕度がない、殊に夜間を退屈するさうで、一方にホテルが出來ても、此の準備がなくば、十日足を止めやうと思うても、相手は五日で歸る、日本の風景、風俗、及び或目的の下に研究するものゝ外は現時の有様では、演劇も音樂も、外國人を喜ばすに足るものはない、そこで當分外國首都に於ける、第一流といへばむつかしい事であるが、二三流位の俳優音樂師を雇入れて、暫時欠陥を補うて置いて、何か之に代ふる文明的の娯樂を、或方面の婦人に向つて、供提せられんことを希望するのである、

予の良妻賢母説

男爵 細川潤次郎

爰に一つの注意すべき事あり、此良妻賢母といへることを狹隘なる意義に解釋すると、廣濶なる意義に解釋することと是なり、狹隘の意義に解釋するときは、婦人の事業の範圍從つて狹隘となり、廣濶なる意義に

解釋するときは、婦人の事業の範圍も亦從ふて廣濶となるべし、我輩は固より廣濶なる意義に解して婦人の事業の範圍の廣濶ならんことを望む者なり、蓋し、狭隘なる良妻賢母は、幽閑貞靜にして、言行を愼み、家事を處理するに勤勉にして、能く子女を監督して、終始一徹なる時は、他人の非難を受くべきやうもなく、完全なる婦人たるに恥ぢざるべし、然りと雖も、其人の事業は、此に揭ぐるのみにして、其範圍猶未だ狭隘なるを免れず此を以て婦人の職分已に盡きたりとすることを得ず、方今の世に至りては、前日と違ひ、男子の事業の範圍頗る廣濶なる如く婦人の事業の範圍も亦甚廣濶なり、其中軍人となり、或は官吏となるが如きは男子の專有とも云ふべきことを得べけれど、其他の事業は大抵婦人の從事すべきものにあらざるはなし、農工商の事業の如き、敎育事業の如き、慈善事業の如き、文學技藝の如き、苟も其事に習熟して實業家敎育家、慈善家、文學家、技藝家と稱せらるゝやうになりて而も能く女徳を全くするときは、我輩の所謂良妻なり、賢母なりにして、廣義なる良妻賢母なり、婦

兒童の敎育

人生の將來に如何ほどの影響を及ぼすか、幼時自分の爲た事を想ふて見ると、四歲頃の出來事は一つ二つ知つて居るが、多く記憶に殘つて居るのは六歲以後のことである。そんなら六歲以前のことは人の將來の上に影響はせざるかと云ふに、決してそうではない。無論意識して居る點はないかも知れぬ、けれども精神作用の基礎は此時代に置かれこれが將來の運命に多大の影響を與へる。要するに幼時は精神流動の基礎をなすのである。經驗によれば幼時に覺へたもの程忘れぬ、而して遲く覺へたもの程忘れ易い、恰ど其覺へる方と、記臆する方が反對になる譯です。六歲以後の生活につき溯て考へて見ると、隨分面白いことが思ひ出される、之を事實に就て申と、四書の暗誦と云ふことは、其頃の敎育法であつて、其後新文明の空氣流入すると共に廢り、明治の新時代に入りては、四書などはつまらぬものとして棄て去つて終まつて、其中に於て在る事柄も忘れた、がこれは唯一時であつて、或年代を經てから見ると、其時代のことは忘れても、敎はつたことを

人の事業の範圍廣濶なるものなり、

凡そ、婦人に敎育なかるべからずと雖も、若し狹義なる良妻賢母を養成するためには、敎育の程度も單純にして事足るべきも、若し廣義なる良妻賢母を養成するためには、敎育の程度も亦從ふて複雜ならざるを得ず修身は勿論、習字、算術、國語、漢文、歐語、内外國の地理歷史に至るまで、尋常もしくは、高等小學などの程度に止るべきものにあらず、複雜なる敎育を受けて後、始めて複雜なる社界に立ち、百事を處理するに錯誤なく、澁滯なく、啻に其良人子女を助くるのみならず、便益を他人に及ぼし、社會の幸福を增進するものは、彼の狹義なる良妻賢母に比すれば其功德更に大なるものなり

世の人或は以爲く、良妻賢母と曰へる詞は、恰かも男子を賞美して良夫賢父と曰ふ如く、未だ以て男子の技倆を盡すに足らず、故に男子の賞美すべき名目は、種々あるが如く女子の賞美すべき名目も良妻賢母に止まらざるべしと、此れ固より一理あることなり、女子を賞美する詞とても、淑女も貞女もあり、烈女もあり、節女もありて、其事業によりて、種々の名目あるべくして、固より良妻賢母に止まるものにあらず

想ひ出し、而して段々興味が出てゝ來る（其時はたゞ譯わからずに暗誦したので、之を以て見ると、人の習慣といふものは實に世の人の生涯の基礎を爲すものだと云ふことが明かであります、西洋邊では幼時より敎堂に出席させ、また聖書を暗誦させる慣はせですが、これが成長して後、大なる勢力をなすのである。併し若し成長して後是に反するならば、其處に所謂煩悶が起つて來るが、槪して幼時に知つた事と云ふものは中々強いものであるから、大抵の事に解決し遂に之が最後の勝利を得る、我國の例を見るも恰と同一です。是等を思ひ合はして見ると、宗敎は道理を以て說くよりも、少からぬ勢力がある樣に思はるゝ。

併し斯樣に幼時から敎へ込むのはよいが、他の方面から見ると幼兒に敎へるといふことは、何年經つても變らぬことは慥かであるけれども或る一派の信仰にかゝる事柄はどうかと思ふ、唯だ余が云ふ處は、幼時から習慣をつけると云ふことで、これが其兒の將來に大なる影響を來すと思ひます（元良博士の談片）

上にも曰へるが如く、實業家にても、教育家にても、慈善家にても、文學家にても、技藝家にても、各々其長ずる所を以て、名を成すことを得べし、而して猶良妻賢母たることを失はず、或る人は此の人をば、良妻賢母に非ず、所謂良妻賢母は此の如き事業をなし得ざる者と思へり、此即ち狹義なる良妻賢母なり、此の如き道理により我輩は舊に依りて、世の未婚の女子に望むに、他日の良妻賢母を以てせんとす、然りと雖も、天下の賢婦人は悉皆良妻賢母とは曰ふべからず、良妻賢母にあらずして賢婦人と稱すべきもの往々之あり、彼の和氣清麿の姉法均尼の如き、近日の人にて近衞家の老女村岡の如きは夫なく子なき人なれば、良妻とも賢母とも曰ふべきやうながるべし、此等は所謂例外の事にして、一般の事にあらず、良妻賢母の語は、一般の婦人に望むことにして、特別の人に望む事にあらず、此事も序ながら辯じおかざるを得ず。

人知らずして慍らず

麹町女學校學監　小川直子

おのれ數ならぬ身にしあれど、若き程より教の道にかゝづらひて、あまたの少女達を生ほしたて來つるが先づ其始は我古里なる、石川のあがたにて、明治の六とせきさらぎの頃、金澤の松が枝町といふ所に、松原學校といふを設けられたれば、爰よりあまたの少女達をつどへて、教ふる事とはなりぬ、夫より爰かしこの學校どもにかゝづらひ、鳥が鳴く東の果なる陸のくにも、打日さす西の都の淸らかなる加茂の川瀬の汀にて、教の庭も廣やかに、いとうるはしう設けられたるにも、十とせの程數へたれば、其少女だちの業卒へぬるが、年ごとにあまた有つれば、今は其數かき數ふべくもあらずして、おのも〳〵志す方に身をよ

せられ、あるはとつぎたるもある中に、其心を氣高うせまほしとて、やむごとなき宮づかへに出たゝれたるもありて、其人のこゝろざしのまに〳〵ものせらるゝそが中には、幸多くて心やすらかに年月を送り、子達あまたもちて、樂しめるもあまたあれど、また幸うすき人もなどかなからん、折にふれ時につけつゝ、とふらひ來て、何くれの物がたりどもせらるゝは、皆親子のごとく思ひなすどちなれば、世に呉竹のうきふしも、嬉敷ふしも、心の底に殘す事なう、かたらるゝが、大かたは此世の中をうれたみ、今日の我身を苦しとて、師の君よいかゞはせむ、わらは此ほどよりある學校に入り、教の道にかゞつらひ、心を盡し、ちからのあらん限りつとめつゝ、朝は木草の上の露と共とくおきいでゝ、人よりも先に至りつきて、そこらあらゆる業ども、萬に心しらひをし、萬につけて便りよからんやうにと計らひつゝ、ひと日だに怠りし事もなく、心をのみ盡し居れど、誰ありて御身は能くつとめらるゝとねぎらふ人もなし、余所人の中には、朝は人よりもおくれてのぼり、夕には萬の事ども人にまかせて歸さのみいそがるゝがなきにしもあらねど、これはた咎むる人もなし、あはれ世は甲斐なきものよなど歎かるゝがあり、また宮づかへなどする人は、身はうるはしき玉の臺にたち馴るゝことにしあれば、いとも〳〵かたじけなう、そこら見きゝ奉る事どもゝ、やむごとなき事のみなれば、すぐ世さへ嬉しう、はたつかふる君はかしこくも、いとねもごろなる仰ごとなど賜ふ折もあれば、齡ものぶるこゝちして、つきせぬ樂しさなれど、猶世はうしとわびしとかこつ事のたえせぬならひにて、口さがなき少女達の中に、日を經るわざにしあれば、我には夢にも知らざる事を、さもありげにしりうごつ人もありて、口をしうおぼゆる時もしば〳〵あれど、これはた誰にかかたりあはせん、ひとり胸の中にこめ置つゝ、あかし暮すほどに、をり〳〵は古里なる親はらからをこひつゝ、なつかしみて、心ぼそさのやらん方なく、思ふ時もあるを、いかゞはせむなど打しをたれて、露け

く見ゆるもあり、又ある人はおのれ敷島の道はたど〱しくこそあれ、年頃學びたれば、いにしへ人の歌などもあまた知りつゝ、何くれと此道につきての事どもは、をさ〱人にも劣らじと思へど、今の世のおぼえ花やかなる、みやびの君たちにたちまじりては、いたう氣おさるゝ事多くして、口をしくおもふ折々なきにあらずなど、うれたげにいふもあり、おのれの思ふには、これ皆人知らずして慍らずといふ理を自得せられざるよりのもだへならん、眞の道にあきらかなる成德の人は、世のために我身の分を盡すも、學問をはげむも、おのれにありて人にかゝはらず、善をなすも同じ事、道を盡すも同じ理にて、萬の事を勤むるに、事々皆おのれの道を盡すより外に意なくして、初より人にかゝはらず、己ひとり道を樂しみつゝ、人の知ると知らざるとはいさゝかも慍ふる事なし、かゝる君子は識見高尙なれば、人に知られずとも、我に損害なきを知る故に、おのづから心ゆたかにして、心の動く事なし、されば世の人皆も、只我勤むる道の進むとすゝまざるとを、心にしめて、たゞひとすぢに道に叶はむ事をのみ願ひて、日を積み月を重ねて怠る事なくば、なす事おのづから道に叶ひ、德にそむかぬのみならず、いつしか神も見そなはして、あはれみ給ひ、佛も冥々の中にたすけ給はむ、

　心だにまことの道にかなひなば
　　いのらずとても神やまもらん

といふいにしへ人の歌もあるぞかし、あはれ君たちも、只々誠の心より身の行ひを正しうしてつとめ給はゞ、遂には善果を得て、世のうれひを免かるゝ事うたがひなかるべし、故におのれをかへり見るのみをつとめて、己を人の知らずとも、ゆめ〱うれひ給ふなよと、例のしれおうながくりことながら、いさゝかかたりて聞ゆるになむ。



家庭所感

女子美術學校長　佐藤靜子

近頃家庭といふことは一種の流行語のやうになりまして、少し問題が婦人に關係して參ると、先づ此の家庭といふことが議題になるので御座います、これは結搆なことで兎も角家庭といふことに、誰しも幾らかの考を寄せて來た證據だと思ひますが、かう言ふて居る內に今後日本人の家庭は、段々改つて參ることであらうと思はれます、一體家庭にはまだ〳〵各自多少の趣を異にした所の習慣や儀式や、夫から主義とも云ふべきものが有るものであつて、之が無くては秩序を保つことも何も出來ぬのであります、乃で日本の將來の家庭はどう云ふ樣に變つて行くでせうか、又奈何いふ風に變るが可いのでありませうか、之れ等が目下の問題かと思はれます、西洋にでも行つて來られた方は奈何しても西洋的に傾いて參りますが、一體に段々と西洋式になつて來るやうで御座ります、無論今日の時勢から見れば勢ひ當然のことでありませうが、さりとて從來の日本的な家庭にも又言ふに言はれぬ美趣が澤山ありまして、一概に西洋を崇拜して一と飛びに西洋的にして了ふことは如何かと思はれます、世間にて全然西洋風にして了つて、夫で誇つてお出での方もあるやうですが、其意を得ぬと思つて居ります、

家庭と云ふもの丶最要の目的は平和といふことにありますので、建築や、衣食や、坐臥擧動、習慣、義式等のことは言はヾ第二第三の事で、第一義はどうしても平和といふことに在ると思つて居ります、故に家庭の平和でない事程人に不幸はあるまいかと存じます、一國の元氣も家庭の內に養はれるといふ位

であるのに、其家庭が常に憂欝で不愉快であつたら第一子女の教育上に甚だ宜しくありません、人間の眞の精神は小さい時に受けた感化が最も力ある者で露國と戰つて如此强いのも畢竟小さい時から家庭で尙武の氣を養はれて居るからだと思ひます、男の子が生れると乾度大きくなると兵隊さんになるなど言ひ、一寸した小言にもそんな事で兵隊になれるものかなどゝいふ、又女の子に對しても昔はよく武士の娘がといつては力をつけたり戒めたりした者で、今でも日本人が壯烈な尙武の氣に富んで居ることは幼時の感化に依ることが多いと思つて居ります、故に善くない家庭から善い人が出ることは殆んど稀で、世に紳士淑女ともいふべき人々は何れも相當な善い家庭の感化を受けられたものに多いのでありまして家庭と云ふものゝ勢力は考へて見ますと誠に大きなもので御座います、

さて家庭の感化を受けさせるには固より習慣も大事でありますし、儀式も大切であります、又一通り定まつた主義もなくてはなりません、尤もたとへ此等の者が相當に存して居ても其上になほ平和といふことが無くては到底善い感化を子女に與へることは出來ません、感化院などの統計に見ましても不良少年の多くは皆平和ならぬ、即ち不秩序な葛藤の多い家庭から出て居ります、無論良家も貧家も同じ事で御座います、或は良家の方が却つて割合が多いかも知れません、かような次第で家庭の不平和といふことは人に思もかけぬ影響を與へるもので、只に家内が不愉快であるばかりでなく、大きくいへば國家社會に影響が及ぶので御座います、でありますから習慣とか儀式とか形式の上について家庭の改善を計るのも一策には相違ありませんが、人は精神的に平和な家庭を造ることを考へねばならぬと思ひます、

夫から又人は何が一番慰藉になると申して自分の平和な家庭ほど人を慰めてくれる者は御座いません、慰められた上に非常な力をつけてくれるもので御座います、人は奈何いふ方から見ても家庭的のもので

ありまして、家庭と云ふことを離れては生存の意味が價値のないものとなるかも知れません、先日も或る人のお話の中にこれからの日本の婦人は良人と共に海外に出て働いて貰ひたいと切りに有仰つた、其譯は良人に家庭的慰藉を與へる爲で、此外に理由はないと有仰られましたが、誠に意味あるお言葉と思つて拜聽しました『從來日本人で海外へ仕事に行くものが澤山ありますが、何れも多寡〱二年三年で歸つて來て了ふ、夫れ故折角の事業も大なる成功を見ないで了つて誠に殘念だと思ふ事が度々ある、乃で何故早く歸つて來るかといふに、其實は家庭病に罹るので家庭の慰樂に餓えるのである』かういふお話でありましたが實に御道理と思ひました、さて斯やうに人の生活上に非常な力のある家庭と云ふものをば調和させて、平和にするものは果して誰の務で御座いませうか申すまでもなく一に婦人の手の中にあることで御座います、一家の主婦の心がけは第一にこの事でなくてはなりません、主婦たるものゝ最要の任務で御座います、或は舅姑の御氣質や御良人の御性分や御職業で平和と云ふことが存外



計り難いこともありませうが、若し賢明な良妻であるならば其間に處して如何やうにも調和させて行くことが出來るので御座います、故に若し茲に不秩序な、紊亂した家庭があるとすれば、先づ其罪は主婦その人にあると申されても詮ない次第であります、

將來の日本はすべての方面に益々發展して來る事でありませうが、同時に餘程六ケしい世の中になる事であらうと思はれます、其將來の難局に處して行かうといふ有爲の人々は皆今日以後の家庭から生ひ立つので御座いますから、今日之れを考へますと女子

郵便切手の起原

今から六十餘年の往昔、千八百三十七年のことであつた。或日英國のとある田舍の小さな旅人宿に郵便飛脚が這入つて來て、其處の女主人に一通の信書を屆けて、二シルリングの稅を拂ふ樣にと云つた。宿の婆アさんは其封筒をと見かう見した揚句、飛脚に向つてさも不滿氣に、『一本の手紙に二シルリングを拂ふなんて譯はない。持つて歸つてお吳れ』と云て、折角屆けて吳たものを突き返した。

此事は一寸受取難い樣であるが、實際あつた話で、立派な證人がある、ロウランドヒルと云ふ名の旅客であつた。折しもロウランド、ヒル氏は其家に立寄つて晝食をやつて居つたのである。兼て仁慈の心に富んで居つたロウランド氏は其樣子を見て取つて、多分婆さんが二シルリングの金も出し兼れるのだらう、何處からかは知らぬが、折角來た手紙であるから、受取つて婆さんを喜ばしてやらうと直ぐ食事最中衣囊から二シルリングを出して受取てやつた老婆は一應其好意を謝したのは謝したが、さて飛脚が出て去つて仕舞つても、一向其手紙を披いて見そうにもせず、折角ロウランド氏が受取つて吳れた物を、其儘食卓の上に置き放しにして、猶も忘れたかの樣に澄し込んで居つた。これにはロウランド氏も尠からず不審を抱いたので、婆さんの注意を促した處が、婆さんは一向平氣なもので『披いて見たつて何にもなりませんや。狀袋の表書だけが用なのでさあ』との答へを冒頭に、故らに受取らなかつた譯を洩した其事實は次の通りである。

此老婆さんには一人の息子があつて、夫が蘇格蘭に行つて、其處に嫁を娶つて世帶を持つて居つた。で時折りには手紙の遣取りなして

お互の安否を知りたいのであるが、何分一通の信書に二シルリングの税を拂はねばならぬものであるから、遂に老婆と子息とは相談をして、税を出さずして互の安否を知る方法を案出した。即ち其日の手紙は其方法を實行したものなので、封筒の表記は子息と其嫁と四人の孫と家内中の者が署名をしたもので、其税を拂はずして差出す、婆さんの處に着く、封筒の表記を一目見れば、夫で家内中のものが署名をして居るから、一同が無事で暮して居ることが判然する、封筒内には元より一行半句の書信もはいッて居ない、只封筒丈の音信であるから、封を披く必要も何にもない、直ぐ夫を突き返す、さすれば二シルリングの税を拂はずして、お互の安否だけは知ることが出來ると云ふ譯なのである。

斯くと知つたロウランド、ヒル氏は、痛く此憐む可き奸手段に心を動かされて成程信書の配達税の高いのは、音信の普通には非常の妨碍をするものである、此婆さんでさへも斯の如くであつて見れば、彼よりも猶一層苦しい暮向きをして居るものには、文通の爲めに苦心をし、便宜を缺ぐことはどんなであらう、況んや又互に一層遠く離れて居るものには、どんなに不自由であらうか、思ひ遣られる、これではならぬからと、氏は直ちに決心をして、距離の遠近に據つて税を增減する制度を廢止して、税金を一定し、且つ其手數を省く爲めに、小さな方形の紙片に模樣を印刷したものを發賣して夫を封筒に貼付して税金を支拂ふ代はりをする制度を採用せられんことを議會に建議した、今日世界一般に行はれて、人々が皆平常非常の便宜を享けて居る郵便切手の起原は、實に此ロウランド、ヒル氏の建議にあるのである、其後未だ百年にもならぬのに、今や、世界で使用されたも、使用されて居るも合して、其種類は二萬から二十萬に達するだらうとは實に驚く可き發達ではあるまいか。ロウランド、ヒル氏は洵に文明の大恩人である？

の一般の教育と共に家庭問題は目下忽諸に附すことの出來ぬ、事であらうと日頃思つて居るので御座います、世の若い婦人方は何卒此點を深く心にしめて形式上のことには兎も角も、精神上に此家庭問題を御考へなさるゝ事を望むので御座います、

元氣よき家庭

女子商業學校學監　嘉悦孝子

私が一番望ましく思ふのは、世の中で家の中を最も樂しい處としたいのであります、然らば何うした

ら家の中が最も樂しい處となるかと云ふと、先づ最も樂しい家庭を見てそれを手本とするのでありますが、さてどう云ふ家庭を手本としたら宜しいか、その手本としやうと思ふ家は、余り多くはありません私が見ました二三の家庭の中では、第一に其家の奥さんが最も快活で元氣のよい家でありまして、一寸人が參りましても、誰より先に一番がけに飛んで出て、笑顔を以て迎へると云ふ樣な奥さんの居る家であります、斯う云ふ家へ參りますと誠に愉快で、つい奥さんの元氣のよいのに釣り込まれ、興に乘じて時の移るのも忘れると云ふやうになり、誠によい氣持になります、ですから私はいつも斯う云ふ家を見る度に、どうかしてあア云ふ風にしたいと思つて居ります、

奥さんが元氣がよければ、從つて家中の者が皆元氣よく、他から來た人も非常に心持良く感じられるし家に居る者は、どの位樂しいか知れません、夫故に私は平生から生徒などに向つても、何事をなすにも、凡て元氣よく樂しくせよと申して居ります、何事でも總て快活に樂しく致しますれば、必ず立派に出來ますが、元氣のない、何事をも樂しんでしない人は、世間の人からやれいくじがないとか、何とか云はれまして笑はれますが、之に反して樂しんで仕事を致しますれば、決して、面倒な事もなければ、厭やな事もありません、例へて申しますれば、臺所で物を煮るにしましても、樂しんで之を致しますれば誠に面白いが、若し之を厭やだと思つてしますれば、何事に依らず、皆つまらなく感じます、又面白いと思つてすれば、何事に依らず苦くなく成就する事が出來ますから、一人で面白く仕事を致しますと家中が皆元氣よくなり、仕事も從つて普通よりは、倍も三倍もよく成就する事が出來ます、

仕事を樂しんでする樣になれば、世の中には必ず何か仕事があるものでありますから、其中で何か見付けて致しますれば、知らず識らずの中に、人間の德性と云ふものが涵養される樣になります、

世の進運と共に、德性の涵養が次第に足りなくなると云ふ人がありますが、夫は皆僞で、家庭に於きましても、其夫人が元氣のよい、凡ての仕事を面白くする人でありますれば、必らず德性が涵養されて行くのでございます、そう云ふ人が奥さんとなつた家は、誰が參りましても誠によい氣持が致します、他人でさへそうですから、まして其御子さん達や御主人などに至つては、どんなによい氣持が致しますか知れませぬ、そうすれば一家の快樂も又自ら生じて參りまして、樂しい家庭も形作られるやうになるので御座います、

夫故に私は豫め皆さんに注文致しますのに、先づ第一に仕事を面白く樂しんでやれと申して居りますそう云ふ風にするには、只今私が申しました樣な、一二の奥さんを御手本にしたらばよいと思ひます、そうしてせめて小供だけにでも、自分の幸福を喜ばせる樣にしますれば、子供も又必ず其幸福を喜ぶやうになるものであります、

私の望む所は、私の知つて居る奥さんのやうに、誠に元氣のよい愉快な人となつて、總ての勞力を厭はぬやうになれば、どの家もどの家も、皆悉く温かき樂しい家になりはせぬかと思ふのであります、

家の中が温かであるのと、温かでないのとは、德性の涵養上に、非常に影響を及ぼすものでありまして殊に子供などに至つては、どうしても、温かき家に育つたのと、冷たい家に育つたのとは、非常に格段なる區別があります、平和の家に人となつた者は、何事をなすにも凡て眞面目にしますが、冷めたき家に育つた人は、總ての仕事に對して、始終世の中の事を謀つてやつて居ります、ですから常に陰事をしたり、又世の中を彌縫ふやうな事ばかりして居ります、斯う云ふ人は自分の非を悟らず却つて人を怨み親をうらみ、遂には不善をなす樣になりますから、家庭のつめたいのは、最も人生の不幸と致す所で御座います、一寸とした例を申しましても、元氣のない母に育てられた子は、別に其母が惡いと云ふ譯で

はありませんが、只元氣がない爲に、一家が面白くなく、從つて家に居る事を喜ばず、終には時々家を外にする樣になります、かう云ふ子供は、又學校なぞに參りましても、決して他の朋友と調和致しませんで、自分一人となり、遂には大勢と提携して仕事をするやうな事は全く出來得べからざる事となるのであります、でありますから若しそう云ふ子供が出來ますれば、只に其子の不幸ばかりではなく、延いては一家の不幸はどんなでしよう、かう云ふ事から考へましても冷たき家庭の事が思ひやらるゝので御座います、云ふ迄もなく、人間の不幸は何であるかと申しますれば、其子をして不完全なる人たらしむる事でございますから、此事を能く考へましたなら假令自分に少しは厭な事があつても、益々元氣よく愉快にし、克己心を起す事が必要であります、何でも自分の爲と思はゞ、出來ぬことはありませんから今現在の安逸を貪らんなど云ふやうな事はやめて、先づ自分を犧牲として、大に將來の幸福を圖らなければなりません、

若し現在の小康に甘んじて、將來の事を忘れたならば、其人は必ず不愉快な家庭を作るやうになります只目前の安逸の爲に、將來の幸福を忘れ、之が爲に家庭を樂ましむる事の出來ぬ人は、只家庭と云ふ事ばかり知つて、大きい範圍にある自分を知らないからであります、でありますから、どうか世間の人がもう少し遠い所に目を付けて貰ひたいのでありますそうすれば自然と家の中を樂しく面白い處となし、自分も又元氣のよい、愉快なものとする事は誠に易さしい事で御在います、そうして自分を愉快な元氣よい者とすれば、家中が亦元氣よい愉快な者となり家庭の和樂は益々增加して行きますから、其爲す處の仕事の出來榮えも、普通のものよりか、二倍も三倍もの好結果を收め得る樣になるものであります、言を換へて申しますれば、自分を犧牲とした報酬は誠に大變なものであります、夫故に最大なる幸福を求めやうとする人は、先づ目前の安逸など云ふやう

な、少慾を捨はねばなりませぬ、

稀有の慈善家

中山幸子刀自の家庭

折柴園主人

慈善家と評判さるゝ人は、多くは慈善を賣物にして慈善家と他も知らず、我も思はぬ眞の慈善家より、慈善を受けて、體面よく生活するものが、十中の八九と云ふてもよいほどで、兎角正眞正銘なのは少いものである、

さても世間は廣いもの、淺草左衞門町を通れば、必ず目につく一構がある、有名なる酒井左衞門尉の邸跡で、庭の一隅には葭蘆生茂り、近き頃まで雁も訪問したといふほどであるから、閑雅甚だ掬すべきものがある、この邸が正眞正銘なる慈善家中山幸子刀自の住居である、

廣々とした家に、家族とては、ことし十六歲になら るゝ當主信重君と、その祖母なり後見人なりである刀自との二人である、刀自は大地主の御隱居樣として、世間の例より云へば、家政は差配人任せにして幸ひ歌には一日に杜鵑二百吟を詠じた達人であり、茶事に花道に堪能であるから、風月を友として世を送るべきを、刀自はなか〳〵さう呑氣には構へては居られぬ、

刀自は維新前佐渡の金山奉行、後に茨城縣知事たりし故中山信安氏の夫人で、夙に婦道を以て聞えた人であるが、社交界に立てられたのは、女子共立育兒會の設立と同時であるとの事である、

刀自は一日に百金を費すも、財政に些の影響を來すでもないが、當主の乳母なる人に帳簿一切を渡し、自ら指圖する外は、更に餘計の筆を加へられず、素より不得要領の支出などあらう筈はなく、自ら奉ずること極めて薄く、なか〳〵節儉し得られたものである、去ながら慈善の事にかけては、殆んど眼中に金錢を置いてないと云ふてもよいほどで、金高の多

いのと出し時の早いのとは、刀自の關係せられて居る慈善會に於ては、第一と稱せられて居る、

先づ女子共立育兒會に於ける刀自の働き振はと云へば、元來同會は一人に一ヶ月五錢か十錢かを出金させて、此の多數の力により、あはれなる兒童を救はうといふのである、刀自はこの五錢十錢を投ずる慈善家を出すべく、十年一日の如く、それ〲手蔓をたぐつて勸誘せられ、今日に至つては、刀自一人の力を以ても、優に一の育兒會を維持するに足るのである、刀自は六十の齡を越え、多病の身を以て之に當るのであるから、殊に車の上に夜を日に繼ぐ有樣で、その車賃のみでも、優に此會四五百人の小慈善家の義捐に價するので、寧ろその車賃を吝しき費用とせず、座して其費を投ずる方得策ならん、など云ふ人もある、されど刀自は、その車賃は吝しきものとなるも、それによつて勸誘する聲は、無數の慈善家を造り出すことを得るのであるから、限りある力を有てる自分一人慈善家になり濟さんより、椽の下の力持となり終るまでも、眞の慈善家を多く造る方策の得たるものと信せられて、それ等の言には耳を貸されぬのである、

すべてかゝる會の起る時には、刀自の如き慈善家を要する、そこで慈善家勸誘となると、虚榮心の盛んなる婦人の常として、たゞ人數の多きを見得として無闇に義理一遍に入會をさせる、されば初めは少し目に立つほどの數が出來ても、だん〲その顏が變つて來て、會員の數が當にならぬ、然るに刀自のは一人の慈善家なる會員を作るにも、五錢位であるから、十錢位であるからを振廻はさず、先づ相手に慈善の心を起させて、其の慈善心が會員となり、會費を出さうといふのであるから、會員の數がいつも當になつて、一人も帳面よごしの會員がない、さうしてその勸誘を飽かぬのであるから、刀自の力によつて續々慈善家が現はれるのである、即ち刀自は慈善敎育になか〲功勞がある、

愛國婦人會の如きも、奥村刀自の半襟一掛說に贊成

して、いざ鎌倉となれば千金をも惜まず、これ亦評議員として數年、一回も評議會に缺席したるとなく時によれば、佐藤少將にでも一理屈お見舞申すことがある、云ふ事は云ふ、爲ることは爲る、曲つた事は嫌ひ、よい事は何でも引受ける、といふさかぬ氣性を有つて、常に重きを置かれて居るが、言葉は正しく、擧止は嫻雅で、決して婦人圏外を脱する如き行爲はないのである、

さて家庭に於ての刀自は、と云へば、病氣などにて横臥せる時、來客に應接する時、下男下女に差圖する時の外は、定めの居間に端座せられて、書見詠歌等を樂まれ、目に入るゝも痛さを感ずまじき愛孫の君の机を、同じ居間に置き、學校通ひ、運動時間の外は、勉學を監督奬勵し、折にふれては人道を說き遺憾なき家庭教師となつて居らるゝので、あるまじき話柄、すまじき擧動など、藥にも見る事聞く事が出來ぬのであるから、この家に女中としてなりとも三年の辛抱の出來る人は、立派な奧樣となる資格が出來るといふので、見習奉公を望む良家の子女も少からず、又その見習奉公を卒業して、立派な地位の令夫人となつて居るのも、なか／＼多數であるとの事である、その中予の知つて居るのも十八ばかりあるが、それは記さぬ方がよからう。

小兒病と現今の注意

小兒科醫に聞きますと、昨今最も多く診察するは、水痘と痲疹だと云ふことであります。痲疹は三月より四月上旬へかけて流行し其後一時下火となりましたが、近來再燃の模樣あり、而してあまり性がよくないと云ふことです、現に記者の近所にも四五名の小兒が罹つて居りますが、其中二名の家では、隨分心配して居ります、一體痲疹といふものは普通十日前後で快復するものですが、今回の病は大分長びき、或は中耳炎、結膜炎などの合併症を發するのが多いそうです、水痘は世人の知れるが如く、潜伏期は大抵二週間で、夫から輕熱を發し、全身に紅斑を呈し、次で水泡に變じて透明なる水液を滿たし、三四日後から結痂し、全く治癒する迄は更に二週間位要しまする、是は痲疹に比して左程心配な病氣ではありませんが、親が不注意ですと、どんな病氣に變せぬとも限りませぬ。何しろ早速

専門醫に診察して貰ふ樣にし、習慣などにかぶれたり、また徒らに放任してはなりませぬ。さて又た、近日來地方から澤山の人が入込んで來た結果どんな病菌を殘し置くかわかりませんから、滯在中は勿論、退去後も蒲團や器物に注意し、消毒的方法をとられねばなりません。其最も手輕な方法は、蒲團は充分日光に晒し、又器物は熱い湯で洗ひ、清潔な拭巾でしつかり拭ふことです、若しこれ以上の方法が盡されれば其上はありません。又た段々流行病が頭を擡げて來る氣候に入つて來ましたし、果物もそろ／＼出始めます故、親達は一層の注意を拂はれる樣に切望致します、一體病氣と云ふものは譬へば盜人の夜來る如く、何時侵入するかわかりませんから、身體の錠前や何かを確りしを説きなさいませ。

種痘後の取扱方

小兒の種痘は春過ぎが能いとか秋が能いとか云ふ氣候の關係などはありません、何時でも小兒の身體に故障の無い以上は生後間もなく種痘ても一向差支えありません、尤も生後百日位經過してから後ならば尚良いのです、種痘をさせる時は先づ其の前日小兒を入浴させて身體を清潔にし、新しい洗い立の衣服を着せ、夫れから醫師の許へお連れなさい、種痘は以前は突いて種えたものですが今日では切種と云つて皮膚を少しも痛まない程に切つて痘苗を種えるのですから附かぬ事はありません、種えて五六日目から少々發熱して水泡を生じ段々夫れが大きくなつて膿疱に變じます、此時分に小兒の機嫌が惡いこともありますが、夫れは別段心配する事はないのです、ソコで十三四日目頃から膿疱が乾いて來て黑くなつて結痂します、痂の落ちるのは大抵二十日過ぎで跡に白い瘢痕を殘しますのは誰人も御存じの事でせう種痘を濟ました跡は殺菌ガーゼで繃帶して置くのが安全です、切種であると瘡も大きいし、從つて痒味のあるために小兒が掻きこわして膿泡を破りますから結痂する迄大事に保護するやうに致したいものです、入浴は熱さへなければ差支ありませぬが種痘の場所を能く繃帶して入浴させ、入浴が濟んだら濡した繃帶を取換へて新しい殺菌ガーゼで再び繃帶してお遣んなさい、種えた跡は痒いから何うも小兒が自分で掻きこわして困るもの、夫れは母親が注意して掻かないやうに爲せなければなりません

美貌家の三注意

外出に先ち顔を洗ふ際熱き湯を用ふる勿れ、毛穴を開き過ぎて塵埃を被り易く、肌地を荒す恐れあり、外より歸來せる時直ちに石鹸を以て顔を洗ふ勿れ、キメ藥を塗り柔かの綿毛又は紙にて拭ひ去るべし、不快なる時額に皺を寄せる勿れ、眼眩しき時目が細め額の皺を寄する勿れ、額に皺寄する習癖は、遂に額に皺を造り、及び額の皺を深くすべし、額の皺程顔を年寄臭く見するものはなし



京阪地方の天地

學習院教授
女學部長　下田歌子

京都に參りまして、京都滯在中の私が、旅の宿に感じたことは、どう云ふことかと申しまするに、私はどちらかと云ふと、子供の時から歌を詠み、和文を書きなどして、風流とか、美術とか云ふことには、多少心の惹れる方に緣があつたものですから。自然京都の山水風物が好きである、何故かと云ふに、是は申すまでもない、京都の地は、山水明媚であつて山は綠に水は淸く。至る所皆歷史上や、故事に緣故ある名所舊跡である、ソレ故に、何處に參つても趣味が深く、誠に京都は愛すべき土地で御座います、けれども單に自分が好きだとか、樂みだとか云ふことゝ、一體、京都の地が國として如何で有らうか、と云ふ可否の批評とは自から別で御座います、今私の申すのは、好き嫌ひと云ふ問題ではなく、國としての京都に就て申すので御座います、雜沓極まれる大阪から、京都に參つて、加茂川に向ひて立ち、東山に望んで加茂川を見たときには、何となく心が涼しく、如何にも閑かな優美な感が起る、其位に思つて居る京都ですけれども、久し振りにて此京都に入つた時には非常に妙な感じがしました、大阪と云ふ處は私は土地としては餘り好きでは御座いませぬ何故なれば、彼地は商業地であつて、是は私共の範圍でない、夫から古き都があつたから、多少は名所舊跡はあるが、眺は東京よりもないと云つて宜い位勿論踏出して神戸まで行き、須磨明石まで行けば大變宜い景色であるが、大阪の地は京都と違つて、水は濁つて居り、市街は大變雜沓して居り、山もなければ、阜も少ない、其地に居る所の人は、どう云ふ

人が多く住むかと云ふと、學者や風流人ではなく、商工業に汲々として、お金をつくりたいと勤めて居る人である、それであるから私は保養とか遊山とかいへば、大阪は餘りこのましくない、大阪に居つた時には、早く大阪が濟んで京都に行きたいと思ふ樣な心地がした、けれども大阪の地形は、どうかと云ふに、段々戸數が增し、人口は非常に殖えて行くと云ふ有樣で有ります、從つて商工業は盛むで、中々活氣に富で居る、夫から京都に行つて見ると、京都の人はしとやかで、みやびやかであるが、遠慮なくいへば、眠つて居る樣で、顏色も惡い、昔は之を名付けて、京都の人は、色が白いと云ふたが、生理的に之を觀察して見ると、是は白いのではなく、青白いのである、さうして一體に人の體格が皆ほつそりした華奢な、沈んだ人が多い、之は如何にも退いて守り、或は一旦世の中の繁激な業務を去つて、此處に隱遁すると云ふやうな人には好いかも知れないがけれども誠に活氣がなく、何となくモウ花が咲き切つて仕舞つて、後から蕾が出ないと云ふやうな風に見えます、往昔桓武天皇が山城の、今の京都に都を御移しになつた時は、丁度維新の時に今上天皇陛下が、故の京を去つて、東京に都を御移し遊ばした時のやうに、甚だ積極的なる進取の爲され方であつたに違ひない、奈良が又爾うです風流を樂み、遊ばうと云ふには京都よりなほ好い樣に思ふ、春日山などに往つて絨緞を敷き詰めたやうな若草の上に座して四方を眺望すると、異個に千有餘年の昔の人になつたやうなゝ清い靜かな心になつて、京都より更に興味が多いやうに思ひます、けれども京都を見て奈良を見ると、一層狹く、一層陰鬱であつて、京都の方が稍開けて居るやうに見える、そこで、桓武天皇が此山の中の地利の不便な奈良を去り、大和を棄てゝ都を山城に御移しになつた、其頃、京都は奈良よりは規模も大きく、所も開けて居つたに違ひないので御座います、丁度それと同じく、今日私共が東京から京都を見ると爾う云ふ考へが起る、京都は甚だ

沈んだ、何だか進取の氣に乏しいと言ひたいやうな感じがする、勿論、それは皮想の觀で、實際はさうでないかも知れないが、兎に角、大阪を見たと、京都を見たとは大變違つて居る、今此感じを假に日本全國に移して見ると、又大に考へなければならぬ處があるやうに思ふ、一體日本と云ふ國は何う云ふ歷史を有する國であるかと云ふに、三千年にも近い歷史を有する國で、モウ充分花は咲き切つたと云ふ時である、併しいくら咲きゝつても、四季咲のばらのやうに、あとから〳〵と蕾が出ればさしつかへ無い、丁度日本の國を小分して云ふと、京都のやうな國である、故に此國は若し之を人爲的に新たに建て直すと云ふことがなくつて、此儘打捨てゝ置いたならば、遂には朝鮮も支那も敢て格別選ぶ所はあるまいと思ふ、總て人と云ふものは、始終動いて變ると云ふ氣勢がないと、遂に腐つて仕舞ふ、けれども是にも度が有るのです道を歩くに足を運ばせなければならぬ、歩かなければ思ふ處まで到り着かないのは當然であるけれども其足に無理をしたら蹉躓なければならぬから、動いて進むと云ふ程度に、余り急進になつてはならぬけ



れども、併しながらモウ先には進まない、之が止りと云ふのは、即ち其人の體力が疲れ切つた時で御座います、國も亦然りです、之を旅中の感に思ひ起して見、又之を一つ宛部分を狹めて女子の上に當て見れば、日本の女子は大層好い處もある、是非之を保護して無くさぬ樣にしなければならぬこともあるけれども、其風潮に非常に遅れて仕舞つて、何でも後廻しになると云ふ時は是は消極的になるときで、物事は消極になつては、決して榮える起ると云ふ方には進まない、總て積極でなければ、起ると云ふ方にはなりませぬのであるから是からは極く適に叶つた適宜な活氣を負はせて、而して幾分か宛進むと云ふ方に持つて往かなければなりませぬ、それには世界の大勢も或部分までは知つて置かなければならぬ日本の内部の一體の趨勢も、或部分は知つて居らなければならぬ、知るべきは充分に知り、而して何の邊まで女子が行つて好いかと云ふことをも好く研究して、其研究に由つて、是ならば好いと云ふ處を目的にして進むと云ふことにならなければならぬ、それ故に先づ第一は體力の増進と云ふことを計らなければならぬ、體力が増進して後、始めて精神までも盛に養ひなすことが出來るのでございまして、體力と精神力とを盛にして心身一途に進み、程好き方針に向ひ、好く敎へ、好く學び、好く務めて往くことが女子敎育に取つても最も大切なる基礎であらうと思ひます、

◎小麥粉を燃料　嘗て英國汽船「クールスドン」號ポートランドより横濱へ向つて航海中、太平洋上に於て石炭の缺乏を來し、止むを得ず積荷の小麥粉五千袋を燃料に代用し、辛うじて目的地に到着したりと、

◎双子揃の婚禮　此程巴里に面白き結婚式ありたり、結婚は二組にて二人の花婿は双子、二人の花嫁も双子、これ丈にて充分なるに且花婿方の介添役に立ちたる二人の男子も亦双子なりしと、

◎一人前五百圓　先頃ジョーヂ、フレツト氏が日本に向ひて出立の前に友人ダツドレー、ドツカー氏が倫敦のさる料理店に開ける送別の宴は、善美を盡せるものにして、目を驚す許りで裝飾は、竹、菊花、躑躅などを以て、總て日本風に物し、給仕は悉く日本服を着け珈琲を運べる女子は日本藝者に扮し別に日本風の茶室を設けたり、來客は三十名にして費用一人前五百圓なりしと、

幸福なの岩佐翁

(金婚式祝宴の回顧)

侍醫兼宮中顧問官岩佐純氏及同夫人德子は、結婚後五十年に相當するを以て、去十九日上野精養軒に、朝野の縉紳貴婦人六百餘名を招待して、大園遊會を開き、金婚式の披露を催したるが、當日は長崎侍從式場を監督し、專ら斡旋の勞を執り、來賓には岩倉公、同夫人、鍋島侯、同夫人、德大寺侯、德川縝倫氏、同夫人、板垣伯、香川子、同令孃、金子男、三井男、同夫人、淸浦男同夫人の諸氏來會せられ、宮中の高官女官さへ見え、いと華麗莊嚴なる宴會にてありき、今ま此の幸多く榮へある愛たき家庭の主翁なる岩佐純氏の半世の閲歷を聞くに▲氏は天保七年五月一日越前福井藩の藩醫玄珪氏の家に生まれ、幼より漢方醫法を學びしが、十五歳の頃洋醫法を究めんとの志を起し、幸ひに藩主松平春嶽公の拔擢に遇ひて、安政三年江戸留學を命ぜられ、大鳥圭介氏等と共に坪井芳州の塾に學び、後亦佐倉藩の佐藤氏の門に遊びて、蘭學を研究し、頓て家督を相續して國に歸り、春嶽公の侍醫となりしが、安政七年に至り偶蘭人ポンペー長崎に來りしかば、藩の命に依て長崎に至り、更に醫學を究むることゝなれり、當時ポンペー監督の下に、松本順氏院長となりて、新病院を開き、佐藤舜海、八木稱平、司馬凌海、土肥直裕、桐原玄海及び岩佐純氏等、醫員として診療に從ひしが、是れ實に我國に於ける洋風病院の嚆矢たりしなり▲其後再び藩に歸り、又春嶽侯に侍して京師に在りしが、慶應二年の末主上御不例に亘らせられし際、急に召されて參内拜診を命ぜられ、戸田山城守其命を傳へしが、主上の御惱御快復ありて、終に其事なくして止みたり、當時の所謂陪臣にして、特に此の如き光榮を得たるは、前例なき所にして、又西洋醫法を以て宮中に召されしも、實に岩佐氏を以て嚆矢とするとぞ▲明治の御代となりて、洋醫の法も漸く世の信用を得るに至るや、岩佐氏先づ政府に建議して、醫學校を設立し、專ら西洋風の學問を鼓吹するの急なるを說き、其說容られて、明治二年和泉橋に醫學校を建つ、是れ今日の帝國大學醫科大學の基礎なり、當時英人ウリース專ら教授を司りしが、岩佐氏は醫術は到底獨逸に學ざるべからざるを知り、相良知安氏と謀て、苦心を極たる後、漸く學風を改て、獨逸風とし、獨逸人を招きて教師とし、終に今日我國の醫學の隆盛を見るの基を開きたり、當時大學創始の際に於て、氏等が苦心したる事實の一方ならざりしは、同時代の人の善く知れる處ろなりと云ふ▲明治八年に至り、大學創始の事旣に緒に就きしより、召されて宮中に出仕し、侍醫を拜命せしが、爾來宮中の御信任非常に篤かりしは、十七年に至り渡歐研學の御暇を乞ひ奉りしも容易に許されず、終に僅に十ヶ月御暇を賜はりしを見ても明かなり、渡歐後は主に墺太利の維也納に於て熱心に研究し、歸朝の後は益々宮中の御信任を受け、今は宮中顧問官を兼れ、從三位勳二等の榮位を授けられ、尙遠からず何等かの榮遇をさへ賜はるべしとか聞きぬ、氏年齡七十三夫人德子六十七、齒德共に高くして健康壯者の如しと、

靖國神社大勅祭と愛國婦人會

大勅祭

靖國神社大勅祭は、五月一日より執行され三日には生憎の雨中を　天皇皇后兩陛下の行幸啓あり、四日には　皇太子殿下、三四兩日には四内親王殿下御親拜あらせられ二日より五日迄は、遺族の參拜を許されたるより、地方より遺族の上京せるもの十餘萬に及びたるよし、

昨年の大勅祭に於ては、三十七年開戰以來三十八年旅順開城に至る迄の戰傷病死者陸軍將卒二萬九千八百廿九名、海軍將卒百二十一名、總計二萬九千九百五十名を合祀せられ、今回の大勅祭には旅順開城後平和克復に至る迄の戰傷病死者、陸軍將卒二萬八千九百九十名、海軍將卒千八百八十七名、總計三萬八百七十七名を合祀せらるゝにて、今回の大勅祭に合祀せらるゝ三萬八千七十七名は、主として陸に於ては奉天の大會戰に於て、海に於ては日本海の大海戰に於て忠戰忠死したるものなり、

右大勅祭に就き、愛國婦人會東京支部員はそれ〴〵部署を定めて九段牛ヶ淵なる同會側の接待所に出張して、遺族方の歡迎に盡し居れるが、何が扨て地方出の遺族のことゝて、隨分飛び離れた滑稽話もあり、遺族も初めのうちは本社から優待券を貰ひ受けしも、モジ〳〵して天幕内に入り得ざるものあり、入つてもお茶一杯くれろと云ふ者もなかりし故に、貴婦人連はいづれの机にても入らつしやい〳〵と招いて、料理屋の女中が客を呼ぶように呼はりしにぞ、女中と見しか但しは始めより普通の婦人と見しか▲濱尾大學總長夫人　に對つてお婆さんと云ふ者あり、早くお茶を吳れ咽喉が乾いて仕方がないから子ー、今お宮から雨に降られて飛んで來たゞよ、と云ふを夫人はハイ〳〵とお茶を侑られる此方は▼酒井伯爵夫人　アノ若い姐さんよ、是れを讀んで吳れ、全體この四角い長い函に何んが入つて居るだれ、夫人は叮嚀に挨拶して、是れは總裁閑院宮殿下の御染筆で、是々と解き聽かせたるに、田舍漢は急にありがたがりそんなら雨に逢ては御不禮な、勿體ないとて件の函を襟首より背中に差込み、羽織を裏返へしにして、頭より被りたるまゝ難有い、さて又此方は▲板垣伯夫人　五六名の遺族に取圍まれ給ひ、何か押問答の態、此處に居る女衆は皆な豪らしい人們のお内儀さんだツて、こツちが華族樣は何處に居るんかへ、と一人が云へば、馬鹿を言はツしやるな華族の奧樣方がコンな穢いとこへ來ておらたちなんかに口を利くもんケー、伯夫人餘ほど持てあまして見えたり▲兒玉大將夫人　何處で何う聽いたか、大將夫人と云ふので、大モテにて、中には大將夫人と聞くや、急に土下座して傍へも寄りつかざりし一老嫗あり、要するに同會場には當日出席の主なる貴婦人等の氏名を列べ記して掲げあるものも、右の連中は勿論かゝるも

のは得讀ます、宿に歸りて人に新聞を讀みきかされて魂消たる遺族頗る多かりしやに聞けば、最初より奈何にかして其貴婦人なることを知らしめたかりき、

◎愛國婦人會と紀念品　前記の如く愛國婦人會は牛ヶ淵に接待所を設けて、專ら遺族の慰撫に勉めたが今同會より遺族に對し一個宛送呈せる總裁宮殿下御染筆の紀念品數を聞くに實に左の如くなりと云ふ、

「二日」四千五百十八「三日」四千五百四十五「四日」三千八百四十八「五日」一千〇九十九「六日」百六十三計一萬四千百七十三

而して、右は單に一遺族に對し一個宛贈呈せる紀念品の數なるを以て、同所休憩所に入りし者は、少くとも五萬餘人に達すべしと、

◎同會の離宮拜觀　愛國婦人會が、今回の臨時大勅祭に際し、大祭委員を助けて、參拜遺族の接待に就き、大に努むる所ありたるより、野津大祭委員長より　長き邊に其旨奏上に及ばれし所　今　同特別の御思召に依り、同會々長以下評議員幹事支部長等今回の大祭に盡力せし六百餘名に對し去る九日、赤坂、濱離宮の拜觀を許させられたり

▲奉納寄附の一二　今回の大祭典に奉納寄附の種類は多樣なりしが、金員の寄附は御下賜金を併せて金一萬四百九十二圓六十五錢なりき次に奉納品中最も意匠を凝らしたるもの、又珍奇なりしは深川養魚合資會社の寄附に係る緋鯉五尾、何れも重量二貫三百目より二貫五百目に至る大魚にして、近藤海軍中佐之を神泉に放置したり、又偕行社幹事より寄附せる薩摩大根二本、一本の目方は八貫六百目といふ怪物にて、兎に角菜蔬類中の珍なれば、此儘永く保存せるべしと云ふ、次に神田共立女子職業學校生徒の寄附せる盛花及び京橋竹川町十二又明堂方藤井みれ子一人の製作の摘細工菓子器等は、何れも纖巧極美のものにて、永久に保存すべき價値ありと、

愛國婦人會大會

同會は、去る二十日第五回總會を新宿御苑にて開きたるが式塲順序は左の如し

▲第一鈴(午後零時三十分)參列者入塲△第二鈴(午後一時)君ヶ代吹奏、總裁宮殿下御臨塲(一同最敬禮)△會長岩倉公爵夫人開會の辭△皇后陛下御令旨△總裁閑院宮妃殿下御奉答△有功章御親授△會務並に會計報告△定款議事△君ヶ代吹奏、

右終つて　皇后陛下の御退塲に次ぎて參列者順次退塲のことにて、會塲の設備は總に天皇陛下行幸の上親しく凱旋將校に宴を賜はりたるを其の儘拜借したるなりき、

婦八共立育兒會總會

去る十七日午後一時より神田青年會舘に於て開會同二時總裁有栖川宮妃慰子殿下御臨塲左の令旨を賜りたり

令旨

我婦人共立育兒會は茲に第十回の總會を開くに至りぬ凡そ何の會たるを問はず創立の始めに當りては種々の困難に遭遇するものなるに本會は會頭幹事の熱心と會員諸子の協力とに由り此數年間に於て基礎を立つることを得たるは予の欣喜に堪へざる處なり願ふに我社會の狀勢は常に變動して已まざるを以て博愛の目的を達するには更に公務を擴張し諸般の設備を整頓せざるべからず予は諸子が將來益々勉勵せられんことを望む

英國人夫妻の關係

遠山稻子

妻といふものは、私が申すまでもなく、良人を一番善く知つて居る人であります、啻に自分の家庭に於てのみならず、外に出でゝも矢張、妻は良人を最も能く知れる人と認められて居るのであるから、良人の執る業務に對し、内に在つては補助るのは當然の事であつて、妻たる者は、家務を監督し、夫を助け或る場合に於て或る點までは、夫が執る業務に立ち入つて働かなければならぬ、或は慈善事業、或は政治上の事業凡て夫が從事して居る業務を助けなければなりませぬ、又教育のある婦人であれば全く良人とは異つた所の公務に從事する事が度々あります、故に英國などでは、報酬を貰はずにする公の仕事の多くは、教育のある、怜悧なる婦人に依つて成功する樣で御座います、婦人を斯く教育する事に依つて吾邦では四つの結果を見る事が出來ました、今其の概略を申上げますと、

第一　吾邦で家庭教育を施して得たる結果として五十年前と今日とを比べまするに、外部の裝飾に於て非常に進歩して居る樣であります、教育を長く受けた人は、趣味が自然と高くなるから、只だ高價にして人の眼を驚かす樣なものを裝飾とせずして、寧ろ價の安い高尚なものを使用うやうになりました、之が第一の結果であります、

第二　家の監理の仕方及び家内の衛生が非常に發達したと云ふ事で御座います、私の見た所では文明國中でも、英、米の家庭が、一番善い樣であります、第一廚房の清潔と云ふ段に於て、殆んど完全と云ふ位に衛生が行はれて居るのは、英國が一番であらうと思ひます、之も矢張り婦人の教育が進歩した結果で御座います、社會百事の進歩に伴ひまして成るべく短時間に成るべく澤山仕事をせねばならぬやうになつて來る、これは男子ばかりでなく、婦人も同じことであります、社交に於ても公共事業に於ても

一旦關係する時には、及ぶ限り澤山の仕事を爲なければならぬ、又考案も爲なければならぬ、夫で時間が益々必要に成つて來るから、時間を節約する爲に家の監理が上手に成つて來なければならぬ、此等の點から斯く發達したのであらうと思ひます、

第三　子供の取扱方が大變に上手に成つて來た、母達が打寄つて會を組織して、どう云ふ風に子供を取扱つたらよいかと種々研究して、良法を實行するのが多くありますが、つまり小供を育てるのに、偏頗の愛を持つて可愛がらない、併し又餘り嚴びしくもしない、其の中庸を取つて行くと云ふ事を望んで居りますが、之も矢張、婦人を教育した結果であらうと思ひます、

第四　は社交上の習慣などが大に進歩して來た事で御座います、昔は交際するにも婦人の教育が低くかつた爲に、交際社界に婦人が顏を出さなかつた、何故なれば會話を男子と一所にする事が出來なかつたからです、然るに教育が進むに從つて男女相携へて交際場裡に出るので、話も面白く趣味も清潔になつて來た、亞米利加では、贅澤な事を喜びますが、英吉利人は贅澤は野卑であると云ふ考へを持つて居りますから、人を招待するにも澤山に食物を出して、人を歡ばせると云ふ事はしない、只だ交際の仕方、話の仕方が面白く、且つ有益であつて可成人に愉快を與へると云ふ事を勸める樣になりました、之が第四の點で御座います、此の四ケ條の外に尚一つの得た事は、教育を受けた婦人を妻にすると、夫婦の關係が親密に成つて來る、何故かと云ふと、教育のある婦人なれば夫の思ふ事に同情同感を寄する事が出來るから、夫の方では何事によらず相談をすると云ふ事に成つて、自然と夫婦間が親密になつて參ります、

次には英國の婦人が一日の間に於て爲す事の大略をお話いたしませう、

英國では大抵朝は七時に起床きて冷水浴をする、入時十五分前に一家打ち寄つて祈禱をする、祈禱の時

には小供、奴僕も皆一所に集つて致すので御座います、夫から八時に朝の食事を致します、此時は養育室に居る樣な幼い子供は列しませんけれ共、少し大きくなつた小供は、矢張り食卓を共にする、若し偖り客でもあつた時には、客人も一所に、種々お話をしながら食事を致すので、元來食事も一種の交際で、食事中には種々愉快な話をして娯しむので御座います、

食事が濟むと、運動に往くものは往き、學校に行くものは行く、夫は自分の職業の場所に行く、婦人は家の取締りに付いて事務を執る、それが終ると今度は手紙でも書くとか、或は公共事業に從事して居る人ならば、其事に就いて奔走する、夫から今度は二階の養育室に行つて、小供と暫時話などして遊ぶ、其内に正午になる、英國では大抵一時か一時半頃に晝飯を食べるので、主人は大抵は晝には留守ですから、學校へ往つた小供が歸つて來て、若し朋友があれば夫等と一所に母親を主人にして、面白い話などをしたり又は學校で聞いて來た事などを語り合つて愉快に食事を濟ます食事が濟むと、主婦は大概大きな小供などを伴れて運動に出掛ける、其あとで、他を訪問する要事などがあると出掛けるので御座います、他から歸つて來ると、今度は又二階の養育室に往つて、小供が寢床に行く前に暫時話をする、大抵午後七時には晩餐を致すのですが、此時には、夫が歸つて來るから、其の準備をするのであります、晩餐の時には、良人或は自分の友人などが、一二人位食べに來る事は普通の樣になつて居ります、夫が濟むと、今度は夫妻打連れて、運動に出掛け、或は劇場などへ往くことも御座います、而して床に着きますのが十時半頃で御座います、之が先づ普通の家庭の一日の有樣で御座います、

英國では夫婦の關係が他の國よりも一層親密の樣に思はれます、此の事に就て私は度々人に向て話しますれども、往々私の言をお信じなさらん事がありますから、之を證するために一つの昔話を致したら

始めて人が感じた事がありますから、其話を一寸申上げませう、

或る所に一人の王様があつて、其奥方との間に、一人の世嗣があつた所が戰爭があつてプリンスは戰地へ臨まれた、其時に國内が非常な饑饉であつたので、群臣が評議して、之は饑饉の神様がお腹立に成つたのであるから、何か國中で一番大事なものを饑饉を起す神様に犧牲として上げたら宜いだらうと云ふので其時プリンスはお留守であるし何が一番大切だらうと云つた所が、奥方が『夫では私が犧牲になる』と申されました、而うすると、多くの僧侶達が考へて、一番大切なものは奥方ではない、此御世繼であらうと云つて、其御子様を縛りに往つた、所へ戰地からプリンスが歸つて來られた、奥方がプリンスに向て斯う〳〵いふ譯であると話された所が、プリンスも如何して好いか分らんで思案して居る内に、最う時間が來たから、早く捧げなければならんと云つて、皆が子供の咽喉を締めて括らうとした、而うすると母の慈愛で夫はならんと云つて、飛出さんとせられた、而うすると、プリンスが『此國



中で誰よりも私の一番愛するものは、貴女である」と云つて抱き止められた、そこで奥方は『プリンスの一番大事のものは、私であるから、つまり國中で一番大切なものは、矢張私である』と云つて自分から殺される人に成つて仕舞はれたと云ふ話がります、夫れであるから、矢張、良人の一番愛するものは、小供よりも何よりも妻であると云ふ話でございます、

奇特なる老婆

むかしの孝女

淺草觀音へ參詣するものは、仲見世の向て左側なる七味唐辛見世に、一人の老婆端座して、頻りと默禮しつゝあるを見るならん此老婆には美はしき一場の譚あり、此の老婆は山口たみと稱し、明治初年の頃には、手足も利かぬ唯獨りの老父を養はんと、大道に七味唐辛を商ひ、其の僅か計りの儲を以て、父を養ふの費に充て、已は食はずとも先づ父上にと、外で見る目もいぢらしき迄に孝行を盡したることゝて、誰れ云ふとなく孝行娘と稱するに至り、忽ち市内の評判となり、當時發行したる銀座三丁目の繪入新聞に托して、江湖の特志家より孝行娘にとて、惠金を寄せらるゝもの多かりしが其度毎に、其繪入新聞は、老婆の手許へ屆きたりき、斯くして孝養を盡すこと六年、父は天壽の盡きたるにや、八十二歳を一期とし、遂に彼の世の人となりしかば、今は全く淋しき身の上となり、何に一つ己を樂しましむる者とてなく、日々曇り勝ちなる心にてありたれど、何時迄も斯くあるべきにあらざればとて、僅かの貯金ありたるを資金として、明治十六年未だ仲見世とならざりし以前の同所に、一戸の床見世を出し孜々として營業を勵みつゝありしが、間く十九年に改正となりて、己が家並みの家屋一帶は、悉く取拂はるゝことゝなり、今の煉瓦造りとなりたるも、以前床見世を有したる關係にて現在の煉瓦見世を借得らるゝことゝなり、明治十八年の暮に同處へ引移り、又再び元の七味を商ふに至りて以來、此老婆の、昔を知るや知らずや、客足日増しに多く、今は何に一つ不自由なき身の上となりたるも、幸なき我身の昔を忍び、決して増長心を起すことなく、嚮きに繪入新聞の手を經て受けし惠みの御恩を忘れまじとて、「金三十錢孝女山口お民殿へ某より」なぞと書き記しある其包み紙を取纏めて、一幅の軸物となし、日々己が坐する側に之れを掛けて、心の誡となしつゝありとは、眞に感ずべきの至りならずや、されば明治十八年同處へ移りて以來、今日に至る迄出來得る限り慈善と云ふ慈善なさゞることなく偖又斯く見世の榮え行くのも、一に觀音大士の賜なりとて、今日まで寄附奉納物をな

したること尠なからざる由、此のみならず養育院の事情を聞てより、十八年の間毎年甘藷を寄贈することに定め、其他逝かれし父の年忌顧忌の其都度には、必ず施物に若干の金を添えて送るが常なりと、其の外學校への寄附金等を擧れは數ふるに遑あらさる程にて、日露戰爭となり、我同胞の多く滿州に渡りたりときくや、さぞ寒からんとて七味唐辛五石を献納せんとて、其筋へ出願したりしに、採用になりたりとて太く喜びたりといふ、殊に感ずべきは仲見世を通る往き來の人が、若し下駄の鼻緒の切れたるときは多くの麻繩を用意し置きて、若者に命じて之を與へしむるが常なりとは、感すべき至りにこそ、

韓國婦人の風俗

看々小史

夫を持つたから、妻を持つたから、直にそれで一人前の人間として、職分を盡したものと云はれぬことは當然の事であるが、相當の年配を大分經過して、望んで配偶を得られず、獨身で居るものは、殊に男は世間から信用の幾分を殺がれるのである、それの甚しいのは、朝鮮である、朝鮮では、獨身の男は四十になつても總角と呼び、文字に示す如く、小供同樣の取扱をされ、他の家に傭はる〻場合などには、主婦の前に甚だ頭上らず、犬でも撲つやうに、ポカ／＼打た〻かれる辛抱もせねばならぬ、實にみじめなものである、然らば妻を娶ればよいではないかと云ふが、それが如何に貧乏人でも、猫の子を連れて來るやうには行かず、嫁貰ひの仕度には、村中の人を呼んで御馳走をせねばならぬなどといふ事があるので、少々の資本ではむつかしい、止むを得ず總角に長い年月を我慢せねばならぬのが、多いのである、そこで話は一變するが、朝鮮の婦人は、支那と同じく、男女七歲にして席を同うせず、といふを今日も遵奉して、決して男子と同席をさせず、もし中流以上の人で、家庭敎師でも頼む場合には、大抵其敎師が男であるから、一室を隔て〻敎授をするといふ實に窮屈千萬なもので、弟子が先生の顏さへ知らずに濟むといふのもある、無論それ以下のものは

教育などいふ氣の利いた事はないので、婦人の十中九以上は皆無教育である、それから婦人はあまり外出をさせぬので、もし餘儀なき場合には、鎌倉時代のやうに被着をかぶらせて、成るべく顔の見られぬ事につとめて居る、京城あたり都の婦人は、淺黄色で上着の同し仕立の、かけ襟をした被着をかぶり、田舍のは白の朝鮮絽で、日本の女袴の一方を除つたやうなものを被着にして殊に奇體なのは、目を一方だけ出して歩く事である、着付は下は緋上は白の袴を二枚襲ね、下にズボン樣のものを穿くのが通例で、靴は男の細作りなのに裝飾をしたものである、

右の如くで娘がたま〳〵外出すると云ふにも、日本のやうに飾り立てゝ、これ見てくれがしではなく、顔などは見られては困るといふ仕掛になつて、必ず母親が同行するのである、次に化粧法は、白粉紅をつけるに變りはないが、顔を洗ふに小便を用うる、これは質を奇麗にする爲との事である、

それから結婚をすると、新夫婦は當分一室に牢居して、一歩も室を離れる事が出來ぬ、食事も茲に運ばれ、大小便も便器にとつて、これは窓から外へ遠慮なくあけるので不潔などいふ考は一つもない、跡仕末は豚がしてくれるといふ有樣、この邊の消息は人間界の話とは思はれぬ位である、

次に妻君となつての仕事はと云へば、中流以上になれは例の總角をつかひ、さもない所で、水を汲むこと丶洗濯をする位なものである、水は川水を用うるが、そこ此處に四疊半位の堀井戸がある、それを汲み來るので、洗濯は、不潔好の朝鮮人に似ず、常に白衣を纏ふので、この汚れを氣にして、絶えず洗ふのである、

韓國の下婢

韓國の婢僕は餘程日本と異つて居る、何の氣もつけず、韓國に行つたら、日本の樣に下女が傭はるゝものだと思ふと大なる誤で、下女を得ることの困難は實に甚しい。大抵は旅費をやつて、日本から呼びよせれば充分でない。韓人にして、下女を傭つて居るもの丶模樣を見るに、日本で想像がつかぬ。まづ韓人生活をなして見て、初めて

日本に居つた時の難有味を覺ゆるは、日本の下女の調法なことだ、日本で下女をするものは、普通未婚の少女であるが、韓國では未婚の下女なるものはない。未婚の女が男子と語を交ゆることの許されないのは、上下おしなべて、不文の禁止法になつて居る様である。男子と語を交ゆることすら禁ぜられてあるのだ況んや人の家の下女たることの出來やう筈がない。それで韓國の下女は既婚者で且つ有夫者である。夫や子が有つて下女をするのであるから、下女一人を傭ふと其一族が皆附隨して來る、尤も下女の親は附隨して來ないのが普通で、親共は別居する様だ、勿論夫は附隨してくる、子も皆附隨してくるから、下女一人の爲めに夫や子や要のないものも養はればならぬ。下女の給金は月に韓貨二圓、即ち日本で一圓位で廉い様だけれども、夫も子も主家で食べるのであるから、實際はなか〳〵高いものにつく、日本の様に本家の小間を與へて置くのではすまぬ必ず下女一家の爲に離れたる一間を與へればならぬ、幸に是だけは門番の役をつとむるのである。下女を傭ふからとて、之に留守番などさせることは殆んど不可能である、韓國人の道德の標準は甚だ低いものであるが、就中下女をする位の女の道德心は何とも云ふことが出來ない位で、泥棒を養つて居るのと少しも異らぬ、少し細君が油斷すると、すぐ手當り次第に着服する。米や薪をゴマカスことは當然のことと心得て居るらしい。賣拂ふて相當の價になるものを盜むことが出來ると、すぐ御暇頂戴と出かける、こんな泥棒同様の下女を傭ひ入れるにも骨が折れるので、韓國では桂庵の様なものがないから、知人に下女はないだらうかと、尋ね合し漸く得らるゝのである。下女の夫は大工とか、車夫とか（車夫は、人力車が輸入されて後のことたるは云ふまでもない）擔荷者とかであつて、朝から夜まで、外で勞働に從事し、妻の所で寢泊りだけするのである、韓國の下女のことを思ふと、日本の下女に感謝せざるを得ない。

婦人の職業

婦人職業問題の喧ましき折柄右の新舊の職業に就いて詳しく調べ見しに是まで在來の者にては

和服仕立▲捲煙草▲眞綿引延▲足袋縫ひ▲下駄の鼻緒▲蝙蝠の縫▲マッチの箱貼▲元結撚▲麻裏草履の裏附▲洗濯▲ハンケチ緣縫▲齒磨楊子▲花簪▲下駄の表編▲糸かへし▲機織▲櫛磨▲羽織の紐組▲袋張り▲電話交換手▲髮結ひ▲子守▲紡績工女▲印刷局女工▲毛糸編物▲メリヤス靴下▲メリヤス裁縫▲造花▲草取▲解版職工▲産婆▲看護婦▲教師

以上三十三種の中には獨立的なるもあり副業的なるもあり又た最後の三職業のみは教育あるものならでは營みがたし扨て又近ごろ新職業として傭へらるゝは左のごとく其の收入は

一家庭教師六圓乃至十五圓、二傳導師十六圓乃至卅圓、三繪端書の着色日當八錢乃至廿五錢、四保姆三圓乃至十二圓、五體操教師十五圓乃至卅圓、六鐵道作業局雇員一日卅錢乃至卅五錢、七通信局事務員一日十七錢乃至五十錢、八爲替貯金管理局傭員一日十五錢乃至卅錢、九東京郵便局傭員一日同上、十日本銀行傭員日給十七錢乃至卅五錢、十一勸業銀行傭員同廿錢乃至廿五錢、十二共濟保險會社同廿五錢乃至五十錢



山靜如太古

文學博士　小杉榅邨

ひむがしの京の西に、天そゝり高くたふとし、瓢形のみそらにそゝる、富士の嶺をふりさけみれば、雪のきぬ取よそほひ、雪のひれかけなびかせて、しきいます國いや廣に、しづめます神いやたかに、この國の鎮となりて、萬代に動かぬすがた、さこしにいとも靜けし、たゝなはる其むろ山は、たちつゞく霞のころも、花の袖みとりにわけに、しな〳〵の臣とまつろひ、ふじのねを君とゐやまひ、七重八重めぐりかくみて、上つ世よ今のをつゝに、動きなきわが大君の、高みくらをろがむなせり、やまたにも君と臣との、しなことにしことにしかぞまつろふ、うべな〳〵わが日本を、うまひとの國とはいひけむからくに人も。

旅のつと

侯爵夫人　鍋島榮子

日光にてよめる中に

我庵はすゞしかりけりなきむしの
　やまの下行く水も見えつゝ

やま川の清きながれを見おろして
　たかどのすゞし風絶えし日も

寂光の瀧に行きて

くるしさをしのびてのぼる石坂の
　あなたに瀧の音ぞきこゆる

去年の秋洪水にて大日堂のあたり
　けしきいたくかはりけるを

木の芽萠しをばが藁屋は埋もれて

のこるいづみの水を汲むかな

宇都宮より大谷観音へ行く岩山を見て

きり出す石もよけれどをしきかな
　松もしげれるこの岩やまを

同じ折雨の降りければ

さらにまためづらしきかな岩山の
　松にかゝれるゆふだちの雨
むら雨やはれわたるらし岩山の
　松のしづくに日かげさすなり

夏の旅

小出粲

夏はよるといへど旅は曉こそまたなくをかしけれ、七八月のころ寝てだにわかぬみじか夜を、かりねの夢のいとゞはかなくて、めをする〱起出てめしをくふほど、はしための寝くたれ髪もまだそのまゝにて、ともしびのかげにかほうちそむけてぬかづくやうにみゆるが、はては燈臺に頭うちあてゝ火をけちたるに、おといひてやう〱めさむるもいとをかし、しらまぬうちにといそぐにめしのあつきぞいと口をしき、ほどなく車もつきたりといへば、出たつに有明の月猶さやかにてりわたりて、きのふの汗衣のまだかはかぬが、すこしひやゝかにおぼゆるもいとをかし、ゆられつゝ行まゝにいとこゝちよくなりて、車の上に舟こぐもをかし、さきのはしためは又ねしつらんとおもふもうらやまし、ひるになればこゝの森のかげかしこの清水のもとにいこひつゝゆけど、日の長ければ思ひの外に道ははかどりけり、日ざかりはたへがたけれど、ひるめしくひて風よくとほるやどの、ひろき板しきをうちみやりつゝしばし枕したるこゝち又いとよし、車夫の早出立んといそがするにふと目さめてみれば、日もかたぶきにけり、おどろきて、いそぎたつもをかし、くれわたるころはしく塲〱もちまたにみつゝ、いづれも門べに床机

おきならべ、若き女どもの客まちがてらすゞみてものいふさまも又をかし、朝も夕べもすべてをかしきものから、とまりにつけばいづかたも、蚤のおほくてときてもねられぬぞいとわろきや、夏のたびはたゞよるのなからましかはと思ひおほせる、

折にふれて

佐々木信綱

楢ばやしくぬぎのはやし一筋の
　小川めぐれるわが家居かな

おさふればいよゝあふれる川水の
　往くらむ方にゆかせてんかな

片なりに唱歌うたひて鞠つきて
　遊びし姿目にのこれども

世のうはさあるじのうはさいひ合ひて
　車やふたりかどにねむれる

二時もきゝ三時もきけど寝られぬ
　胸のくるしさあはれ如何にせむ

許しませ報はすでにあまりあり
　誰ゆゑならぬ我胸のなやみ

山かげの我住む家は狭けれど
　妻あり子あり春の風ふく

舞姫がたえぬほゝえみこゝろより
　もらす微笑いく度かあらむ

へつらひて何を求めん我やどの
　裏のやせ畑よしや瘠せても

旅やたて筆とりいでゝうつしけり
　舟まつほどの川かみのやま

さすらへの繪師をやどして花園の
　花をゑがゝす村をさのきみ

さ夜ふけて胸にし問はゞ人の世に
　罪なき人はあらじとぞ思ふ

七つ子のいたづらざかり親だにも
　手にあまれるを敎へます君

胡蝶の日記（四）

白井千代梅

血の池とて、こと〱しう指示すを見れば、くぼまりたる岩に、雨の名殘にや水少し濁れるなりけり、攀ぢつゝ行くに上の平かなる岩あり、こは慈覺大師の護摩の壇といひ侍り、在昔宿世山に、手長足長てふ、蛇棲みて人の煩ひ大かたならぬを、大師の憫み玉ひて、爰にて降魔の法咒し給ひしに、さばかり猛きも二段と成て、尾は此山に落て村雲ならねど、いみじき劒の有しによりて、尾落伏劒山と云ひ侍ると博士めきて說聞す、受難き事に覺ゆ、胎內くゞり、鬼の棧など、奇しき所々を廻り、彼方此方より聳え立たる巖に板橋かけたるを打渡るに、下には蛇の伏たるやうなる岩あり、蛇體石てふとぞ、實に蒸したる苔も鱗かと見ゆ、寺にも斯々の寶あるなどいへど耳とゞまるもなければ出ぬ、下戸升川打過ぎて、未の頃ほひ野澤なる齋藤某が許にいたりぬ、此わたり近きより書をよう寫す法師の來て、山水花鳥など書きすさぶを、人々興じて見はやす、文月一日、今日は宿世山なる二の瀧の險きに登ればとて、つとめて出立つ、秋となりしもしるく、霧ふかく立籠めて、鷄の聲そこ此處に聞ゆるなど、山里の朝げ最と哀れなり、やゝ日はさし出で、山の梢どもの霧の間がひに、そこはかとなう見渡され、繁う置きわたしたる千艸の露の玉と輝くもおかし、

秋とおもふ心つからやけさはまた
　わきて露けき野邊のみちしば

左の方に、青葉を暗う茂り合ひたる森山ありて、水のおとさや〱と鳴りて物凄じう聞ゆ、問へば名さへ恐ろしき龍澤とぞ、立續きたる松の茂みを分行くに吉出と云ふ里に出ぬ、野澤なる主人も伴ひ來ぬるが、爰に公の仰せことにて、死燒く屋の侍ふが、四方のながめ最好く侍れば、暫時立寄らせ給はなむやと案內するにぞ

打見れば、いかめしうたてたる門ありけり、入りぬ

るに。廣らかなる庭に竈いくつともなく据並べあるぞ、珍らしう覺えて近く寄て見る、また長き屋の内にも外にも棟瓦あまた積てあり、彼方に數寄屋の侍るが、入らせ給ひて茶めし玉へといへば、打まはりてゆくに小やかなる二間いと淸らに作りなし、庭は小やかなる竹垣結ひまはして、木は一本も植ず、綠の芝艸一面なるに、飛石のみつけたるは、樣殊りてをかし、萬づ心を籠たるさまに、主床しう覺ゆ、頓て出づるを見れば六十ばかりの翁也。此人三十年こなたに都より移らひ來しとぞ、宜こそ斯る田舍には似氣なうぞ有ける、調度くだものなべて鄙ならず、外面を見れば、宿世の山は手に取るやうにて、過來し松原も宛然庭かと見ゆ、さればこそ庭の木をば植ぬなるべし、近き渡りに蠶桑とて、公の機織る所あるに、關守の親しき友の住めるを、瀧のしるべにとて、消息して招く、野澤人は、あの高嶺の半ばに登りて足を勞すとも、此瀧の水には勝らじとて、瓢取出で爰に止まりぬ、草道ふみ分つゝ行けば、三新田と云ふ所にかゝれり、案内人頭をめぐらして、爰なむ寬政の頃までは、小萱生ひ茂りたる野良なりしを白井某、學の館の御料にとて、斯く千町の小田とはなし給へりなど、我を其うま子とも知らで語るを、他のごと顏に聞つゝも心の内には、

かぎりなき君がいさほを仰くらむ
小田のたみぐさ枯ぬかぎりは、

並木の松左右に植わたして、奥に社見ゆるを指て、こは此里人らが、白井大明神とさへ崇め祝へるなりと敎ゆるにぞ、斯くゆくりなく來ぬる事の嬉しうも本意ある事に思ふ物から、人々の中に、己れのみ拜み奉らば、しるべ人や怪しまむ、又たゞに過なんも心苦しう、且はかしこし、兎に角に、隱れ笠着し身ぞ佗しけれと、紐をのみ解しに、刀自心をやとり給ひけむ、いざ詣んとて手を執り給ふが限りなく嬉しされど、奉るべき幣は更なり、山はまた青葉なれば

隨意と申さむやうもなくて

何をかもぬさにしてはし秋を淺み

をりて手向んもみぢだになし

おもはずよみ霊のふゆをまつりてし、神のおとゝといへば刀自ふ契りありとは、うしろは深き林にて、傍に清らかなる水ほそう流る、二度詣づることもあらじなどおもふに、すゞろに涙ぐまれて、

かしこくもいと昔をしのぶ身は、神のみやゐを立ぞわづらふ

出れば人々待ち休ひ居つ、抑もろこしにては、蒼生を恵める政ある人は、生ながら祭れるを生祠といへることは、聞傳へつれど。大御國にては其例し稀な



るにや、近き年ごろ紀國なる、駒根木正次とかやいへる武士、賢き名ありて、民ぐさその誠に靡き、在し世ながら駒根木の社と號けて祀れるとぞ、此社も同じさまとこそ覺ゆれ、今はかゝる御功をも知らぬ顔の人も多きは、最も口惜うなむ、百年にして天下のあげつろひは定まると、古への人も云ひしなれば後の世にはなほ光り彌増給ふらめと、文木ぬし語り居給ふ、行き〳〵て山路になれば、草のみ繁く木立もなし、暑さたゆべうもなけれども、只登るに、従者どもは困じ果てゝ、見給はん

瀧よりも、己れらの汗こそ落まさらめなど、呟き佗るも理に覺えて心苦し、鳥居立てる所にて、しばし憩ふ、見下せば綠の小田涯もなうて、遠近の村里は只森のやうに見え、青海原は空につゞきて、夫かあらぬか木葉の浮べるやうに、舟ども小さく見ゆるなど、すべて色なき筆には書き盡すべうもあらず、日はいよ〳〵照り添ふ物から、吹き來る風の涼しきに、皆立かねつ、其鳥居に多く書きすさびたる發句どもの中に、八日めや鳥の囀づる青葉かな、とあるを、あな心も得ぬ言の葉や、かた腹いたしと人々笑ふ、されど斯道しるらむ人の見ば、いみじき言の葉にもや有らむ、爰よりは平かにて、草果なう生たる中に大きなる石所々にあり、下野の那須野といふも斯やなど覺ゆ、やゝ分行くに木立いと深くなりて、細き道の露さへしげきは、いぶせけれど、

　ことさらに濡てをゆかむけふならで
　　また分けがたきみ山路のつゆ

斯る山路にしあれば、往來ふ人もあらで、唯杣人の樵りすてし爪木のみ、此處彼處にあり、たつきも知らぬなどいふに、呼子鳥にはあらで鶯の、若びたる聲に囀る、霞をわくる初音より猶珍らしうて、

　うぐひすの聲する方にわけ入らむ
　　風にしられぬ花もありやと

五月雨

喜久本海洲

今日も朝より降出でぬ
一人たゞづむ身の淋しさに
歌書き居れば筆の毛の
　あはれや拔けて落ちにけり
今日も朝より降出でぬ
友を訪はんとをりたちて
開ぐる傘のあへなくも
　紙はやぶれて雨ぞ降る
嗚呼いつまでの五月雨ぞ

窓押わけて眺むれば
山たちかくす浮雲の
中をなきゆくほとゝぎす

今昔の螢

桐廼舎桂子

五月雨のをやみだになき頃のさう〴〵しさにふるきあたらしき袷巻物おしひらきて、ひとり心をなぐさめつゝありしに、うちしめりたる風と共に、いひしらぬにほひのかほり來て、ものゝけはひさへするがいぶかしと、鵜自物せる頸根さしもたげて見るに、こは、青色の唐ぎぬに緋いろの裳らうたげにそうぞきて、さゝやかなる籠に、なにゝかあらん虫をいれてもちたまへり、あなたぐひなのさまや、かゝる上臈の、いかにしていぶせきを家にまひきたまひにけん御供の人やついたまふと、外のかた見やるに、さおもはるゝものはあらで、なほいり來るものこそあれ小鼓をもたし、胸の守をこそかけね、袷のうちに見えたる、われながらたのまれがたきちぎりかな、おもひわたさぬ人をこひつゝ、といふあそびめにや、とをかしう見るほどもなく、よりて、なほめとめつるに、たちまちにやうかはりて、あたらしき袷のやうになりたりき、かみこと〴〵しうあげて、かざしことにしげく、はふに厚く、べにはえ〴〵しうして、夏草のくちたるいろの衣に、黒きこがねのいともて天津ほしのかげにやとゝめたるをうちかけて、いまやうにひきつくろひたるもをかし、あまりにあやしくて、とみにいひ出むよすがもあらねば、かたへにしぞきて、かなたこなたまもり居るに、さきなるが、なでしこの五重がさねの扇なかばひらきつゝかほにあてゝまし、いしくもちかひのごとゝひこしよとのたまふ、あとなるはほゝゑみて、まことなしとのみいひけちたまひそとざればみつゝほとりちかうゐよりて、今日ぞむかしの御物語うけたまはらむとてたのしみつるをと怨じぬ、これもゑま

しげに、いなわらはこそいまの世ざましらまほしうあれ、とく〳〵ましよりとせちにのたまへば、かれは、いとわれは顔に、さはとて語りいつるものか、しろしめすごと、わらは昔むろの津にはべりしが、世のなかひらけぬると〻もに、ゆめのまに千里をかよふ船さへ出來ぬ、いまはいたづらに追風まつ人もあらねば、いかゞはせんと身をこがしつ〻、つひにさすらひて、この北の里にすまひぬ、年月にまさりゆく都のにぎはひも、皆たからによてなめり、さればいまは公ごとにつかふまつるつかさ人はさらなり下が下まで、皆たから得んとてなん、世をわかすとかや、されば、たからさはなるは、をかしきあきうどもたかき位にのぼるとぞいふ、つとめてか〻る人に身をよせむと、人侍になれしたしむによて、まことなしてふ名もおひぬれど、身もわすれてめでたまふ人もあまたなれば、うしとき〻しもなか〳〵にたのしうてなん、君もいまゆのち、かたくな〻るを捨て、おもしろき世に光り出たまはんとならば、はからひはべらん、とまめだちていふ、かたへなるは、古めかしうつくりなしたるまゆうちひそめて、そはいときたなきことぞ、いかでまことのたのしみとなすべき、ち〻おとゞもろこしにありけるとき、彼國にいみじうまづしうて、書このむをのこありける、あぶらのしろもあらざりければ、よるはよむことかなはざりけり、ち〻ぎみこの籠の虫をあたへて、まどのうちをてらしやりつることはやくもれて、かれはさらなり、此大御國の教のにはにとなへたるぞ身にあまりぬるひかりになん、また光てふ源氏の君ましませしとき、この君筑紫より得たまへる姫君ををぐらき局におきて、兵部卿の宮わたらせたまひけるに、俄につとはなして宮をおどろかせし、また女車に出なたれたりしかりそめのすさひながら、雲の上にいまなほめでたまふ事のかしこさよ、わらはがたのしみはかくこそ、またこらずや、このほど石山よりうつり來て、九重のみそのふにすみわたれることをと、心すゞしうかたらひたまふに、いたくかん

じて、身のほどもわすれはてゝ、ことゝはんとゆすりいでつるに、あはれたちまち身のわなゝくにおどろかれて、と見れば例の絵巻物に笹浪たちて、二人のをみなは影もとゝめず、夢か現かとなほ思ひまどふをゆりさますは父の君なりけり、いまさるかたよりうすものゝうつはおもしろうしたてゝあまたいれておこせたりとのたまふまゝに、よりて見るに、あないみじのほたるや。

三十一文字

藤　　　麻生春子

しめやかに春雨そゝくまつが枝に
　かゝりてにほふ藤なみの花

躑躅

山そひに咲つゞきたる夕つゝじ
　くれなゐふかき色ぞ床しき

螢

夏くさの葉におく露のひかりさへ
　風にみだれてとぶほたるかな

夕立

風はやみたちまちはるゝ夕立の
　なごり涼しき野邊のしらつゆ

時鳥　　　長谷川しん子

有明の月にかゝれるくも間より
　ひとこゑたかくほとゝぎすなく

ありあけの月よりもるゝ一こゑは
　はつ音なりけり山ほとゝぎす

五月雨

つれ〴〵をなぐさむすべもなかりけり
　やま家のさとのさみだれのそら

夏月　　　坂本乙子

夕立のはれし雲間にやどりけり
　見るも涼しき夏の夜の月

百合

夏草のしげれる中に交りつゝ
　かをり床しき白百合の花



食物に就て

醫學博士　高木兼寛

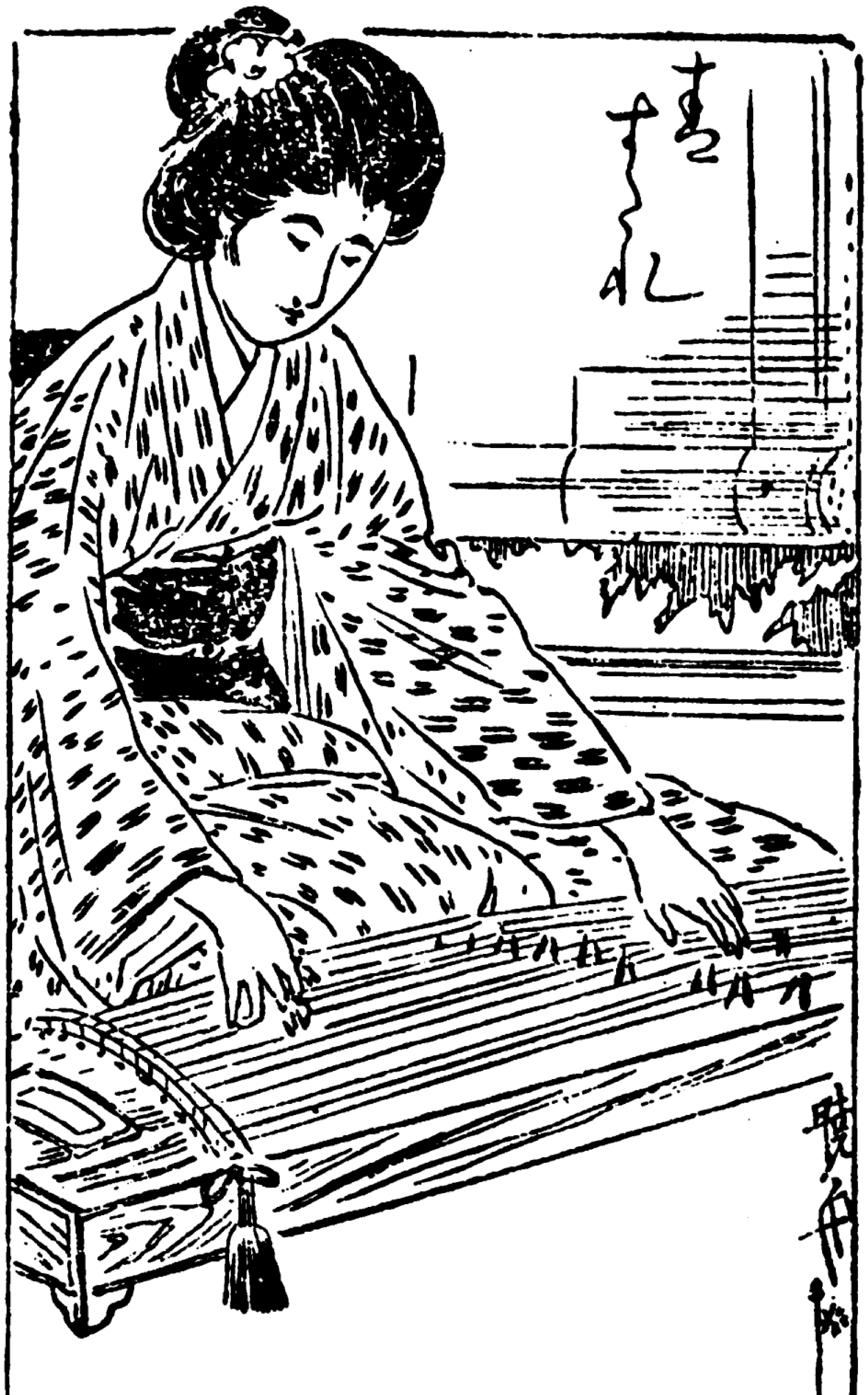
食物は至つて大切なものである、と云ふことを心得て居ない人が澤山にあるやうに思ふ、ソレ故に土を食ひ、水を呑んでも何々をすると云ふ樣なことを言ふが、決して斯う云ふことの出來得べきものではない、是は全く虚言であつて、人のからだと云ふものは、決してさう云ふ無法の事の出來るものでない、極々精巧なるものであつて、而して其働きと云ふものは至つて奇々妙々のものである、即ち私が一時間餘胸中に貯へて置いたことを話をしあなた方は又之を聽き取つて、ソレ〱了解をされると云ふ斯う云ふ不思議な働を爲して居る、造物主が斯樣なる不思議の器械を造るには、必ず非常な工夫を要したに相違ない、其工夫を致すのには自ら混み入つた仕掛がある、即ち申さば人のからだは時計のごときものである、時計と云ふものは上等になればなるだけ混み入つた仕掛になつて居る、又上等の時計になれば自然に運動をするかと云ふに、決して自然に運動はせぬ、矢張人手に掛けなければ運動は出來ぬ、然るに人の體は、人手に掛けずに自由自在に運動をする、併ながら自由自在に運動するには、自ら原因がなければならない、其元は何かと云ふに、即ち或物質があつて、其物質がからだの中に於て、斯くの如き働きをするのであつて、極々精密に組み立てゝあるもの故、此物を永く充分に維持するには、どうするかと云ふに、即ち飲食物を以て我々の知るべからざる奇々妙々の機械を維持して往くので、食物と云ふものは人間の生活上甚だ必要なるものである、然るに彼は贅澤、是は驕りだと云ふやうなことを云つて、

食物には一向頓着をしない人がある、我々の幼さい時などは、殊に食物などは何でも宜しい者のやうに思つて居つた、今日も尚は斯う云ふ様な考を以て居るものが世の中に甚だ多い、是は實に歎息の至である

ソレ故に私は食物は一體何う云ふ工合にして食すれば宜いかと云ふことに就て一言したいと思ふ、

先づ食物と云ふものには自から成分があつて、野菜、穀類、肉類等、皆悉く滋養分を含んで居る、是を區別すれば

含窒物　含炭物　水　鹽類



と云ふ此四つとなる、米を分析しても肉を分析しても歸する處は、此四つの品物に外ならない、即ち是だけの物を一定の原則に從つて食用すると云ふことになれば、人のからだは無病壯健、即ち一年三百六十五日の間毎日々々働いて居つても體重が増しもしなければ減りもしない又病氣もしないことになる、然らば其割合はどうかと云ふに、大約含窒物一、含炭物四合せて五つのものを、銘々からだの量目を百分の一を毎日食すれば宜しい、即ち十五貫目ある人は含窒物一、含炭物四の割合で出

來たものを、毎日百五十匁食はなければならない、毎日百五十匁の食物を食つて働けば、夜になつても疲勞を覺えず、翌朝になつても氣分が爽快で、又前日と同じやうに働いて往くことが出來るのである、處で其分量は、先づ含窒物三十匁、含炭物百二十匁の割合で宜しい、此割合を過まらぬ樣に致せば、人は無病息災と云ふことになる、それならば斯う云ふ譯合に出來て居る品物が、食物中に在るかと云ふに、世界中搜しても斯う云ふ完全した食物は甚だ少ない殆んど無いと云ふてもよい、そこで先づ之を細述すれば長くなるから大略にして、只米と麥と云ふものに就ていへば、米を分析しても、麥を分析しても、前述の如き含窒物、含炭物、水、鹽類の四つに分かれる、然るに米の中に在る滋養分と麥の中に在る營養分とは其割合が違ふ、例之ば今百匁の米を食するとすれば、米百匁の中に含窒物六匁、含炭物七十四匁ある、併し是では滋養が足らぬから、米を二百匁食するとすれば、含窒物十二匁含炭物百四十八匁になつて、是では、一定の原則に照して、蛋白質(含窒物)の不足なること二十八匁、澱粉質(含炭物)の多きこと二十八匁になる、是まで米を常食とする日本人は蛋白質の不足を何うして居つたかと云ふに、豆の類が補つて居つた、大豆、味噌汁其他の副食物などより補つて居つた、米を澤山に食すれば、含窒物が不足で、含炭物が多過ぎるから、胃腸の病氣を起し、甚だしきは脚氣病を起す、脚氣と云ふものは全く此理によつて起る處の病氣である、故に此病は自分の注意次第で豫防して往くことが出來るので有る、麥は二百匁の中含窒物二十二匁含炭物百四十四匁で有るから、米と比較して、含窒物三十、含炭物百二十の定則に稍々近い、それ故にからだの、健康上より云ふと、麥を食する方が宜いのである、米は二百匁食すれば含炭物が多過ぎ、百匁食すれば含窒物が餘りに不足をする、因つて其不足を補ふ爲に、牛肉なり、魚肉なりを食せねばならぬから、それだけ金を餘計に費すことになる、然るに米を廢めて、麥を多

く食すると、金を費さずに、金を出したと同じだけの滋養物をからだの中に入れることが出來る、又百姓は粗食すれども壯健なる理由は、含窒物の多き食物を餘計に食べて居るのも大に關係して居ること丶思ふ、又中流以上の人の食物は、含窒物の不足がある爲に、始終氣分が惡るいとか、胃が惡いとか云つて、顏色も靑褪めて居る、原則に因つて食物を攝取すると、人が病氣をしない樣になる、さうすれば長壽をするのは言はずして明かである、そこで注意を要する點は實に此處に存するのである、含窒物と云ふのは、鷄卵の白身と同じもので、蛋白質と稱し、含炭物と云ふのは、澱粉、(葛)砂糖及脂肪である、成るべく米を食せずに麥を食する方が宜しい、若し米を食するならば、分量を少なくして、含窒物の不足は魚獸の肉で補ふ樣にしたい、斯くすれば即ち百歲までも壽命を保つことが出來るので有る、

米の中では何か一番宜いかと云ふに、一體米と云ふものは、神武天皇の御降臨前から日本に在つたものである、併し其頃から精米があつたのではなく、古來燒米、干飯、玄米、精米とあつて、精米を用ひたのは近世のことで、實に德川氏以來のことである、加藤淸正の七ケ條の法令などにも、食米は玄米たるべき事と云ふ事が書いてある、それを以て考へて見ると、どうしても精米と云ふものは古は無かつたものと思はれる、さうして此精米と云ふものは、あまり宜しいものではない、何故惡いかと云ふに、精げて仕舞つて、米の外側にある最も養分のある處は糠として捨て丶仕舞ひ、澱粉の最も多い處が殘つて居るものである、誰でも白いのが好いと云つて喜んで食するが、米をば食用としての價値の上から云へば、一番好いのは玄米、次に下白米にして、上白米は最も含窒物と含炭物との割合を失ふて居るから、衞生上から言ふときは、上白米は下白米、下白米は上白米と斯う云ふ譯になつて玄米は最も食用に適すると云ふことになつて居る、是れ即ち古代の人が長く壽を保つた一つの原因で有らうと思ふ、古の人は燒

米玄米等を多く用ゐた、ソレ故身體も壯健で長壽を致した、然るに後世になつて、澱粉即ち含炭物を多く取り、蛋白との權衡を失つて、からだの害を爲し、生命を縮めた、乃で之を何うしたならば宜しいかと云ふに、麥を混合して用ゐるが宜しい、假に米を全廢することは出來ぬが、私の考へでは、從來は日本中で米を四千萬石用ゐたものならば、二千萬石に減じて、半分の二千萬石は販賣することにして外國に出すが宜い、一體日本の米は世界の市場に於て販賣すればなか〳〵價が高い故、半分だけは輸出品として外國に出し、半分だけを食用として其補ひを麥を以てすると云ふことになれば、誠に一擧兩得である、即ち一方に於ては外國に輸出して利益を得、一方に於ては身體を壯健たらしむることが出來るので有ます、麥は初めの程慣れない中は隨分食べ惡い、即ち先入主となり、好いものでも初めはそれほどに價値の解らぬ者である、併しながら慣れて見れば、麥の方が食する時の味ひも、食した後の腹工合も好く、成程此方が宜いと云ふやうになるもので有りますから、どうか少しなりとも用ゐるやうにしたいものである、斯く云ふのは決して高木兼寛が一身の爲ではない、國家の爲め同胞の體格を強壯にし壽命を長く保たしめ、以て對外の策を施さんとするの意に外ならないので御座います、人と云ふものは、一度決心をして事を爲せば何事も行はれぬと云ふことはない、況んや斯くの如きの些事、決して行はれぬと云ふことはない、併しながら中には麥を食するのは、外聞が惡るいと云ふ樣な點から宜いと知りつゝも自から等閑にするものも隨分あるが、是等は眞に國家を憂ふる念慮の薄い人の言ふことで、斯樣な事から人の誹謗を受くるのは決して頓着するに及ばぬ、苟くも好いことであれば速に實行さるゝ樣に自分は冀望するのである、

夫婦して門田見ながら納涼かな

木の下に草鞋のまゝの晝寢かな

一日の暑さ忘るゝ夜舟かな

豆類の滋養分

醫學士　三宅　秀

豆は、大變滋養に成ると云ふことを申しますが、實際に分析して見ても豆の中には、滋養に成る部分が澤山に備つて居ります、

豆類の中でも、日常餘計に用ひて居るのは大豆であつて、此豆で拵へる豆腐は、滋養になり、且つ、軟かいから大層消化が宜しからうと誰れも思ひますが或る病人に成りますと、豆腐さへも消化すことが出來ない病氣があります、けれ共これは、餘程衰へた病人の話であつて、先づ普通の病人には食べて差支ないと成つて居ります、

それから平日食べて居ります、味噌であるが、これは食物の味を付けるために使つて居るのでありますけれども、舊來此味噌に大層効能があるものゝ如くに申して居ります、唯滋養になるばかりでなく、藥のやうな効能がある如くに思つて居ります、

それから又、溜りとか、醤油とか云ふものも矢張り味付に使ふのでありますが、馨ばしい匂ひと、良い味を有つて居るものでありますから、唯燒鹽で味を付けた食物より醤油で味を付けた方が美味と云ふて病人が好むやうな塲合には、差支なく食べさせて宜しい、以上は、大豆から製したものでありますが、又病人には隱元豆の軟かく煮ました物などは、食べさせても害がないと昔から言つて居ります、是は決して害が御座いますまいが、唯皮の部分は消化が惡くございますから、叮嚀に致しますには、裏漉に懸けます、さすれば味も宜しくなりまして病人には能く食べられまするし、又、滋養にもなり、害も無からうと思ひます、

赤小豆と云ふものは、世間一般藥の如く考へて居りまして、殊に脚氣病人には主に茹赤小豆にして砂糖を極少なくして食はせます、併し通例は、餡にして菓子などにして食べるのでございます、此餡と云ふ物の中には砂糖と云ふ滋養物が這入つて居り、それか

商界に於ける女傑

十四年の苦鬪

玉置須美子の事

玉置牛右衛門翁が愈々鳥島渡航を決心した明治二十一年頃、夫人須美子は十一の鍋太郎を頭に鎌三郎、傳、道と云ふ三男一女を養育して、鐵砲洲に住み馴れ、倉の一棟もあつて、八丁堀に少しは家作も持つて居たから、普通の女ならば、子は母の碇と云ふ鍋、鎌、傳、道の四挺碇に繋ぎ留められ、思ひ切つて出稼ぎ同様無人島に押し渡らうなどゝは思ひも寄らぬ。

然るに須美子は、牛右衛門翁が鳥島行を相談に及ぶと、聲に應じて断言した『世は段段開けるに何時迄も斯んな事を爲て居ては碌々世間に顔も出せまい、どうせ兩手に花は持てないから、家も家作も引き拂つて往きませう、此所で何時迄も斯んな事を爲て居る位なら、私はいつそ鳥島で粥を食つて死ぬ氣だ』

早速の返答に牛右衛門翁も驚いて『子供等は如何する』と問ひ返すと『ナアニ早けりや三年遲くて五年には何とか目鼻がつくだらうから、上の二人は學校へ預けて、運が惡けりや丁稚奉公に打ち込んで貰う迄の事下の二人は連れて往きませうよ』と、相談忽ち一决して、親類縁者の止むるも聽かず家も家作も二束三文に賣り飛ばして、鍋太郎と鎌三郎を下谷の元島學校に托し、傳と道子を伴ふて、愈々鳥島に往く事となつたが、唯一人故高崎府知事のみは『そりや好い事ぢや、あれ丈の鳥が居るから、肉でも羽毛でもキャアとかスウとか物を云ふには相違ない』と勵ましたので、須美子も大に力を得た。

五つの鍋と二つの道子を伴ふて、ゴロツキ人夫の間に立ち混つた須美子が、愈々鳥島に到着して見ると、三間に五間牛の家を一軒建てた許り、雨でも降ると百人許りの人夫が皆此内に潜り込むから、小供を寢かす事さへ出來ない、しやがんで二人の小供を抱いた儘に、夜を明した事などは珍らしくない、夫れで居て晝は終日夫の總理大臣と參謀長と大藏大臣を勤めて居るのだ。

特に愈々牛右衛門翁が、始めて鳥の羽根を携へ賣り口を求めて内地に歸つた時の如きは、二人の小供を引連れて夫の留守を預かり、百人近くの人夫の頭に立つて、鳥の羽根が首尾好く賣れるか賣れないかと云ふ生命の瀬戸際に、力と頼む糧食が殆んど缺乏して來た時の如きは、須美子の慘憺たる心痛苦悶は、實に一ト通りや二通りの事ではなかつたのである。

臨機應變の頓才に富んだ男勝りの須美子であるから、夫の留主中に米の缺乏とあれば人夫等の働きがなくなるを察して、米の不足などは顔色にも出さない、先づ第一に米の儉約法を考へ、傳と美智の二子を伴ひバケツに鳥の肉を運び來つて肉饅頭を製し、之れを油に揚げてお茶菓子に出すと、人夫等は大喜びで揚饅頭に舌鼓を打ち鳴らす内に

自然と米の儉約が出來た。
今度は醬油が不足になつて來る、味噌が缺乏を告げて來た、其所で須美子は人夫等の寢靜まつた後に、醬油に鹽水を割つて沸騰させ、一升のものを三升にも殖し、味噌にも鹽を混ぜて使つたから『今度の味噌醬油は馬鹿に鹽辛い』と人夫が云へば『さうかねえ口が違つたから、此次ぎのは好いかも知れんよ』と空惚けて居た胸裡の苦悶は、中々容易の事ではなかつた。
遂に斯の如くして數十日間の糧食を節儉し半右衞翁が鳥の羽を賣り糧食を積んで歸航する迄、能く籠城の任務を盡したのである、人夫等後に須美子當時の苦心を聽いて鹽辛い半樽の味噌を紀念として噴火の時迄大切に保存して居た。
須美子の鳥島出稼ぎは、其の豫定の如く三年にして歸れたが、斯く迄にして能く半右衞翁をして今日の成功を爲さしめた須美子は到底尋常一樣の女ではない、生れは濱町出羽の邸宅で、十一の歲に兩親に別れてから、親類緣者に米一粒厄介をかけた事なしに、獨立獨行十四ヶ年の奉公を續け二十四の時半右衞翁に嫁したので、本年五十八歲である。
生來勝氣で男優りの須美子であるから、何事でも何人でも恐れると云ふ事はない、違ふと思へば一刀兩斷にピシ／＼遣つ付けて躊躇しない、常に半右衞翁の實印を預り、入つては金錢の出納に任じ、出でゝは商法懸引きの衝に當つて居る。
今に一例を云ふと、須美子が商法取引で外國商館に往くや、草履が出て居ないと下駄の儘で何處へでもガタ／＼上り込む、是れを咎めると『下駄は日本人の靴です』と一喝して平氣であるから、須美子の顏が見へると、商館番頭が慌てゝ玄關に草履を揃えると云ふ位である。
彼のウヰンケル社が鳥の羽百斤十二圓位に安買ひしながら、曾て四萬斤許りをペケで跳れるや、須美子はドシ／＼他に高價で賣却し、ウヰンケル社から故障が出ると、ペケを賣つて居るとて取合はず、存外の巨利を占めた事がある。
半右衞翁は元來氣力の塊りで企業心には富んで居るが、商業心に乏しく取引き談判には不得手であるから、須美子は此缺點を補ふて居るので、人に依ると玉置の主人は實に好く出來た男だが、彼の細君がと眉を顰める者もあるさうなが、如何して／＼須美子なかりせば半右衞翁も或は鳥島の借地權を他人に詐取せられて居たかも知れぬ、今日の富の半を減じて居たかも計られぬ。
それに半右衞翁、家事になると夜中でも須美子を起して相談をかけると云ふ風で、須美子の方では却つて其氣性同樣、テキパキ專斷でアベコベに斷行して仕舞ふが、半右衞翁は一切信任して何にを如何したかとも訊かない、只新克約商業學校卒業の鍋太郎君や東京女學館卒業の美智子が『お母さんさう云つても時節が違ひます』など時々反對すると『ナアニ時節もヘチマもない、私がさう遣つて來たから夫れで往く』と頭ごなしにケナシて仕舞ふが、實際須美子に實功實力があつて一同から立てられて居るから、家庭は至つて圓滿な麗はしい家庭であるらしい、果して然らば須美子の如きは入つては心溫かき家庭の女王、出でゝは口喧ましき商界の女傑であらう。

ら又亦小豆から取つた所の澱粉でありますから、兩方も身體の養ひになるものであつて、害にはならない、尤も食べ過ると宜しくありませぬ、併し日本では、是迄病人には餘り、豌豆とか蠶豆のやうなものは進めないやうに致して居りますが、西洋では大層豌豆を賞めて居ります、而して夫れを粉に挽きまして、其マルトン、グミノーゼのやうな物を混ぜて、病人の食物に致して居りますが、是は大層養ひになる食物だと云つて居る、之にお湯を注いで攪廻すと恰度日本のお汁粉のやうなものが出來ます、日本では餡で造つたお汁粉は餘り病人に食べさせないやうな事に成つて居ります、西洋では、今のマルトングミノーゼが大層滋養になる物であると云ふて病人に食べさせて居ります、丁度珈琲の樣にして飮ませますが、それも大層滋養になると云つて居ります、若し果して此樣なものが養ひになるならば、日本のお汁粉も餘り砂糖を入れずして食べさせたならば、必ず病人に害は無からうと思ひます、何も西洋の品計り、尊いと云ふ譯ではありませぬ、

乳の話

其四　牛乳に就て

農學士　牧　忍

牛乳は他の家畜の乳に比すれば其分泌量多いのみならず、バター、チース等を製するに用ひますから、現今各國營養品中の重要なるものとなつてゐます、牛乳は一般には酸性及び『アルカリ』性の兩反應を有する液體でありまして、不透明で白色でありますが、其飼料に因て一定しては居ませぬ、時としては微黄色を帶ぶることもあります、凡て乳汁の不透明で白色を呈するのは、其中に無數の脂肪球が乳化した有樣で存在するによるもので、決して脂肪が乳汁に溶解して居るのではありませぬ、其重なる成分の性質を略述して見ますれば、次の通りです、

一、脂肪、牛乳中の脂肪は主として『ステヤリン』

「パルミチン」『オレイン』と云ふ脂肪の混合したものでありまして、分娩の當初は時日を經るに從つて漸次其量を増加します、純粋なる牛乳脂肪は白くて臭味共に少いのですが、元來牛乳の性質が前に述べたやうに揮發物に對して、吸收力が甚だ強いのですから、其吸收した香氣は善惡共に是より造りました、『バター』に感染して、之れに一種の香味を附與するものであります、脂肪が乳の内に存在する狀態は、微細なる球狀をなして居ます、故にそれを脂肪球と稱へます、乳汁脂肪の消化し易い所以は消化液に接觸する面積が大いことが其主なる原因です、

二、乾酪素　牛乳の含有する蛋白質は其大部分は、乾酪素よりなることは已に明かであります、其乾酪素が乳に始めて表れるのは、小牛が生れて二三日若くは四五日經し後でありまして、それより著しく其量を増す場合が多いのです、其以前に乳の中にあるのは、乾酪素以外の蛋白質です、乾酪素が他の蛋白質と異るのは主として燐を含むからです、乾酪素が生乳中に存在する有樣は勿論液狀でありますが、全く溶解して存在するものではありませぬ、之は乾酪素の分子中に水の分子が吸ひ込まれた爲に、乾酪素が非常に膨脹して居るのです、

三、乳糖　之れは乳に特有の糖類でありまして、其溶液は甘味がありますけれども、固體を口中に入れても殆んど甘味を感せないのは、唾液中には水分が少いのと、其溶解することが遲いのとに因ります、牛乳が腐敗すると凝固するのは、乳糖が乳酸に變ずるから、其酸の爲乾酪素が凝固するに因るのです、

乳汁の主なる成分は、今述べました三つであります
現今開明各國で主要な營養飲料として牛乳を貴ぶ所以は、其一種の香味があつて人々の嗜好に適するから、と尚各滋養素の割合が人體の營養に適し、殊に乳兒及び病者に向つて缺くべからざるものであるからです、大人が牛乳を飲用する目的に二種あります、一つは通常の飲用物と共に用ひて、其飲用物滋養素の不足を補ふ爲と、他は疾病の爲通常の飲食物が充

分に消化しないか、或は通常の食物を用ふることが出來ない場合に於て之を飲用するのです、若し健全なる人が牛乳のみで充分なる營養を得んと思はゞ、毎日の飲用量は凡そ一升八合を要しますから、病者でなければ之を專用することは出來ませぬ、若し強いて之を實行すれば先づ消化機を損害し、且經濟上の損失も少くはありませぬ、

家庭理科

食鹽の話

山下謙堂

前回まで申述べた事は、化學の大體の事を一と通り申して置かうとした爲に、自然と混雜した物になりましたが、大體の事は此れで述べましたから、今からは有りふれた物に就いて必要な事を述べる事に致します、それで今度は食鹽の事に就いて少し申述べませう、先づ其の元素から申します、食鹽の元素は鹽素と申し、黄綠色の瓦斯で烈しい匂がありまして、少しでも人が吸ひ込むと、氣管を傷めます、諸元素と化合する方が非常に強く、殊に水素と混合して日光に逢はすと忽ち爆發する事は前に申した通りであります、

此の瓦斯は傳染病の毒を消し、紅、藍等、植物性の色を消す性がありますゆゑ、消毒、防臭、漂白等に用ゐられて、誠に有用な物であります、さりながら瓦斯體の物でありますから、其儘では持扱ひに不便であります、故、水化石灰に此の鹽素を吸收させて出來た漂白粉といふ物を使ひます、此の粉を入れてそれへ少し酸類を加へますと、直に鹽素が分れて出ますから、初から鹽素を使ふのと同じ効能があります、さて其の漂白粉を以て色を拔くには、先づ漂白粉を水に溶かし、其の中に紅金巾とか、藍色木綿とかを入れ置き、暫くして此の布片を取り出し、別に水中へ稀鹽酸少しを滴したるものに浸します、此の仕方を數度繰り返して後、清水で洗ふのであります、

便所などの消毒や、防臭には、此の粉を撒布して置けば宜いのであります、此の色の抜ける理由は、漂白粉から分れ出る鹽素が、水の水素と化合して酸素を離すゆゑ、其の離れ出る酸素が色素を酸化せしめるからであります、消毒や防臭も同じ理で、悪臭の瓦斯や有毒物が、酸化されて別物に變じるからであります、

右の瓦斯が食鹽の主なる元素で、之と曹冑謨（曹達の元素）と化合したのが通常の食鹽であります、其の自然に出來て在るものは、山鹽或は石鹽といひ、石炭抔の如く地層を成して地中に在るのを堀り出すのであります、其の純粋なのは其の儘食用に使ひますが、陶土とか石膏とか混り居るのは、水に溶かして鹽水となし、混り物を濾し別けて煮詰めるのであります、其他食鹽は海水の中に多く含まれて居りまして海水から採られるのが、殊に多いので、日本では皆此れであります、其の方法の大略を申しますと、先づ海濱に鹽田とて平地を設け土砂を撒き擴け、之に海水を撒き注け置く時は、日光と風の爲に其の水分が蒸散し、鹽分が土砂に附いて殘ります、其の時此の土砂を掻き集め豫ねて、之を濾す仕構ありて、其處に入れて水で濾します、さうすると黄茶色の濃い鹽水が取れます、此の鹽水を鹽釜で煮詰めたのが食鹽になるのであります、

我が國は四面環海の國でありまして、海に沿ふた所では大抵鹽田が開け、鹽が製造せられて居りますが古來名の聞えて居るのは、下總の行徳、阿波の齋田播磨の赤穂等であります、赤穂の花鹽といふのは、種々の模型に入れて焼いた焼鹽であります、

さて鹽の性狀を申しますと、無色透明の結晶體で、其の形は立方形でありまして、地中より堀り出したのは、其の結晶が大きくありますが、通常鹽田 海水から煮て採つたのは、結晶が小さく、其の角縁が連結して、多數集り漏斗形になつて居ります、味は鹹らく能く水に溶解ます、純粋の食鹽は前申した通り鹽化曹冑謨でありますが、通常海水より採つたも

のは純粋なものでなく、種々の混り物があります、鹽を俵又は笊杯に入れて久しく置きますと、灰汁の様な苦い汁が垂れて出ます、之をニガリと稱へて豆腐を製造するに使ひますが、此れは硫酸マグネシアで其の外にも鹽化マグネシア、硫酸曹達等も混りて居りまして、空中では水分を引いて濕り易いものであります、

食鹽は味噌醤油を造り或は其の儘にて、食物の調理に缺ぐ可らさる品なる事は申すに及ばす、肉類の腐敗を防いだり野菜類を貯へたりするにも必要な品であり、其の他工業用の鹽酸、或は曹達等を製造するに多く用ゐられます、

鹽は食物の調理に用ゐられては、其の味をよくするのみならず、大に其の消化を助けるもので、人體中に是非缺ぐ事の出來ぬ物であります、其の他鹽には種々の効能があります、まづ

◎鹽には細菌を殺す力がありますから、五十倍位の水に溶解した物は、石炭酸水の代用として嗽口を洗つて、其の膿化を防ぎ清潔を保つことが出來ます、又口を嗽ぎ、或は吸入器で吸入療法をする藥液に使用して鹽剝水、重曹水等に劣らぬ効能があります、我國古來物を清めるとか、不淨を攘ふとか云へば、鹽を撒くといふ風俗がありますが、自然と理に適つた事と思はれます、

◎肉類の生の儘で食べると胃腸を傷める物でも、醤油に浸し或は鹽で揉んで（能く殺して）食べれば、其の障害が起りませぬ、此も鹽の力であります、

◎火傷した時も、大抵は鹽で直ります、其の仕方は其の燒けた局部へ鹽を附け、一二時間斷えず水にて濕して置けば、段々痛も止まり、跡へ水脹等も出來ずして直るものであります、

◎又歯の養生に著しい効能があります、其の仕方は毎朝歯を磨いた時に食鹽を歯の間に擦り込み置く事で、或は歯磨粉の代りに鹽を用ゐても宜しいのでありますが、水で口を嗽ぐ時洗い捨てゝは効が薄くなりますから、口を嗽いだ跡で又一通り擦り込んで置

くが宜しうあります、此の事は現實確かな實例があります、其れは本年八十歳になる老人が、元來齒の性が善くないにも拘はらず、中年から此の食鹽を用ゐた爲、目今で拔けた齒と云つたら前齒二枚と奥齒四枚とが無いだけで、其の他の齒は皆確乎として居りて、炒り豆を食べるのであります、此の奥齒の拔けたのは、まだ此の食鹽を用ゐぬ以前に齲齒のために損じたからであります、自分も齒の質の惡るい方で、齲齒の痛み齦の腫等で常に苦しんで居ましたが、數年前から此の實例に倣ひ實行して居ますので、其の以來は齒痛で苦しむ事はなく、又齦の腫れるといふ事も一切なくなり、口中が臭くなる事なども勿論なく誠に善い心地であります、

雨ふくむ空を見ながら晝寢かな
うつゝにも夢にもつかふ團扇かな
よい風の生れそめけり靑すだれ
寢てからもいどろ人ある納凉かな

子供の遊相手

高橋久野

世の母人の吾子を育つるに尤も注意すべきは、遊び敵即ち遊び相手を選ぶことなり、昔支那の墨翟と云ふ人は、白糸の染まんを見て歎きし如く、幼兒の心は恰も白糸の如く滑らかなるものなれども、生長するに從ひ其周圍の事によりて、或は善に或は惡に變ずるものなれば、子供の敎育上遊び相手の選み方ほど大切なるはなし、よりて今其種類をあげて其選み方を述ぶべし、子供の遊び相手は先づ大別して左の三とす、

第一　人類　第二　動物　第三　玩具

第一人類の内には(イ)母親、(ロ)家族の人々及び乳母子守(ハ)友達の三種あり、

イ、母親は人類の中にて最上の友なり、如何となれば母は吾子の性質習慣を能く知り居れば、子供の心に適ひたる遊びをなさしむることを得、且つ又諸事

みな慈愛心より出づれば自然に子供の心にも感應て樂しく遊ぶなり、世に惡戯子とて誹らるゝ子供も其母自身が子供の友となり、庭園に花を培ひ郊野に蝶を追ひなどせば、其いたづらも止むに至らん、實に母親は吾子の最上の友なり、

ロ、家族の者並に乳母子守等も母の如く居を共になせば、性質習慣等をよく知り居れば、又子供の遊び相手に宜し、併し乳母子守などは往々教育なき人多ければ、其人々の性質及び言語等を選ばざるべからず、即ち子供は直ちに乳母の性質をうけ、又其詞等を習へば尤も注意せざるべからず、

ハ、友達即ち同年輩の子供は亦よき遊び相手なり、年頃の同じき子供は自身も同じ程に發達し居れば、遊び相手に尤も適せり、大人の苦心して學び得ざる無邪氣の戯をなして、共々に樂しむさま實に麗しき限りなり、されば貴賤を問はず必らず、同年輩の友を與ふべし、諺に云ふ如く水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友に從うと云へば能く擇ばざるべからず、年は一歳上か下位が宜し、性質は純良なるもの、詞使ひも野卑ならぬものにて、正しき家庭に育つ子女を尤も善しとす、滿六歳以下は男女を擇ばず共に遊ばすべし、學校に通ふ程になれば一人でも友を作るものなれば、豫め其撰み方に注意を與へ、又時々如何なる人を友として學校に往返するかに注意せざるべからず、

第二　動物の内には(イ)家畜(ロ)鳥類(ハ)虫類(ニ)魚類の四種あり、

人類以外に小兒の友として良きものは動物なり、而して幼時よりかゝる物を飼ひ慣れしむる時は、此等のものを恐るゝ念を去り、自然に動物に對して愛情を増し、又此等のものを處理する術を知り、從つて其物に就きて特質をも知りて、徳育に智育に益する所多し、又犬猫と戯れ走り小馬に乘りまはす、或は野邊に蛬をあさり、小川に釣を垂れ遊びなど、皆能く四肢の發達を助け、何れも體育の助となるなり、

イ、家畜中にて尤もよきは犬猫にして、小さき時よ

り之を養ふ全權を與へ、朝夕にいたはらしむるをよしとす、此等のものは小兒の遊び相手として、興味を與ふるのみならず、其小猫の鼠を捕へしとか、又小犬の門守りしとかいふ實用をも知らしむることを得て妙なり、家庭の事情の許す限りは小馬を飼はせ猿兎等を養はすもよし、

ロ、鳥類にては鷄を第一とす、雛より飼ひなれしめ甲は太郎のもの、乙は次郎のもの、丙は三女のものと各其所有主を定め、責任をもたせて保護せしむべし、其鷄の生みし卵の祖父母若しくは兩親の食卓に供へらるゝを見ば、如何に樂しく感ぜらるゝならん、又鳩、かなりや、雀などの如き小鳥を供へ樂しますもよし、



ハ、虫類にて子供の悦ぶものは龜の子、蝶、螢、螽蟖、蟬等にて夏の夕川邊に螢を狩らせ、秋の野に螽をあさらせなば之皆天然の美を覺らす助となして他日科學的志想を養ふの助となる事多し、又女子には蠶を養ひならはしむるもよし、

ニ、魚類も亦大に子供に興味を與ふるよき遊び敵なり、池中に金魚、緋鯉を養はしめ、小鮒を小川に釣らしむるは如何に子供を悦ばす業ならずや、

第三　玩具の内には（イ）普通の玩具（ロ）繪畫（ハ）

幼稚園恩物の三種あり、
玩具は極く幼き時より、子供に缺ぐべからざる遊び相手といふべし、或は之を手にし又は見聞などして、五官を發達せしめ以て諸種の智識を得るなり、
イ、普通玩具　一二歳頃には主に色の美しきもの、持つに都合よきもの、音の高きもの、形のをかしきもの等にして、殊に色つきたるものは無毒の色料を用ひたるを撰むべし、其主なるものは張子の犬、太皷、ねつりこ、護謨人形、がら〳〵、鈴等なり、三四歳よりは色合のよき、形麗しく而も其物を動かす事によりて、一種形を變へ得るものを悦ぶなり、其主なるものは獨樂、喇叭、滊車、風船玉、笛、[illegible]等なり又五六歳に至れば、其玩具を遊に用ふる事を得るもの即ち鐵砲・洋刀、護謨毬、紙鳶、獨樂、陣太皷、雛人形、唐子人形、小道具等にて、人形の衣服は脱がすることを得るやうに爲し置くを善とす、
ロ、繪畫は三四歳以上にならねば興味なし、三四歳位の時には形大きく色合鮮明にして、小兒の知りたるかたちを畵きたるもの、即犬ころ又は桃太郎の如きを畵きたるをよしとす、而して何れも破りて差支なきものたるべし、五六歳より極く解し易き話しの畵き出されたるを善しとす、又歴史畵の單純なるものを與へ、又は室内に貼付などして遊びがたきとなすいと善し、
ハ、幼稚園恩物とは、幼稚園に遊ぶ小兒に與ふるものにて、幼兒に適したる遊びものなれば其効用大なり、其間には一種の連絡ありて大に智識開發の助となるなり、其主なるものは六球、箸並べ、板並べ、積木、環並べ、紙摺、紙切、縫ひ取、紙帖豆細工、粘土細工等なり、而して以上述べし物に付て善く考へ、人動物玩具等皆適宜の物を撰み供ふべきなり、

初夏の臺所

梅園女史

上等ビーフテーキ

俗に鞍下と稱する外ロースを

薄く切り、機械にてひくか、或は出刄庖丁にてよくたゝくかし、よく筋をたゝき切り、其の中へ食鹽を少しふりかけ、鷄卵を少し入れ、よくかきまぜ、胡椒を少しふりかけ、丸形或は小判形となし、西洋鍋或は平鐵鍋、玉子燒鍋等へ適宜にバタを入れ、それを火に掛け、煙の一面にたち上りたる頃を見定め、牛肉を入れ、少しく火の加減を弱くなし、片面をこんがり燒き、又返し、度々上下をかへし、こんがりと燒き、火の通りたるを見定め、箸にて兩端と眞中と刺し試みて、堅くなりたるを度とし、皿に盛りたる後、ヲイスタソースに醬油を少し割り交せ、沸騰なしたる時其肉へかくるべし、あしらひには、さやえん豆、さやいんげん等を、沸騰したる湯の中に入れ、柔くなりたれば笊へすくひ揚げ、手早く團扇にてあふぎ、さめたる時フライパン、或は他の鍋に、バタを解したる中へ鹽を少しふりかけ、ざつと煮て肉へ添へて出すなり、

〔同じく別法〕 牛酪又は胡麻の油にて、兩面をこんがりと燒き、酒三分味淋七分の割にて醬油に味を附け、あがり際に青豌豆の茹でたるもの、或はそれに類似のあしらひを適宜に入れ、葛を水にてとき、少し落して調理するなり、肉の分量は、百匁にて三人前を適度とし、あしらひを多くすれば四人分ともなる、鷄卵は肉百匁に一個の割合なり、

〔イチゴ砂糖掛〕 覆盆子に砂糖をふりかけ、食後又は中間に食する人多きが、覆盆子は砂などの多く附着し居るもの故、是非ともヘタの付きたるまゝよく洗ひ、目笊の如きものゝ中へすくひ取り、水をきり、ヘタを取り、深き器へ入れ、牛乳の沸騰して冷めたるをほどよく入れ、其上に棒砂糖、又は角砂糖をつぶしてふりかけるなり、

〔覆盆子のジヤミ〕 いちごのよく熟したるを見て、ヘタを去り、深き鐵製の鍋に入れ、少しつぶしたる中へザラメ砂糖を充分に加へ、火にかけ、沸騰したれば火を弱くして時々かきまはしつゝ、こげつかぬやうに煮つめ、そをさまして、蓋のある器物の中に入

れ貯へ、一週間程經て、湯を少しさし入れ、砂糖を加へて練り、黴の浮かぬやうに注意し置き、燒麵麭又は菓子に用うれば、極經濟用となるべし、

◎きぬ卷菓子　はじめ饂飩粉一合位づゝを二個の深き器物に入れ置き、一個の方へ鷄卵の白身を加へ、一個の方には黄身を加へたる中へ、水七八勺を二度に入れながら箸にてかき交せ、黄身と白身と入れたるを別々にして、鷄卵燒の鍋に、胡麻の油を紙にしめし引きたる上に小さき金杓子にてすくひ入れ、凡そ三寸丸形に薄くのばし、下面を燒きたれば裏がへして兩面を燒き、白身を入れたると、黄身を入れたるを別々に板へならべ、一枚づゝにジャミを細く入れ、卷きて一皿へ白と黄と盛合せ、ジャミを入れ、二つに折り、鹽漬の櫻の葉を水にて鹽出しゝたるものに包めば、風流なる餅菓子となるなり、

うたゝ寢をゆりおこされてほとゝぎす
あらひ髮風にふかせて晝寢かな
取あへず簪を蚊帳のつり手かな

◎宇都宮の貞婦

栃木縣宇都宮大町油蠟燭業前市會議員黑川德藏の母まさ(六十七)は、家附きの娘なるが、幼少の頃より柔順にして、親孝行の譽高かりしため、近所の娘の手本とも立てられ居たり、斯くて年頃になりて、養子定平を迎へ、前記長男德藏を生みしが、德藏も母に似て德望高く、長じて公共事業に心を盡くせしかば、遂に市會議員に選擧されて、土地の信用尤も厚かりき、然るにおまさの夫定平は、去廿一年中より神經病に罹り、爾來身體不自由となりて、飲食起臥一切の事は、皆他人手を借らねばならぬ仕末となりしかば、おまさは一身を之に委ね、晝夜の看護大方ならざるにぞ、去三十七年十一月十六日栃木縣廳より、其美德を褒めて木盃を下賜されたるが、其後おまさの貞烈はいよいよ加はり、人道の模範たる事明かなれば、同縣廳は更に平生の行狀を探り、目下主務省へ上申中なりと、感ずべき事共かな

◎本年流行の單衣地　追々暑氣に向ふと共に、單衣物地として新奇なる柄のフランネル、セル等現はれたるが本年は、日本衣裳として寫りよき縞柄のもの出來、大概は御召擬ひのもの多きを占む、先づセル地の婦人向きとしては利久茶のからみ大名縞、同じ翁格子、金茶の四本筋、小格子、たき縞、よろけ大名などあり特に變物としては横飛白(あまだれ)なども見受く、尙は被布と單衣との兩用向として紺、鼠、茶などの小格子の上等物もあり(一反十圓)又フランネル地は大人向は格別例年に變はらざれど小兒向きには從來になき新柄出來せり先づ茶の辨慶縞、黑のやたら格子、藤色の千特格子、オリーブ色の元祿式格子など特に目新し(一ツ身一圓六十錢、四ツ身三圓廿五錢)立縞の中には婦人向として特にセル風の柄のものあり色には茶、鼠など流行の(大人物四圓九十錢乃至五圓十錢)傾向ありて例年よりは賣れ行く有樣なりと



東京土産

愛氷散士

一

こゝ九頭龍川の源、美濃と越前の國境なる、牛原といふ所がある、はや四月も末になつて、都は花の八九分を塵にした頃、峰の雪はやう〳〵とれて、梅も桃も櫻も、一時に蕾を破り、これから春らしくならうとするのである、後れても花は咲く、流石に見る人があればであらう、酒屋へ半里、豆腐はいつでもといふ譯には行かず、畵にすれば捨てたものでもない藁葺の一軒家、そのあたり廣々と占領して、立つ煙はさて心細う暮して居る、祖父孫二人、晝は戸を開放して置いても、少しも物騒といふこと知らぬ家に、鍬を擔いで歸つてくる夕まぐれ、これからの仕事は、料理辭書には見られぬ御馳走で夕飼を終へば、跡はおもしろい夢でも見れば何よりの仕合せ、

『お祖父さん、東京へ行く話はいつにしましたえ

といふのは、ことし十八九、まだ二十歳にはならぬ娘盛り、紅白粉といふは正月か五節句、鎮守樣の祭につける位なもの、思ふ存分くすぶつては居るが、顔質のよいと、色の白いのとは、持つて生れて、それに

桝を拾ひの山坂を、節おもしろく歌ふのが村中の評判、氣質は誰敎へる人もない丈に、曲つた事は少しも覺えて居らぬのである、

「村長さんも彼ア云うて下さる、行きたいは山々ぢやが、行くとなりやア、まさか出してやると云うても我身の事に、そんならさうして下さいとも云へず、さうすりやア、お前のを借りてゞも行くより外はない、その借りて行くのが、返す的はないのぢやから、貰つて行くも同じことで、

と打しほれて居るのが、娘の祖父さんで、見掛よりは若いであらうが、もう六十の坂を四つ五つ越して居るらしい、

「そんな心配せずと、つい行つて來りやア、お祖父さんの氣もすみませう、私はそれが何よりのお願で、どうぞねえお祖父さん、

と勸めるのは、五月二日から、東京の靖國神社で招魂祭があるから、それへ參詣をし、序に早く出立て、大觀兵式をも拜見したい、といふ祖父さんの望を叶へさせたいのである、それについてあはれな話といふのは、祖父さんは珍らしい律義者で、佛性で、虫一匹殺めた事もないほどであるが、如何なる因果であるか、妻にも子にも早く死なれ、さん〳〵の苦勞をして育てた孫二人、一人は男で、一人は女、どうにか斯うにか物にして、兄の松太郎は三年の徴兵も勤め、瘠田の一枚でも引受けるやうになり、嫁も與らうといふものが極まり、妹のお夏、これも家の手助をした傍に、やれ田植の養蠶のと、そこ此處から手傳を賴まれ、貰ひ蓄めた金は悉皆村の收入役を勤める人に預け、塵も積りて嫁入の仕度には間に合ふやうになつた物であるから、祖父さんはこのお夏さへ嫁入けて仕舞へば、それで役目は濟む、三十年目にやう〳〵重荷がおりる譯と、喜んだのは夢の間、杖とも柱とも思ふた松太郎は、先頃の戰爭に召集されて、其の當座は

勇ましい便りばかりをして居つたが、遂に奉天附近で討死をした、村長が此事を知らせるには、いろ〳〵骨を折つて、皇國の爲とはうなづかせたもの丶、祖父さんは松太郎が何となう目の前にも在るやうな思ひがして、涙のある限りを泣いて泣いて泣き盡し、葬式の時などは、この村開けてこれほどの立派な賑やかなのはなかつたとの評判、それを有難いと思ふにつけても、身體だけは自分が代つてやりたかつたと、また泣くずをれるのであつた、そのうち御下賜金があつて、村長からもこれで少しでも身の樂になる工夫をするがよいと云はれたのであつたが、それでは死んだ松太郎が可愛さうなと云ふので、その金で石碑も分不相應のを建てる、寺へもお經料として過分な納め物をする、息災な時には誰の世話になつた彼の贔負になつたといふので、友達をあつめてふれまう、一文も身にはつけず、それで少しは氣が安まつたやうである、

すると村長が祖父さんを慰めやうと云ふので、今度九段の招魂祭には、恐れ多くも　天皇陛下にも御親拜あらせられる、あアいふ時に皇國のお爲になられたから、松太郎さんも一しよにお祭をうけられる事になつた、何とまア仕合せなことではないか、そこで有難い事には、遺族の者へと云うて此お祭に御招待があつた、お前さんはまだ東京へ行かれた事はなからうから、見物旁行かれては何うです、岐阜まで行けばあとは汽車、手つゞきは如此、旅費も失禮じやが私が出して上げやう、お夏さんは留守中、淋しからうから私が慥にお預り申す、と云はれたので、祖父さんはその招魂祭に行けば、松太郎に逢へるやうな氣がして上京しようと云ふ氣になつたが、所縁なくして返されぬ金を他に借るのは厭と云ふので、お夏に相談する、お夏は大恩受けた祖父さんの事であるから、身の皮を剝いでもと云ふ事になつたのである、

二

奉天附近にて名譽の戰死を遂げた、上等兵山田松太郎の祖父藤左衞門は、例の村長の添書を貰らて、村長が書生時代に下宿をして居たといふ、九段坂下の近江屋といふ高等下宿屋に、案ずるほどもなく無事に着いた、

さて入浴をして、打寛いで、宿の若い物に『お疲れさまで』と云はれた時は、實によい心持で『お若い方御氣の毒でございますが、葉書を一本書いて下さい』と安着の報知を出した時は更によい心持で『お孫さんは大層お手柄を成さつたさうですが』といはれた時は、今一つよい心持に辶をかけたのであつた、宿屋の味を初めて覺えたので、少し心細いやうな所もあるが、何にしろ周圍が賑やかなので、閑居とはして居られず、ついブラ〳〵出て見たくなる、これだから若い者が東京へ來たがるのも無理はないと思ふと、國の事も、孫の事も、少しの間は忘られるのであつた、

何がさて東京の繁華、針線が家を曳いて歩く、喇叭が會話をするといふ騒ぎて、見るもの聞くもの皆珍らしいものばかりで、そこ此處見物したいと思ふたが、村長より東京の物騒な話をさん〳〵聞かされて居るので、何だか危險なやうな氣がするのである、

『あなたも遺族の方ですか、

と遺族の名が、甚だ通りがよい、

『はい私は、その遺族でございます、

『さやうで、私も遺族といふ譯でございます、

といふやうな事から、隣室のこれも六十内外の老人、東京から大分離れて居る土地の人らしいが、併し旅に馴れて居る樣子、段々話を交換するうちに、幸に私も一人だから、見物も御一しよにしませう、一日の

費用はこれほどあればといふのが、思ふたよりは格安、連れ歩いて貰ふ氣になる、出れば其處此處說明をして呉れる、その間には身の上話も出る、氣の毒なと云ふので、小さな勘定はしてくれる、何方を向いてもおッ吃驚ざるを得ない事ばかりで、藤左衞門は此世に生れ代つたやうな氣がしたのであつた、

いよ〳〵けふは觀兵式と云ふので、相客の老人に誘はれて、三菱ケ原の遺族の拜觀所へ陣を取る、これから青山へかけて兩側は人の垣をつくり、どよめき騷ぐ聲は天地を動かすばかりで、無論針線で家を曳くことも此時は中止である、

午前八時より祝砲數發、九時近き頃紅地に金色の菊花を打てる天皇旗、朝日に閃きて馬場先門を出づると左右忽ち靜肅になり、やがて 天皇陛下の鳳輦、東宮殿下、有栖川大將宮、東伏見大佐宮、伏見少佐若宮博恭王三殿下何れも通常軍服を召され、田中宮內大臣、花房同次官とも、馬車にて扈從するといふ美々しき鹵簿、一町に餘つて、見るに眼も眩むばかりである、

藤左衞門は 大元帥陛下が、カーキー色の戰時服を召させられ、天顏の麗はしきを拜し奉つて、思はず其處に土下坐をし、あまりの有難さに落淚數行、松太郎の戰死はさて置いて、おのれも露の命を何惜むべきと思ふたのであつた、

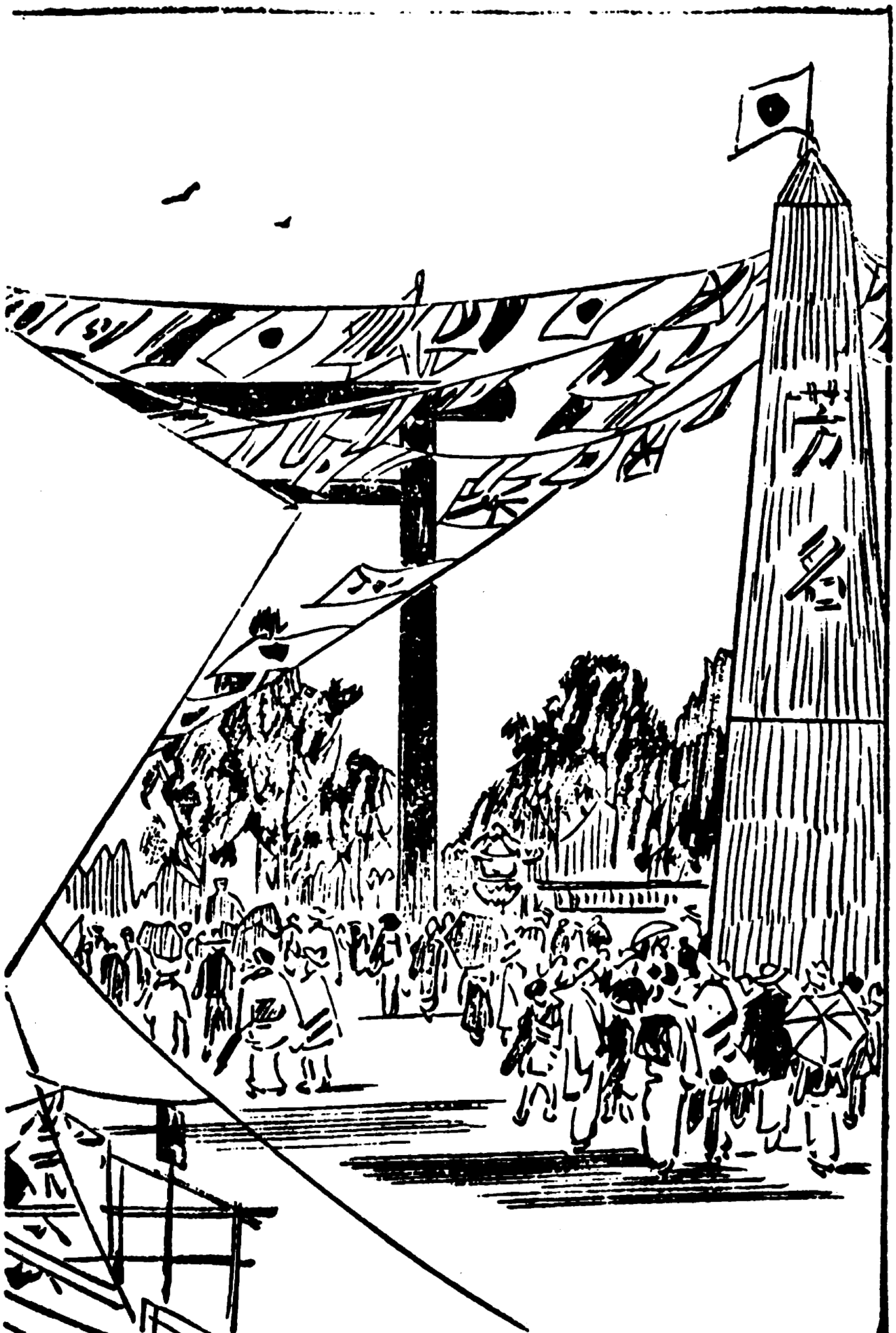
續いて靖國神社の招魂祭、殆んど毎日九段坂の上下をお百度で、殊に雨中 鳳輦を拜し奉つた時は、冥加の恐ろしさを覺ゆるばかりで、愛國婦人會の貴夫人方の接待を受けた時などは、夢ではないかと足をつめつて見るといふ有樣、芝離宮、新宿御苑を拜觀しては、いよ〳〵皇恩の深さに感じて、松太郎の戰死を悔む念は全く腦裡を離れたのであつた、

まことに醉へるが如く、夢の如き中に數日を過して、藤左衞門はいよ〳〵歸國となつた、歸つたらお夏に

何から話して聞かせう、草鞋を解くより先に、松太郎の墓参りをせねばならぬなど、旅宿を立つ時は魂は早や故郷の牛原、幸に怪我もなく、懐都合も申分なく、もはや新橋から發車の時間を待つばかりとなつた、老人の出急ぎをして、午後の十時發といふにまだ二時間以上もあるので、切符賣下口にまご〱して居ると、不意にドンと突當るものがある「年老にひどい事をする」と、こぼしながら不圖懐に手を入れると、無殘や歸國の費用にと、國を出る時から用意した一包は、遣殘りの金とともに、何處へか消えてなくなつた、

三

人の心の知らるゝは滊車に乗る時の勢、おのれ上等の棧敷を



得やうと云ふので、二人や三人突轉ばす位は平氣なもの、いつも景氣のよい新橋の停車場、これも乘急ぎの仲間であらう年の頃二十七八の淺黑い、曖昧氣のない男らしい男振で、それがサーベルを提げて居る所へ、一杯機嫌といふ、まことに威勢のよい軍人、急足で切符口に來ると藤左衛門が掏摸難に遭うて、巡査や野次馬の立騷ぐ中に進退谷つて居る、件の軍人は、見るから正直さうな老人が、右の有樣に見兼たものか、

「お爺さん、お前さんは路銀を掏摸れたさうぢやが、何處までお歸りで、



藤左衛門はやさしく問はれたので、

「ハイ、私は越前半原の山田藤左衛門といふものでございますが、えらい災難にあひましたと、もう顔の色も何もあつたものでない、

「ナニ、越前半原の山田、

と云ひかけたが、

「よろしい、僕はこれから彦根まで歸る處、丁度よい道づれ、失禮じやが、その路費は僕が立替て置かう今切符を買ひますから、

見物も藤左衛門も煙にまかれて居るうちに、軍人は岐阜行一枚と、彦根行一枚とを買つて、

「さア時間がないから、乘らうじやアありませんか

とせかし立てる、

「それでも初めてお目にかゝりますお方に

と流石にためらふ、

「ナアに僕の醉狂でする事じやから、遠慮などしなさんな、どうせ歸らにやならぬ人であらう、さあ乘後れぬうちに

と手を取らんばかりにするので、藤左衛門も何うしてよいか、もう分別する暇もなく、三等室へ連れ込まれ、程なく汽車は出る、今迄の騒ぎは耳を離れて、左は渺茫たる海に、十五夜の月は金波銀波を漂はし、右は高輪泉岳寺と歌ひたくなるのである、軍人は

「先刻に、お爺さんは越前半原の山田、といはれたやうであつたが、もし同じ苗字で、松太郎さんといふ

人がある筈ですが、御存じはありませんか、
藤左衛門は、やう／＼愼まつた氣が、躍るばかりになつて、
『旦那樣は、どうしてその松太郎を知つてお出でなさいます、松太郎は私の孫でございます、
と云ふた時は、藤左衛門の驚よりは一しほで、
『あの松太郎君の、さうでございましたか、これはまた不思議の御縁ぢや、實は松太郎君には戰地でいろ／＼御世話になり、ある時露奴に圍まれて、まさか捕虜にはならぬが、命はないものと覺悟して、切死をしやうとした所を、松太郎君に助けられた事もあつて、いはゞ松太郎君は僕の命の親、どうぞ一度は半原へもお尋ね申したいと思うて居りましたが、相變らず御元氣のよい事でございませう、
『さういふ事もございましたか、それでは旦那樣は松太郎の事は御存じがないのでございますか、
とこれから藤左衛門は松太郎の戰死の事から、いろ／＼身の不幸を物語つて、
『今晩旦那樣に助けていたゞかねば、どうしてよろしいか、途方にくれて居りました、して見ますりや、松太郎が旦那樣にお引合せをしてくれたのでございませう、
軍人は藤左衛門の一言一句を皆涙で聞いて、
『僕は彦根の柴田雄二と申して、自家でも荷厄介者、それが死ぬる處をも助かつてこの通り、松太郎君のあの元氣では、矢でも鐵砲でも中るまいと思ふたが、とう／＼さういふ事になりましたか、それはさぞ／＼御力が落ちたでございませう、重々御察し申します、
『旦那さんならこそそのやうに云うて、このむさい親爺をいたはつて下さいます、それに聞いて下さいませ、これから隱居が出來ると思ふ所で孫の召集、痩田一枚も歸る迄には、肥やして置かうと思ひまして

老人には荷が勝ち過ぎるのを、草一本生さずに面倒を見ましたが、もう張合も拔けて仕舞ました、しかし今夜取替へていたゞきましたお金は、歸りさへしますりやア、私はもう一文もない身體でございますが、村長さんにお願ひ申して必ず御返し申ます、えらいお世話樣になりました、

『何の返して貰ふ程なら、初めてお目にかゝつた人に出しはしません、それも知らぬ人であつて見りやア兎に角、僕の爲には恩人のお祖父さん、兎てもの事に半原まで送つて上げませう、

『いや／＼岐阜からは一文なくても歸れます、そうしてやさしう仰有つて下さるので、失禮でございますが、死んだ孫に逢うたやうな心持がいたします、今度は　天子樣も拜むことが出來ましたし、もう生きて居るうちには殘つた一人の孫の外には、やさしう云うてくれくれるものもあるまいと思うて居りましたが、本當に今度のやうな嬉しい事はございません、これで親爺は明日が日に土になりましても、心殘りの事はありません、

不幸の人にはたゞさへ涙が多いに、雄二が信切な言葉に、心の底からあつい涙が湧くのである、

『お爺さん、大分話が陰氣になつた、幸ひ汽車が止つたから一本買ひませう、

雄二は、二合入の正宗二本に、すしを買つて、

『さア一つ献さませう、

折ふし隣りの子供が節おもしろく歌ひ出した、

倒れし戰友抱起し、耳に口あて名を問へば、莞爾と笑うて目になみだ、萬歲唱ふも口のうち、トコトットト、

藤左衞門もそれに釣出されて、愁眉を開いた、

四

地主三軒と村役場と小學校の外は、時計といふものもないが、油坂を標的にして、日影のもう十二時といふ頃、お夏は藤左衞門の歸りを心待ちに、門に出て見ると、向ふの田の畦を傳うて居るのは、紛ふ方なき祖父さんなれど、まさかに兄さんが生れ變つて歸つてくれたのではあるまいと、そこに立すくんで手繰よせるやうに思ふ、雄二がもし軍服でなかつたならば、沼津の平作といふ取合せである、

まア無事に戻られたといふので、嗅付けて村の誰彼、村長君も校長氏も訪ねて來る、思ひ掛ない連が軍人であるから、何處の人とも知らずに、大に敬意を拂うた、見る人毎に頭を下げる、小供達はいつの間にか群をなして、盛んに萬歲を唱へるのである、

德孤ならず、隣といふ家もなけれど、藤左衞門の吹聽で、雄二の義俠は村中に廣まり、村長の發企で、この村に雄二氏の如き人の來られたのは、甚名譽であるから、歡迎會を開かうといふ騷ぎになつた、ところが時計の少い土地は人の氣も長い、下物は次の日曜に九頭龍川の鮎を釣つて、それを馳走しやういふので四五日引留られる、雄二は其足で引返すつもりのが、松太郎氏の凱旋も同じことゝいふので、松太郎の信用まで引受けて、勢ひ五日が十日の逗留となつた、

何がさて知らぬ山家の淋しさは、退屈を凌ぐ材料もないので、

「お爺さん、却つて長い間御厄介になりました、明後日までは村長さんがどうしても居つてくれといふ事ですが、もう居り序に一日や二日は居つても宜しうございますが、皆さんに毎日休んで貰うては氣づまりですし、若い身體を遊ばして置くのは勿體ないやうな氣がしますから、けふは畑の手傳でもしませうナアに百姓はお手の物ですから、

『どうして〳〵、こんな所で宜しい事でございますなら、千日が萬日でも、
『これはどうも恐れ入つた、何にしろ肩が夜なきをするから、すこしばかり畑をいぢつて見ませう
藤左衞門は、ホク〳〵笑つぼに入つて、
そんなら百姓しますか、それでは老爺も一しよに出掛けませう、
藤左衞門は、お夏に松太郎の古着を出させ、
『これは松太郎の野行、これを着て貰うて畑へ行きやア、松太郎と一しよに行くも同じこと、穢しからうが、とてもの事にこれを着て下されぬか、
『僕も一日でも松太郎君になれば、嘸松太郎君も喜んでくれるであらう、
『さうでございますとも、これお夏、お前も一しよに出掛けぬか、
どうしても若い物同士は足が早い、藤左衞門は二人の後姿を見て、
『いつまでも斯うして置きたい。

懸賞小說　貳等

蓮華式部

東京　山田和歌子

『では何うわつてもお聽入れ下さることは出來ぬと被仰るのですか。』
と薄き蒲團の上、身を支へるやうに痩せ細りたる手をついて、キツパリ云つたは四十五六の、眼の落ち窪

むだ、頬の瘠けた、見るからに痛々しきまでに病み窶れたる老女である。それと相對つたは四十ばかりのでッぷり肥つた額の拔け上がつた、唐桟の袷に糸織の縞目もはや朧なる羽織を着た、さうして古ぼけた手提鞄を右手に置いた男、冷やかな眼光で老女を見ながら

『左様、被仰る通りにすれば貴女の方の御都合は宜しいか知れませんが、手前だッて何にも施しをする心算りでお貸し申したんぢやなし、ちやんと何時何日には返すと云ふ證書に調印の上お貸し申したのですから。』

『夫れはモウ被仰るまでもありません。』

『被仰るまでもありませんて、まア大概に人を馬鹿になさい、云はないでも分つてる位なら整然と耳を揃へて返して下すッたら宜いでせう、散々お百度を踏ませて置いて何んの御利益もない、利子だッて滿足に拂つて下すつたことはないぢやありませんか、モウ何んと被仰つても猶豫することは出來ません。』

『出來ぬと被仰れば致方がありません、御随意になすッて下さい。』

と老女は力ある聲で云ひ放つた、眼はモウ涙も涸れて盡きたか、唯だ異様に輝くのみであつた。

『宜しい、随意にしろと被仰るなら随意にしませう、だが併し強制執行をかけて見た所で、この宮本の眼に映る丈けの當家の動産物ぢや、到底元利金五十八圓の代償は出來ない。』

『出來ないのを承知で强制執行とやらをして、私達親子を困まらさうとなさるのですか。』

『さア其處です、唯今も云ふ通り費用をかけて强制執行をして見た所で、到底元利金五十八圓には足りつこがない、足りつこはないが百兩の代價に編笠一蓋と云ふ譬もあるから、手前の方は夫れで我慢をするとした所で、差詰貴女方二人がお困りであらう、營業は營業、人情は人情で、他人から鬼の魔のと云はれる

高利貸はしても、夫れは營業、手前だつて人間ですもの、見ねば知らぬこと、眼前に貴女方のお困まりになるのを見ては居られませんや、實に夫れがお氣の毒で。』と前とは打つて變つた優しき言葉に

『それ程のお慈悲があるなら、今少時の所を何うぞ。』

と老女の聲も和らいで來る、宮本剛造得たりとばかり北叟笑みつゝ、

『其處ですつて、お氣の毒には思ふが、延期の所は何うも營業で致方がない、一日だつて猶豫は出來ませむから其處ンところを……。』

『何うすれば宜いと被仰るんですか。』

『左樣打開けたお話をすれば、手前も元利金を揃へて奇麗に拂つて頂き、また貴女の方でも五十圓と百圓と纏つた金を手に入れて、斯う申しては何んですが、大學のお醫師にでも診て貰ふことの出來るやうな、双方の利益になる策をなすつては何うかと、斯う手前は思ふんでして、へ、、、。』と底に慊味のある笑ひをする。

『五十八圓さへお返しすることの出來ない私に、何うして什麼大金を作ることが出來ませう、夫れが出來ます位ゐなら、斯うして七重の膝を八重に折つてまでお願ひは致しません。』

『さゝ其處で御座いますてや、貴女も感の惡い方ぢや、是れまで申せば大概お分りになりさうなものぢやなアお娘御、貴女にはモウお分りでせう。』

と老女の後に行儀よく座つて、首垂れ勝に、この場の始末如何に成り行くことかと案じて居る、娘お關の顔をぢろりと差覗く。

老女は一膝乗り出して

婦人薬

一週間分　金四拾五銭
三週間分　金壹圓貳拾五銭
五週間分　金貳圓

主治之効能

婦人血の道一切。子宮病。産前産後諸症。月經不順。月經困難。逆上。耳鳴。頭痛。眩暈。氣欝。動氣强き。息切れ。便秘。白帯下。赤帯下。腰腹痛み。腰腹手足の冷へ。消渇。神經諸症其の他貧血及衰弱諸症に**强壮薬**として無比の寄効を奏すべし。

婦人薬は世にありふれたる一時的の血の道薬と異なり効能顯著なる根治的良薬なれば一日分位の服薬にしては充分の効績を見難けれども少なくも七日分以上服用あれば奏効の確實なるを認めらるべし故に持長して連用あらんことを望む。

東京市日本橋區本石町三丁目十八番地

發賣元　薬種貿易商

合資會社　**博愛堂薬店**

電話本局二百八十六番　電信略號〇八

絶好紀念

◎肖像墨蹟は東郷乃木兩大將

◉凱旋大觀兵式（四月三十日）唯一紀念　乃木大將　肖像墨蹟寫眞版　額面

◉一回刷用紙アート紙幅一尺五寸長二尺◉定價一枚金貳拾錢◉發送料金拾錢

大將の快諾を得て謹寫せし半身像、上に大將が陣中吟の傑作を掲ぐ、本會の爲に大將が揮はれたる眞筆也、颯々たる英姿、淋漓たる墨根と相俟て、眞個凱旋好紀念

◉日本海大海戰（五月廿七日）唯一紀念　東郷大將肖像　石版額面

◉用紙鳥の子◉幅一尺八寸長二尺三寸

◉肖像は知名の肖像畫家が心力を注ぎて謹寫したる大將が等身大の半身像を極彩色三十回刷と爲せしもの、毛髮鬚眉の細一々眞に迫り、人をして親しく大將に接するの想あらしむ

◉東郷大將墨蹟額面　用紙畫箋紙◉竪額横額の二種にして竪額の大は肖像畫と同じ◉横額は竪二尺二寸横四尺五寸墨蹟『在此一戰』の四大字、彼の大海戰に於けは大將の信號中の警句は今や大將の筆に上りて鶴舞ひ鴻飛べり、肖像の温容と相對して、世間何物か是に優るの好紀念品あるべき

◉右肖像墨蹟（竪額横額何れにても）二枚一組定價金壹圓一枚賣は肖像一枚八拾錢墨蹟一枚參拾錢◉發送料金拾錢

◉申込は總て前金若くは代金引換の事◉郵便爲換は京橋區築地郵便局宛振込まるべし

◉利益は悉皆癈兵院に寄附

東京市京橋區築地二丁目十一番地　日本癈兵慰問會（電話新橋特二八六九八三）



御用諸學校
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
No.3 Urajimbo-cho KANDA. TOKYO
S.A.
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田表神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用體操器械
東京神田表神保町五
S.A.安藤商店
體育用品
確實製造販賣
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
テニス用ラケット一組四本
改良櫻二重枠ラケット一組
〇テニス組一張
〇迄各種あり升
東京市神田表神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

『私でさへ分らぬことが、何うしてまだ二十の肩も越さない此娘に分かりませう。』
『ヤ、まだお分かりにならぬか、ヘヽその何んで、お娘御のこの標致なら、今日が明日にでも百圓や二百圓は造作もないこと、私が引受けてお世話をします。』
『では貴方は、此娘を圍ひ女かなんかにしろと被仰るのですか。』
『さうです、妾奉公なり、また吉原の方へなり、何方にしても百圓や二百圓は。』
とまだ言葉の終らぬを、老女は遮つて屹然となり
『な、何んですと、妾奉公！、止して貰ひませう、穢らはしい、そ、什麽者に、假令明日の日石に噛り附いて親子が餓死をしやうとも、そ、什麽ことがさせられませうか。』
『さう御立腹では困まる、折角親切にお世話をしやうと申すに。』
『エヽ什麽御親切は受けたくありません、外聞が悪い、口惜しい、奥には他人様がお在でなさる、さ、歸つて下さい、歸つて貰ひませう。』
と聲慄はせて床の上より滑り下り、宮本の前に膝擦り寄る時、奥の四疊半に下宿して、目白の女學校に通つて居る笹川千代子は、大きな包みを抱へて其の四疊半の椽側から、お關親子の眼を避けるやうにして、跫音を窃むで表の方へと出て行つた、其の姿を瞥乎と開きかゝつた上り口の障子の隙より見て、老女はますく\聲を喘ませ
『さ、歸つて下さい、什麽お世話にはなりません、何うなりと勝手になさるが宜しい、さ、歸つて下さい。』
と病苦も忘れて打ち喚くを
『お、阿母さん、什麽になすつちやお身體に障ります。』

と涙ながらにお關が後より抱へて介抱するを機會に
『ちや石に噛り附いて餓死にをするがよい、因業な老耄婆、左團扇で榮耀の出來る、金生樹を有つて居ながら何んのこッた馬鹿〱しい。』
と宮本剛藏、彼の古ぼけた手提鞄を懷中に捻込むで
『強情張つて、明日は泣面搔くな。』と惡口吐きつゝ歸つて行つた。

⁂

宮本が去つてから二時間ばかり、親子が泣いつ口說いつ身に降りかゝる不幸を嘆いて居る所へ、最前出て行つた千代子は俥で戾つて來た、而して急に寄宿舍へ入らねばならぬやうになつたから、直ぐに移轉すと云つて早々荷物を片附けて、待たせて置いた俥に夫れを積むで、暇乞して立ち掛けに
『また閑な節にはちよい〱お伺ひを致しますが、叔母さん何うぞお身體を大切に、早く快くお成んなすつて下さい。』と物優しう
『ハイ難有う御座います、何うぞお通りすがりの節はお立寄り下さいましと申し上げたいのですが、事に〱依りますとモウ長くは此家に居られぬやうなことになるかも知れません、誠にお名殘り惜しう御座います。』と打ちしめる
『アラ叔母さん什麼事があるもんですか』と云つてお關の方に向ひ『お關さん、何うぞ阿母さんを善く護て上げて下さい、是れは眞個の些少ばかしですが、叔母さんのお口に適ふものを買つて進げて下さい。』
と云つて、表に上の一字を鉛筆で走り書きした一封を置いて
『夫れでは叔母さんお關さん、モウお暇致します。』

と、二人が禮云ふ辭跡に聞き流して、さも急げるもの丶如くに辭し去つた。
お關親子は明日は無慈悲なる宮本の恐しき手に多くもあらぬ家財を奪られ、如何に此後をなすべきかと、悲哀の淵に沈める折もをり、聊頼らんとの心はなけれど、二年越し同じ軒に起臥したる千代子に突然行かれて、更らに一層の悲しさを增し、親子互ひに打伏して、忍び泣くより他はなかつた。
其夜母の病氣は重體と云ふ程ではないが、咳が烈しく熱が出て、三月以來の苦しさである、お關は折角なれば千代子の特志もて少しの藥調へ來むと、最前千代子が置いて行つた一封を開いて見ると中からは拾圓紙幣が四枚、夫れには

誠に失禮には候得共、この金子御用立て被下度候、決して〳〵御遠慮は御無用、御返し遊ばすやうのことと有之候ては、私の微意水の泡となり、一生の御怨みに候、かしこ

と云へる手紙が添へてあつた。

千に近い生徒のうち、綺羅を飾つて學校の往き復り、道行く人の足を停めさせて居た千代子、寄宿舍に入つてからは打つて變つた木綿の着物に、誇りとして居た懷中時計の鎖も今はリボンの紐と變つた、學友は餘りに其の變化の甚いのに、初は善からぬ噂さへ立て丶千代子を疑つて居たのであるが、德は孤ならず必ず隣りあり、何時のほどにか千代子が質素の源因知れて、虛榮に趨りたがる今の女學生中には珍らしき心掛けと、誰れ云ふとなく蓮華式部の名は目白臺から下町にまで傳へらる丶やうになつた。
今も千代子は、時折り病める老女、幸薄き娘を訪ふて居るとかや、あはれ親子の眼には、慈悲圓滿の菩薩とも見ゆべし。

懸賞小説　選外　秀逸

光子（上）

片岡清子

『夫れは御無理もムいませんは、貴孃が其れ程迄に御嫌ひなさるものを御父樣だつて強いて嫁けと仰しやる譯では御有りなさらないのでしやう。』

『えゝ父は別に彼是申すのではムいませんけれども、唯母や御伯父樣が……。』俯向いた儘、面も上げ得ず力なげにほつと溜息を吐いたのは、花の盛りの十七八銀杏返の髮も濃く鬢のほつれ毛はら〳〵と百合の樣な姫に懸つて痛しう、元祿模樣の華美な半襟は打沈んだ娘の姿を引立せる程の力もない。

『御察し申しますは、けれども御母樣や御伯父樣だつて御斷りなさる位辭なら何樣でも有ますは、光子さん貴孃は最う見合なして了たから仕方がないと仰しやるけれども私は其れからして間違つて居ると思ふは、見合をすれば必らず將來の幸不幸に不拘其れを甘じて受けなければならないと言ふ譯はないでしよう、妾が斯んな事申しますと吃度生意氣な人だと御思ひなさるかも知らないけれども、宜いは何と思はれても是も貴孃の爲なんだから、全體女と生れて、此世の中へ出て來た上は一度は人の妻とならなければならない義務を持つて居るものです、ですから妻になるに就いてつまり結婚するに就ては其良人とする人が自分の理想に適して居るか、自分が一生を任せて差閊なき程の資格あるか無きかを見究めた上生涯の運命を取極めなければならない筈の見合が、昔からの習慣として未來の夫婦其人の互の人格も知らないで只一片の仲媒口を信じ言譯許りの見合位ゐで一生の運命を得樣と言ふのですから隨分輕卒な御話では有りませんか、其危險な見合の爲めにみす〳〵不幸な結婚と知りながら夫れが爲に御困りなさる……私は御友達の義務として何うしても默つて見て居る譯には參りません、元々及落無いものと致したなら見合なぞと云ふものはなくつてもよい譯では貴孃が御母樣に仰しやり憎ければ私申上ても宜くつてよ。』

友の優しい言葉を光子は身にしみ〴〵と嬉しく思つたのであるが彼女は未だ其と思ひ決する程の勇氣もない。『難有うよ清子さん私は何故斯う不幸なのでしよう、何故母にも御伯父樣にも義理を盡さなければならないのでしよう嗚呼義理と云ふ者が無かつたなら……斯んな情ない思をしなくつても……』

『貴孃はよく義理と仰しやるけれど世の中の義理と云ふものは果して何でしよう義理と云ふ者は弱い者から随がふ義理はあつても強い者から其れを強ゆる權利はありますまい、まして御伯父様だつて貴孃の爲を思つて御世話をなさるのに、それに貴孃がその様な遠慮をなすつて好まぬ結婚をなすつて一生不幸に暮しなさる様な事があつたなら御伯父様や御母様始め御父様だつて何んなに御心配なさるか知れやしないは夫れこそ却つて不孝に當りますは』

答へ爲し得ず光子は[illegible]く紅唇のまゝ手を膝に思ひに惱んで居るのである、其筈である、光子には此縁談意外に猶思ひに苦しむ原因があるのである、夫れは外でもない彼女には且つて人知れず思ひを寄せる意中の人があるのである、夫れは今度自分の爲に盡さんとせる伯父に一人息子の彼女には從兄に當る清雄と云ふがある、年は彼女には三つ許り上で學才あれば容貌もよき未來有望の青年である、然るに彼女は未だ年若き乙女心の恥しさに言ふも憂く言はぬも苦き胸の念を素振に見せて、只狹き心の中に戀慕がれて居るのであつたされど清雄とても萬更木石ではなく、日頃の彼女の様子を悟らぬでもない、否寧ろ清雄は光子が自分に對する情熱よりも己が光子に寄する念の深くありはせぬかと思はるゝ程なれど、清雄は徒に青春の戀に迷ふて、可惜勉學期を過す様な事があつてはならぬと我と吾身を強いて鎭めて、と戀を語らざるなりき、是れと共に光子は戀しい慕しい念ひはいや增すにつけ、伯父の親切は怨めしく、さりとて彼の人と添はして吳れよと母に縋るだけに未だそれ程の男氣もない、彼女は今は如何にすべき、友に打明るも恥しく唯一人其小さき胸に苦しむのみ、されど今清子が云ひし言葉は少なくも、彼女が胸に幾分の光明を認め得たのである、彼女は茲に至つて此縁談を破るべく決心したのである。

『清子さん難有う貴女の今の御言葉を伺つてすつかり夢が醒めたやうですは、私は此事を直に御母様に申上て破談にして貰ひますは、御蔭様で胸がさつぱり致しました。』嗚呼光子は其言へるが如く胸はさつぱりしたのであらうか、よしや彼女は一ツの苦痛を免れ得たりとするも、後に來るべき問題は果して彼女の意に適ふべきや。

(下)

『夫れじや如何んです、斯んな事を申しましたなら、定めし生意氣な奴と御思召かも知らんですが、其れでは光さんが餘り可愛想ぢやあないですか、』其父であらう五十許の老人の前に畏座つて、何か言爭つて、絶えず聲の高まるのにも氣が附かず、談じて居るのは、去年頃徵兵檢査を濟した位ゐの、年格好まだ、うら若い、色の白い青年である。

『何が可愛想なのぢや、少しも可愛想な事はない筈だ』老人は落附いた調子で、斯う云つて、天井を仰いで冷笑した。

『否可愛想です、彼んな非道な奴の處へあの溫しい光さんを嫁に遣るなんて、御父様も存外酷い人だ。』

『何が酷いのだ!』

『そうじやあないですか、それあ先は財產家でしよう、日頃の放

濟無頼な行ひを、御父様だつてよもや知らない事はないでしよう、三度目の妻までも追出して、又しても光さんを金の為に賣はうなぞと、何處迄も冷酷な奴だ、御父様だつてそうだ、光さんを嫁るには地位や財産を得やうと云ふ非常なる野心を持つて居るからです。』

『野心？馬鹿な事言ふな、其様事は貴様等の知つた事ちやない、默つて見て居るがい〻』

『いや默つて見て居る譯には行かんです、貴父は地位や財産を得やう為めには、只た一人の娘を犠牲にして、夫れで社會に立つて、恥すべきでないと御思ひですか』

『は〻貴様はいやに光の肩を持つな』

妙に言はれて、清雄は今更顔を赧くして、其儘口をつぐんでしまう

『結果は私の財産は御前の財産、私が斯うするのも皆な御前の為を思ふての事ではないか、まあそんな苦い顔をせんでも宜い』

『私の為となら猶更です、何うか此縁談は破談にして下さい、私が此様に光さんの為に辯護をするのは、或は私が……光さんに……と御父様は何か妙に思はれるかも知らんですが、否寧ろ妙に思はれて頂きたい、私は彼の吉岡如き不倫極はる輩に生れて、一點の汚れない光さんの操を、蹂躙させる事は、斷じし忍びないのです、御父様、私は地位や財産は入りませんから、どうか此縁談は破談にして下さい。』

清雄は思ひ切つて、今迄秘め置いた胸の念を打明けて、熱心に破談説を主張したのである、正義のためには何物の用らぬ、名譽もいらぬ、財産もいらぬと、清い我子の言葉を聞いて、父は今迄深くも後悔したのである、始めて知つた我子の心を父として、今迄の行ひを其子の前に恥しく、せめてはそれ程思合つた二人の仲を、互に望むに任せたなら、此身の心の罪も消ゆるならんと、深くも思ひ定めたのだ、

『あ〻清雄勘忍して呉れ、私が惡かつた、私は天下の大馬鹿者だ、唯た一人の御前か、それ程思て居る光子を、結果は御前の為を思つて計つた事ではあるが、今の御前の言葉を聞て、私は今迄作つた罪を悔いて、御前に謝罪る、此縁談は確に私が破談にしてやる、而して、御前と光子は屹度添はしてやる、だから安心するがい。』

『え？それでは破談にして下さる、而して私と光さんと？』

『うむ夫婦にしてやる。』

＊　✿　✿　✿　✿　✿

一週日許り前の事である、清雄と光子は其望めるま〻の夫婦づれ親の許を受けて幾千代懸けて華々しく結婚の式を擧げたのである、光子の悦びは如何許りであらう、彼女は女學生時代に日頃理想せし新なる家庭を容造つて、樂しき生涯を良人の為に捧げんとするのである、彼女が幸福は彼女が運命と共に、永く／＼盡きる時はあるまい。

つ〻ましき花いろ衣の袖のうちに
千代のちぎりやうちこもるらん

美術

紀念繪葉書に就て

齋藤松洲

日露戰爭大勝利の紀念として、遞信省は第一回より第四回迄、三十九枚の繪葉書を發行し、戰局收つて滿州軍紀念を一枚、觀艦式紀念を二枚と、最後に第五回として、甲種一枚、乙種一枚、丙種三枚の繪葉書を發行したことは、誰も知る所である、

而して此紀念繪葉書は、第一回發行以後需用者極めて多く、最終の第五回に至つては、命掛で一組を買得たといふ如く、非常なる人氣で、騎馬巡査が買手の人波を制しかねしといふ有樣であつた、

斯の如き勢を以て、盛んに賣下げられたのであるが其製作品に就ては、いつも非難の聲高く、世の歡迎の多きに拘らず、製作品の價値は、大紀念品とすべきものにあらずとし、殊に最終の第五回に至つては尤も非難の聲を高め、新紙上に於ても、萬朝報、報知新聞の如きは、縱横無盡に罵殺したやうである、その大體は、大に正しい說かも知れぬが、坊主を憎む序に袈裟までもと、往々微細の點にまで立至つたのは、少し酷に過ぎはせぬか、

もしそれ等の批評家の滿足を得んとするならば、到底短時日に好成績の擧るものではない、第一材料の撰擇に就ても多少の日子を費さねばならぬ、第二圖案家の人撰に、其當を得ることも容易でない、次に製版者、印刷の手際等、それを一々吟味することになれば、小田原評定の間にも數月は遠慮なく經過せられ、なか／＼短期日に於て製作せらるゝことは、甚だ覺束ないことである、

されば云うて、遷延すれば紀念の時期を失するの恐れがある、予は奇を好んで遞信省の辯護をする譯

ではないが、先づ第一回より第五回に至る製作品を順次比較するに、第五回に至つては、甚しき非難あるに拘らず、圖案撰擇に於ても大に進歩し、製版印刷の上に於ても大に見るべきものがある、

假に遞信省が、第一回の紀念繪葉書發行以來、繪葉書業者として開店をしたと見るならば、僅か二年足らずの間に於て、其商品製作の見事になつた、其の進歩の早いことは大に祝さねばならぬ、

たゞ遞信省は、出版の事に不馴の故であらうか、往々製作の上に於て美を缺いで居る、もしも出版の事に委しい人があるならば、又それ等の人に托したならば、在來の如き非難は受けぬことであらうと思ふ

而して今この繪葉書流行の時に際して、第一回より第四回迄は措て問はず、最も盛んに熱鬧を極めて、發賣された第五回の繪葉書は、單に繪葉書嗜好者の道樂の爲ではなく、古今未曾有の大戰爭の凱旋紀念として、子孫に傳へ、當時の遺訓ともなさんとする誠忠の一端が迸つた結果である、故に遞信省に於て第五回紀念繪葉書の、發行數の多かつたのは、製作上の美に起因するのではなく、白紙に紀念の文字をすかしてあつても、世の希望は決して其數を減じないのである、併し幾千年の後の紀念にもなるべきものであるから、完全なる繪葉書を作るといふことには大に同意を表するのである、

故に今回は短時日で止むを得ぬに出でたとすれば、英國のネルソンの百年紀念に盛んなる繪葉書を發行したる如く、春陽堂が先月廿七日海軍紀念日として繪葉書を發行したる如く、四月三十日を凱旋大觀兵式の紀念日として、毎年行ふことが出來ぬならば、三年か五年目に一度といふやうに、紀念繪葉書を發行すれば、其間充分千載の紀念品として傳ふるに足るべき製作品も出來る、大に士道の爲めに利益あること〻思ふ、

餘事ながら、今回の發賣法に就ては、遞信省も大に鑑る所があらうと思ふが、素より當日の混雜は豫想したには違ひないのであるから、最初に申込を受

け、引替分を渡して置き、期日を永く引替る事にすれば、大切なる紀念品が一般に行亙ることが出來たであらうと思ふのである、又發賣所の如きも、かゝる場合には、男女入口を別にしたいものである、

是からいさゝか批評に取掛らんか、丙種の觀兵式の寫眞は、四月三十日に撮影したは云ふまでもなきことで之を翌月七日まで幾十萬の印刷した敏捷にも感ずべきが、撮影した翌日繪葉書にして、新宿御苑に招待された六千有餘の將士其他の人々に贈つた手際には、流石に政府の仕事として驚き感服するの外はない、斯の如くたゞ敏捷を第一としたことであらうが、輪廓の圖案が、黄色と紅の菊、これは秋の季節のものは云ふまでもないが、御紋章を意匠したものとすれば、甲種の元帥大將連の印刷せる周圍に、白き平面の菊花を圖案化したものを、此方に流用する方が優つて居る、如何となれば、黄紅の菊の自然寫生的のものより、御紋章に近い、平面の菊花をあしらふ方が莊嚴でもあり、圖案として當を得たものであるから、丙種の大神宮と靖國神社を、御鏡の中に現はしたのは、適當の模樣である、觀艦式のもまづ〳〵申分なく、殊に　天皇旗の高くかゝげられたのは、實に有難く感じられたのである



これに櫻を用ひたるも、模樣化して居る。ひとり觀兵式の菊が圖案化して居ないのは、季節を溫室より採つたのかも知れぬが、甚だ感服しない、それから觀艦式の櫻は浮出しになつて居るが浮出しといふは左まで有難い物ではないにしても、製版上大に手數の掛る事であるから、いさゝか尊嚴を加へる事にもなる、そこでこの浮出しを觀兵式の方へも用ひて貰ひたかつたのである、

天皇旗のかゝげられたる御召艦、そを印刷するには大に莊嚴にせねばならぬが、それと同時に鳳輦の方には、猶一層裝飾を莊嚴にせねばならぬのである、甲種の方にも浮出しがあつて、この方に重きを置いてない如く見ゆるは、もとより然あるべき筈はないが、甚だ遺憾とする所である、

乙種の繪葉書は、尤も非難の聲を受けて居る、中間の大將の左袵として攻擊されたるは、精査するに、遞信省の說の如く、下襦袢の袵が、白く細く殘つて居る、それを數ふれは、慥に左袵ではないか、唯不幸にして鮮明を缺いて居る、次に大將の顏をカイゼル髭などは少し酷評に過ぎる、まづ一文字に近いものであるから、これならばよいとせねばならぬ、又弓を持つて郞黨の佩ける左刀は鞘があつて柄がないと云ふものもある、まさかそんな事のあるべき筈はないので、よく見れば柄も鍔もある、

そこで有職の間違もあれば、大に正さねばならぬことである、千歲の紀念品とすべき繪葉書の金粉が、俗人を喜ばせるといへばそれまでゝあるが、眞鍮の粉で、すぐに燒け落ちて仕舞ふとすれば、圖案も何もあつたものでなく、もし眞の金粉を高價にて用ふるに堪へぬとすれば、褪色せぬ金に近い色を用ふる方が宜からうと思ふ、

◎神經質頭痛の療法　熱い湯を手拭に浸して、顳と耳の後部を蒸すのは、よい頭痛の療法である、特に婦人に普通の神經質の頭痛には實用される、甘く行けは根切れになるといふ醫者の話、



紀元二千五百六十六年　西暦一千九百五年　清暦光緒三十一年
明治三十九年六月一日金曜日　ひのえね

▼投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、濟々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の讀者にて女鑑の讀者には同紙ロハにて見らる、
▽廣告　一行十五字詰五二十錢但し四面に限る
發行人　淡路八部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門
發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

論說

言語の改善

近來言語の惡しくなつた事は、實に箸にも棒にもかゝらぬ、之は大に改良せねと文字の上にまで及んで來る、言文一致の流行せる今日に於て殊に然く感ずるのである、故に文字を言語と一致せしむるには、言語を文章に近けるやうに進ませればならぬ、而して今日は文章家が言葉を追駈けるので、言葉の方では追駈けられては困ると言つて段々逃げて行つて益々野卑になる、其證據はと云へば、言葉と云ふもの〻尊き所は何處である、日本で何處が一番美しい言葉が使ふであらう、人民の代表者たる人々の集合せる帝國議會に於ても、甚しきは通辯なくては解し難き言葉さへ使ふものがあつて、文字にしたいと思ふのは容易に聞き得られぬ、又術も、天皇陛下を代表する裁判官、これに對する辯護士、其間に於ける言葉にしても、論旨は妙を極むるも、言葉を採れば文章とは大分緣が遠いのである、其他は知るべき而已である、而して婦人の言葉はといへば、現今甚だ妙でない、身分や裝束よりは餘ほど下品である、德川の末世時分には、假令二百石か三百石かの小旗元でも、今日の奥樣やお孃樣のやうな「あらさうなの、よくつてよ」と云ふやうな言葉は聞くことを得なかつたのである、況んやそれ以上の身分ある人に於ては各藩とも言葉は餘程叮嚀なるものであつて、粗末なる言葉を恥とし大に愼んだものである、然るに三十九年後の今日に至つて聞くさへ不快の念を生ずるに足るべき言語を立派なる學校に於ても、立派なる家庭に於ても、常に耳にするやうになれるは、實に歎かはしき極みである、かゝる有樣では、言靈のさちはふ國などゝは耻入る次第である、折角河原操子女子の如き、日本語を蒙古に植ゑ、次第に日本語の蔓延せる時に於て、一般に言葉を愼まればならぬ事と思ふ



文苑

夏雲　鍋島　直大

夕立の雲のみ見えてふらぬ日は、いよく暑き心地こそすれ

菖蒲　諏訪　忠元

おまへなる池にしげりて朝風に、かなる菖蒲のゆかしかりける

梅雨晴　小出　粲

五月雨の空は晴れてもやま水の、音なほ雨のこゝちこそすれ

同　鍋島　榮子

五月雨の雫もたえてにはたづみ、今宵は月のやどりけるかな

同　前田　朗子

五月雨の晴て今宵はめづらしく、月の影をも見出でつるかな

通信

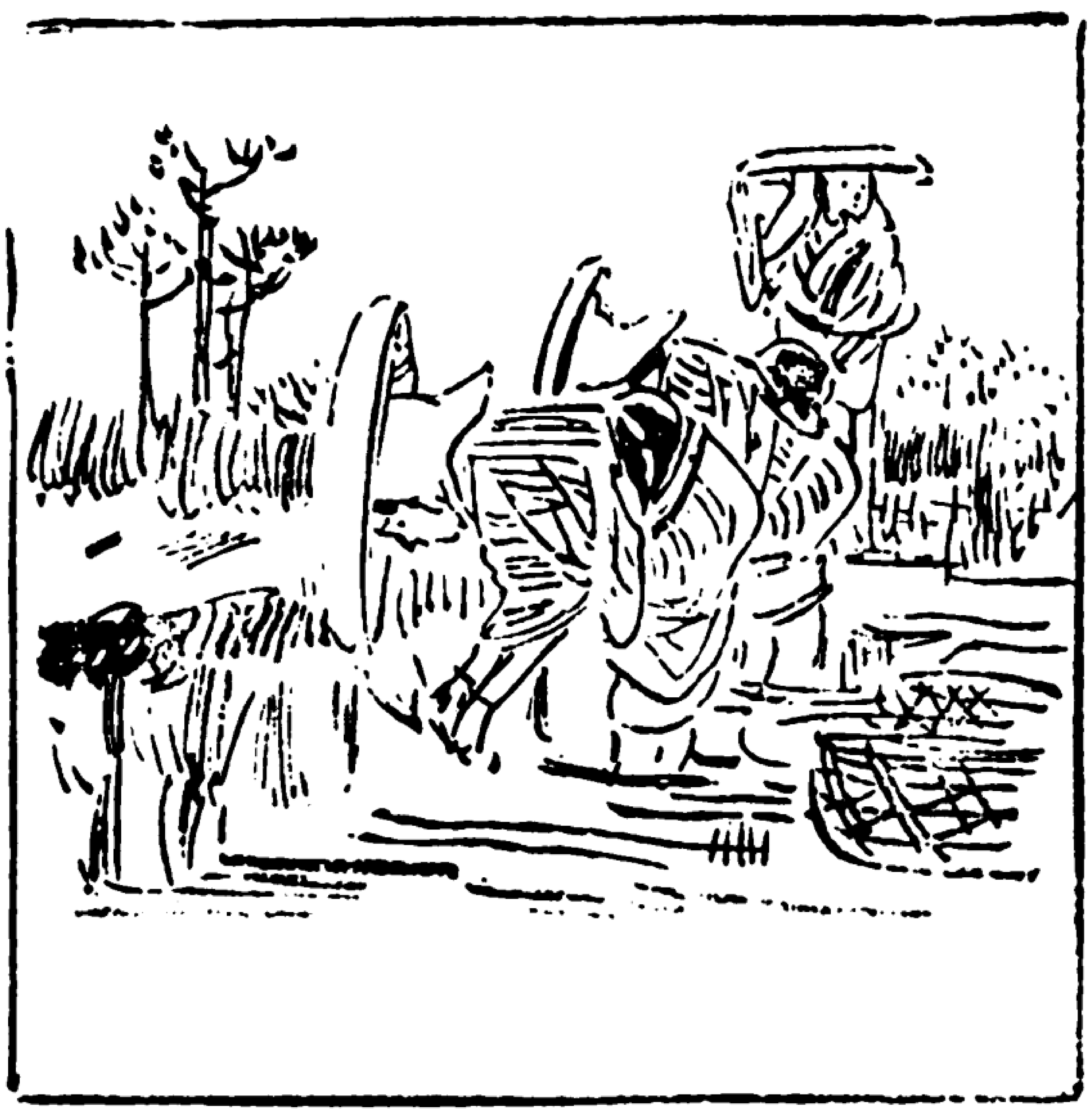
韓國皇室と婦人會

韓皇帝陛下には、近來日韓兩國婦人會の近況を屢々御下問あり、同國婦人の活動を、大に御滿足に思召され、時々御奬勵の御諚を賜ふと、又陰曆四月八日は、同國の名節なるより、淳妃は婦人會の代表者を宮中に召され、御宴を開き、同時に左の令旨を賜りたりと、

令旨

韓國婦人が、近來日本婦人と共に、活動の端を啓きたるは、國家の爲慶賀すべき事なり、諸媛は今後益々奮發して社會百般改良の原動力に從事すべし、

◎夫婦の浦鹽移民　戰勝に伴ふ結果として、海外發展の雄圖を企つるもの數ある中に、大阪市谷町七丁目二番地の中村雄藏(三十二)は、同地に於ても少壯實業家として、敏腕の聞えある人なれば、逸早くも此處に目を着け、猫の額のやうな內地に、愚圖々々して居ては、到底碌な事は出來ぬと大奮發一番に敵國として睨ひたる露領浦鹽に踏込み、思ふ存分我抱負を展べんため、妻の千代子(二十四)に其志を明かせば、千代子も女學校出の粹な世育ち、才學人に勝れて、花顏柳腰の美人なるが、それでは妾も其覺悟で參りませうと相談を遂げ、夫は某園の園丁に、妻は良家の雇女に住み込み、夫婦別れ〳〵になりて働き、將來成功の緒に就くまでは國元への音信も絕つべしと、健氣なる覺悟を定め、夫婦は愈々去る十九日神戶を出帆して浦鹽に向ひたりと、記者はその成功を祈る



◎夏季の座蒲團　原料の騰貴せる爲め、冬向の座蒲團と同じく夏座蒲團も亦八分乃至一割の高値なるが、季節柄とて賣行は相應にあり、其一枚直段は藺製二十錢より六十錢止り、革製一圓五十錢乃至三圓、麻布製六十錢以上一圓卅錢迄、紙布製五十錢より八十錢紙製十錢、十五錢二十錢內外なる由

本年の婦人向單衣地

青葉もやがて小蔭をなし、風かをる軒端の鈴に夏の心は動き初めたる、扨て本年の單物地として數いろ〳〵と現はれたるが中に、最も時好に適したりと稱するものを聞くに、縞柄はお召擬ひの物に多し

△セル地は利久茶の霜格子、同じくからみ大名縞小格子、たき縞、金茶の日本筋、よろけ大名等あり又變り物としては兩滿（橫飛白）などもあり

△被布と單衣との兩用としては、鐵鼠茶などの小格子上物もあり、一反十圓ぐらゐ、又大人向のフラ子ル地は、例年と格別の變りなし

△又小供向にはこれ迄になき新柄出來たり、先づ茶の辨慶縞黑の矢鱈格子、藤色の子持格子、オリーブ色の元祿格子など、目新らし

雜報

米國留學生の募集

米國委員の保管に屬する奬學金一萬弗の利子を以て年々五百弗乃至六百弗を支給せらるゝ日本女學生一名を、本年度中に留學せしむる爲め、日本委員内田政子、岡見けい子、瓜生繁子、津田梅子、巖本善治、神田乃武、島田三郎、元良勇次郎等諸氏の名義を以て、全國の女學生志望者中より、試驗の上採用す可く、各女學校及び是等に緣故ある人々に、其の推薦方を依賴したりと云ふ、此の奬學金は津田梅子氏の米國留學中、彼地有志婦人より寄附されしものにて、明治二十五年を初期に一名、三十一年に一名三十五年に一名を渡米留學せしめたるが、昨今募集中なるは、其第四回目なり、而して受金候補者となりたきものは、本月十五日までに麹町區五番町なる女子英學塾内奬學金委員宛にて願書を差出す可く、尚ほ精しきは同塾委員に問合せなば判然す可し、

◎埼玉女子師範の養蠶　埼玉女子師範には、養蠶實習をなし居れるが、生徒は熱心に從事し居るよし、その收益を以て園藝場を作る資に充つるの計畫もありと、

◎隨意聽講の開始　本郷千駄木林町の日本女子美術學校にては、教員檢定受驗志望者及び一般婦人の爲め染色及織物、日本風俗史、日本女學史等の隨意聽講を開始したりと、又一時中止し居たる割烹科を再興し、先月より毎土曜日午後より和洋の同講習會を開けるが講師は日本料理井上藤右衛門氏、西洋料理木村留吉氏なりと、

◎婦人の纖維應用の發明　京橋區竹川町藤井みれ子女史は、藥品を以て木葉を腐蝕せしめ、其纖維のみを殘して、婦人の帽子其他の裝飾品となす事を發明し、獨逸參科を利用して、殆んど刺繡の如き美觀を呈する細工を案出せりと、

◎郵便切手改正　三錢切手を老紅色に、一錢五厘切手を菫色に改め、當分の間從前の分と取交ぜ、使用せしむることゝなれり、因にいふ一錢五厘の切手を改めたるは、端書のそれと同色なるを避くるためにて、其と同時に三錢切手は郵便切手の色として世界一般に行はるゝものを採用するに决したるなりと、

昨今の小兒病と菓子

近來小兒の胃腸病は砂糖製の菓子を食過ぎるより起るもの十中の八九を占むるが、元來餡類を原料とせる砂糖澤山の羊羹や、餡類は、小兒の最も好んで食するものにて世間の父母も、小兒の菓子は、此類に限ると思ひ居れど、是れ大なる誤りにて、此種の菓子は、胃に入りて醱酵し易く、乳酸を生じて消化器を刺戟し、甚だしき害を與ふるものなれば、平生かゝる習慣を付けたる小兒は、爲に不治の慢性胃腸病を發して、取返しの付かぬ事になるもの尠なからず、然れは小兒にかゝる、砂糖製の菓子を廢して、ビスケット麪麭などを與ふを良しとす、是は單に消化好きのみならず、滋養も至つて多ければ、之より夏季に入りてのおあひだには、最も適當のものなるべく果物も至極結構なれど、往々青梅青葡萄不熟のものを食して、反つて胃腸の疾病を招くものなれば能く〱注意すべきなり、

◎白粉の鉛分　東京衞生試驗所での白粉檢査に依れば市内に販賣せる白粉四十四種中鉛氣皆無と稱すべきは僅かに十種に過ぎずと云ふ

社會

凶作地の昨今

下谷區入谷町なる長松寺内の婦人救濟會にては、這回凶作地より、孤兒三十二名を引き取り、同寺に收容しつゝあるが、今其の孤兒を連れ戻られたる、同會幹事の實地視察談をきくに、一般人民の流離困頓の窮狀に陷りつゝあるは、事實なるも、是決して彼等は單に凶作の爲のみを以て、斯くも悲慘の窮地に在るものにあらずして、元々彼等凶作地の人民は、平素極めて優柔不斷にして、毫も競爭心なく、奮發力なく、氣概なきの遊民徒食の輩のみ多く、從て平素無事の日に在ても、粟一粒の蓄へさへなき其日暮らしものゝみなりしを以て、今回の如き一朝其天災に遭ふ時は、其影響著しく現るは無理ならぬことなれども、今や全國は勿論海外の特志家より、續に同情の恩澤に浴しつゝある彼等、今日の態度は、果して如何と云ふに實に寒心に堪へざるものあり、彼等は施米惠金の恩澤に慣れて、鬼をも捕りひしぐ大の男が、皆白晝轉々横臥しつゝありと、只施米と惠金の來るを待つのみなりといふに至りては、實に言語同斷の限りと云ふべし、夫のみならず、役場等より施米惠金を分配し來るときは、數日分の糧食をも、僅か一日の中に團子餅等のあらゆる御馳走を拵へて、喫し盡せばケロツトして元の如く横臥しつゝあり、之には郡長始め町村長は皆閉口しつゝありて、止むなく人數に應じて、其日丈けの分量を與へて、少したりとも余分を與へざる方法を取りつゝあり、而して彼等の窮民に非ずして、窮民なる所以は、其縣其郡其町村に於て、彼等救濟の一端として、特に土木工事を起し多少の賃銀を取らしめんとて、頻りに勞働すべく勸誘すと雖ども、一人として之に應ずるものとてなく、只家に横臥しつゝ、施米と惠金を待ちつゝありといふが、凶作地昨今の狀況なりと云ふ、夫に就けても只憐れなるは、子供にして、よし父兄あるものと雖、已に述ぶるが如く、窮民徒食の輩多ければ、兒童を養ふこと能はざるは勿論にして、若し夫れ親なく兄弟なき、純然たる孤獨の貧兒に在ては、憫然中の憫然たるものにして、是眞に救ふべきものなり、今回連れ戻りたる三十二人は、皆悉く已上の如き不幸兒のみにして、此等孤兒の一々に向つて、試に伯父さんと東京へ行くかと尋ぬるや、『御飯さへ喰べさすれば何處へでも行く』と答へたりと、嗚呼未だ東西分たぬ頑是なき兒童の口より、斯の如き言の出るに至ては、如何に食に飢へつゝあるかは容易に推知するを得べし、

宗教と音樂

女子音樂學校々長　山田源一郎

宗教が音樂と關係厚く、また音樂が宗教と關係の厚いことは今更云ふまでもないことであつて、音樂ばかりでない、美術であつても其通り、凡て美に關係があり、人の感情に關係のあるものはみな宗教との關係を絶つ譯には往かぬやうである、ソクラテスの話や、其外古の人の話を聞いても其趣は分るのである、如何しても宗教と美術、宗教と音樂、此等の關係は亡くすることは出來ぬのである、

假に日本の美術に就て考へて見ても分る、美術の尤も發達したのは奈良朝である、建築でも彫刻でも凡て發達して居たのであるが其當時の美術は大抵宗教殊に佛教と密接の關係がある、佛教を離れてはあまり美術として見るべきものが無い、彼の法隆寺であるとか、其他奈良の諸大寺を見ると孰れも宗教に關係ある美術を以て滿たされてある、若し宗教を離れたならば、彼程の美術は或は起らなかつたかも知れぬ、昔から佛師とか彫刻師とか云ふものが常に佛教を信じて居たことは、誰も知つて居ることである、されば宗教と美術との關係は餘程深いものと云はんければならぬ、獨り日本の宗教と美術との關係が厚いばかりでない、西洋でも宗教と美術とは非常に密接の關係がある、何か美術の大作と言へば大抵宗教的美術である、ドウも宗教と相離れた美術に、偉大なものは無いと云つても宜いくらゐである、其と同樣に音樂に於ても亦宗教との關係が厚く、現に音樂學校などで教へて居るクラシカル樂は殆んど凡てが宗教音樂である、ドウも宗教と離れた音樂は野卑である、宗教を基礎とした音樂は何處となく高尙で自然氣品が高い故に音樂は宗教を俟つて始めて完全なものになるのである、其から又宗教の方から見ると宗教には音樂が必要である、人の感情を和らげて自ら高尙な心を起さしめ、宗教的思想を起さしむるのであるから、禮拜上に於ても、種々の儀式上に於て

も、是非とも音樂を以て宗敎の助けとする必要がある、宗敎が如何に帝王の保護や其他の大なる勢力の保護ありとも、音樂と云ふ武器を用ふる方が餘程有力なごとかと思ふ、實に音樂は宗敎の武器であつて丁度兵士が武器を以て戰場に立つ如く、音樂と云ふ武器を有つた宗敎は、ドウしても有力である、如何に武勇であつても武器が不完全では到底勝つ見込みが無いと同じ樣に、宗敎も音樂と云ふ武器を有たぬ者は、イクラ高尙な宗敎でも、完全なる宗敎と云ふことは出來ぬ、故に完全なる宗敎には完全なる音樂が伴はなければならぬものである、

元來宗敎と音樂とは、單に今云ふたゞけの關係かと云ふに、左樣ではない、宗敎と音樂とは同進路に赴くものである、宗敎は精神に滿足を與へ、安心を與へる、即ち心の平和を主とするものである、音樂も亦同樣の目的で、心の平和と云ふことが最大の目的である、即ち此點に於て宗敎と音樂とは相一致すと云ふても宜いと思ふ、

全體宗敎が理性の力に依て傳へらるゝことは勿論必要のことで、寧ろ宗敎は理性の方面に屬するものである、然るに音樂は感情を支配するものである、即ち理性を滿足せしむる宗敎と、感情を支配する音樂と相待つて用ひられ、適當の方法に應用さるゝならば、實に宗敎自身の爲にも非常な利益である、難解なことを百萬遍説いても、一向心に沁み込まぬ事柄も音樂ならば、僅に數音で人の腦裡に入れることが出來るのである即ち宗敎は偉大崇高の觀念を與ふるものであるから、宗敎的音樂は偉大崇高の觀念を人に與ふるものである、我々が富士山に登りて廣々とした處を見渡し、大海を航つて其大きな光景を見れば、何處となく偉大のやうに感ぜらるゝけれども、之に宗敎の念が伴はぬ時は、ドウも崇高とは往かぬ眞の偉大とも云へぬ、凡そ宗敎心のない美術家や音樂家は、到底偉大のことを解せぬ、平々凡々のものになり了るのである、彼の雲慶や、探幽の如き大美術家が今日に於て尊ばるゝのも、また宗敎的觀念が

あつたからである、昔からの美術家や音樂家で後代より貴ばるゝものは、大抵宗教的觀念のある者に多い、ドウも宗教的觀念なくして、後代から、貴ばるゝものは少いやうである、

過去の有樣が其樣であるから、此を以て推しても、將來もまた同じことだらうと思ふ、今日イクラも新進の美術家と云つて、斬新な畫を描く人がある、中には大分大きなものを描く人もあるが、唯大きいだけで、偉大とは往かぬ、ナルホド色彩の美はある、曲線の美はありもしやう、併し一向に活動して居らぬ、唯だ形式だけの美に止つて居る、音樂も亦其と同樣である、

元來國家の幸福や安寧秩序を保つと云ふには、法律と云ふものがあつて、充分行屆いて居るやうではあるが、法律は單に消極的に惡をさせないばかりで、積極的の方には力がない、音樂は時代風俗の反射鏡であつて、風俗の善惡は音樂で分ると云ふ如きものであるから、人心を和らげ、積極的社會を進ましむることが出來るものである、其程のものであるから宗教者が音樂を忽にすべからざることは勿論のことである、

故に宗教家諸君は、音樂を一日も等閑に付してはならぬので、是非々々盛にして往く責任があるのである、音樂と云ふものも責任がないとは云はぬが、主として宗教家中の有力なる佛教家、殊に斯る完全なる佛教の如き宗教に在つては、大に此邊を用ひて貰ひたいのである、然るに從來此種の企てをなす者もなく誠に遺憾なことであつたが、近來佛教家の中に大分音樂を用ふる者が出來たのは、結構なことで、大に喜ばしいことであるが、まだ〳〵今日の如き有樣では不充分であるから、將來が尤も肝要である、佛教家諸君は、此から一層熱心に音樂の爲に盡力せられんことを希望するのである、

社會の事物は常に變遷するもので、時勢と與に進歩し往くものである、故に宗教も社會と與に相進歩して往かんければならぬ、若し其樣しなければ、如何

なる宗教でも、教理は何程完全であつても、末長く繁昌する譯に往かぬ、今日の佛教は、悉く時代後れの宗教だとは云はぬが、隨分革新を要する事と考へられる、故に今日の佛教家が、能く時代精神を觀破して、其時代の先覺者となるやうに心掛けるが必要である、此際幸に新進の佛教家が佛教革進の第一着歩として完全な佛教音樂を作り、一般社會に弘めて佛教的音樂の普及を圖つたならば、啻に佛教の隆盛を輔けるばかりでなく、此の廣大無邊な佛德を賛美することが出來ること丶信ずるのである、

何に致せ宗教と音樂、佛教と音樂との關係は頗る親密のものであるから、何の方面から考へて見ても將來益々盛にしたいと思ひます、

有樂流炭手前

東京裁縫女學校教師　田畑夏子

凡て正式に點茶いたしまするは、必ず點茶前に炭の手前と申して、炭を風爐につぐのが例であります、併し時間を急ぐ、即ち炭の手前を致す時間のなき塲合、若くは今炭の手前をしたばかりの處へ來客の際は、之を省きても少しも差支はありません、か丶る時は挨拶後すぐ點茶をいたし、茶菓を客にすゝめるのであります、其他は皆炭手前をし、香をたき、茶道具疊羽箒にて淸めて、菓子を運び、點茶をするのが順序であります、

扨て炭の手前をいたす前に、炭取並に灰焙爐の用意を水屋にてなし、第一に炭取を兩手に、兩脇よりさ丶げ持出で、風爐の右方に置く、二に灰焙爐を左手に受け、右手は右脇よりあしらひ運び出で、釜の正面に座し、灰焙爐は右手に持ち、右脇の後方に置く先づ炭取より羽箒を取出し、炭取と釜との間に飾付く、次に香器を右手に取り、左手をあしらひ、釜の左角の下に飾付く、次に釜敷を右手に取り、左手にて一寸あしらひ炭取の正面に置く、次に釜の鐶を右手に取り、左手の方のを左手に持ち、左右より一同

に釜にかく、次に火箸を右手にとり、羽箒の右に飾り附く、先づこれで器物着座の飾り付は終りました第一に釜をはづし、釜敷の上におろし、身體を右へ向替り、釜を右へ引よせ置き、釜の鐶をはづし、左右の鐶一つに見ゆるやうに合せ、釜の右に置き、右手に灰焙爐を持ち炭取の前に置く、兩手を兩膝の脇につき、元の座即ち風爐の正面に着座、右手に火箸を取り、左手もあしらひ『お火はござりますか』と客に挨拶をなす、客答禮あり、

先づ火を向へ積上げ灰の位置をなほし、火箸を左手に持ち、右手に羽箒をとり、火箸の先を拂ひ清む、客に羽箒のうらの見えぬやうにして二度上下を拂ひ右手の羽箒を元へ置き、左手の火箸を右手に持ち替へて元に置く、第二に灰焙爐を右手にて取り、左手に持替へ、右手にて灰匙を持ち、其内のあらればいを一さじと三さじほどまきて元へ置き、火箸を右手に取り、炭取の内にある枝黑を灰焙爐へ替置き、第三に枝黑を風爐につぎます、その仕方は、一は胴炭二に輪炭、三に毬切炭、四に四方炭、五に管炭、六に枝黑、次に點茶といたします、その形容は塲合により種々ありますが、普通山水と申して向ふに火の山、手前より左右には炭の連山、其中に管炭を、枝黑にて橋を架けたる形にするのであります、第四に羽箒を右に取り、風爐の緣を清め、羽箒を元へ置き右手に香器を取り、左手にうけ、右手にて蓋を取り風爐の正面に置き、右手に火箸を取り、香を二箸風爐にたき、火箸は炭取の中へ入れ、右手にて香の蓋をなし、香器は元飾付の所に置き、第五に膝の左右に兩手をつき、右に向替り灰焙爐を元へ飾り付け、釜の鐶を右手に取り、左方を左へ持ち、左右一同に釜にかけ、左へ引よせて風爐の正面に向き替り、釜を風爐に掛け、先づ釜敷を右手に取り、左手にあしらひて炭取に入れ、香を炭取の中の釜敷の上に納め附け、第六に灰焙爐を右手に持ち、左手に受け、右手は脇にあしらひ、目八分に持さゝげて退く、次に進み出で風爐の正面に座し、少し炭の方へ向き、先

づ炭取を兩手にて右へ替置きなし、羽箒を右手にて風爐の敷板より斜に置き、膝を右へ向け替へ、左右にて炭取を持ち退く事、次に進み出で、羽箒にて座を淸めるのであります、その方式は、先づ炭取の置きわりし場所を初め、板敷の上並に道具疊を淸ばきいたします、而して釜の湯煮立つ時は、此時に少く釜の蓋を切り置き點茶いたすのであります、

茶の湯に招かれたる時（千家）

◎茶會の招待を受けたならば、必ず前禮をせねばならぬ、其前禮といふのは茶會の前日に主人の家を訪ふて厚意を謝すのだ、イエ自分が穴勝行かずともよい、假令一寸差閊でもあつた時には郵便でも使でもよい、要するに好意を謝しさへすれば足るのだ、又た貴人に追陪するときは前後ともに相伴の挨拶を忘れてはならぬ

◎當日になつて、玄關の小座敷等へ案内に應じて集まつた時には直ちに席順を定めねばならぬ、さうして揃ふたといふことを取次の者へ通知するのだ、人間といふものは集合すると前後の考もなく猥りに高笑なしたり、或は耳語したりするものだが、決して右樣の不禮があつてはならぬ、茶會などでは別て謹まねばならぬ、足袋は新なるを用ひ、帽子手袋襟卷の類は茶室に携帶してはならぬ、尙ほ云ふて置かねばならぬのは、應接所や小座敷へ案内せずして、待合に案内することもあり、庭口より直ちに待合に到ることもあり、又た直ちに迎付することもある、是等は一定する事は出來ん唯だ主人の意に任して置て然るべきである、されど席順を定むることは定式によらればならぬ

◎一同の客が待合へ通つたときには、腰をかけて茶室の方へ注意肝要である、亭主手水鉢の水を換へる音を聞くまで、客一同は待合を出て並立する、さうして亭主の迎附があつたときに、總禮をするのだ、それから亭主の歸るとき一同之れを目送して又た元の待合へ這入て烟草を一喫し小用を便じて盥ひそゝぎの上で座入するのだ、尤も降雨降雪等の際は必ず竹笠の備付があるから、それを片手にて差ひ扱をして、室外で以前亭主が持ち扱ふた笠の上へ重ねて置くのだ、それから尙ほ注意しておくが、前にいうた總禮とは客一同が亭主に辭儀することだ、又た待合にも疊のみにはかぎらんので板間のがある、此時には圓座があるから夫を各自が敷くのだ、又た座入するときには、各自が今迄敷いて居つた圓座は元のやうに重ねて、手爐とか烟草盆は片隅へ仕末をして置くべしだ、尙ほ外路次と内路次との間にある中潜り等の戸は内側より閉して置かねばならぬ、ナニ卷烟草か、敢て差支はないよ、併し洋服が淨瑠理のやうだ、可成ならば使はぬがよい（某宗匠談）



勤勉の德

文學士　常磐榴丘

一

予が勤勉を以て第一の德に數ふるは、此德は人の一生を通じて、人間の幸福に至大の關係を有すればなり、人は働かんが爲に生れたるもの、眼あり、耳あり、手あり、足あり、一として是人をはたらかしむる機關ならざるはなく、又働くに都合よく成り居らざるはなし、されば此天授の機關を運用せざるものに幸福の來るべき筈なかるべし、勤勉の德を有せざるものは、身の上の不幸を來すのみならず、心の上の不幸を招く事も頗る大にして、一生涯人を怨み、天を怒りつゝ、且不幸短命にして終るの結果を見るべし、是皆是等の機關を不用に歸せしむる天罰にして、自ら招ける不幸に外ならざるなり、

予常に中等社會は最も幸福なりとの語を聞く、其理由は種々あるべしと雖も、予は種々の家庭に就きて實驗するに、今に於て中等社會は夫婦共に最も其勤勉の德を實行し、勤勉はやがて幸福を產むものなるを感得せり、主人の邊は今は之を措きて、先づ其主婦の上より之を見ん、上流社會の主婦ほど、日本に於て不勤勉なるはなからん、不勤勉の天罰として身は上流にあれども、其精神上の不幸は存外に多きが如し、存外に不幸多くして、他に見えぬ所に淚多きに似たり、是主として不勤勉より來る自然の結果に外ならず、若し此不幸を除かんとせば、衣服飲食に求めず、夫を責めず、他を羨まず、他を嫉まず、先づ身を投じて勤勉ならしむるに過ぎたる方法なきなり、彼上流にありて不平に泣く婦人にしてこゝに注意せる人はありや、なしや、飜りて又下流社會を見よ、夫は終日汗を流して僅に一日の米を得て夜に臨

みて歸るが如き家庭にありてすら、猶其主婦たる者は、ゴロ〳〵として無事に苦しみ、小人閑居して不善を爲すの格言に洩れず、つまらぬ考へのみを起して、夫のはたらきなきを罵り、人の幸多きを羨むもの、比々皆然るに非ずや、徒らに世の無情を歎じ、身の不幸を悲み、而して掃除さへも怠りがちにて、裁縫洗濯の末に至るまでも、自から之を爲さゞるが如きは、是實に裏店社會の通例に非ずや、主婦の勤勉の如きは、到底此下流社會にも亦之を見ること得ざるなり、斯く上流と下流とに主婦の勤勉を見る事少きに引きかへ、中流には最も多く之を見る、是實に幸福を產む原因の主なるものなるを忘るべからず切々と勤勉して家政を整へ、家政の暇には讀書して日を送らば到底不平をいひ、小言を弁ぶる閑暇なきものなり、不平なく、小言なければ家庭は和して琴瑟の調へるが如くなるべし、家庭和樂して琴瑟の調へるが如き、是既に非常の幸福なるに加ふるに、主婦の勤勉の此財政上に及ぼす影響は到底こゝに述ぶる能はざる程大なるもの、家政のよきは決して收入多きより來るものにあらざるなり、主婦の心得如何によりては、大金も悉く死すべく、又小錢と雖も悉く活くべし、勤勉なる主婦は、金錢のみならず、廢物と雖も之を活用するものにて、經濟の道實に此中に伏在するなり、若し廢物の末に至るまでも之を活用する勤勉あらんか、是實に和樂する家庭に加へて、益々其家政を整はしめ、子弟の敎育の如きも、勞せずして之を能くするに至るべきなり、斯くて勤勉の結果は啻に一世のみならず、二世三世までも長く其賜に浴するを得べし、諸姉も幾多の家庭に就きて、主婦の勤怠如何と、其幸不幸との關係を實驗せば、必ずや此言の理あるを見るべきなり、

二

若し夫れ中流と雖、主婦にして怠惰ならんか、たとひ今日は中流に位するも、明日は下流に墮ちて、早や幸福なる中流に止まるを得ざるべく、又中流にして大に成功を得て、上流に上るものありとせんに、

此時に至りて當初の精神を失ひ、怠惰に流れんか、是亦永く上流に止まるを得ずして、遂に下りて中流に墮つべく、こゝにても眼を覺まさず、猶上流にありと誤想して、怠惰を續けんか、遂にはいつの間にか下流に沈みて、幸福なる中流には止まるを得ざるべきなり、又翻つて見るに、下流のものにも、僥倖にして時には一足飛びに上流に上るものもあれど、此幸福なる中流も經ざる、所謂成り上りものは、到底永續すべきものにあらず、時ありては再び一足飛に下流に下るものなり、されば上流に上るも、中流の心得を失はずして勤勉なるものは、長く其幸福を享くべく、又下流に下る事あるも、失望せずして勤勉なるものは、必ずいつか中流に上るもの、結局幸福は中流にあり、換言すれば中流の心得ある所に存するなり、諸姉は皆是中流或は上流の家庭に生長せるもの、而して遠からずして新なる家庭の中に入りて、主婦の位置に立つもの、其時に當りてや、或は好運に乗じて玉の輿に乗るものあらん、或は之に反して思はざる苦境に沈淪するものもあらん、いづれにもせよ、勤勉は主婦の第一の德なることを忘るべからず、されど其時に至りて俄に勤勉となり得るものに非ざれば、今日より其準備として、勤勉の習慣を養ひ置く事極めて必要なるべし、今日の勤勉は是一世、二世、三世の幸福の源泉なる事を深く考慮して、學校生活の時より、遊ぶ時には能く遊び、學ぶ



時には能く學ぶの格言を、自分のものとなされん事、實に日本國家の爲に望ましき事なり、

三

勤勉の德と相關する事尤も深くして、寧ろ勤勉の源因とも云ふべく、又結果ともいふべきは內心の平和なりとす、此平和の德も亦吾人の日常にありて、極めて肝要なるものにして、而も甚だ實行に難きものなり、難しと雖極めて大切なるものなれば、予は諸姉に向て、此德を養成せられん事を希望するものなり、前にも勤勉なる時は、自ら不平も起らざるものといへるが、猶少しく之に關して述ぶる所あらん、現時は成功の文字が非常の流行物となり、能く成功の語を新聞にも雜誌にも見るのみならず、甚しきは成功といふ雜誌も出來、又誰々の成功談などゝいふ著書も續々と出版さるゝを見る、而して世人の成功といふは、位置を得るとか、財産を作るとか、所謂衣食住の方面に於て、滿足を得るをいふ如し、是成功には相違なきも、最後の結果のみ、予は猶少しく深入りして、此結果を得たる肝要なる源因を究めたく思ふ、若し其源因を究めずして、徒らに結果のみを望む時は、弊害のみを殘す憂あればなり、全體人の成功するは何に出るかと云ふに、勤勉と平和とにあり、平和と勤勉の二德とは極めて關係深きものにて、平和なるが故に勤勉なる事を得、勤勉なるが故に平和を得るもの、內心の平和なくして勤勉は到底滿足に行くものにあらず、又勤勉なくしては內心の平和は到底立派に得らるべきものに非るなり、世人が內心の如何に注目せずして、徒らに齷齪として衣食の上にのみ滿足を見んとするは、是既に一歩を謬れるものたらずんばあらず、予は平和にして勤勉するものには、天必ずや此人に報ふるに成功を以てするもの、成功は寧ろ天よりの賦與にして、徒に之を望むも、人爲を以て得らるべきものにあらずと信ず、而して又此二德を實行して、急がず、撓まずに進むものには、必ずや成功はいつとなしに其頭上に來るものなるを信ずるなり、

四

天竺の雪山に寒苦鳥といふ鳥あり、此鳥は非常に寒氣に苦むものなれども、亦至つて遊戯に耽るものなりといふ、終日天氣のよきにうかれて、巣を造る事も打忘れて、終に薄暮となり、寒さ身に泌むに及んで初めて後悔の念に堪へず、明日こそは朝早くより孜々として巣を造りて、此苦しみを再びするの愚を爲さゞるべし、今日一日は誤れり、明日こそはとて、終夜『夜明造巣々々』と鳴き續けて天明に至り、扨明日となりて麗かなる天氣に遭へば、昨夜の苦みは遂に之を忘れて、又花の陰や、流の邊りにうか〳〵と日を送りて、夜に至りて後悔の念に堪へずして、終夜『夜明造巣々々』と鳴くと云ふことを、予は或書に於て讀める事ありき、吾人若し勤勉ならずして一日を送らば、其夜は宛も此寒苦鳥と同じく、實に内心の苦悶を來すものなり、此内心の苦悶はいづこより來るかといへば、決して外より入り來るものにあらずして、自ら招ける結果に外ならず、されば之を除かんとせば、決して他に目を向くるに及ばず、自ら己を勵まして勤勉するにあり、勤勉なる時は必らずや夢安らかにして、元氣中に滿ち、勤勉又勤勉毫も苦みを覺えず、其結果は平和又平和、實に太平の世を樂むを得べし、是實に成功に達する必然の順序なり、

五

全體苦樂と云ふことにつきては、大に考慮を要する事あり、世人は樂といへば衣食住の滿足する事、苦といへば其不足なる事をのみいへども、是れ大に誤れるものなり、若し然らば衣食住にして滿足ならば苦はなき筈なれども、華族にも、富豪にも、存外苦を感ずる人もあり、又之に反して裏店にありても、存外樂しみを感ずる人もあるなり、されば苦樂とは身の上の事にあらずして、心の上にあるものなるを忘るべからず、吾人は身と共に、大切なる心を有するものなれば、諸姉は心して此心の一字を念頭より離すべからず、予は苦樂といふ事を細かに分析して

次の如くせば、明了ならんと思ふ、

(一)身心共に樂し、

(二)身は苦しけれども、心は樂し、

(三)身は樂しけれども、心は苦し、

(四)身心共に苦し、

(一)身心共に樂しき人間は到底あり得べきものにあらず、前に述べたる如く人ははたらかんが爲に、耳目手足を有するものなれば、身心共に樂しきを欲するは、最初より誤れるものなり、世には此無理の注文を爲すもの多きを以て、其結果は身心の樂しきを得ざるのみならず、却りて、(四)の身心共に苦しき境遇に沈むもの、數ふるに遑あらざる程なり、是即ち無理の望みの爲に蒙れる天罰にして、此天罰は自ら招けるものなれば、決して天を怨むべきにあらず、されば(一)は人間には望むべからざるもの、又(四)は人間に望ましからぬものなれど、人間として撰ぶべきは(二)か(三)かの外に之あるを見ず、(二)の身苦しめども心樂しとは、前述の勤勉の結果心の平和を來すものに當り、(三)の身樂しめども心苦しとは、衣食住の滿足を希望して齷齪として、奔走運動するものに當らざるか、吾人若し口の樂しきを欲せば、其爲に心の苦しき事幾何ぞ、耳の樂しきを欲し、體の錦繡に纏はるゝを欲し、大厦高樓にのみ住まんと欲せば、その爲に心の煩はさるゝ幾何ぞ、身は樂しめども之が爲に心の苦しきは、他より之を見て想像しがたきものあらむ、之に反して人と生れては、勤勉なるは是人の務めなりといふ思ひより、一日勤勉しては其夜圓かなる夢を樂み『明日もまた、朝とく起て學びなば窓にうれしき有明の月』、心にうれしさを覺ゆると共に、元氣益々増して、益々勤勉せば、其結果は實に一身の幸のみならず、一家の幸のみならず、國家の幸をも來し、社會の幸をも招くものなりと思はる、諸姉願くは内心の平和を眼目として勤勉せられん事を、斯くして進まば、天や必ずいつの間にか求めねども衣食住の滿足をも賜ふべきものなり、之をこそ成功といふべけれ、

六

現時にありて諸姉の如き若き女子の方は、動々もすれば獨身にして世を終へんとの思想を抱くものあれども、予を以て之を見れば、これ甚だ不健全なる思想なり、男女一體となりて初めてこゝに滿足を得、男の不足を女が補ひ、女の缺を男が補ひ、互に其長所を以て、互に其短所を補て、初て滿足の結果を來すものなれば、諸姉もいつしか新なる家庭を作るべき事を決して忘るべからず、一たびは必ず主婦の位置に立つべき事を終始念頭より去るべからず、諸姉若し主婦の位置に立つ時、前述の如く内心の平和より勤勉し、勤勉して益々内心の平和を得られなば、こゝに一家の團欒を來すは勿論なれども、然れども人は情の動物なれば、時には愚痴も起るべく、時には不和も起るべく、時には悲しみも苦しみも起る事あらん、この際に中りて之を平ぐるの心得なかるべからず、これには予は心を廣くして迫らざる事第一なりと信ず、乃ち心を廣くして泣くも笑ふも、此心の中にてせんとの心掛殊に肝要なりと信ず、心の中に一大公園を造りて、泣かんとせば此中に於てし、不平を言はんとせば此中に於てするは、人間に取りて大切なることにして、人間の價値の高下も、此心掛の多少によりて定まるものなり、然しこの事たる最大難事中の最大難事にして、男子中の豪傑といはるゝ者にありても、之を難しとする所なれば、情にもろくして、之に驅られ易き、女子に取りては、こは實行しがたき事ならん、されども情に誤られ易きは女子の常なれば、女子には殊に此心掛を大切とすべく、たとへ實行し難き迄も、之を實行せんとの心掛を有するだも、肝要なるべく、心掛あるのみにても、其結果は著しきものあらん、予は此德を抑情とも、又は中庸とも呼ぶ、

七

中庸の德を守る事は、男子にも實に難中の難なれば、情に強き女子の身に取りて難事たるは、實に理の極めて明了なるものなり、されば予は此德を養ふに付

きて一の捷徑を、諸姉に呈せんとす、其捷徑たるや實に易々たれども、あまりに易々たるを以て、却りて忘られ易きものなり、

毎朝蓐を離るゝ際、今日一日の無事ならんを希ふべし、斯くて一日を終へて夜に至りて、蓐に入らんとする際再び今日一日の無事なりしを深く喜ぶべし、之を天地に對する感謝といふ、若し諸姉にして毎朝夜二回宛之を繰り返さば、必ず諸姉は不平を少くするを得べく、不平少ければ隨て和平を得易く、和平なれば隨つて中庸を得易く、和平にして中庸に、且つ勤勉ならば實に諸姉の現在は幸福にして、將來も亦益々幸福なるを得べし、將來主婦たるの時、若し不平の面色を呈せば一家は爲に不幸に沈むべく、之に反して顏色和らぐ時は一家は爲に和樂すべし、顏色の和ぐは、決して心を外にして求むべきにあらず、内心にして中庸、和平を得ば、顏色は自らにこやかとなるものにして、主婦のにこやかなるは一家幸福の源泉なる事を忘るべからず、斯く見る時は、中庸の德を養成すべき捷徑たる感謝も、亦實に肝要なるものなり、

今村裁判長を訪ふ

中川愛氷

煙の立つ所、必ず多少の火あるを免れざれども、毀譽褒貶の不公平なる今日に於ては、煙のみ高くあがりて、火の認められぬものあり、而して毀譽褒貶の不公平なるが爲に、社會は所謂善人にも、所謂惡人にも毒せらるゝことあるなり、

人の罪を犯すは、種々の慾望の良心を曇らするに基因す、故に本心の善にかへらしめば、再び惡事を働くことなかるべし、こゝに一罪人あらんか、そを改心するに力めず、少しにても嫌惡の情を以て之に向はんか、一時はその恐ろしさに戰慄せしめて、再び惡事をすまじき如く感ずれども、服役すれば足るてふ心起らば、次回よりは平氣になりて、遂に惡人は

惡人にて終始一貫すること丶なるなり、予幼時大岡政談を讀みて、大岡越前守の判决には、喜んで其刑に伏し、一人の之を怨むものなかりしといふことを記臆せり、

罪人の判官を憎むべき理由なきは、もとより當然の事なれど、盗みする子は憎くなうて、繩かける人がうらめしい、とさへ云ふに、惡事を犯したる常人が、此人によつて己の罪の相場を定めらる丶と思へば、己の惡事は棚へ上げて、其言渡に不服なるは、全部良心を失ひたるによるものにて、罪を償ふ念起らず、血をす丶れば骨までとなる也、

其罪を憎んで、其人を憎まず、といふことは、今更ながら敬服せらる丶聖者の心事也、惡人は多くの人に、其良心の不具を憫れまれずして、絶對的に憎まる丶が故に、彼の心はます／＼惡に傾きて、火に油をかけられたる如きものとなる也、

今の世に惡人といふは、法廷に於て定められたるもの丶名也、故に法廷に於ける判官は、惡人の罪を指摘して、改善の心を起さしめ、而して其罪を償はしめ、再び其法廷に相見ることを耻づるに至らしむべく、極めて尊き、職分を持てるものと信ず、

近時世間を騒がせし野口事件あり、男三郎なる人の暴惡の程度は知ることを得ざれども、花井辯護士が、我四千萬の同胞中、男三郎に同情を寄するものは、我等數人の外はあるまじと云はれし如く、天下の同情を失ひし程度は、肉を裂かざれば飽かじとまで云はしむるに至れり、而して公判廷に裁判長として、この惡人に向はれたる今村恭太郎氏の態度は、前述判官に希望するもの丶如く、數回の公判に傍聽して、昔の大岡越前守の裁判は斯の如くありしかなど丶、ます／＼敬服したるのみならず、氏に死刑を宣告されたる男三郎をして、花井氏に贈れる手簡に見るも、い丶、い丶、せい／＼したと云はしめたりき、か丶れば判官は決して閻魔にあらずして、牧師以上なる事を知るべし、

予は家庭に於ける氏に面會するの榮を得んとて、男三郎に、言渡しの前日、氏を水道端の邸に訪ふ、邸

所謂新奇法の實驗

數年前墺太利の醫家ドクトル、シエンク氏が妊娠中の胎兒を自在に男又女となすの法を發明したるが、其後氏の死去したるにも拘らず、氏の二子はヴイエンナにありて、氏の遺業を繼ぎ、今に其法の傳播に勉め居る由なるが、近頃米國の大富豪ロックフエラー氏令息夫人は、氏の法に據りて療治を受け、首尾能く玉の如き男兒を分娩したりと云ふ、此法發明の報一たび世上に傳はるや、千里を遠しとせずして來りて治療を請ふ者甚だ多かりしも、氏は自重して多くは之を謝絶し、此法の傳播に與りて力を貸すが如き、著名の人物に對してのみ、其請に應じて療治をなし居たるが、ロックフエラー氏令息夫人が、世界最大の財產を繼がしむべき嗣子を擧げて、夫及び養父母の喜びを買はんものと、ヴイエンナに至りて療治を請へるに、氏の遺業を繼げる二氏は喜んで之を諾し、夫より佛國南部の保養地なるカンに滯在し、茲にてヴインナより折々派遣せらるゝ技師の療治を受くる事となりたるが、何分食物其他の規定の八釜しきより、一時は夫人の之に堪ふべきやを疑ひたりしも、窒素質に富める規定の食物は、意外にも夫人の口腹に適したれば、療治の初期より、技師は夫人の相違なく男子を分娩すべき事を證言しありたるが、今や技師の證言事實となりて、目出たく男子を分娩したるなりとか、抑々氏の法と云ふは、男性の胎兒は女性の胎兒よりも其細胞の數多しとの理に基づける者にして、療治の詳細は、秘密にして之を知るに由なきも其目的は唯此細胞の數を自在に增減せしむるに過ぎず、是が爲には嚴に脂肪及び糖分を禁じ、多量の窒素質食物を取らしむる由なるが、試みにロックフエラー氏令息夫人が用ひたる一日の献立なりと云ふを見ば、其邊の概略を窺ふを得べし、即ち其献立左の如し、

第一回朝食――砂糖を入れざる牛乳一椀及びビスケット
第二回朝食――牛燒ハム及び麪麭
晝食――スープ小量、炙肉(但し野菜類なし)燒直しチース
晩食――炙りたる鮮肉、チース、麪麭、小量、林檎一個
右の外白葡萄酒を混じたる水、日に三杯宛

尚ほ此献立の爲に、不消化を起すやうの事なき爲、夫人は長距離の散歩を命ぜられ、成るべく手足の運動を爲さしめられたりと、然れども神經を刺激するやうの事は宜しからずとの事にて、療治中は全く社交界に出でざりしとの事なり、

婦人の探撿家

時代の要求する最も進取的の婦人の一人として、茲に辯護士小島官吾氏夫人清子を紹介せんに、夫人は良人將來の立脚地を作らんが爲めに、昨年五月を以て單身米國に渡り、種々の困苦を嘗めて、一通り調査した結果先頃歸朝し、今や良人官吾氏と共に、一家を擧げて米國に移住せんと、專ら其準備中である、其來歴を記さう、

◎官吾氏の米國移住希望　小島氏は牛込區長たりし頃より、米國に渡航して、園藝に從事したいとの希望があつた、のであるが諸種の事情は之れを許さず、氏をして悶々の間に徒過せしめた、利かぬ氣の婦人清子は、良人の心を思ひ遣つて單身目的地に渡航し、先づ第一着手として實地を視察すべきの意を述べたので、氏は夫人の氣質を知るものから、直ちに之れに贊同し、六人の子女を殘して出發せしめたのは、昨年五月中であつた、

◎北米を跋渉す　夫人は海上無事英領バンクーバーに着港し、夫からビクトリヤを經英米の境界を越え、シヤトルに行き、次にポートランドから桑港に入つたが、北米の西海岸にある有數の都市は、凡て到らざるなく跋渉し、其間在留日本人伴、服部等の成功者を訪ふて意見を叩き、或は寒村僻地に分け入つて地味風俗を視察し、自己の企圖すべき事業に關するものは、飽迄研し究たのであるが、其根氣の強い事は、到底男子も及ばざる程であつた、

◎裁縫店に雇はる　米國の地の氣温順にして、地味肥饒なるは、夫人の心に大なる滿足を得せしめたが、夫人は之に飽かず、更に風俗習慣及び言語を研究せんとし、專ら人込みのする所に立ち入つて、多くの人に接したが、もと見物がてらの旅行でないから、大金を用意した譯でなく、遂には旅費に困却する程となつたので、一は好める道とて、桑港の一裁縫店に雇はれ一個のルーズメーカーとなつた、然に上等の服となると、ミシンに掛けるを好まず、唯手先きでするのを尙ぶと云ふので、夫れには日本人はお手の物であるから、非常に好遇を受け、夫人は此處に日に三弗を得る事となつた、

◎火災の報に歸朝す　夫人は茲に安心の地を得たが、ダンスに要する華美な服或は職業婦の扮裝を作るがために勞する、ルーズメーカーたるを快しとせず、更に地方に去りて安逸に素志の貫徹に務め、人とし桑港を距八九十哩なるワツソンビルに移住し、此にも年間を消光せんとしたが、暫らくして、東京なる家宅の火災に罹つた旨の悲報を得て、一先づ歸朝する事となり、彼地を去りて、最愛なる子女を溫き手を取交はしたは、去月中の事であつた、

◎八九月頃出發せん　然るに其視察の結果良好であつたので、良人官吾氏は愈々夫人と共に家族を引纏めて移住するに決し此程旅券の下附を得、來る八九月の頃までには出發すべしとの事であるが、移住先は尙は未定だがロースアンゼレスペサデナ及びリバーサイドの三個所の一を擇ぶ積で良人は專ら園藝に從事すべきも夫人は單獨に美術的道具商を開業する積りなりと、

は友人齋藤松洲氏の宅に隣れり、されど此時今村氏の邸の北隣なるを知りしぞ迂遠なる、

刺を通ずれば、取次の下女らしき人は、若旦那樣にですかと、念を押し、頓て應接所に通されぬ、さて唯今入浴中なれば暫らくとの事也、

暫らくと云ふ程もあらず、氏は額にまだ汗の玉なすまゝ出來られ、卓を隔てゝ相對する時、昨は法服嚴しく見し裁判長、今は兵子帶一筋にて應接せらる事の、いさゝか異樣の感なき能はざれど、其温容と威嚴とは、造らねど懷かしめ狎れざらしむるものあり、

予は野口事件に就て婦人の爲に參考すべきもの、及び訟廷に於ける婦人觀を問ひしに、當時男三郎公判言渡の前なればとて、廿一日の再會を約せられて歸りしが、氏との初面談なり、此時に於ける談片及び、氏の婦人觀は次號に揭ぐることゝせん、

蝙蝠や柳にかゝる三日の月

卯の花の宿に笙吹く月夜哉

祠あり若葉の奥に灯の點る

瓊子内親王（三）

三島江月

五

さるほどに帝は、三月七日にぞ都を立ちて、遷幸の途に着かせ給ひける、豫て期し給へることながら、宮方の御歎き、かつは近侍の人々のくれまどへる態を御覽じては、おのづから御涙を催したまひけむ、さりながら、斯くなり果てしも、衰へたりし朝政を古へに復へし、萬民塗炭の苦みを救ひ給はんとの叡慮より出でたるなれば、神や護り給はんと思し召されつゝもなほ、

遂にかく沈み果つべき報いあらば
上なき身とはなど生れけむ

とぞ詠ませ給ひける、あゝ忝くも十善の君にまし〳〵ながら、なほ前世の果報を歎かせ給ふとは、いとも畏し、

かくて常ならぬ行幸なれば、御冠に世の常の御直衣、指貫、白綾の御衣一重ねを奉りて、網代の御車

に召させ給ふ、げに變れば變る世の中なりけり、去年の今日は、北山に群臣共を召させられ、花の宴をば開かせ給ひしものを、再び春は回り來て、花は去年の儘なれど、今年の今日は思はぬ旅路に出で立たせ給ふことの、哀れに定めなき世を、如何ばかり憂き事にぞ思召されけむ、

路次の御警固には千葉介貞胤、小山五郎左衞門、佐々木判官入道道譽等五百餘騎にて、皆弓箭を帶せる荒武者どもが、前後左右を打ち圍み奉りて、七條を西へ東洞院を下へと御車を進むれば、京中の貴賤男女小路に立ち塞がりて、赤子の慈母を慕ふが如く、衣の袖を絞らぬものぞなかりける、

彼の承久の昔、後鳥羽院の同じく隱岐の小島に遷幸ありし時の事ども思しやらるゝにも、再び都に還り給はんことの、いとゞ難くや思し召されけむ、御簾をば少し捲き上げて、彼方此方を眺め給ひつゝ、御所の梢の隱るゝまで見かへり給ふ御有樣を拜しては警固し奉る猛き心の武士も、鎧の袖を絞りけり、

死して、姫宮の御有樣を見たまふ方々の御歎きは申すも更なり、深き御心のほど偲び奉る人々の心の中や如何ならむ、姫宮は華の衣を脫ぎ棄てゝ、玉の宮居を後にして、やんごとなき金枝玉葉の御身をも賤しき女の童に裝ひて汗衫、袙に重ねの袴を召してぞ、三位局と一つ御車にて御供したまひける、

これよりさきは、人里遠き山坂越えて、荒浪騷ぐ船路をぞ渡る、げに千里の旅路なりけり、

六

かくて帝は遙に赴かせ給ふ、淀の渡りにて昔八幡の行幸ありし時、橋渡しの御使ひなりし佐々木佐渡判官高氏が、今は入道して名も道譽と改め、此度の御供にも加はりたれば、そのかみのことども思し出させ給ひて

　しるべする道こそあらずなりぬとも
　　淀のわたりはわすれじもせじ

ほどよく攝津國昆陽野の宿に着き給ひて、夕づき夜のほのかにをかしきを眺め給ひては

命あれば昆陽の軒端の月もみつ
　　また如何ならんゆくすゑの空

武庫川、神崎、難波、住吉など過ぎて、廣田の宮、葦原の宿、すゞめの松原、布引の瀧な、御覽せらるゝにも、古き行幸のことゞも偲ばせ給ひつゝ、生田の森をとはで過ぎさせ給ひけり、
兵庫の浦に着かせ給ひしとき、土佐の國へ流され給ふべき中務宮は、今昆陽野の宿に着き給ひしが、帝のまぢかう御座しますを聞かせ給ひて、

いとせめてうき人やりの道ながら
　　おなじとまりと聞くぞうれしき

この宮は、此處より土佐の國へ渡らせ給ふなりけり
和田の岬、苅藻川、須磨の浦など過ぎて播磨の國鹽屋、垂水、大くら谷を越えさせ給ふほどに、人丸の墓はあるなり、明石の浦に着き給へば、島かくれ行く舟の影、ほのかに見えてあはれなれば

水の泡の消えてうき世を渡る身の
　　うらやましきはあまりの釣り舟

野中の淸水、二見の浦、高砂の松など御覽せらるゝにもかゝる行幸になからましかば、如何ばかり御心やらせ給ふらんと思ふも、その甲斐なしや、
美作國なる院の庄に着かせ給ひし時、御心地少しなやましくて二三日やすらはせ給ふほどに、かりそめの御やどりなれば、間近う續きたる軒のつまより煙の立ち昇れば

よそにのみ思ひぞやりし思ひきや
　　民のかまどをかくて見むとは

花は櫻木人は武士、あはれ兒島高德が大御心を慰め奉らんと、御庭に盛りの櫻木の赤き心を書きつけしも、このあたりなるらし、
これよりさきは、嶮しき山坂うち續き、見渡す限り白雲の、かゝらぬ峯はなかりけり、人里遠き山路をば、上り下りつ行くほどに、憂きこと積る旅の空、思ひやられて哀れなり、
姫宮は、斯かる嶮はしき山路をも物ともせず、越えさせ給ひしなり、百敷の大宮中に生ひ立たせ給ひて、

未だ御園の芝生をも踏ませ給ひしことさへなき御身にも、孝養盡さんとのいと健氣なる御一念には、粗金の土をも岩をも、將、かゝる嶮しき山坂をも、つゆ厭はせ給はで越えさせ給ひしなり、

やがて葛折りなる四十曲の坂を下れば、坂井原宿なり、まづ伯耆の國に入らせ給ひて、遙か東南の方を眺め給へば、今はあるべき時ならぬに、雲間の山に雪見えて、天そゝる峰あり、警固の武士を召して、これを問ひ給へば、伯耆の大山にて大山寺の在る所なりと奏しければ、暫時御輿を駐めて何をか祈願あらせ給ひける、

それよりは日野川に沿うて下り、山市場なる藤井某の邸に入らせ給ふ、此家今は絶えたれど、當時は此地の豪族にして後には姫君の御出家せさせ給ひし安養寺、かつは御墓の在る所なり、

七

やがて山市場を立たせ給ひて、車尾の宿に着かせ給ふ、此處にては深田某の家に駐まり給ひしなりと云ひ傳へたり、此宿は隱岐へ船出し給はんとする安來の浦にも程近く、かつ遠く小島に渡らせ給ふことの、如何ばかり御心ほそく、御名殘惜しうも思し召されけむ、かつは長き旅路の御疲れもや在らせられけむ、數日此處に宿り給ふことゝはなりぬ、

斯かる程に、姫宮の御身の上には、たゞならぬ大事ぞ起りたりける、そは警固の武士ども六波羅よりの命に依りて、供奉の人々を檢べ奉るなりけり、これ程なく小島へ渡らせ給ふなれば、怪しき者のありや無しやと、御道連れの人々を檢ぶるにぞありける、

斯くと聞し召されし姫君の御驚きは申すも更なり、如何ばかり御心惱まし給ひけむ、必ずや護らせたまへと神かけて祈らせ給ひしなるべし、さりながら高貴の御身は面影に包み給ふ由もなく、遂には姫宮にて在らせらるゝを知るに至りぬ、されば、こを覺りし警固のものども、驚き騷ぐこと一方ならで、遂には宮を此の地にたゞ一人引き止め奉らむとはすなり

あゝ姫宮は孝養盡さん一念に、遠の山坂はる〳〵と、

此處まで御供し給ひしものを、如何に暴主の命とはいひながら、如何に逆徒の習ひとはいひながら、姫宮の御心をば露ほども推しまつらずして、たゞ一人このいとも侘しき鄙の地に引き止めまつらむとはすなる、げに下れる世とは云ひながら、かばかり情を知らぬ人もありつるものかな、

宮の御歎きは、そも如何ばかりならん、帝も如何ばかり御心なやまし給ひつらむ、さりながら斯くてあるべきにあらねば、帝は遂に此地をさへ出で立たせ給ふ日とはなりぬ、さりとも千々に心を砕き給ひし甲斐もなく、たゞ一人この鄙の地にとゞまり給ふ姫宮今は詮術もなく皇女を一人殘し沿きて、彼の島へと出で立たせ給ふ帝、見送り給ふ姫宮、今別れたまひなば、何時をはてともめぐり逢ふことさへ難き浮世のならひにしあれば、とも〳〵御淚はしさ御名殘惜しさのあまり、かたみに袖をしぼりつゝ、今日の別れを限りにと嘆かせ給ふなりけり、姫君はたゞ文目も別かずかきくれて、絶え入るばかり泣きくづをれ給ひぬ、帝も過ぎにし都の御別れ路にもいや増して、如何ばかり御名殘惜しうも思召されけん、あまたゝび此の宿をば振り返り見たまひつゝ、ためらひ給ふなりけり、

さるほどに帝は出雲の國安來の浦に着かひ給ひしがこれより舟路を渡らせ給ふなれば、やがて御座船へ召させられ、大船二十四艘、數をも知れぬ小舟ども、御船の前後左右を守護しまつりつゝ、此浦をば船出して中の海をよこぎり、美保の關に着かせ給ひて、いよゝ此處よりは絶海の一孤島指して漕ぎ出でさせ給ひけり、

かくて御船の、八重の汐路もやすらかに、三月廿六日といふに、隱岐の小島に着かせ給ひぬ、

平時の覺悟

橘　経子

嘗てある發狂者が突然校舍にあばれこんで、現在就

學中の妹をさがしに來た時、年若の教師や生徒は皆色を失つて大騷を爲たにも係らず、やはり年若であつたが、一人の教師は、聊か驚いた樣子もなく、靜に我が室に留まつて居つて、其發狂者の來るや、聲和かに請ふ入り給へ、請ふ座に就きて來意を述べられよ、と云つて、蒲團を出した時に、今まであばれ廻つて居た狂人は、俄に己に反つた樣に沈まつたといふ事は當時の事を目擊した人が皆話し合つて、其人の沈着なる樣子を稱贊しないものはなかつた、それから其狂人は回復して、其時の事やら、いろ〳〵病氣中の事を語つて頻りに恥かしがつて居つたが、誰も彼も恐がつて逃げる中に、彼の女史の沈着なるには驚かざるを得なかつたと、友人に語つたと云ふことである、眞に心持のよい話である、

犬を見てもわかる、大きな逞しい恐ろしい犬が幾匹も己れッといふやうな有樣で通行人を襲うて來ることがある、誠に氣味のわるいものであるが、逃げだしてはだめです、必ず面白がつて追ひかけて來る、さわげば騷ぐほど襲來して攻めかける、或はこちらで向ふを苦しめやうとすれば、向ふは猶々怒つて遂に傷害を與へるのである、こんな時に、若しジット歩行をとゞめて、其顏色を見て居るなら、初めの中は吠えて居つても、終には默つて靜に去つてしまふ、余は途中で時々こんな事にあつたが、いつも此寸法で彼等を退けてやる、

道をあるいてつまらぬ亂暴書生などに遭ふことがある、やさしい顏色であると思つた時には、豫め泰然たる態度で行くと決して戲言一つ吐かぬものである大人でも小人でもふは〳〵した樣子でゆくと必つまらぬ事をいひかけたりするものである、

人でも動物でも、何でも向ふが正しくないのを豫防するのは嚴格で迫らない態度に限る、不正の者はいくら強くても正しいものは恐いに相違ない、其正しいものが嚴格にして居たならば、必不正の者を制する權が十分ある、何の時でも、何事に遭つても同じことである、變事はいつどこの場所に起るか知れな

い、故に學校でも、家庭でも、多人數一所に居る時でも、常に此物に驚かないといふ覺悟は殊に女子に於てありたきものであると思ふ、

應接時間

山田素表

時間を以て起き、時間を以て寝ね、時間を以て働き、時間を以て休むと云ふ規律ある西洋の風習は誠に羨望に堪へざる次第なり、若し他の長所は取るべきものとせば、此等は最も先づ執て以て我が所有となすべきものなるべし、然るに實際に於て我が社會はまだ〳〵其域に達せざるの遠きは誠に殘念なる事どもならずや、

然し世の活劇場裡に投じて業務にたづさはる人は、其人に於ても家庭に於ても、割合に時間立ちて自から規律も備はれるを見る、左れど尚ほ一歩を進めて其實際の樣子を見る時は、己れ自ら時間を定め、規律を立て、之を利用すると云ふにあらずして、我却つて時間に追ひ立てられて使はるゝ事宛から奴僕の如き狀態なきにあらず、誠に斯かる家を訪問し見よ主人と謂はず、妻女と謂はず、其雇人に至るまで少しも落着きて用談を果すはなく、左顧右眄彼に就き此に走り、且語り且起ち、殆ど訪問者をして茫然として據る所なきに苦ましむる往々なりとす、其如何に齷齪たる狀の見え透きて見苦しきことぞ、畢竟するに自ら時間を立つるにあらずして却つて時間に驅使せらるゝの弊に出づるものなり、

時間の規律なきは固より宜しからず、然れども時間に追ひ使はるゝも亦宜しとせず、想ふに今の世間は極端と極端とにあるが如し、規律なきは其不規律の極端に居り、規律ありと見ゆるは亦其規律の極端に在りて遑々として毫も餘裕あるなし、夫れ時を徒過すると過食するとは、其靈形に及ぼす病弊は相同じきものなり、前者は怠慢より生ずる諸種の疾病を醸し、後者は過勞より生ずる病に陷るにあり、前者に

就ては吾人今言はず、唯後者に向つては一言の勸告なきを得ざるを覺ゆ、

日曜日制度を確定する事は實に社會改良の一大根本なりと雖も、之も今論及せざるべし、少くとも吾人は應接の時間を設くる事を以て今日の急務となさゞるを得ず、日常業務上の用談は多忙なる今日簡にして要なるを尙しとすべし、然れども人は決してパンの事のみにて生くるものにあらず、取引以外別に人情の世間なかるべからざるなり、假りに人はパンの事のみにて生くるものとするも、用件には十分にして言ひ盡し得るもあり、一時間を要するもあるが、故に時と塲合に依りて之に應ずるの餘地を備へ置かざるべからず、然るに何事も一山百文的に即談即了を以て專一とするに於ては人間の交際之ほど無味なるはなかるべし、況んや親戚友朋等の交際に至るまで此流義を以てせんには、人間何處にか樂を求め得べき、又如何にしてか世を保ち得べき、人間社會の中心は固と其交際に依りて保たるゝものなり、若し交際にして絶へん乎、社會は其中心點を失つて四離五裂終に全からざる猶天體の引力平衡を失はゞ破滅すると等しきなり、少くとも交際日に疎にして我れ我たり、人、人たるの狀態とならば、何を以てか家庭の和樂、社會の進歩、人類の幸福、世界の平和など期して待つを得べきぞ、一切唯滅亡あるのみ、故に多忙なる人は多忙なる丈け一日中に應接の時間を設けざるべからず、少くとも一週日中に適宜の日を定めて應接の時となすを要す、斯くの如く定め置かば訪ふものも無駄なる足勞をなすことなく、訪はるゝものも不時の暇潰しを爲すことなく、用談も双方十分に其意を盡し得て、後にて間違などの生ずる憂も少きに至り、且つ交際の情味も遺憾なく酌交し得て、辛き世にも花咲く世界あるを覺ゆべし、斯かる餘裕を保ちてこそ我は時間を守ると云ふべけれ、然らずんば規律あるが如く見えて其實は其奴隷たるなり、

斯くの如く一日若くは一週中に適當の應接時間を設

くる事は、固より其家の業務にも由り、主人たる人の都合にも由ることなりと雖も、亦一家の主婦たる人々の心得方にも大に與かることなりとす、通常如何なる多忙の家にありても、男子の頗る忙はしきに拘らず、婦人には割合に閑暇多きなり、若し其割合に多き閑暇を男子の勞に加へたらんには、それだけ一家に餘裕を生ずべき筈なり、吾人は固より婦人をして男子同様の勞力に服せしむるの意にはあらず、只婦人相應の事務を負ふて多少なりとも男子の勞を補ひ、斯くて主人をして客に接して十分用務を辨ずるの遑あらしめんこと是なり、多忙なりと言ふ人、願くは心せよ、

綠陰閑語

甲賀女史

一

平和快樂てふ色香ふかき花は、善てふ根の培養より開く者なり、心常に善を思ひ、德をつみなば、期せずして此美花は身に咲かん、心の樂まず平かならぬを、果敢なき世の娛樂もて醫さんとするこそ愚なれ眼膜花月の影を映し、耳口美饌珍味にふれたればとて、など心の病かたなく癒ゆべきかは、かく益なき事に時を移さんより、一善をなすを急ぐに若かず、

二

世上あまたの娛樂、何ぞ限りあらん、されど、根なきに咲く花、それ幾時をか保つべき、憖に之を摘みて、枯衰の悲哀を買はんより、自ら汗を流して、永久不枯の快を造れ、なべて快樂てふものは自ら世の表に備れるものにはあらじ、吾之を造るなり、造らざればなし、快樂なしとて、喞つ吾が心こそ愚なれ

三

思へば徒事をのみ悲しみ、空事をのみ憂へしが、自ら顧みれば、赧然として、轉己が暗愚なるをはづるのみ、そも内に省みて疚しからずんば、はた何をか恐れ、何をか憂へん、たとひ世人の吾をすつとも、捨てらるべき謂れなかりせば、天豈に吾をすてんや

さもあらばあれ、不浄汚敗の世、變幻不定の世、何物かよく依倚の價かある、迷霧、瘴烟をうちはらひて、よしなき空事の煩悶をせざれ、只自省もて正義の軌道をふみまよはぬやうつとめよや、

四

毀譽褒貶とは、色みえてうつろひやすき人の心の、誠なき脣を排して出づる虚しき呼吸なり、ほめらるゝとて嬉しからず、誹らるゝとて悲しまんや、

五

ほめらるゝをば慕ひ、誹らるゝをば忌む、これなべての人情の常なり、されど、こは小人の心にて、至人豈にこの範圍にあらん、それほむるもの、そしるもの、またいづれか僞ならざる、昔『吾をほむるは我短を知らざるなり。』といひけん聖人ありしとかや、まこと己を知るものはげにかゝるべからん、さるをほめらるゝに鼻をうごめかし、破顔をたゝへて自惚を知らず、また誹にあひては、いたみ悲しむなどこそ、實に愚かしき業なれ、誠に徳至りなば、譽も、誹も、吾に於て何かあらん、

六

人に親切をつくし、或はものを與へ助くるなどせんに、報を願ふ心あるべからず、吾よく接せば、彼も吾によからん、吾與へば、愛慕吾に至らん抔、之をなすに先ちて報を思はゞ、是心の商人なり、たとひ美善の擧行なりとて、豈嘉するに足らんや、凡てものに報酬あるは、自然の則なり、願はずとも至りぬべし、只之をなすには、道によりて爲すべし、

七

山上にありては山容を知らず、漁場にありては魚臭を知らず、己を知り、その缺點を悟ると、それ己にかたし、これ只、人の直言と諫爭とによりて、知り且つ正すべし、悦びて之を容るゝを雅量といふ、豈に得まほしきことならずや、

八

人と交はるには、人をもつて己が美醜をうつす鏡となすべし、人吾に不正ならば、之を吾が形とも見て

直に己を正くせよ、人吾に無禮ならば、省みて自を恭しくせよ、誰か温顔に向ひて粗暴の擧動する者あらん、誰か敬言に對して、劍舌を振ふものあらん

烈婦阿澄の傳

介洞散史

東洋の貞女烈婦と云ふのは所謂消極的に高尙な操行を具備せる者で積極的に進んで事業に當つたのは至て少ない、即ち個人の美德としては稱讚するに餘りあるが、國事と關係直接せる者は絕無である中に、此の阿澄の如きは實に鐵中の錚々と謂ふべき者、巾幗社會の師表とする價値があると思ふ。

阿澄は羽前國村山郡大谷村平民畠彌次右衛門の娘で文政八年八月に生れ、年十九の時に同村天滿宮の社人畠外記に緣付た、夫婦の中睦まじく一男一女を擧げて嘉永五年迄は何事も無つたが、其配下の社人に櫻井某と云ふがあつて、日頃外記と不和で遂に社田の事に就て爭論を致し之を白河藩へ訴へ出でた、然るに藩廳では外記を非分と判決されたから幕府の寺社方へ訴出、此處でも又外記の敗訴になり、其のみならず藩の役人は櫻井の賄賂を納れて外記を獄に下し、拷問して罪に伏させ樣とした、其殘酷なることは一日の牢間は勤獄一年の痛苦に勝ると云ふ程なれば中々常人の堪ゆる所でない、質朴な村民は外記の無實寃罪を知つては居るが役人の威勢を恐れて何事をも申立ない、親戚朋友も落目になると寄附く者は一人もありません、恰も此歲は非常の凶作であるのに外記は久しく牢舍して居る事ゆゑ其費用も莫大かゝる、然るに烈婦阿澄は夫の留守を預かり農業を勉め、傍ら樣々の勞働に服して賃錢を獲、其を以て獄中の差入其他の費用に充てました、

櫻井方では元より非理の訴訟を起したのであるから正確の證據に乏しい、仍て外記が獄に入り家内の不人なるを機會として其手下を使つて外記の家に秘藏する古記錄御朱印等を奪ひ取らうと謀りました、阿

澄は兼て斯くあるべしと覺り常に懷劍を身に添へて
離さず、晝夜心を八方に配り曲者來らば眼に物見せ
て呉れんと待構へて居たから惡黨等も流石に恐れて
近付き得なかつた、斯て烈婦は證據書類の契合によ
つて夫の寃罪は程なく明白になる事と思ふて待つ甲
斐なく、賄賂に眼の眩める姦吏は益々其毒を逞うし、
外記は亂心したものであるといふ事にして安政二年
終に之を終身禁錮即ち其時の言葉で永牢と宣告され
ました、此を聞て烈婦は痛哭殆ど息も絶ん計りであ
つたが悵恨懊惱の餘り屹度心を決して時方に十月に
して天寒く風荒く積雪數尺に及べるを事ともせず、
陸羽を隔つる大山脈を越えて仙臺へ來り、仙臺侯へ
哀訴致しました、
此時の仙臺侯は頗る英明の御方であるから其訴の
趣を一々聞取られ至極不憫の者とは思はれたが、
扨其頃の制度として隣藩の所分に喙を容るゝ事は出
來ぬから其趣を諭しましたが烈婦中々承知しませ
んで數日の間慟哭して聲を止めない、之を觀る者感
嘆して其由を侯に申し上る侯にも感心あらせ給ひ、扨使
者を白河藩に遣はして外記覆審の事を請求されまし
た、外記の妻が既に仙臺藩の御扶持人となつた上は
同藩よりの請求を無下に謝絶する事は出來ないから
其々の手續を爲した上愈外記に罪のない事が明了し
て、三年の後外記は放免になり家に歸ることを許さ
れた、烈婦の喜は譬ふるにものなく仙臺侯に御禮を
申上げ歸國します、侯には其操行を嘉みし事蹟を國
中に播告して士民を奬勵し、猶烈婦の歸途萬一の變
あらんことを慮り、士卒十數人に命じて護送せし
めた。
扨此件に付き仙臺侯は白河侯と外記赦免の事、及び
爭地を返還する事、越訴の罪を問はぬ事を堅く約定
したに拘はらず、白河藩の姦吏は又外記を罪科に行
ふたから外記は已むことを得ず再び仙臺侯に訴へ出
た、仙臺侯には幕府へ直訴するがよいと云はれたに
より外記は直に江戸へ赴きました、之を聞て姦吏共

は大に驚き幕府の町奉行に依頼し外記を逮捕して之を藩邸の獄に下し、猶又先度の如く烈婦の越訴せんことを恐れて之を捕へて獄に下した、烈婦は此時産をして僅に七十日目であるが少しも驚く色なく、其幼兒を懷て薄暗い獄中に三年を過して意氣凛然更に挫屈しない併し精神は確乎たれど身體は産後引續きの入獄に堪ゆべくもなく遂に大病に罹り、獄中のことで藥餌の手當も不十分だから今は九死一生の危境に迫りました。

元來烈婦は極めて深謀遠慮の性質であるから先年仙臺から歸郷する際心に思ふ樣、白河藩は一旦仙臺侯に憚かつて自分共を放免しても彼の姦吏輩後年如何なる事を巧むやも測られない、其時に父子夫婦一網に打盡さるゝは策なきの甚しきものであると其長男秀直をば仙臺の親戚に託して置きました、果して再度の獄起ると同時に藩から捕卒を發して秀直を搜索しましたが秀直は仙臺に潛匿して居たから禍を免れた、扨母親が獄中大病に罹つた由を聞きて大に嘆き、是は幕府の法廷に訴へるより外はないと決心して姿を易へ潛行して江戸へ參り寺社奉行松平伊豆守へ直訴しました、秀直年十六伊豆守の糺問に答へて從來の關係と父母の寃罪を事細かに申陳へて審理を請ひましたにより伊豆守も之に動かされ白河藩に照會致し、仙臺侯よりも其筋へ申立たから此獄漸く審理を遂げられ、畠一家の寃罪始めて明白になつたのは全く烈婦の力であります、天は善人に幸福を降すと云ふものかさしも劇症であつた、烈婦の病氣も案外容易に平癒して一家安穩の昔にかへり、數年の間に三人の男子を産み樂しき月日を送りました。

扨畠一家に於ては外記を始め深く伊達家の恩義に感じ折もあらば之に報いんと心掛けて居る中に戊辰の戰となり、朝廷には仙臺侯を會津征討の先鋒となし九條澤醍醐の三卿が總督府を仙臺に開かれましたから外記は民兵を募り總督府へ出頭して先鋒の列に加らんことを請ひ、督府に於ては之を賞して寶刀一口を賜ひ、歸郷して命を待つ樣に命せられた、外記

は國に歸り村山郡の寒河江柴橋の二ケ所を守り居る酒井左衛門尉の兵と戰ひ酒井の戍兵は遂に同所を引上けた此時外記父子の從軍した留守中烈婦は家財を散して兵を募り又心利たる者を四方に派遣し敵情を探偵して之を外記の方へ報し、又時々鄕黨親族の子弟を聚めて大義名分順逆成敗の理を説き聽かせますに聽く者感奮せざるはありません、其後外記は遂に陣ケ峯に於て討死をしましたが敵軍は愈々外記一家を恨み白河藩吏に囑して外記の家族を索めました、烈婦は此事を聞き幼兒を懷中に抱き勝生山中に逃れ其より晝伏夜行の艱苦を凌ぎて仙臺へ參り其子秀直と一所になりました、此時奥羽越の二十餘藩は同盟して官軍に抗し、官軍數々戰利あらずして意氣頗る沮みたる有様であるから烈婦は密に秀直を九條家の臣藤井某方へ遣はし、志を官軍に通して時の至るを待つて居る、然るに同年十月に諸藩皆降伏し奥羽平定したにより烈婦は秀直と俱に鄕里に歸りましたが兵荒の餘邑里蕭條として家に四壁なき有様である併し烈婦は之に處して夷然驚かす秀直を助けて自家事を取り捌き動止常の如くであるから人皆其操守を稱贊した、明治十四年聖駕東北を御巡幸あらせ給へる折其節義を聞し召され忝なくも金若干を賜はり烈婦の名は益々世間に顯はれました。此阿澄の如きは東洋のローランド夫人と稱しても宜敷かと思ひます。

（完）

夏窓雜感

駿臺女史

◉過不及

凡そ物には、簡慢にして成就するあり、急遽にして成就するあり、其終局の度に至りては其性相同じきも、之を執行する際には各異なるあり、一は優沈にして熟考し、一は短癖にして即席の考を爲す、二者何れも理あるに似たれど、餘りに熟考するも、時期によりては過ぎたるも及ばざるの恐あり、さ

ればとて、强ちに一時の考を以て最上とするにはあらず、唯其人の心により是非を判斷するに任すべし、

◉人の是非を論ずる勿れ

梅雨頻に至り、心中憂鬱を覺え、器物皆濕氣を帶ぶる時に於ては、物事を爲すに懶き爲、二三朋友を招き集めて徒に人の是非を批判するを快となし、一も善事に誘化することなく、却りて他に美擧あるを聞けば、互に是人の爲に援助して、共に喜び樂まんとはせで、一善あれば、これを罪に陷し入れんことを謀り、剩さへ汚名耻辱を加へ、之を樂みて苦笑す、誰か斯の如き人をもて、朋友の信あるものとせんや、例へば、高所に至らんとして、中間に妨ぐる者あらんに、之を飛び越えんとの勇氣をいださず、徒に天然自然の難所あるを怨みつゝ、先に經過せしよりも一層危所あるを知らざるが如し、遂に深淵に臨まんとするに及んでは、扁舟を借らんとする力も消え失せて端なく溺れ、玆に始めて助力を求めんとするも、身體碎片となりて、水底の藻屑と化せん、淺間しき事ならずや、これ始は人の是非を談論するのみなりしも、他を羨む心の加はり來て、遂には驕慢自負となるなり、畢竟目前の善を喜こびて、内に省みる所なきによる、

◉空言僞辭は人をして終生岐路に入らしむ

人は沈默ならん事を要す、沈默なれば言寡し、言寡ければ行端正なり、行端正なれば心中清淨潔白なり、心中既に清淨潔白なるに至れば、之より流出する所も、空言僞辭に非ずして、常に他人の心中をして、共に無垢たらしむ、豈愉快の事に非ずや、然れども、世の人は斯くの如き行ひを重んぜず、往々僞を以て虚飾するを善とす、なげかはしからずや、

古昔、西洋に富める商人あり、其家益繁盛を極めたるに、榮枯盛衰は、世の習慣にて、斯る豪商も、忽ち一夕の夢と破られて、家頓に零落しけるが、其人怜悧にして、正直なりければ、數年勉勵の功を積みて、生計やうやく常に復りぬ、さる程に、某地に一の會社立ちければ、入社の旨申込しに、正直勉勵な

るによりて、直に許されたり然るに其娘、外出の歸路、數名の人々と共に乘じけるが、其人々の中に、我が父の恩人ありとは知らで、大言吐きて語りけるは、我が家に、莊園幾許あり、我が邸宅は近郊に稀なる建築なりと、件の恩人思ふやう、彼は零落せしと聞ける故、我等が貸與せし金子も催促せざりき、さるを今猶依然として動かずときく、彼は正直なりと思ひしに、豈圖らん斯の如き僞人なりしかと、やがて會社に告げしかば、會社は僞人なるを信じ、開會の期に至りて、此人を遠ざけたり、然れば其の父は何の爲めに斷られしかを訝りて、只管苦しき事に思ひ、之を會社に問ひ正さんとて都會に出でけるに、



憂の餘り發熱して遂に問ひ正す事も叶はざりき、さるを玆に一人の人ありて、此の不幸なる病者を見しに、我が先に不正なりと思ひし人なりしかば、太く驚きて慰め問ひけるに、先に彼の信實なりと思ひしは誠の僞にて、其小女の僞言なりしとわかりければ、いと憫然に思ひ、路費を與へてその家に歸らせ、かくて後其人は太く周旋の勞を取りしかど、期に後れて一生運命を開く能はず、さびしく此世を送りたりしとぞ、げに僞は百行の裏にして、只己の身に害を及すのみならず、此談話の如は、尊敬愛慕すべき父母をも不幸の深淵に陷らしめて悔ゆる心なきなり、俚語に曰く、口と巾着とは閉づるに如かずと、眞なる哉言や、

操行に就て聞けること

後藤新平氏の夫人

新に男爵を授けられた後藤新平氏の夫人和子といふは、故安場男爵の次女であるが、後藤家へ嫁家したのは、十六七歳の頃でもあつたらうか、當時安場男は愛知縣知事で地方官中有力なるものであつたが、後藤氏はと云ふと、漸く福島縣の醫學校を卒業したばかりで名古屋の病院へ十五六圓の月給で雇はれたばかりであつたソウである、和子夫人は中々非凡の女で、當時既に此人ならばなど信任を措いたそうである、全體安場男の母堂と云ふは賢夫人であつたので、此祖母に養育せられた和子夫人も、尋常婦人と異なる點が非常に多い、其人と共に臺灣へ行つても、平素質素にして、衣服は無論食物も奢らず、三飯共臺灣米を使用すると云ふ風なので、一般の風俗が頓に改まつたとの事である、又座敷などは裝飾のさつぱりしたのみでない、後藤氏の相馬事件で饅頭笠に腰縄で裁判所へ看守に護衛されて行く處の寫眞が飾られてある、ソシて子供達に人生には意外の災難もあるが、最も平素の心懸が肝腎で、富貴の時に奢らず、貧賤の時に悲まずと云ふ覺悟さへ持つて居れば、萬一に處して決して周章狼狽する事はない筈だ、おまへ方の父さんがよい鑑であると何時も云つてゐるさうである、

家庭上に於て聞ける事

女の寫眞師

本郷東竹町はお茶水橋に近き電車通りに臨める小綺んまりとした寫眞屋の近ごろ開店されたるあり、主人は磯前鈴子（二十七）とて、二三の少女を相手に營業大事と立働ける處、まさか當世廂髮のなれの果でもあるまいと、段々様子を探つて見れば仲々見上げた婦人、父は聞れて商工として有名なりし磯前雪窓にて、今より二十二年前實母に死別れ、父なる人の手一つにて鈴子は、今より五六年前養子を迎へしも、或ゐる事情の爲に離縁となりたるさへあるに、父雪窓氏は去三十五年中七十二歳にて此世を去りたる跡に殘れる鈴子は、奈何にかして婦人に適當なる職業を撰めんと、明け暮心を碎き、或人の紹介にて、神田なる寫眞神保舘主に就きて斯道を修むることゝなりしは、昨年の二月のことなり、斯くて鈴子は熱心に研究し、是を覺えて一日も早く開業がして見たいと云ふ一念より、辨當持參の通學二十日計りにて、漸く機械の使用法を覺え、首飾を投じて寫眞器を買ひ込み、所々の風景を撮影して、雜誌社等に送り、去る三月まで一日も休みなしに專攻したる末、今春に入りて漸く件の處に開業せしなり、本人の直談に據れば、素より技倆未だ熟せざれば、到底開業など思ひも寄らざれど、併し此まゝに專攻しなば、婦人とて決して一個の寫眞師となられぬことはあらざるべく、昨今は二十圓の屋賃を拂つて、可なりに營業し居れるが、兎に角に開業の際

に、五百圓乃至一千圓の資金を要することなれば、今時の若き婦人は、金に不自由せぬ人は別として、一寸考へればならぬことなり云々、若き婦人の新職業として、寫眞術の流行する當時、最も耳を傾くるに足るべし、

可憐の孝行息子

本郷區菊川町二丁目五十七番地武力鐵の製造業金子徳次郎(五十)は十餘年前より痔疾に罹り、此頃にては病勢益々募り、立ち居も自由ならず困り居しが、息子の菊次郎(十七)は、石鹸製造所の職工の身分にも拘らず、世にも稀なる孝行者にて、醫者よ藥よと日夕看護に勉め居りしが、先頃永樂病院に名醫ありと聞き、二度迄も病父を戸板に載せ、入院を乞ひしも、病室なきの故を以て斷られ、詮方なく病父を連れ歸り、自宅療養を盡しける程に、徳次郎は斯かる不治の病身を以て、親子共困苦を極むるより、イッソ死ぬるに若かずと思てか、遂に菊次郎の留守の間に縊死したり、菊次郎は歸宅後父の此の有様に打ち駭き、死骸に取り付きて泣き叫びしにぞ、近隣の人々打寄りて慰藉に勉め居れりとは、聞くも哀れの至也

◎水の効能

腎臟病の原因は水を飲むのが足らぬからで、婦人は殊にさうだと云ふ△朝夕水を茶碗に一杯づゝ飲むと、日中心が爽かで、さうして大便の通じが好い△然し、食事の前後には成るべく飲まぬ方がよろしい、それは消化機能を妨げるからだ△それで食前三十分ほど前に、水道の水か井戸水の良いのを一盃づゝ行ると、顔の色好くなるし、第一身體を丈夫にする△下手な茶よりは水の方を飲むやうにせよ、と某醫士の談、

養鷄の流行

近時上流及中流の家庭に流行せる養鷄は、漸次大仕懸となり、今や殆んど一の事業の如くなれり、大隈伯夫人は、平常料理用に供する鷄卵も、商買より購入せるものは、新鮮の品ならざる故、衛生上より見ても、家庭の養鷄は最も必要なるべく、殊に平生の運動の不足せる本邦婦人には、娯樂を兼れ、健康上の利益之に伴へば、何よりの仕事なりとて、邸内の一隅に大養鷄場を設け、場内は鷄舍、孵卵室、育雛室、調餌所、物置等に區分し、熱心に親ら之を監理し、又岩崎男は品川の本邸内に廣大なる鷄舍を建て、英米兩國より新血統の種鷄を數十種購入し専ら其飼育に從事し居られ、此他戰後軍人殊に將校遺族の家庭にて、此の事業を始めたる者多し、是れ養鷄は遣り方次第にて何程にても容易になし得べく、飯櫃の洗流し、米の磨汁、魚類骨臟腑、野菜の屑、穀物のすたれ貝殻の破片等掃溜へ捨つるより、仕方無き廢物を利用して餌とし、且つ兒童の通學の餘暇に樂み半分に、其の世話をせしむるを得べく、毎日の産卵は、小兒の所得として、其代金を貯蓄し、學資や小使となさば、一面兒童の自立心を養成し、一家の經濟上より見るも、頗ぶる好都合にて、尚ほ少しく多數に飼育する時は、立派に生計の助ともなり、漸時經驗を積まば終には之を職業とするを得るより、近在なる澁谷、大久保、千駄ヶ谷、高田などに移轉して、斯業に從事する者次第に増加し頗る好望なり

新島の婦人

吉見秀次

私は豆州南諸島の風俗調査の爲め、伊豆の新島へ渡航しましたから、其内婦人の風俗に關する、項目だけ記す事とします、

新島は富士帶火山脈が、海中に降起して生じたる所謂豆南七島中第三位の島嶼で、東京より、西南に五十一里、下田港より南方に約十三里を距りて新島の南東三海里に利島、南西五海里には神津島、更に十三海里には三宅島があります、其から右の傍に地内島と云ふ無人島がありて、其南には式根島があり、左の傍には鵜度根と云ふ是にも無人島がありますで、新島の周圍は約七里で、南北に三里東西には三十町山は最も高く、島の南北兩端に各一座の峯が聳え、殊に北部のあります、海面を拔く事千五百尺に達するのが、地理及び地質に關する事は總て略する事としますが、新島土着の人は高天原種族とは異る所の事代主神種族の遠き子孫が奈良朝の終期より内地人の移住せしものと結んだ混血種である事は豫め御承知を願ひます、直に風俗の話に移りますが、孃樣方は古い御伽話に南海の傍に女護の島と云ふ物があるとの事を御聞になつたでせう、固より取るに足らぬ俗説ではありますが、新島の海岸の夕景が一寸女護の島の話に似て居ります、此島の習慣として漁業以外の勞働は、農業から家内の仕事迄細大共婦人の手に依りてなさるゝもの故女たちは夕暮前に一日の勞働を終ると直徑二寸餘もある大きな團飯を五六個と、もろ鯵の干物蠑螺の油揚、其他二三種の添物と、數合の水とを携へて海岸へ出掛て行く、其から間も無く島中は娘も老婆も小兒も皆磯へ出揃ふと、例の辨當を開いて、寄せては返す白波に對し、凉風を身に浴して團飯を食べ乍ら島歌を歌う者あれば、小兒に添乳しながら、隣の娘と明日の畑行を約束するものがある、中にはお辨當を仕舞つて、さも心地宜さうに、砂上に假睡するもあり、實に此磯邊の夕飯

は島內唯一の娯樂で、是に依りて一日の勞苦を慰めるのであります、然し何故か此時ばかりは一人の男子も交りませぬ故、若しも此樣な有樣を昔し海上の船客が認めて能く事情も調べずに、偖は此島は女ばかり住んで居るかと怪んで、あと善い加減に尾に鰭を付けて、女護の島など丶云ふ事を傳へ始めたのではあるまいかと思ひます、

婦人の衣服は、稍や內地制とは似て居ますが、袖は至つてせまく恰どそき袖位で、裾は膝迄しかありませぬのみならず腰から上は麻で腰の下は、前は麻ですが後は黑木綿が付いて居ります、此衣服上下別々のものを寄せ合せて作るのは夏物のみでなく、冬でも矢張そうですが、然し冬と云つた所で、內地の冬の樣に寒くはありませぬから、脛を出して居つても更に不都合は無いのです、色合は縞ものや染色等別に派手々々しいものは喜ばず、槪して黑色のものを用ひますが、唯葬禮の時には多少身分あるもの丶妻や娘は刺繡模樣の衣服を着るそうですが、私は終に見ませんでした、帶は幅一寸程の眞田紐の打紐を三重廻して、前で締め其上から、めくら縞の前掛をしめます、頭髮の長き事は後で話しますが、新島異風俗の一とも云ふべき、女の鉢卷は七八歲の小兒で髮のや丶結び得る程のものから、十三四歲の小女は內地の手拭程の中形眞岡木綿を四つに疊んで前で結び此以上十七歲位迄は少し横の方、十八九歲からは皆後で結ぶので、島の女は小兒と老婆とを問はず朝起るから、夜寢る迄は此鉢卷をしめ……、家の中でも客に接する時でも取る事は無いので、神事葬祭等の特別の儀式の節は赤き布と替へ、矢張りれい〳〵と結んで居ます、

惡戯の禁制

黃雛女史

道路をゆきてしば〳〵見るは、

◎所謂腕白ざかりの少年が、猫兒の首を繩にてしば

り、あるは大路を引ずりて樂しみ、あるはどぶ泥の中に投じて、其煩悶のさまを快とし、之を殘殺しては、手を拍ちて笑ひのゝしるものなり、

◎蟬どもあまた捕りて、糸にて首のあたりしむれば、苦しう羽ばたきして、やがて頭落ち、羽根さへ、手足さへ、もろく引きぬかれて、地に捨てられ、屍は下駄草履の下にふみにじられて、さらぬだに秋をも知らぬ果敢なきいのちを、まだ夏の盛にだにもあはで、あへなく其生を奪はるゝもあり、

◎まだ己れより年少き小兒を、故もなきに打擲して、其泣きさけぶを見てたのしみ、あるは互の遊戯の群より省き、瓦石を投じ、水うちかけ、其走りゆくを何とはなしに追ひ苦しむるもあり、

◎他人の庭園に侵し入り、人目を忍びて、美はしき果などを盗み去るもの、心して培ひ、養ひたる花の、漸くさきそろひたるを、いたはしげもなく引きちぎり、手折りなどして、やがて眺め飽きぬれば、惜しげもなく路上にまきちらして捨て去るなり、

◎動植物を害ひて樂しむものは、性必ず無情なれば、爭ひては友を傷つけ、怒りては衣服器物をそこなひ、戸障子門塀の如きをすら破り、すべて故に害を人に及ぼし、物に加へて欣ぶものは、殘忍冷酷なる罪惡、已に此の中に孕まれたり、

彼等が罪なき笑顏、かゝやけるまなざし、いたいけなる手を以て、いつしか此の惡戯はくりかへされ、清淨無垢なる心に、おそろしき罪の分子は植ゑつけらる、見よ、たゞ子供の惡戯とゆるせるほどもなく、習性となりて、無邪氣なりし惡戯は亂暴となり、或は他人の物品を欺きかすめ、或は殘忍殺害の人となり、よからぬ枝葉ます／＼榮えて、遂に其身を破り、名を辱しむるものあるを思はゞ、幼兒が只一時のたはぶれたりとも、其惡性を含むものは、嚴しく之を戒めて、其將來の禍根を斷つべきなり、何事も天眞を枉げざらんやう放任すべき幼兒の教育、此の一つは決して輕々しく思ふべからず、

凡て智惠なきものを苦しめ、力なきもの、弱きもの

をしへたぐるは、いかばかりあはれなるぞ、苦しめられ、しへたげられても、其理を解くを得ざるものを弄ぶは、悪むべき罪悪の一なり、牛馬のやみて倒るゝを鞭うち、或は過量の荷を負はせ、過度の道をゆかしむるが如きは、衆目の見て憐むところなれば、こを非難する聲は漸く揚り、動物虐待禁止法は、社會の公徳として行はるゝに至れり、されど其社會を成立せる人民は、個人的に皆この禁を守りつゝあるか、皆心中よりこを重んじつゝあるか、父母は其子を戒むるにこの一つを忽にするもの、未だ決して少からざるべし、

動物虐待の罪は、必しも牛馬の上に於てのみいふに非ず、あしたに生れ、夕に死するものゝ類も皆ひとしく動物なり、之を憐み、之を愛護するは、靈長たるものゝ責任たるを思ひて必幼者を戒めざるべからず、志此にあらば、教ふるもの力ありて、從ふもの必服すべし、植物には生命なけれど、これ亦ひとしく神の愛造として、時をたがへず、地上の景を装飾しつゝあるを、主なければとてこを奪ふすら誤なるを、況して他人の境界に侵し入りて、花枝果木を盗みとるは、刑に觸れざる囚人ともいふべし、いかで深く戒め咎めざるべき、或は怒を外物に移し、すべて罪なき者を害ひ破るは、皆幼時の習慣性となりて、改め難きものなれば、吾子の人に勝らんことを願ふものは、深くこの問題を重んじて、將來の禍根を先づ此に拒がざるべからず、

女子傭員の近況

婦人の職業問題漸く世の中に騒がるゝやうになりて就業すべき範圍も一年增しに廣まり行く有様なるに就き一部銀行會社官衙に就て其傭員及事務員に關る現況を聞くが儘に記せば▲日本銀行●●●は去三十年に古紙幣取調べの爲に、女子を採用したるより、此方現今は廿歲前後の者百人近くも使用しあり勤務時間は毎日に七時間、日給十七錢乃至三十五錢なれど年

に二回の決算期には、必ず夫れ夫れの賞與あり、外に盆と暮には給三ヶ月分を給與せらるゝ定めなれば此銀行のみは收入他に比べて割合に多しとか▲勸業銀行 は疾病等特別の塲合を除き豫め三箇年間勤續すべき誓約を成し得る者を限りて、採用することゝなり居り、仕事は債券發行の改別、抽籤珠、當籤番號調査等にて、毎日七時間勤務とし、居殘り日曜出勤は別に手當あり日給二十錢乃至二十五錢、盆暮二期に多少の賞與あり▲共濟保險會社 の執務はカードに保險金額等を齎入るゝにて時間は一日七時間、日給廿錢乃至五十錢なれど、勉强次第に依りては、慰勞金を支給し總て未婚者に限らる▲鐵道作業局の運輸部調査掛にて使用するものにて、重に乘車劵を調査するなり現在員七十三名、年長卅一歳より年少十六歳迄にて日給三十六錢乃至十九錢時間は一日八時間、過般新に簿記部を設けたり▲新橋驛 は出札掛員にて現今十五名、年齡廿四歳乃至十七歳日給三十錢乃至三十七錢昇給限度を六十五錢と定め、歳末には月給一二ヶ月分を、其成績によりて給せらるゝことゝなり居れり▲電話交換局 の交換手は日給十八錢以上五十錢迄にて晝勤、夜勤と交替し、執務は八時間にて、休暇は定まらず、なほ本年度には電話架設數多き由なれば、隨て女子交換手の需用も增すこととならんと▲通信局 の事務は發着局報告書對照料金調査等至つて細かき仕事のみにて、此所の他と異る所は名稱を事務員と呼びて、一般官吏同様の待遇を受くることにて、年齡十四歳以上二十三歳迄、時間は一日八時間日給普通五十錢内外、月額二十圓迄は昇給し得らるべし▲爲替貯金管理局 目下の就職者は百五六十名にて、多分は二十歳前後の處女なり、八時間勤務日給十五錢以上三十五錢に止まり、執業は成る可く手輕なる計算事務なるも、至りて忙しきことは非常なり、總て總體に此等女子傭員及事務員の其學力は、如何と云ふに、先づ高等小學校卒業以上高等女學校、或は尋常師範學校三年級履修者に限ぎられ居れば、就中小學教員免狀を持る者有

官幣大社　橿原神宮の由來

橿原神宮の御宮趾は、中世以還煙滅して、其何地たるかを知るを得ざりしが、明治維新以來大和國高取の人、西内成郷氏多年其探究調査に盡力し、其結果として、正確に其地を知るを得たるより、之を主務大臣に建言し、種々具陳する所ありたる末、明治廿二年三月時の宮内次官吉井友實氏は、圖書助丸山作樂氏を隨へ、橿原宮址實地檢定の爲出張せられ、尚其筋に於て充分調査の末、侍從子爵西四辻公業氏を實地確定の臨檢として、畝火橿原へ差遣せられ、其筋に於ても充分詮議のうへ神武天皇橿原御宮址は遂に建言の通りに確定し、去る廿二年六月十日宮内省より成郷氏へ、宮内大臣子爵土方久元の名によつて左の御達文あり、

　平素皇室を尊戴し、橿原宮址保存及其他の義に付盡力不尠　御紋付三つ組銀盃下賜る

御宮址字實賀階段橋に相當する地所は、成郷氏所有の分を獻納し、其他大地一萬六千餘坪は御料地として、宮内省へ御買上げとなり、併せて地均し實測坪數一萬八千八百八十一坪となる、此處に神宮創建の事に運び、御本殿は京都の御所賢所（又内侍所とも云ふ）拜殿は、同上神嘉殿を遷し賜はり橿原神宮初めて成立し、掌典子爵石山基正氏を勅使として、明治廿三年四月二日畝火橿原に差遣され　神武天皇　皇后媛蹈鞴五十鈴媛命の二柱大御神の御鎭座あらせらる、

而して御本宮の御例祭は紀元節、即ち毎年二月十一日と仰出され、尚四月二日は本宮御鎭座の御當日、及翌三日は神武天皇崩御の日、同四日は翌日祭なるが故に、毎年四月二日より四日迄、嚴肅なる祭典を舉行せらるゝことゝなれり、

因に記す、橿原神宮鎭座に際し、神靈御鳳輦の渡御勅使參向の車道なきを以て、成郷氏蹶起して新道を開きたるが衆を役すること二千八百人三日三夜にして竣工したる由。（口繪參看）



女子の敎育

東京府視學　御園生　金太郎

近頃に至り、女子敎育の進步したる事は實に驚くべきもので、それに從つて、年々都下に遊學する女學生の增加することも夥しいものである、最初は、誰も、都下に女子の遊學生の麕集するのは、地方に女學校の乏しいからである、地方に女學校を設けたならば、女學生の集中は漸次に減少するであらう、とかう考へた、然るに、その後各地方に陸續として高等女學校も立てられ、技藝學校も設けられたが、遊學生は依然として減少しない、減少しないばかりか却つて益々增加する、その原因は何處にあるかといふに、一方には、敎育を受けたるものは、敎育を受けるに從つて、ます〳〵敎育の必要を感ずるもので一段の敎育を終れば、之に飽き足らずして、また一段上の敎育を受けたい、一段上の敎育を終へたものは、なほこれにも飽き足らずして、なほ一段高い敎育を受けたい、といふ慾望が增すので、地方に敎育が盛んになればなるほど、地方の敎育の不完全を感じて、その上をその上をと續々都會に出るものが殖えるのと、また一方には、敎育の氣運が一般に進むに從つて、今まで敎育を中止して居つたものも、世間に後れてはならぬ、後れ走せにも一奮發しやうといふものが出來る、此種類のものは希望が種々雜多である、然るに地方には此等雜多の希望のものに一々適當した學校がないところから、これも競うて都會に都會にと押し出して、各種各樣の私立學校に入學すると、かういふ事になるからである、

かくして、地方にも都會にも年々女學生の增加することは女子敎育の普及進步として、兎に角賀すべき

ことである、女學生の增加は、しかく賀すべき事であるが、月にむら雲花に風とでもいはうか、これに伴ふて、女學生問題といふ事もまた大に論者の口に上るに至つた、併し新聞紙上などにも時々顯はれる女學生の墮落云々など云ふ忌々しい文字はいたく憂ふるに足らない、之は多くは女學生風のいかゞはしい女と女學校生徒との混同したところから起る間違であるらしい、學校生徒の外に風來の書生が數多あると同じことに、女學校生徒の外に女學生風の女は非常に多い、廂髮と蝦茶の袴この二つさへあれば女學生と斷定されるらしいが、廂髮と蝦茶の袴の女は種類が多い、その種類には一々擧げるさへ好ましからざるものがある、尤も此の種類の內には、故郷を出るときには立派な志を立てゝ出ながら、半途で横道へ迷ひこんだものもあるとか、されど今日のところ、某々學校生徒といふ肩書のあるのには世間で風評するやうな敗德者のないことは事實である、此の敗德問題は別としてなほ女學生問題として考ふべきことは一にして足らない、今日の女學生そのものに付ては、彼等の將來の運命と思ひ合せていかゞであらうか、と疑はるゝ缺點も決して少なくはないと思はれる、

しかし、こゝには一々其の缺點を擧げやうとするのでない、寧ろ其本元に遡つて、さやうな缺點を生せ



しむる原因を討究したいものである、世人は女學生の缺點とし云へば得たりかしこしと學校攻擊の鉾を磨くのであるが、これ一を知つて二を知らないものである、かく云へばとて、なにも學校を辯護する譯ではないが、元來教育といふものが學校ばかりで出來るものではない事は解り切つた事である、學校以外に家庭といふ有力なる協力者がなければ學校の効果は收められないものである、その外にも教育の結果を左右するものは數多あるが、まづ主として直接に子女の教育に與かるところのものは學校と家庭とである、學校教育と家庭教育、此の二つが表裏相待ち相助けて人の品性を陶冶することはいふまでもない事であるが、ことに女子の教育に至つては家庭教育の與かるところが、男子のそれに比べて一層重大である、今日の世間で口を揃へて攻擊するところの女學生の攻擊は、學校教育の上よりも寧ろ家庭教育の上に下すべきものが多いやうに思はれる、

元來女子の教育は、ひとり學校教育にのみ依賴すべきものではなく、家庭教育と學校教育と此の二つが合體してこそ始めて完全な教育を施すことが出來るのである、ことに女子の教育に至りては、家庭の教育か學校のそれよりも却つて必要なのである、然るに世間には往々此の重要なる家庭教育を忘れて、唯學校にさへ出して置けば、學術技藝家事の實習に日常の行儀萬端一から十まで完全無缺に出來上るものであるかのやうに心得て居る親達がある、これは古來女子教育の振はなかつた我が邦に俄に女子教育の氣運が高まつた爲に、女子教育の狀態が一朝急激の變動を見るに至つた結果でもあらうが、さりとは學校教育の價値を過大に買かぶつたものといはざるを得ない、もと我が邦の女子教育が男子の如く重んせられなかつたといふは、これは主として學問技藝の上に就いていふことであつて家庭の教育に於いては、從來と雖も決して女子を度外視して居らなかつたのである、それはかりか女子の家庭教育といふものは中々嚴重に行はれて居つたのである、然るに今日學

校教育の門が開けたからと云つて、まるで家庭教育をそつちのけにするといふは、そもく親達の不注意といはなければならぬ、

學校教育と家庭教育とは自から分業の行はるゝもので、學校では學校で施すべき教育あり、家庭では家庭の司るべき教育がある、學問技藝の如きは家庭の補助を要すべきは勿論であるが、主として其教授に任ずるは當然學校である、家事の實習日常の行儀作法の如き品行上の監督の如きは、學校の訓練によるところ少からざれども、主としてその實行監督の任に當るものは家庭である、世間で八ヶ間敷騷ぎ立てるところの女學生の攻撃なるものゝうちには、『行儀作法が甚だ不作法である』といふやうなことがある、さてその不作法といふのはどういふ事かと聞くと疊ざはりが荒いとか、戸の開閉が靜かに行かぬとか、來客にお茶の羞め方も知らぬとかいふやうな事がある、成程之は女子に必要な躾け方には相違ない併しながら此事は今日の學校の設備と家庭の設備の相違から生ずる生活上の狀態から必然に來るところのものも少くないといふことも考へなければならぬ、一例を擧ぐれば學校はテーブル式で、疊式のところはない、戸はガラス戸で、その開閉の仕方も紙障子とは違つて居る、もし學校も家庭と同じく坐蒲圍式であつたならば、戸障子の開閉も疊の上の歩き方も思ふがまゝに教へもし、練習することも出來ようが、如何せん二者の懸隔は之を一致せしむることを許さない而して此等は一度や二度口舌で諭したくらゐで直ちに出來上るものではない、日常起臥の間の反復幾回つひに知らずく習慣となつて始めて用をなすものである、もとより學校でかゝる事を輕侮すべく教育するものであれば、その罪實に學校にあるのであるが、もし然らずして、學校にてもそれ相應の注意をなすに拘らず、境遇の相違から已を得ずして起るものであれば、之は大に恕せなければならぬ事であらうと思ふ、來客に茶の羞め方も知らぬ云々の如きに至つては、之は全く家庭教育の不注意で

ある、元來躾け方といふものはその機會々々に投じて馴れしめなければならぬものであるが、學校ではその心得だけ、敎へる事は出來ようが、機會に投じて反復練習するといふ事はとても出來ない、其機會がないのである、まだ〳〵女學生攻擊の中には、御飯の炊き方も知らない、香の物の漬け方も心得て居らないなどといふやうな極端の論もあるようであるが、これはまだ甚しいといはねばならぬ、元來世人はかゝる事をまで學校敎育に望むのであらうか、數百人の生徒にこんなことの實習の出來るものでもなし、また決してその必要もない、たすき掛けて箒木を持て立ち廻るやうな設備が出來るものではない、よしまた出來たとしたところで決して望ましい事ではない、昨今は一種の流行で學校で合ひの子調理の眞似事など敎へて得々として居るところもあるようであるが、これとていはゞ一種の流行で、實際に適切なのは寧ろ少ないこんな事はその家庭家庭で實地の手傳をさせるが遙に適切で、しかも有効である、

要するに此等の事は家庭敎育の範圍に屬するもので親達が常に注意しなければならぬ事である、然るに今の女學生の親達には之に關して甚だ不注意な向も少なくない、此の缺點に氣付かずして食道樂を片手に七りんの下を煽ぎ立てる新夫人に驚くのはそもそも遲し、これ皆親達の怠慢である、家庭敎育の行き屆かざるよりして生ずる過といはねばならぬ、以上は假りに學校の敎育は其事情の許す限り完全に行はれて居るものとして、いかに學校で力を盡しても、家庭の敎育が之に伴はなければ、完全な女子は決して望み得べからざる所以を說明したに過ぎない、けれども今日の學校敎育は我々の希望通りに行はれて居るかといふに、決してさうばかりは行かない、中には却つて家庭の敎育を防害するやうな感化を與ふるものがないとも限らない、今日の學校に希望すべき點は固より少くない、併しながら學校に關する方面はさらに改めて之を說くことにし、こゝにはなほ親達の注意すべき箇條のことを擧げたいと思ふ、

その一つは今日の親達が學校の事情に暗いことである、それがために、子供達を監督する法を誤り、子供達はまた親達を視下して勝手な我儘を振舞うとする、親達は己れが無敎育であり無學であるところから、少し學科の出來でもよいと、それを無上のえらもの丶やうに思ひ、家庭の敎育も家事の實習も一切をその犧牲に供して顧みず、知らず〳〵の間に我儘氣隨の氣風を增長さすといふ事になり勝ちである、

また一つは、親達が學校を選ぶに甚だ無定見である事である、己れの家門財產身分などの事をも慮るに遑なく、唯一時のはやりを追うて、隣り近所で何處その學校にやるから、うちでもやらうくらゐな淺薄な考から學校に入れるものがある、之がまた大なる過ちである、學にはそれ〳〵其の目的あり程度あるもので、甲の家の子に適する學校が必ずしも乙の家の子に適するものではない、その撰擇を誤ると後日に至つて却つて當人の不爲になることがあるのである、又甚しいのに至ると、生徒が勝手に方々の學校を經廻つて、規則書くらゐを一見したばかりでこれならばいつて見ようかくらゐな考で、一時の腰掛に入學する、二三ケ月も經たぬうちにまた外の學校を搜して歩るくといふのさへあるさうである、か丶る有樣で品性の敎育など丶は思ひもよらぬ事である、これ等は特に父兄の注意を促さなければならぬ

それから、いま一つ最も親達の注意を促さなければならぬことは、其膝下を放して年若な娘達を遊學させる場合である、前にも述べた通り、敎育は學校と家庭との二つが合力して始めて成功すべきものなれば、彼の下宿屋住ゐなどに至つては既に敎育の一事を放棄して居るものである、故にもし子女をその膝下より放すといふ場合には、是非とも親達に代りて之と同樣、相成るべくは同樣以上の嚴重な監督をなし得る人の手許に托するといふことを考へねばならぬ、

終りに臨んで一言して置きたい事は、女學生が一身の上に受くるところの非難は、よしそれが學校敎育

の缺點から生ずるものであらうか、たゞしは家庭教育の缺點から生ずるものであらうか、等しく皆一身に受けなければならぬ非難である、もし世間から彼是と非難されるやうな缺點があるなら、それがいづれの方面から來るにもせよ、よく〳〵一身の上に省みて、學校の名と家庭の名とを汚さぬ覺悟をしなければならぬ事である、

◎女子小學生徒と樹栽官有地　從來小學校生徒樹栽地として、官有地拂下若くは貸渡の出願に對しては、男子に限り、官有地特別處分規則第一條第一項により處理し來りたるも、自今女生徒の場合と雖も該條により、一人三十坪以上五十坪以內の割合にて處分せらるゝことゝなりたり、

◎女醫學校の擴張　牛込河田町なる同校は、先般來三百人を收容し得る新講堂の建築に着手しつゝありたるが、昨今漸く竣工したるより、去る一日開校式を擧行したるが、同校は近年に至りて入學志望者頓に增加し、這回は百名を限り入學を許したりとのこと、中には一等軍醫の未亡人等もあれど、總て入學者の父兄は、農家最も多く商家醫家は之に亞ぐ由

◎女子體操講習會　東京市麴町區飯田町一丁目日本體育會體操學校女子部にては、在地方入學希望者の便宜を計り、入學願書の提出期を更に四月三十日とせしが、同部にて來る八月一日より、十日間女子體操遊戲の講習會を開く由にて、其科目は(一)體育の原理及び授業法(二)體操(三)遊戲(四)薙刀の四科なるが、講習會費は金二圓、申込は七月十五日限りなりと、

◎速成女子繪畫講習會　女子修學誘掖會の事業の一として、牛込砂土原町一の二東洋實業女學校內に設立され、日本畫西洋畫の二學科に分つて、每土曜日午後に授業し、滿一ヶ年を以て卒業せしむる筈にて本月より開始したり、因に云ふ、同日本畫主任教師は每號本誌に麗筆を揮はれたる公文菊仙氏なり、

女學生の自炊費

女學生は一體に一ヶ月幾何の費用を要するか、十圓以上二十圓と云ふ調査のみ、世人に知られ居るが、今實際に就て取調べたるに、左の如し、

女學生は現今女子大學に通學中のものにて、牛込新小川町なる素人屋の六疊一室を、月三圓にて借り受け自炊し居る今年二十歳の婦人なるが、其出納帳を見るに

四月分

一日、五十錢(點茶の月謝)▲三十錢(菓子これは親類への進物)
二日、六錢(鯛)▲五錢五厘(八百屋)▲三十四錢五厘(郵券)
三日、三錢五厘(お湯ながしつき)
四日、二十錢(料理實習)
五日、三錢五厘(お湯)▲二十六錢(來客へ交際費)▲十錢(靴のへつ)
六日、二錢(ほうれん草)
七日、二十五錢(アップル五個)▲五錢(時計直し代)▲十五錢(花瓶)▲十二錢(半紙と筆)▲四十錢(菓子)▲十錢(髮洗代)▲二十二錢五厘(足袋)
八日、二十四錢(來客へ蕎麥)
九日、十三錢(入浴四人分)▲十五錢(菓子)▲十一錢(肴)▲五錢五厘(香の物)▲煎餅十三錢▲六錢(昆布まき)▲三十六錢(蕎麥代)
十日、十錢(お茶)▲四錢(油揚)▲三十八錢(天麩羅)▲二十六錢(ムラサキ外雜誌二冊代)
十一日、十二錢(菓子)▲十錢(澤庵と昆布卷)▲三錢(ワゼリン)
十二日、四錢(みつば)▲二十五錢(蕎麥)▲十錢(おせんべ)
十三日、なし
十四日、十五錢(豚)▲十錢(菓子)▲七十八錢(下駄一足)▲七錢(お湯二人)
十五日、十二錢(肴)▲九錢(玉子四ツ)
十六日、十五錢(菓子進物)▲八錢(肴)
十七日、三錢五厘(お湯)▲六錢五厘(筍の子)
十八日、十錢(くわし)
十九日、七錢(とび魚)

以上十九日間の經濟は、少し贅澤に過ぎる樣なれど鄕里より新たに上京せし女學生の二友人が姑く滯在せし故、かくは嵩みしなりと、此外更に最必要なるは毎月の米代一圓、炭代六十五錢(一俵)石油一升十八錢と座敷料三圓とにて即ち十二圓四十九錢五厘となる可し十圓、十圓、七圓五十錢の三學期間に納む可き二十七圓五十錢の授業料は、其都度別に鄕里より送金を仰ぎ、毎月の學費を十五圓づゝと定めあれど、花の稽古や、音樂や、扨ては禮法の稽古などに參ることもあれば平均月に十七圓づゝは要りますとは、本人の語る所なり(報知)

女子美術學校

翡水女史

日本文明の恩人たる、佐藤博士一家によりて設立せられ、敎場以上の精神的敎育を施されつゝある、最も氣に入つた婦人校長の學校は、と大隈伯に云はしめたは、こゝに記す女子美術學校である、

佐藤博士夫人靜子氏は、多くの令孃を持たれて、この令孃方の敎育に就ては、甚だ注意の行屆いたものでやがて一般の令孃方をも、出來得る限り、自分の娘同樣面倒を見たいもの位な考は、夙に胸裡に畫かれたことであつたと思ふ、

同家に緣故深き磯野吉雄氏が、美術上の事より、藤田文藏氏を同家に紹介し、屢々出入するうち、女學校設立談起り、この話の纏つたのは、明治三十三年五月であつた、その年十月設立認可を受け、翌三十四年假校舍を建築し、同四月一日に開校式を擧げ、式後一週間いよ〳〵授業を開くことになつたのである、同十一月藤田文藏氏外數氏發企人を辭し、これまで學校の後見者であつた博士夫人は、設立者となり、同時に校主となつた、校長は當初より藤田氏が

珍らしき老女學生

日本橋區馬喰町二丁目三番地川中緋尾方より、毎日袴を着けて本郷元町なる高等女子技藝學校に通へる老婦人あり、最初の程は同校に何か學科を受持つ女教師と思ひしに、然にあらで、十七八歳の女學生と机を並べて、毎日稽古に餘念も無い處、さて何か仔細ぞあらんと、件の老女學生に面會して、其來歷を尋ぬれば、婦人は三重縣志摩國鳥羽町字錦町に住みて、裁縫の稽古所を開き居る前田蝶子(五十七)と云へる、親も子もなき孤獨の婦人にて、父は山本佐平と云ひ、舊藩主稻垣攝津守へ仕へて、共に志摩に移り、良緣ありて、前田某に嫁ぎしも二十三歳にて夫に死別れ、其後後家を立てゝ今日に到りしものにて、三十年前より裁縫の師となり、同地に其の稽古所を開き、今は六十名の生徒を預りて、志摩國唯一の裁縫女學校として、衆望を囑せらるゝに到りぬ、然れど悲しい哉、女子教育の流潮は、前田女史の頭腦を陳腐と化して相容れず、件の生徒中には、割烹造花さては、ミシンの使方など何かと敎へて給はれと、申込み來る者日に增し多きを加へたれど、微々たる稽古處にて、一々其が專門の教師を雇ひ入る可くもあらず、擧

任じられたのである、其後三十七年一月藤田文臓氏校長を辭せられ、此時より全然佐藤氏の學校と成つた、この當時學校は種々の批評を受けたのであつたが無事に通過したのみならず女子の美術學校また、技藝學校として重きを置かるゝやうになり、生徒は近年常に定員に滿ち、卒業生は、數以上の需要者あるに至つたのは、大に賀すべきことである、

同校は女子の徳性智識を涵養し、兼て女子に適當なる優美の藝術を教授し、内に在りては良妻賢母たり外に處しては、文明を裨補するの技術家及び教育家たるものを養成するにあつて、科目は、本科撰科の別があつて、日本畫科、西洋畫科、彫塑科、蒔繪科、刺繍科編物科、造花科、裁縫科の八分科になつて、それに修身、家事、國語、英語、數學、科學、歴史等の女子教育に及び、各科に必要なる學科を授くることになつて居る、

同校生徒の風彩に就ては、世間にては、ハイカラとか種々の評判すれど、同校にては、同じ價の衣服を着るならば、學ぶ所美術であるから、殊更に非美術的風彩をさせるに及ばぬとの事である、左ながら人をして異樣に感ぜしむる如きは無論禁制する由

ろ東京に出て、是れを專攻するに若かずと、同地の有志者の一人なる、郡長夫人北原虎子に諮りたるに、老体の身の敢て差支へなくば、留守中は私も尚事を世話する程に、充分研究して來らる可しとの親切なる申條なるにぞ、前田女史は斷然笈を負ひて、東京に出でたるは、去月一日の事なり、扨て又東京留學中も老の身の何か不意な事のありてはとの懸念より、門下生なる出口もと子（二十八）と云へる女學生が附添ひ居り、最初は日本橋より本郷に通學し居りしが、老婦の身の且つは時間の都合上、昨今は同校の寄宿生となりて、他の若き女生と寢食を共にし、熱心に勤勉し居るが、女史は打見たる處四十前後には見ゆれど、小さき髷を結ひて、眼鏡（老鏡）をかけ、鐵漿をくろ〲と塗けたる矍鑠たる婦人にて「どうも年の故か、ミシンを教はります時には汗が出まして、夫れに若い中には是れ位ゐのことは何んでもないと思ふた事も、仲々おッくうでござります、併し割烹、茶の湯、造花、作法、洋服裁縫、摘み細工、袋物の七科目だけは、何ういたしましても覺えて歸りませんでは」と語り居れるが、今時の女學生が聽いて以て模範とす可きことなり、

韓國貴族女學校の設立

日本海外教育會の設立たる韓國の京城學堂は今回同國皇室に獻納することゝなり、四月廿九日宮內府に引繼を終り、同時に韓帝より教育會に對し、金一萬圓を下附せられ、玆に純然たる日本の學習院の如き、貴族男子の學校と化し、一面に於ては更に貴族女學校の設立を見るに至りぬ、

◎校舍　皇族嚴柱益氏の元住邸に係り、建坪は八百間（我が百八十坪にて一坪六尺四方なり）右は嚴妃より校舍として下賜され、尚ほ設立費の中へ一千圓の御下賜金ありしと云ふ、

◎日韓婦人會　元京城に創設されし韓國婦人側にては、貴族女學校と同一視し、嚴妃を總裁、義親王妃を副總裁に仰ぎ、趙東閣母堂を會長に、李址鎔夫人を副會長として、極力同會及び貴族女學校の爲めに盡すべく定まりしは、同四月中の事なりき、

◎宮中の御宴　斯て宮中に於て五月二日午後二時より貴族女學校設立の協議を兼ねて、御宴を開かれ、日韓婦人會及び同校贊助者中日本婦人側にては淵澤能惠子外十一名、韓國側にては皇族大臣夫人十五名の出席あり、殊に皇族妃殿下方には、女學校の創立に就き、一方ならざる同情を寄せられ、一同歡を盡して別れたり、

◎學校嫁入　嚴妃には最も同校設立に盡力せられ、十六個の書棚を注文して寄贈せられたるに、某貴夫人は斯くとも知らず、何故に斯かるものを買入給ふやと尋ねたるに『予が愛娘を嫁入りさせん爲にて、又皇族の凡ての娘を此の學校に嫁入りさせん爲め、斯くは買入れしなり』と宣はせられしとか然ればにや昨今は三十名以上の人夫を雇入れて、頻りに校舍の完成を急ぎ居れり、而して校務を總掌しつゝあるは韓國皇族に信用厚き教育家

◎淵澤能惠子　と云ひ、今年五十六歲にして、貴族女學校の設立されしは、全く其力に依れりと云ふ、女史は岩手縣の生れにして、幼少より米國に渡り歸

朝して京都同志社女學校に入學し、卒業後山縣侯桂伯等の家庭教師を勤むること數年、其後馬關、福岡熊本等の各女學校に教鞭を執りつゝありしが、昨年の冬岡部子爵の依賴に應じて渡韓の途に上りしなり

◎皇室の信用　岡部子爵より依賴されたる事項は、盡く調査を終り、旋て日本に歸らんとする矢先赤痢に罹りて病床に呻吟する中、熟々韓國女子教育の爲に、一身を擲たんとの考へを起し、病氣全癒と同時に奮然女子教育の必要を說き、嚴妃を始め趙夫人李夫人、孫夫人等と最も親交を厚うし、竟に貴族女學校の創立を見るに至りたり、然れば皇室よりも女子教育に就て頗る信用を得、現皇帝の御養母にして皇太后の生家に當る前記の趙家には日頃出入し四月二十九日には趙夫人孫夫人等と共に例の輿にて皇室に參內し、洋食の晩餐を受け、種々女子教育に就きて御下問を受けしと云ふ、

◎女史の意見　先づ韓國婦人界の教育振りと云はゞ有夫の婦人は教師たる能はず、又實際女子教育に從事せんとならば、更に男子と相見ざる位にして、創めて彼地の婦人に接し、而して女子を教育する資格ある者と見らるゝ程故、學術上の教育を第二とし、主として精神上の開發的教育に力を盡さん考へにて、差當り江藤代議士の手を經、村井信子(三十)と云へる女教師を雇入れたり、

貧民窟　小學校

細民の兒童を收容教育するに、如何にせば完行し得るかの問題は、近時教育界の提議なるが、▲下谷萬年小學校の狀態に付其一般を窺はんに、▲同校は去る三十六年の設立以來、漸次盛大に趨き、現在の生徒總數五百八十二名に達し、內七十六名は夜學部生にして、第一回の卒業生は十名の少數なりしも、第三回の明年度は一百廿名に及び、明後年度は二百十三名に增加する豫算にて、此の勢もて進まば、直に校舍の擴張を圖らざる可からざるが如きも▲貧民學校の特色として、半途退學者非常に多く、殆んど入學

當時の四割に達し、三十八年度調査の原因に見れば奉公二四、被引取六、就勞働一三、子守一、留守其他一四、即ち貧困に因るもの五八其他轉居死亡等二四にして、孰れも生活難より不已得に出るものなり▲今試に現在就學兒童保護者の職業を擧ぐれば、人力車夫、屑拾、屑選、屑買、煙管らうかへ、土工夫配達夫、屑硝子賣、都節語、荷車挽、下駄齒入、灰買、刄物師、蝙蝠傘直し、鑄掛師、所謂職人（桶屋外十五種）所謂内職人（靴下解外十四種）千ケ寺詣所謂小商人（豆納賣外十種）所謂日雇人足（下水浚外三種）按摩等にして、其の所得は平均一日四十錢内外なれば、到底戸主一人の腕にては、家族の生活を繋ぐ能はず、爲めに半途退學者を出すこと斯く多き次第にて▲學校にては是れに對する特殊の施設をなし、就學上に於ては一切の修學用品は勿論手巾、上草履、下駄、雨傘等に至るまで給與若しくは貸與し▲戸籍と教育法規との對照上不都合なるものも、全く國籍を有せざる者も、教育法規の精神上差支なき者は收容し置きて、後ち相當の處理の途を講じ▲衛生上に於いては疾患ある者は發見次第臨時治療の途を採り、手、机及び手巾類も毎週一回藥液にて消毒し校内浴室ありて毎週一回是れを開き、理髮の如き職員指導の下に行はれ居り▲教授の上にも特殊の方法を用ゐつゝあるが▲貧兒普通の家具をすら知らず、例へば急須といふも是れを解するものは一名も無き有樣なれば、彼等に一通りの概念を與ふる迄は、中々骨の折れる事なりと、

◎帝國女學會設立　多年教育界に經驗を有する諸氏の主唱にて、今回麴町區富士見町四丁目三番地に、帝國高等女學會を設立し、通信教授の方法を以て、高等普通の學藝を教授するの目的にて、目下會員募集中の由

◎在學八年間無欠席の小學兒童　北海道根室國梅ケ枝町雜貨商西野仁左衛門の二男仁三郎（十六）といふは今を距る八年以前同所花咲尋常高等小學校に入學以

來、一日も欠席したることなく、學力優等品行方正の聞えありしが、愈々去月四日最優等を以て同校全科卒業をしたるが、在學八年間一日も欠席することなく、學事に勵精する此の仁三郎の如きは、全國を通じて殆んど稀なりと、實に小學兒童の鑑といふべし、

◎清國今後の女子教育　西太后が女子教育に留意されつゝあるが、目下歐米を巡視中なる出洋大臣は各國の政體法制を視察する外、女子教育に就ても十分調査するの命を受け居る由にて、同大臣歸國の後は、大に女子教育の奬勵をなすべしと、

◎清國派遣女教師養成所　東洋婦人會にては、其事業の一端として、清國派遣の女教師を養成すべく夫々準備中なりしが、昨今略其設備も調へ、入學試驗も結了するに至りたり、第一回の入學及第者は十名、生徒の寄宿は女子學院の寄宿舍を、音樂は女子音樂院を、體操場は同會會長鍋島侯爵邸內を何れも借用することに決し、其他の授業は同會假事務所に於て去廿一日より開始したり、學科は支那語、漢文に重きを置き、其外普通學一般を敎授し、修業年限は一ヶ年半なりと云ふ、

◎金澤市立女子職業學校　新設の同校長は安原時太郎氏任命せられ、その他職員それ〳〵任命あり、開校本日

本社に送金の方に（郵便振替貯金に加入）

女鑑代金及び本社へ送金せらるゝ方は、本社は今回郵便振替貯金に加入したれば、同拂込用紙を本誌に挿入したるにより、以後同用箋を使用ありたし、さすれば手數料を要せず、且つ途中盜まるゝ等の憂なかるべし、前述の如く誠に便利と安全なる送金の道開けたること故、同用箋の裏面記載の方法によつて送金あらんことを乞ふ、猶不審の事もあらば、最寄郵便局に御照會あらば直に判明すべし

詞藻



文學士 男爵 千秋季隆君選

郭公

天

花ならば袖にうつしてつとにせん
はつ音ぞをしき山ほとゝぎす
陸中 安達百合子

地

夜わけなばいざつげやらん吾友に
初ほとゝぎすふけてきゝつと
信濃 遠山敏子

人

ほとゝぎすきゝつとかたる人もなし
なくねおまねき此頃のそら
東京 小川政子

秀逸

○ 東京 佐野富子

ふすほともなきみしかよにね覺して
おもはすも聞山ほとゝぎす

○ 東京 吉岡龜子

中そらに月はのこりてひと聲の
ゆふへやいづこやまほとゝぎす

○ 秋田 細矢はる子

花にさへとふひともなきわか宿を
おとつれてなくほとゝぎす哉

○ 東京 青木たま子

花もちり青葉になりぬひところは
をしまてなのれ山ほとゝぎす

○ 埼玉 横田政子

石ふみのたてる野中のわかれ道
みきとひたりになくほとゝぎす

○ 神戸 藤木梅子

香焚きて有徳の僧の寂咏を
賞つる御てらにほとゝぎす啼く

よき歌にてよく似たるもの　二つ

右　　東京　河合象子
ほとゝぎすはろけき聲は弓はりの月のいりにしあなたなるらむ

左　　東京　佐野ふき子
はるかにも聲きこゆなりほとゝぎす弓はり月のいりしあたりに

右　　奈良　天野照子
よもすからまちにしかひはあり明の月に一聲なくほとゝぎす

左　　千葉　木村きよ子
れもやらてまちつる甲斐はありあけの月に一こゑなのりてぞ行

○　　愛知　淺井九三子
忍ひれもわれにはもらせほとゝぎすまつふひくの心しりなは

○　　東京　松本まつ子
しら雲の上のゝなかのなつこたちしけくもなくか山ほとゝぎす

○　　薩摩　松原みれ子
さらてたにむかし覺ゆるたち花の香るゆふべになくほとゝぎす

○　　對馬　青木まさを子
思はすもこよひきゝつるほとゝぎす待えしよりも嬉しかりけり

○　　大和　栗山たか子
なちかへりなく音をよそにもらさしとれぬにかされしやま郭公

○　　新潟　岩本芳子
うきくもの月にかゝるをうらみてか忍ひ音になく山ほとゝぎす

○　　大和　栗山倹子
ほとゝぎす雲の何方にやとるらんこゑかすかにもきこえける哉

○　　東京　福田よし子
杜鵑この山のはの月影をよそなる里になどて鳴らん

○　　常陸　岡田萬子
たちはなの花散る里の夕くれにしのひ音漏らすほとゝきす哉

○　　東京　土田八重子
ほとゝきすおちゆく月を慕ひてかみ空にたかくなのるひとこゑ

○　　大分　薩城鶴代子
月清くたちはなかをる木の間よりほのかに名のる山ほとゝぎす

○　　和泉　稲原菫子
村雨のをやみなくふるたそかれにほのかに名のるほとゝきす哉

○　　常陸　兒玉こう子
忙しき夜桑つみより歸るさにはからす聞きぬ山ほとゝぎす

○　　東京　萩原文子
青葉もる月をかすめてほとゝぎすなのりもあへず雨過さりけむ

○　　上州　飯沼かつの子
文見むと文机によるをりしもあれ庭のこすゑになくほとゝぎす

○　　東京　毛田みや子
ほとゝきすこゑは間ちかく聞ゆれど姿はくものよそにこそあれ

○　　松山　野菊女史
飯盛のふもとの塚はあれはてゝ血そめのくもにほとゝきす鳴く

○　　山口　村上操子
ほとゝきすまたて聞く夜の一聲は殊にうれしき物にぞありける

○　　上毛　大澤雛子
音もなくふるさみたれに小夜更けて心ほそくもなくほとゝきす

○　　下野　井上倫子
杜鵑くもよりいてゝやまのはのまつにかゝれるつきになくなり

○　　陸前　前田河みさを子
山の端にかゝれる月のなこりそと聲をのこして少くほとゝきす

○　　東京　山田菊子
ほとゝきすたゝ一聲をあとにしていつこの里にいそくなるらん

○　　東京　林環子
ふるさとを忍か岡のほとゝますひとこゑたかくつきになくなり

○　　東京　林艶子
なくこゑは遠くそなりぬほとゝきすいまやなくらむ故郷のそら

○　東京　小林芳子
月に雨におもひまつ夜のかひありてきくも嬉しきほとゝきす哉
○　越後　松永繁子
たちはなのかをれる宿の影月夜ほのめきながらほとゝきすなく
○　宮城　大槻やす子
ほのかにもたゝひとこゑの音信を月にきゝたるはつほとゝきす
○　相模　大谷津峯子
只ひとりたどる山路の松かけにゆくりなく聞くほとゝきすかな
○　山城　北尾きぬ子
船にして保津を下ればうれしくもほのかになのるほとゝきす哉
○　大和　藤岡慶子
亡夫をしのふ卯つ木の花かきにまつとはなくもきくほとゝきす
○　名古屋　林田糸子
別れにし友なつかしく思ふ夜に葉さくらかくれ鳴くほとゝきす
○　福井　岩橋花子
思ひきや降くらしたる五月雨のあやなき夜半にほとゝきす鳴く
○　岐阜　豊田ふゆ子
さやかにもなのりそめけり玉くしげふたかみ山に鳴ほとゝきす
○　長崎　秋山虎子
夜もすから待兼山のほとゝきすよそのくも井に鳴くそつれなき
○　備後　石井妙子
我が宿の垣の卯の花咲きしより山ほとゝきすまたぬ夜そなき
○　伊賀　菊山かれ子
わかれ路に足をとめてそ聞にけるゆくりなき音の山ほとゝきす
○　東京　美矢竹光子
ほとゝきす初音きかむとたち花のさけるあたりに幾夜ふかしぬ
○　秋田　古瀬りく子
枝ならす風のおとのみひゝきゝてまつにつれなき山ほとゝきす
○　秋田　古瀬惟子
いつまでか大みや人にまたすらんみやこにいそけ山ほとゝきす
○　埼玉　横田須磨子
ほとゝきす一こゑなきぬ花は根にかへりはてたるうたの中やま
○　埼玉　横田秋子
朝手洗ふかけひの水もとりあへず初音こぼして行くほとゝきす
○　埼玉　横田やな子
山畑にひと日くらして思はすもかへるゆふへに鳴くほとゝきす
○　東京　入江菊子
いにしへをしのふか岡の神垣にこたかくなのるほとゝきすかな
○　東京　山口琴子
ほとゝきすをち歸りなく聲すれとすかたはみえず雲のよそにて
○　靜岡　竹内光子
ふりいでゝ今そなくなるほとゝきす笠とり山のさみたれのそら
○　東京　高貞子
ふり出て雨になくなりほとゝきすむかひの丘の笠まつのかげに
○　上野　黛ゆきよ子
老ぬれは浮世の事を聞かぬ身も初ほとゝきす待たれつるかな
○　東京　碓井のぶ子
ほとゝきすまつとはなしに夜は更てさやけき聲をきくそ嬉しき
○　近江　室谷由加利子
さらはとて今を限りの別れ路になくほとゝきすこゑあはれなれ
○　東京　堀田たけ子
世の塵をすてゞみ山へ入る人のこゝろ知りけむほとゝきすなく
○　東京　佐藤のふ子
はしき音を聞きそめてより郭公なかぬ夜半にもえこそねられね
○　愛媛　廣田政美子
目の前にもの思ひをれはほとゝきすかけをかすめて忍音になく
○　東京　古谷花子
ほとゝきすまちにしかひもありあけの月にさやけき聲を聞く哉

○たちはなの匂ふあたりはまたぬ夜も待夜もきなく山ほとゝきす　福岡　三原すな子

○桑のみか今日は岡邊にほとゝきすはつ音をさへもつみにける哉　肥後　友永常子

○うの花の月の夜ころになりしより今年はしけくなくほとゝきす　肥後　友永章子

○三日月のかけほのくらき山のはに初音さやかになくほとゝきす　長野　岡田千穂子

○うの花のかきねにきなくほとゝきす雲井の月にいつなのりてん　愛媛　樋口孝子

○ねやらで待ちしかひありほとゝきす曉ちかくなのるひとこゑ　上毛　角田すみれ子

○雨晴れてすゝしき月にひとこゑをもらしてすきぬ山ほとゝきす　東京　高木鏡子

○たちはなの木かけにこよひ宿かりて一こゑきかむ山ほとゝきす　駿河　森つな子

○さつきやみあやなき里にほとゝきす誰を尋ねてよもすからなく　京都　高丘春子

○一聲はたしかにきかせほとゝきすふたゝひとこそ頼まさりけれ　埼玉　安部とみ子

○ほの／＼と明ゆくまゝにほとゝきす雲間にたかくなき渡りけり　駿河　森つな子

○思ひねの夢をやふりてほとゝきすもらす初ねのなつかしきかな　東京　白井峰子

○片われの月さしのほる山の端にふたこゑ三聲鳴くほとゝきす　伊勢　黒田代哲子

○一聲もこゝろして啼けほとゝきすゆめも結はてまつとしりなは　上毛　大竹しげ子

○ほとゝきす行手の山にこゑすなり棹さしかへせ宇治のかはふね　東京　[illegible]津梅子

○久かたの雲のあなたのほとゝきす月のみやゐにいまなのるらむ　廣島　富樫てる子

○山さとの賤かなり月の夕まくれほのかになのるほとゝきすかな　加賀　宮田環子

○ほとゝきす雲井にのこるひとこゑは夢なりけりな待ふかす夜の　京都　下川登美子

○みそら行くかたわれ月を横ぎりてなくほとゝきす聲のさやけさ　東京　日暮郁子

○みちかよの月に文よむまとのとにうれしくもきく山ほとゝきす　能登　栗倉すみれ子

○夢さめてふるさとしのふ小夜中にまくらに近くほとゝきす鳴く　東京　永井ふさ子

○明やらぬ雨の戸をもるゝ月かけをかすめてなける山ほとゝきす　石見　青柳秀子

○みなの川落ち來る水の絶え間なくは山しけやまなくほとゝきす　香川　松永波子

○ほとゝきす鳴きて横ぎる武藏野にゆふたち雲のひろこりわたる　東京　中島波子

○みな人のまつをもよそに空たかく名のるつくはの山ほとゝきす　埼玉　東角井高子

○ほとゝきすそれかあらぬか思ひ寝のまくらにちかき夜半の一聲　東京　岩谷淺子

○卯の花のさけるあたりに來てみれは一聲たかくなくほとゝきす　三河　永井さい子

○わか葉さすこのもかのもに聲しけく鳴くや筑波の山ほとゝきす　岩代　菅野和子

○わかはして春をへたてしさかひ山こえてそ名のるほとゝきす哉

○　天津　富成梓子
ほとゝきすなかふる聲をからくにの川のほとりにまちわたる哉

○　永富藤子
ほとゝきすかけこそ見えれ生しける青葉かくれに聲たきくかな

○　東京　西村直子
ほとゝきすほのかにきゝし一聲は月のかつらのあたりなるらむ

○　伊豫　高橋茂子
一こゑをしるへにゆけはほとゝきす卯の花かけにまたもなく哉

○　三河　榊原きく子
梅雨晴れし葉櫻かけに嬉しくも初ねゆかしくほとゝきすなく

○　神奈川　由樹しづ子
なき聲のみ空を翔けて洩しけむ只ひとこゑのなつかしきかな

○　松山　田村多豆子
月になき雨にもなのるほとゝきすいつを時ともさためさるらむ

○　松山　上原のぶ子
かならすの初音たかはぬほとゝきすうの花月にあめのあけかた

○　陸前　平間あさ子
夢さめて空亊おもふあかつきにひとこゑきこゆやまほとゝきす

○　高松　井上玉代子
ほの〲と明け行く空にほとゝきす一聲鳴きてすぎにける哉

○　陸前　前田河千年子
ちになきて何れの里をしたふらんこゑおほれなる山ほとゝきす

○　上野　大澤淡子
おもふことなき身なからも今更に君しのけるゝほとゝきす哉

○　越後　須藤淡負子
ほとゝきす聲きゝ初てそゝろにもこゝろなこりのせられける哉

○　播磨　櫻田作枝子
宵やみに忍ひねもらすほとゝきす月なきそらにたれなとふらん

○　大阪　田中靜子
留守居して一人衣縫ふよすからを聲ふりたてゝほとゝきすなく

○　岐阜　山田房子
ねさめしてかへすまくらのほとちかく一聲もらす山ほとゝきす

○　愛知　淺井愛子
よを深み忍ふこゝろやゆるみけん月にうかれてなくほとゝきす

○　東京　瀬藤千代子
さくら花散りにしあとの木下闇ひとこゑもらすやまほとゝきす

○　東京　長田せつ子
月影ののほらはなのりいてんとてくらまに忍ふほとゝきすか哉

遠山松

天　　　伊豆　近藤邦子

山高み麓は雲につゝまれて
空のみどりにつゞく松ヶ枝

地　　　東京　森田幸子

過ぎし世のしらべ聞かまし遠かたの
みどりもふかきみねのおい松

人　　　秋田　古瀬雛子

ひさかたの山のあなたをながむれば
雲にねざせる松もありけり

秀逸

○ 肥後 友永常子
見渡せはをちのやまの端しら雲の
うへにも松のそゝりたつなり

○ 秋田 古瀬りく子
よのちりのかゝらぬ月の山のはに
こゝろ高くもたてる松かな

○ 愛媛 廣田政美子
氣高くもいく世の人かなかめけむ
あまそゝり立つみねの老まつ

○ 東京 佐藤のぶ子
やまつみの衣やほすらむ尾上なる
松のしつえにかゝるしらくも

○ 常陸 兒玉こう子
窓越しに絶えすなかめてとほやまの
松も庭木のこゝちこそすれ

○ 東京 青木たま子
白くものたえま／＼に遠やまの
まつのみとりの見ゆるゆかしさ

[illegible]

○ 薩摩 松原みれ子
みきはなほ雲の上にてさかゆらむこすゑのみ見ゆ遠のやままつ

○ 東京 松本まつ子
旅人の道のしるへになりぬらむをちのたかねにたてるかさまつ

○ 埼玉 横田秋子
今朝みれはいよ／＼とほくなりにけり霞のつゝなてのそのゝ松山

○ 讃岐 安藤光代子
八重がすみひと重二重と薄らきてあらはになりぬ遠やまのまつ

○ 東京 碓井のぶ子
遠山の松のみとりは千代かけて變らぬいろをしめしけるかな

○ 陸前 前田河千年子
大そらに枝葉さかゆくやままつはをちかた山に根やしめたらん

○ 東京 林環子
遠山の松はねくらかむらからすいりあひの空をかへりゆく見ゆ

○ 東京 林艶子
さながらに繪に似たるかなひともとのいり日のあとの遠山の松

○ 羽後 鈴木しゆん子
とほ山の雲にまがひて見ゆるなりとしふる松のえだ榮しげりて

○ 東京 小林芳子
おほ空の色かあらぬかしらくものたえまに見ゆるをちのやま松

○ 越後 松永繁子
咲きつゝく榮種にそまるくものいろかゝれとあをしとほ山の松

○ 宮城 大槻やす子
遠方やみねのゆふかせふき絶えてくもにたゝよふ松のひとむら

○ 東京 永井ふさ子
とほ山の松のみどりの色ふかくうきよのかせをよそにきくらむ

○ 山城 北尾きぬ子
花の色はうつろひ行けとをちかたの松のみどりは變らざりけり

○ 大和 藤岡けい子

ふかみとり老いてかはらぬ遠山の松はかみ代のすがたなりけり

○　播磨　横田春枝子

冬ふかみたかれけはしきみ山路にみちしるへしてたてる松哉

○　東京　堀田たけ子

しら雲と松のみとりと染わけのころもきるらしたちのやまく

○　愛媛　廣田せき子

遠の山ひとつみとりとなりにけり目なれし松はいづれなりけん

○　東京　古谷花子

遠かたの尾上の松のほのかなるすがたに千代のかけやこもれる

○　肥後　友永葷子

ふく風のおとをへたてゝしつかにもとほ山の端に見ゆる松かな

○　伊賀　菊山かれ子

をさなくて迷ひ入りにしふるさとの山もみえけり松もみえけり

○　東京　美矢竹光子

春雨にぬれていろますとほやまの松のみとりやいやまさるらむ

○　埼玉　横田やな子

よこくものわかるゝやまの峰の松見えつかくれつ明はなれゆく

○　埼玉　横田政子

雲かゝる遠やまゝつをみわたせば峯のすさひもおよはさりけり

○　東京　山口琴子

とほ山の松のときはの深みとりけにもゑかきしこゝちこそすれ

○　東京　高崑子

いつれにか宿りはとらむをちに見し高ねの松もくれはてにけり

○　陸前　平間あさ子

とほ山の二もと松をなかめつゝ千代をかたらふわかきいもと背

○　松山　上原のぶ子

とほ山の高嶺のまつはしら雲のうへにや種のこほれたりけむ

○　備後　石井妙子

樵夫だにかよはぬ峰のおいまつはこゝろ安くも千代をへぬらん

○　京都　下川登美子

おほ空につゝくみとりは遠やまの峰に小まつの生ひしげるらん

○　上毛　大澤葷子

なかめやるとほき山々くもはれてきのふにまさる松のいろかな

○　福井　岩橋花子

見渡せは山をりくによそほへと松のみとりのかさしかはらす

○　岐阜　豊田ふゆ子

この夏もまためにたちてとほやまのわかはかくれに見ゆる老松

○　岐阜　山田房子

ゐなからにみゆるもうれしなつかしきわかふるさとの遠山の松

○　奈良　天野照子

あふきみるをちのたかねの松こそはおのが操のかゝみなりけれ

○　大和　栗山たか子

立へたつかすみの中にほのみゆるみとりはまつの峰のまつはら

○　大和　栗山捨子

遠くみてふるきむかしを忍ふかなふなさか山のまつのなかめに

○　東京　吉岡龜子

遠山にこたかく茂るかさまつをみちのしるしとさしていそかむ

○　常陸　岡田萬子

いくとせか嶺のあらしにふかれけむ遠やまの端に立てるおい松

○　秋田　長田せつ子

降雨のはれてものこるしらくものかゝれるかたやとほやまの松

○　下總　渡邊澄子

とほ山のなかめやまさる松か枝のみとりのいろの雲につゝきて

○　東京　土田八重子

きえのこる雪と見しかなとほ山の松に巣こもるつるのすがたを

○　新潟　岩本芳子

もやはれて朝日照りそふをちの山まつのみとりも色まさるなり

○　對馬　青木まさを子

雨はれしあしたにみれはとほ山のさやかにみゆる松のむらたち　愛媛 樋口孝子

○

雨はれてまちかく見ゆる遠やまの松のすかたのおもしろきかな　伊勢 黒田光子

○

いたゝきの雲の白まくたえ〳〵にみゆるは松のみとりなりけり　伊勢 黒田代音子

○

たとりゆく道しるへしてとほ山の松ははるかに見えそめにけり　東京 禰津梅子

○

雲をよふ龍のすかたとみゆるかなとほやまのはのひともと老松　埼玉 東角高子

○

晴わたるあしたの空につゝくなりとほやま松の木々のみとりは　松山 田村多豆子

○

花ならは雲にまかはむとほやまのまつそおのれか松のいろなる　東京 岩谷淺子

○

今朝みれはあはじ島山くもはれて松はかりこそ見えわたりけれ　下野 井上尙子

○

いろかへぬみとりたふとく仰ぐかな神さへたてるとほやまの松　千葉 木村きよ子

○

朝かせにかすみは消えてとほ山の松はかはらぬ色を見せけり　岩代 菅野和子

○

色かへぬ松はみさをのかゞみかはとほやま嫈ふけはひけたけき　上毛 大澤華子

○

あしひきの山また山はとほけれと松のみとりはかはらさりけり　能登 粟倉すみれ子

○

小窓よりみるとほやまの常磐木は千代木の松のみとりなるらむ　東京 萩原文子

○

春なれは花かとそまかふとほやまの松のみとりにかゝるしら雲　天津 富成梓子

○

千早ふる神かすさひのすみかきのふてそたえなるとほやまの松

○

ゆふたちのはれて名殘の入日させはとほやま松に綾の雲かゝる　櫻山 山脇孝子

○

ゆふ日さす峰をはるけくへたゝれとさやかにみゆる松の色かな　三河 永井さい子

○

うみこしのあはの遠やまあけそめてほの〳〵みゆる峰のなみ松　東京 中島茂子

○

高嶺のみゝとりに見せて遠やまのまつのあらしや雲はらひけむ　山口 村上操子

○

遠かすみいつしかはれてまつ山の千とせの色はあらはれにけり　東京 日暮郁子

○

遠山のかの松なくはいつかたをわかふるさとゝ日々にながめん　神戸 藤木梅子

○

しら雲のいくへかさなる山ならんかれていこひしみれのかさ松　東京 福田よし子

○

おぼろ夜の月ばかすめどなかめやる雲間にたてる遠やまの松　高松 井上玉代子

○

うれ〳〵とれがたもわかぬ濃みとり雲にたゝよふ遠やまの松　加賀 富田環子

○

とほやまの松はちとせの色みせて鶴のこをうむやとゝなりぬる　秋田 細矢はる子

○

岩しみづむすびて彼方眺むればゆふ日にゝほふおいまつのかけ　大坂 田中靜子

○

あさやかに松さへ見えて雲遠くみわたすやまにあさ日さすなり　伊豫 高橋茂子

○

雲かゝるたかねにたてる笠松をやとりとさしてみちはいそかむ　靜岡 竹内光子

○

羽ころもと見ゆるも床しとほやまの松の片枝にくものみれ立つ　上野 繁ゆきよ子

○

はろ〳〵とをちのみやまを眺むれは松のみとりそ色まさりける　東京 毛田みや子

短文

本欄の投書家に

この欄に採錄する文章は、僅々百字以内にて、事をうつし、景をえがき、想をのふるものに限れば一字なりとも、心して記さゞれば、平に凡々となるべし、少くも自ら感じ得らる程度までは推敲して本欄の甚だしく賑はんことを、投書家諸嬢に望むなり、尙心付きしことを述べんに、(一)たゞ幼兒は無心で可愛い位では新趣向でもあるまじ、(二)突如として、美イちゃんや喜イちゃんが出て、よくッてよ、いやだわアでもあるまじ、(三)友に別れて唯悲しい位では涙を讀む人に望むことにむづかしかるべし、(四)花や月を見て死んだ人を思ひ出す位も、もう古めかしくはなきか、まづ以後は以上四件位は禁物にして、寸鐵人を殺すといふまでは行かずとも、今少し骨を折つて稿を草せられたきものなり、(本欄選者)

地賞

雨後の景色　伊勢　井口孝子

雨は霽れたれど、煙未だ收まらずして、夕陽雨氣に映ずるの力なし、小高き岡に登りて向ふの方を打見やれば、森も薄らぎ林も黑めど、小川のみは濁流長く漲りて、瀬に白蛇の躍り狂ひ、行衞は菜花の雲に消えて、雲雀の聲漸く靜かなり

評　百文字以外大に情趣あり、筆端變化ありておもしろし

人賞

磯邊の逍遙　千葉　木村きよ子

夕陽斜に射りて千波萬波金色と輝き銀色と砕けつゝ雲より出でゝ歸り來る漁舟は、漸く近きて波と上下する九十九里の濱、歌を思ふて佇めは、暮色遠きより近きを包み、苫屋を洩るゝ燈火の數殖えゆきて、何處よりか節をかしき鄙歌聞ゆ

評　定めておもしろき歌の詠ぜられたる處なるべし、げに類なき海岸の夕景、文に見るだに、腐腸の洗はるゝ心地ぞせらる。

理想の夫　　岩代　菅野和子

酒飲むはよしされどひつかしからぬ人。財産も多くは望まず大した學問ある人を撰はす、常に滑稽言ひつゝもしまつた精神のある人、子供好で趣味をもつ人、愛嬌ありてよくもてる人。かゝる人と添はゞ如何なる苦みも忍ばるゝ、

評　劈頭第一酒飲むはよし　とはおもしろし、眞情を吐露したる正直の希望なり、やがてこの理想に到着せられん。

自然のあはれ　　上野　大澤漢子

時めきし百千草、いつしかうつろひければ、蝶の行方も、わかずなりぬ、田の面に集ふ蛙の音近きはいとかしまし、梅雨煙りたる夕、朧月夜の風靜りたるに、遠く聞ゆるはをかし、更けゆくまゝに、燈火細う、山時鳥音を忍ぶなど、いとあはれ深し、

評　小枕の草紙の一節とも云ふべくや。

落花　　肥後　友永常子

春風梢にさはれは、時ならぬ吹雪とちり　風梢にさはらざれは、花は蝶を追ひ蝶は花を追ふ、追つ追れつ、みとり色添ふ庭前の苔路に止まれは、落花雪よりも白し

評　この落花チラリホラリ位の所ならば、蝶の花を追ふ態もはたらきあるべし。

夜半　　相模　大谷津みね子

こだまに響く怪しい音夜風につれて、丁々又丁々とたえつ續きつ何の呪詛かこの音、常闇の森陰に流れし火の影亂るゝ黑髮……そばだつ枕に曉の鐘の音さえて、みそらに滯るゝ月の光消ゆる星かくて世は又暖き呼吸を吹き返しぬ。

評　夜の恐ろしさも、晝となれば極めて平凡なり、

妹　　薩摩　松原みね子

其後は薩張りお便りがありませんが。若しや御病氣にては。其共何かお腹立。其ならどの樣にても仰つて下さい、私妹ですからと柔しい愛らしい文を手にした時には。矢張り昔稚子鬢に被布で飛び廻つた。妹の姿が目の前にちらつくのである。

評　あまり妹の君に氣を揉ませ給ふな、

落花流水　　東京　永井ふさ子

流水花を浮かべて去らむとせば、詩人涙あり、愛兒惱みあり、我れ又來む春を迎へんとすれば一歳の老あり、花に不變の色あれど人生朝露よりはかなし、噫落花情有りて、流水情なし、

評　流水を無情といふされば花を浮べて去る心を如何にせん、

暮れ行く春　　讃岐　香川節女史

今し入相の鐘の音は、寂しげに靜なる大氣を震はせて、遠く遠くこゝに響き來ぬ。そはかの菜の花の奥なる野寺よりならん。あゝ、春は此の如くにして暮れ行くなり、曉の鐘に迎へられて夕

の鐘に送られて………!!

評　栞の花を萩の花と改めたらんには、暮行く秋ともなるべし

子すゞめ　讃岐　藤井つぎ子

悪戯盛の芳坊がとりきたりし子雀三羽、寒さうに毛をふくらし、目をつむりて、時々、かなしさうなる聲たつるに、ふとみよ子さんの事思ひいだされて、そゞろ、涙をとゞめかねし折しも、めざめか、みよ子さんのなき聲、

評　みよ子さんに落す涙が、少しよめかねるなり、

筆の効　大分　護城鶴代子

文人の利器たり無二の伴侶たるは筆なり、一枝の水莖之を揮へば鬼神天地も動かすべく、忠臣之を取れば亂臣賊子跡をひそむあるは月の夕花のあしたは更なり、喜怒哀樂、心にあまる思を紙に現す、此筆の効如何に大なるや、

評　筆の効恐入つたり、

友がりへ　下野　井上倘子

寂しき君の文抱きて、小くらき夕の窓によれば、しゞまの中にきえ入りたき心地するも是非なく候、君よ、彼の朝顔の如く、一時に戀にまよひ給ふな、近々の中御伺ひ、御庭の藤棚の下にて君の御手とりつゝ、ゆる〱御慰め申べく候かしこ。

評　藤の花より、其の心の色、いとなつかしうこそ、

春の野　伊勢　黒田代音子

「三重の川添栞の花十里」といふ鄙歌の通り、見渡す涯り黄金界、向うの方で摘草して居る人の頭や、手拭ばかり幽に見えて、丁度蝶のやう、自分も亦蝶と成つて暮るゝをも忘れて遊んだ、やう〱氣付いて歸る頃牛引きの子が急ぎ足にて歌の節も暮れて行くやうに、「三重の川添栞の花十里」

評　此黄金の色にならば、心を腐らすこともあるまじ、

海邊より　越後　松永しげ子

只今間瀬の海邊に打ち出で候に、殊の外心地よろしく、佐渡も近く見え候、波の上には都鳥樂しげに遊び、砂の上には舟おほく、干したる網の陰には漁夫夢を結ぶさま餘り美しき故、寫生せむと畫帳取り出し候、何れ御目にと……

評　いづれとは何時の事に候や、早く見たきものに候かしこ、

幼兒　香川　松永茂子

白き雪よりも、美はしき露よりも、澄める三五の月よりも、淸く樂しく、うれしきは幼兒の心なり、一たび口を開けば、神のすさぶ聲を出し、一たび歌をうたへば天女の樂の如し、嗚呼、塵に醉へる人の子よ、淸き、罪なき幼兒の奏する樂を聞かずや、濁なき幼兒の心を知らずや。

評　さて幼兒のむつがる聲は何と聞き玉ふや、

思ひ出　東京　闕谷巳子

水に映れる菖蒲の影、そは美しき花なり、美しき者辛うすくやがて此艶も無情の風に散らさるべき運命こそ持てるなれ、思ふも涙の種なるよ、

此池畔に共に、語りし露子の君今は鐘の音に送られて、他界の人とは。又、美しき一片水に落ちぬ。

評　菖蒲を思出の種にしたるは、これがはじめなるべし、

思ひ出　東京　河瀨秀子

丁度一昨年の今日、あの藤の下かげで姉君と弟と、共に手を取りあひつゝ、末は斯くよと誓つたが、あゝ又とあんな樂しい事は來ない、姉君は既に苔の枕石のしとれ着て眠つて居られるのだ、あゝ實に浮世はうらめしい、

評　それでこそうき世なれ、

花賣爺　加賀　富田環子

花賣爺は花畑の前に、荷をなす𛂞、獨ほゝ笑みつゝ腰の剪刀とりて畑に入りぬ巧樂一枝手にして來り、傍の庵へ持ち行きぬ、内よりは低く靜けき讀經の聲聞ゆ花は佛壇に上りしか。

評　賣らん花ながら先づ一枝をと云ふ心やさし、

貞女　羽後　鈴木しゆん子

「父つさん、妾如何な離儀をしても、嫁けなくつてよ、と女の聲「父の言葉に逆ふ不孝者奴ッ、と男の聲、はてはうつ音罵しる聲泣く聲……この有様を見た妾は、思はず身ぶるひした、さりとは初瀬後家のうき名さへ立つ世の中に、

評　貞女は頼まれてなるものにあられど、

あしき心　東京　山田菊子

さつき三日の夕、吹く風心地よきまゝに、そゞろあるきせんと、門でせし折から、彼方に人つどへり何かとゝへば、少さき男の子の人の物とりしとて、とがめられつゝあるとか、あはれ其稚子に父母ありやなしや、おひゆく先こそあんじらるゝなれ、

評　折角思立たれし逍遥も、立消えとなられしなるべし、

白　大阪　田中静子

白は色素の根源なり、神聖にして純潔なり、あゝ神聖と純潔、詩人をして神來の想を採らしむべし、されど少しの精味も熱素をも有せず、以て哲人をして靜かに冥想せしむべし、

評　白もなか〳〵六釜しきものなる哉

憐れ葉櫻　水戸　吉田靖子

誇り顔に競ふて咲いた櫻の花、憐れ一夜の、小嵐に散り始めてより、きのふの面影どこへやら色褪めし出茶屋の、のれんに青葉となりて、影を留むるのみ、

評　その葉櫻の蔭こそ、立よらまほしからずや、

母君の御旅中に　長野　岡田千穂子

母様今頃きつと大平峠、いくら御氣丈でももう六十余の御齢だもの、どうぞ御無事でおこし成される様に、御守様も掛け、燈も進ぜそして、神様佛様には、常から御願ひ申ては居るが、却て留守を案じていらしやるか知らあゝ早く御便りを、

評　萬事に注意いたし候へば、旅先の事はかならず御案じ下さるまじく候、母より

點茶　播磨　横田春枝子

水屋の組立て、床の裝飾、清雅なる一間に、世の塵さけたる人々聲なく坐して、茶筅の音のみ、松風とひゞき、二八の君の白き指もて鹽瀬緋の帛紗さばきさても美しき。茶釜さら〳〵と音すれば、宇治の香ゆかしく、緑のあわさとたつなる、

評　水屋の組立て、床の裝飾を、一間の内に收めらるゝとは、さても器用な事なり、

三人の女　東京　神田けい子

思出多き社の跡を訪へば、三人の少女樂しげに散りしく花を糸に綴れり。噫吾も十年前には三人斯く此處に遊びしものを、其の一人は既に世を去り、今一人は早や人の母とさへなられぬ。されど吾一人今も學の窓に日を送る、噫幸多き哉。

評　その學びの窓より、美しき光をもらし給へ、

我が所信　讃岐　安藤れん子

高等女學校を卒へて四年、なすなき姿をみやこの友はよんで阿蒙

と叫び、井蛙と罵る、さもあらばあれ、何をか悲しまん、妾は自然を友として徐に所信に向つて進まんのみ、

評　自然を友として所信に向ふとは、いかなる事に候ふにや、

有情無情　山脇野菊女

恨み多き雨は、しと／＼と降つてやむべき模様もない今し梅林の小徑をたどり出たうら若き馬子、ぬれて重たう地に垂るゝ手綱曳く手にも、そが笠にも、今枝を拂はれし落花を乘せて何處にか立ち去つた。

評　さう落花を乘せては、少し塵の方に近く覺ゆるなり、

燈下の讀書　野の花

月は窓をてらして、虫の音たかくきこゆる夕、ひとり燈火の下に文をくりひろげて、見ぬ世の人を友とするはいとたのしく、夜のふくるをも忘るゝまでになん。

評　眼光紙背に透る見るやうなり、

時鳥　和歌山　高田さくら子

雲にまがひし梅はいはず、雲にたぐひし櫻さへ夢のまに散りはてゝ、木々の梢は、みそら月のかげももらさぬ、ばかりしげりあひぬ、あはれこのながめよ時にあひては又、花紅葉にもまさりて覺ゆるぞかし、あゝさてもまたるゝものは時鳥の一聲かな、

評　突如として時鳥の一聲を望まるゝそこらが時鳥の價ならんか、

小天使　尾張　井口登代子

おとなりの秀ちやんは今年五ツそれは／＼かわいゝ子、いつも私を姉ちやん／＼と云ふては甞つて來ます、そして其冷しい星の樣な目で、私をながめる時には、實に／＼何とも云はれないまるでエンゼルの樣、

評　丁度五つといへば、いたづらの初まり、尤も愛らしき盛りなり

折にふれて　神奈川　由樹しづ子

青い波を打こせるなどと云ふ、麥畑を見はらせる二階を明けはなして、涼しい風を透すが、こんな所に住んで居ても、頭にふけがたえませぬ、あの御母さんがなくなつてからは、

評　ふけでお母さんを思ひ出されては、お母さんも少々助らぬなるべし、

家事節用を讀て　三河　柳原きく子

春雨わびしき或一日小川直子女史の半生をよみ、知らず紙上に熱涙の溢れこぼれぬ、げに女史の如きは、古今の賢婦良妻、天晴女の好模範ぞかし、たらはぬ賤が身も朝な夕なに思ひ出でゝは、いよゝ心の勵まるゝなり。

評　願くばその心をいつまでも、

いつれか妙　群馬　大澤筆子

松間の月、柳枝の月、海上の月、湖邊の月、さては花さく春の朧月、何れか愛たからざらん、いづれかゆかしからざらん、さはれ春天暖き日、咲き亂れたる花の上に躲れる蝶、飛びかふ蝶の風情こそまたなく優しきものゝ限りなりけれ、

評　段々と月を數へ來つて、いづれの月がお氣に召さるゝと思ひきや、咲亂れたる花の上に、躲れる蝶と來たので、月曰く「おもしろくもない」、

無常　松山　田村多豆子

したしく語らひ交しゝ人の。今朝はむなしくなりぬと告來たる夢かとはかり胸轟きて。いそぎ車にのりてかけつくれば。人々枕邊に集ひて泣さけぶ。遺骸にも口はあれと音はず。目はあれと見え

ず。あはれ世はかくもはかなき物にやと。夕に散る花の恨み。朝にきゆる露の歎き。心にもめにも。

評　口はあれども目はあれどもでは少し道理に近過ぎはせずや

夏夕

神戸　藤木梅子

庭の遣水に閃々燃ゆるかのやう夏の月の映ろひて、蚊遣の烟低く揺れつゝ輪をなして來る處、渋團扇片手に父と兄とは莚を圍めり切戸を開く音に顧みれば、網して歸る弟の大桶に獲物を秘せる、銀條を流せる如く見ゆ。

評　燃ゆるやうの月にては、あまり涼しきやうにもあられど、莚を圍みて夢中になりたる所へ、弟君の獲物自慢がありさうにて莚の暑さは忘らるゝなるべし、

押花

能登　栗倉すみれ

我春夜を飾りし櫻と菫の押花を都に學び給へる兄君の許に送り參らしぬ。其お返しに「其麼草深い田舍に居て、誰にあんなハイカラ的な事をならッたのだ」と、而かも繪葉書ならぬ常の葉書に我は密かに兄君を恨みぬ。

評　的の一字甚だ可笑味あり、ひやかさるゝにも繪葉書を望まるゝ亦可笑し！

新體詩

地賞

花賣翁

加賀　太田静子

花を召せ〳〵花を召せ　ほころび初めし桃さくら
破れし籠に挿しはさみ　朝まだきより玉しきの
みやこの大路賣わるく　翁ありけり身にまたふ
うづら衣はあやなくも　耻らふ色とて更になく
僅かに得たる代をもて　我家を指して歸るさに
青菜や米をとゝのへて　其むすめ子を養へる
花を召せ〳〵花を召せ　聲もあはれに賣る花の
露に任する身なりとも　浮世の中のまことをば
くみて天津の月かげに　うそぶくきよき心には
しづ心なくおちこちに　狂ひあるきて世の中の
蚩くふ富のさかえをば　もとめざれども自から
やすきこゝろは萬代の　眞理の中にかゞやけり

人賞

田舍の暮影

大阪　田中鶴子

くれなゐ染むる山々は　淡きけむりに包まれて
夕陽のかげは名殘なく　明日のあしたを契つゝ
移り消えゆく夕けしき　おのが塒にかへらんと
三つ四つ二つ後やさき　鎮守の杜をさしてゆく
からすの羽音静やかに　とき告渡るやまでらの
鐘のひゞきに送られて　牽きゆく駒のすゞの音

いと睦まじく語りつゝ　家路を辿る田子ふたり
すみ繪にゑがく森影の　彼方こなたの茅が屋に
のぼりそめたるゆふ煙　夕けをかしく賤の女が
畠打かえしいとなめる　夫の歸りを待つならん
　七つ八つなる愛らしき　小兒小女等うち群れて
鄙歌うたひうれしげに　遊べるさまの餘念なし
　浮世はなれしやま里の　晩れゆく影の靜けさよ
大空くらくほしおほく　きらめく火影二つ三つ

選外秀逸

暮れゆく春

伊勢　黒田代音子

さしもしづけき里川の　汀のさくらちりそめぬ
くれなゐ淡く悠やかに　綠のなみにうかぶなり
優しの花のしがらみを　掬ぶもをしき心地して
おもはずきしに佇みぬ　うたよみ文をかく人も
みやびを知らぬ里人も　ちりて果てなばいか斗り
春の夢をやかこつらん　ゆくへやいづこ佐保姫の
かすみし車しばしだも　引てとゞめんよしもがな
そゞろ木陰に寄そへば　流るゝ水はさゝやきぬ
はるは年毎よどみなく　とはに廻りて來るものを
花はとし毎かはりなく　同じいろ香にさくものを
などて名殘を惜むらむ　心のどかに來ん年の
はな咲く春をまち玉へ　かくて暮れゆく春と花
のせてぞ水は流れゆく　そよ吹く風に誘はれて
又もはら〳〵一しきり　見送るおのが衣手に

暮山

肥後　友永常子

峯よりひゞく鐘の音の　ひところゐつゝに墨染の
色になりゆく谷の戸を　雲もねくらと定めけむ
うき世放れて歸るなり　なげきこりたる柴人も
今日もみ山に分入りて　家ちになして樂しげに
九十九折なる山みちを
歌ひつれつゝ歸るなり

胡蝶

大和　栗山たか子

花の香おくるはる風に　羽袖かへしてひら〳〵と
むつれ狂へる妹と背の　胡蝶のゆめのあとゝはん

初夏

神戸　足立おさ子

人のこゝろば花染の。うつろひやすき春過て。夏來にけらし卯の花の。垣根の雪は白妙の。衣にかゝる薄かすみ。立居涼しくおぼえけり。

さまよひ

松山　山脇幸子

畫堂になやむ蝶なげて
春姫が野にさまよへば
金輪の紋きら〱と

やなぎに靡くうす霞を
たんぼの錢若やぎの
朱欄の小ばし渡るとき

仰げば空は七彩の
そがこぼれてはかげらふの
車かへして過るとき

黄金の翅の二片れ
蜜の小甕の香に醉ひて
寸毫になやむ我胸を

つばさある子に引かれつゝ
末葉のうすぎぬに
みまくなのべて三十里

ぬけて菫の床もあと
七艸八草ゆるがせて
水の底ゆく春の雲。

綾か錦かうすくこく
糸より風の菜の花路
そこには蝶の眠るなり

靜にのして安らけく
夢のみ神のさゝやきに
若き血汐はおどらする。

電信

神戸　月足ろい子

海と陸とのけぢめなく。
鳥が物かはいなづまの。
千さと萬里をへだつとも。
光りの間にぞ音信るゝ。

春渡場

東京　豊田とよ子

二人して渡まつ間の手遊に
糸は風にと打とけて
結びてはなつ青柳の
下にくる〱みづまはし。

○

雲間ぬひゆく片破月の
濱の岩根によせては歸り
千古のひきよくしらべをかしと
あなたよりくろ波もしづかに
打つや鼓の音もさえゆけは
此の世をさして屆くだる。

五月雨

大阪　田中静子

晴間も見せず降りしきる
里の小川の水まして
卯の花くだすさみだれに
舟流すべくなりにけり

春の宵

羽後　鈴木しゆん子

今宵櫻の花園を
花と花との間より
さまよひながら見渡せば
早くものぼる春の月

行きかふ人の音もなく
松原遠く人の影
しづかに春の夜は更けて
うたの主やそれならむ

無名草

讃岐　松永茂子

小庭につゞく灌木の
花は名もなき花ながら
生垣がくれ咲きいでし
たゞ懐しと見られけり

ゆかしと見てしあしたより
夕霧深くなるまでも
朝風清く蹈みわけて
眺めせぬ日はなかりけり

道ゆく人もなき野邊に
ことに名もなき花なれば
異草を知れる人もなし
獨り哀れと思ふのみ

しかはあれども何となく
おのが生命も空ならず
優しく見ゆる花故に
覺えそめては歌をこそ歌へ

春の夕

讃岐　香川節子

夕日は西にかたむきて、
今日も暮れぬと山寺の、
足もとうとく醉おびて、
馬士の歌さへおもしろく、
風はそよとも吹かなくに、
雲井の雲雀落ちぬれば、
鐘の音ひゞく其時に、
花下影をあゆみくる、
駒も一こゑいなゝけば、
二ひら三ひら花の散る、

古寺梅雨

播磨 横田春枝子

御堂の屋根のかはら落ち
ほれあらはなるかべの上に
みやまの奥の荒寺に
若き尼ぎみたゞ一人
くちし鐘堂にたちまして
袖よりいづる白き手に
かはほり一つ飛び出しぬ

千草茂りて雨しのぎ
鉢づたのぼりて風ふせぐ
小雨そぼふる夕まぐれ
花桶さげてじゆず持ちて
しぶきにぬるゝ墨染の
撞木の縄をにぎる時
あはれさびしき夕まぐれ

袖枕

大阪 田中れん子

さても戀しき母上の、
樂園とやらんに在まさば、
櫻花散るおばしまに、
月影消きゝ萩原、
白露ゆらぐ野のゆふべ、
最後の景狀をくりかへし、
空にしられぬ袖しぐれ、
今宵おぼろの月の下、
池のほとりの御寵愛の、
夢か現かまぼろしか、
戀しきすがたあらはれて、
すゝ母樣と御袖に、
たちまちかなたに行き玉ふ、
何處迄もと行き行けば、
たちまち元の花の影、
驚かされて目はさめぬ、
小窓に月の影さして、

まこと戀しき母上の、
我も行かなん母上よ、
そゞろたゝずむ春の宵、
上葉をわたる秋風に、
ありし昔に母上の
一人幸なき身を泣きて、
戀しき母よ今何處、
そゞろ歩きの奥庭や、
花の木影に立ちよれば、
白衣まとへる其人の、
まれき玉ふに我知らず、
すがり付かんとよりそへば、
おんあとしたひ我もまた、
池の汀を一めぐり、
ありし姿はかげもなし、
身はうたゝ寢の袖枕、
妹が寢がほのうつゝなき。

秋雨

近江 室谷由加利子

夏の暇ひを足に蹴み
降りくる秋の雨淋し。
破窓を蔽ひし秋海棠の
秋は淋しき味にして。
梧を訪ふ夕雨や
鋭き白歯に噛み切りぬ。
黄菊、白菊、七草は
花は涙みの子ならじか。
雨は見知らぬ天帝の
よべは緑蒼の葉に落ちて。
けふオレンヂの立田姫
落武者振りの雄々しさよ。
やがて矢創も多ければ
勇士斷末魔の悲みか。
小川流れの音も細く、
胸に血汐の色ぞまし。

今ぞたちくる「時」の香に
落葉かみしめ味はへば
葉うらをかいて梗により
雨にも咲けり秋の野邊
奇しき腕の靈力かも
錦は楓、黄は公孫樹
紅にまみれて散りもゆく
一度雨にうたれては

若草

越後 丸山あつ子

雪消え果てゝ水わかし、
思ひも同じ野にあらば、
風をはらへば頬しろし、
やよ行け野路暮るゝ迄、

色崩え出でゝ草おとし、
心もおなじ根を摘まん、
氷をわたれば裾かろし、
いざ摘め春をいつ迄も、

小ゆびの土に香ひあり、
いざ我汲まん雪解水、
堇かぐはしゝ葉は若し、
かはらぬ色を君摘れや、
戀はすみれの露のひま、
踏みなわすれそうす翠、
嗚呼若草の情しきかな、
いこへや野路群るゝ迄、
たもとのふさに雫あり、
やよ君あらへ籠わか菜、
花やはらかし根は纖し、
移ろはぬ間に我染めん、
まよふは蝶の夢のほど、
折な惑ひそ濃むらさき、
惜しき思ひのもゆる哉、
遊べや春をいつまでも、

巡禮の歌

下野　井上倚子

京は近しとおもほへど
足のなやみのやま坂や
世のうき旅に面やつれ
花のくちべの色あせぬ
瞳にみだるも物うしや
ありし昔のおもかげは
墨のかのみに止めぬる、
小鈴ふりつゝみ熊野や
深きえにしは知れども
寂しき歷史こしるらん、
故鄕をあとにさ迷へど
雲なつかしとすげ笠に
情なき時雨ひとしきり
なれぬ旅路にたゞひとり
杉のこずゑに小鳥なく
小さき胸の血は冷えて
綠の髮の香はうせて
花にまさると愛られし
あめにさらせし黒髮の
紀三井の寺の歌あはれ
すげの小笠に竹のつえ
心はのころにしのそら
小手打かざす夕ぐれを
衣の袖をぬらしけり。

師の君

大分　讃城鶴代

花とし愛つるむすめらを
あづかり敎う師の君よ
つとめはけみて朝夕に
月と樂しむむすこらを
君等の任はいと重し
ふみなたがへそ人の行く道

百合

尾張　登代子

谷間をふかく姫百合の
似たりやいとし少女子の
ちりにけがれぬ優姿
未だこひ知らぬほゝゑみに

菅公

東京　永井ふさ子

土の中より生ひ立ちて
心に同じ菅原や
陥擠せられ無に
されど心は淸らかに
三十一文字の言の葉は
公の左遷はさらなれど
未につながる運命に
されど心に曇りなく
庭の梅花を顧みて
いつの世迄も香ばしく
あはれ正月末つ方
公はひたすら無實なる
再び京に歸らんと
その期なきこそ悲しけれ
つきの思ひの一詩篇
風雨いらかを打ち破り
文讀む燈油盡き
さし入る月の光をば
食膳缺くることありて
あゝあはれなる公の身は
延喜三とせの二月に
無常の風はふきつのり
月日も爲に影ひそめ
九十有九を名殘にて
「思歸家」の三字殘しつゝ
濁りにしまぬはちすはの
延喜の昔小人に
身は逆境に沈みたり
宇多の御門に迄りたる
永く歷史に輝かん、
公の御子等も飄の
至りたるこそ悲しけれ
紅梅殿を出でられて
詠み殘されし大和歌
永く歷史に輝かん、
つくしの宰府に遷されぬ
我身の罪の雲はれて
光る希望を抱きしが
空に輝く秋の夜の
永く歷史に輝かん、
露は不斷の香をたき
幅はくちし寒窓に
常住の燈とたのむなり
昔にかはる今日の様
永く歷史に輝かん、
主なき梅はかほるとも
つくしの浦の浪高く
悪覺は斧を振ふなり
無限のうらみ晴らして
世をかへ給ふぞかなしけれ

短歌

天賞

夏月　東京　牧野きぬ子

うたゝ寢の夢の浮橋わたりあえず
　すゞしくあくる夏の夜の月

地賞

梅雨晴　千葉　伊藤とく子

五月雨の雲のまよひもはれしより
　軒のしづくの音たえにけり

人賞

渡し守　神戸　足立あさ子

心なく水棹なさしそ渡し守
　ちりうく花の中やたえなん

選外秀逸

殘花　松山　上原のふ子

なつも猶胡蝶のあとをおひ來れは
　青葉のかけに花そのこれる

梅雨　上野　大澤漢子

乙女らがふし面白く早苗とる
　小笠の上にさみだれのふる

田家　和泉　福原菫子

足らぬをばたらぬになして稻しきの
　ふせやに住むぞ樂しかりける

新樹　東京　土田八重子

草木だにころもがへして見ゆるかな涼しき夏のうすみどり葉に

五月雨　下野　井上尙子

軒ちかく雲のせまりてもしほたくけむりもみえぬ浦のさみだれ

梅雨久　大和　藤岡慶子

さと川にまさるみかさを今日もまた水の菖蒲のはなに見るかな

茶摘　大阪　田中靜子

京出でゝ宇治へ三里のはろびより茶摘をとめのうたもきこえて

牡丹　高松　井上玉代子

見るごとにこゝろのうさも散りはてゝながめ盡きせぬ色深見草

新竹　肥後　友永常子

露にさへたわみがちにて村すゝめまだふしなれぬことし生の竹

籬外燕　讃岐　安藤光代子

涼かぜにすだれゆらきて軒傳ひとなりにそれしつばくらめかな

桑　岐阜　豊田冬子

あけぬより人こゑすなり山はたのくわのにゐはゝ誰かつむらむ

螢　山城　北尾きぬ子

やり水に流るゝ星の影と見しは風にまかするほたるなりけり

螢　上毛　紫[illegible]夜子

かはかぜにたもと吹せて橋の上に立つ我が袖にほたる宿りぬ

池蓮　　尾張　井口と代子

かぜ吹けば池のはちすばなみこえてにごれる水も玉とこそなれ

夏曙　　近江　室谷由加利子

明けのころる星影ひくゝまたゝきて鷄は鳴きけり夏のあけぼの

夏の月　　香川　松永蔦子

流れゆく小川の水に涼しさのかげこそ見ゆれ夏の夜の月

麥畑　　東京　毛田みや子

みどりなる布引きわらす麥はたに春かせふきてのどかなりけり

雉　　香川　星野ひさ子

ありあけの月は白みてやまはたの麥生のおくにきゞす鳴くなり

春月　　大和　栗山たか子

さきにほふ花なきさとの夕つきはおほろけならぬ心地こそすれ

朧月　　東京　堀田たけ子

夕暮につゝまれながらゆく馬子のうたもかすけき野のおぼろ月

桃源　　神戸　足立ゑい子

水かみのふかきすみ家は跡たえて桃のはやしにはるかぜぞ吹く

春雨の夜　　北海道　武　小町子

まくら邊の小さき燈灯かきあげて文くる夜半にはるさめの降る

春の野　　三河　神戸しづ子

今日もまたすみれさく野に過しけりみやこの友の道しるべして

春興　　大分　護城鶴代子

花は咲きわか草もゆる春の野はいとまなき身も野邊にひと日を

菜花　　羽後　鈴木しゆん子

凪ひきや眞柴のつま木折りに來てかゝる高ねの花を見むとは

櫻　　福岡　三原すな子

こてふにはあらぬわれさへ咲匂ふ花のあたりははなれかねつゝ

花のかげ　　讃岐　藤井つぎ子

花のかげにくれゆく春を惜むらん小田の蛙のもろごゑになく

堤上眺　　伊勢　田中千賀子

春ならで見かへるものもあら川のはなにひかるゝひとごゝろ哉

落花　　福井　岩橋花子

散る花にむつるゝてふのそてのうへに春の名殘をとめてける哉

同　　肥後　友永章子

木のもとにたゝすみをれは黒髪もしろくなるまてちるさくら哉

同　　東京　神田けい子

しばらくは春の惜しさも忘られて散り行く花のおもしろきかな

名所殘花　　東京　古谷はな子

くれて行く春のなこりとみよし野や青葉のかけのおそさくら花

山路落花　　大和　天野照子

たび人や袖寒からずこゆるらん花のふゞきの志賀のやまみち

蛙　　東京　四村直子

みさひゐて月もうつらぬにこり水いつより住てかはつなくらむ

雨の海棠　　越路　松永しげ子

うつくしう庭にさいたるかいどうのはなに雨して春もくれゆく

山吹　　東京　湖藤千代子

賤か家も黄金花咲くやまぶきのいろなつかしきときは來にけり

暮春懷舊　　備後　石井妙子

ふるさとの宿のしば垣あれはてゝいかにわびしく花のちるらん

水邊藤　　東京　河合象子

中島の松ふくかせにおとかりてみきはにさわくいけの藤なみ

水邊藤　　東京　登田とよ子

御けしにもかゝりやすらむ吹上のみそのゝ池のふぢなみのはな

池藤　　相模　大谷津みれ子

ゆく春の名ごりをこゝにせきとめて風にゆらゝくか池のふぢ波

卯花　　大阪　田中れん子

何となくゆかしかりけりさゝ川のなかれにそひし卯の花のやと

同　　信濃　土屋彰子

暮れてゆく人のすがたの映るまでみてらの庭に咲ける卯のはな

同　常陸　岡田萬子
白川なくだる夜ふれぞおもしろき岸のうつ木のはなのさかりに

同　臺灣　山崎絹子
友よ來ませ今宵わが家の破れがきの卯のはなかげに昔がたらん

つゝし　名古屋　林田糸子
くれなゐに咲きつゝきたるつゝし原いつこを花の限りなるらむ

山家　三河　榊原きく子
琴のねや松吹くかぜにかよふらむみやこはなれし山ざとのいほ

山里の夕　群馬　大澤華子
賤の女のおりたく柴やけふるらむかすみて暮るゝ山もとのさと

松島　下總　渡邊澄子
名にしあふそのみちのくの濵こえてかすみの上に松のしけれる

笠置山　伊勢　黒田代音子
かさぎ山ふもとの里にゆきくれてむかしをしのぶまつのした露

蜘蛛　大和　栗山俊子
さみだれのはれにしけさの庭みれば露のたまちるさゝかにの糸

恨みの枝　東京　永井ふさ子
手折らんとおもひし枝の花ちりてねむる蝴蝶の飛ぶもうらめし

折にふれて　東京　爾津梅子
すみだ川花のあとゝふひともなしうつろひかはる此よなるらむ

同　讃岐　香川節子
うばらの花一枝をりてかめにさし君まつゆふべほとゝぎすなく

同　新潟　岩本芳子
なみのれも月にすみゆくしものせきふしおもしろき舟子の追分

同　伊豫　益田春子
ちりて行く花のこがけにやどかりてへだてぬ君とかたるけふ哉

學校　神奈川　汲田治子
學びやに通ふ少女のけなげさよかよわき身をもいとはざりけり

觀兵式　東京　美矢竹光子
草もゆる青山はらにものゝはつどひてむかふすめらみことを

商人　三河　永井さい子
あき人も太刀こそはかれ外國とちからあらそふ世に社ありけれ

輕業師　埼玉　横田初子
引わたす只ひとすぢの細つなをわたるもおなしうき世なりけり

夢　越後　須藤婆貝子
乘りもせず歩むともなく古里に通ふはいめの力なりけり

同
こゝかしこむかしも今も時ところ一つにわたすいめのうきはし

五月五日靖國の社を訪ひて　東京　佐藤のぶ子
人しれすなみたの袖やしほるらむあなあら神の妻子はらから

都なる弟よりの文に入りにし花をみて　伊豫　高橋茂子
色あせし花も嬉しと見つるかなおくるこゝろのいぢらしくして

母君のみ旅を思ふ歌のうちに　長野　岡田千穗子
棚引るかすみをわけてはゝ君はこゝろのとかに越えたまふらん

今年一月一日に母のみまかりたれば　上州　飯田かつの
なつかしな母にわかれてなにごとをおもふも淋し朝なゆふなに

茨木みす子の身まがりしをかなしみて　伊勢　神田みよし子
のこされし言葉の花を見るからにいやしのはるゝ君がおもかげ

神功皇后　薩摩　松原みれ子
たをやめの御身にて遠くから國を靡けて稜威あげまし〻とは

源頼朝　埼玉　横田やな子
いつのうみや石ばし山の一おろし天のしたふくはじめなりけり

俳句

天賞

若葉　伊勢　田島市子

灯ともして庭の奥まる若葉かな

評　若葉の露にやどれる灯かげの涼しさの、此上なう愛でたきものから

地賞

蚊　東京　中津しん子

蚊を追ふて見直す孫の寢顔哉

評　蚤にもくはせぬといふた、以後蚊の一項を加ふる事になれり

人賞

菜の花　常陸　兒玉好子

菜の花や川を隔てゝ女學校

評　やさし乙女の文學ぶさまも偲ばるゝなり

選外秀逸

若葉蔭　越後　松永しげ子

杜鵑なく〳〵姉が墓に行く

評　血を吐く思ひあらん、

卯の花のかげにやさかむ杜鵑

片われの月になきけり杜鵑

葉かくれ　常陸　兒玉好子

若葉して稲荷の鳥居かくれけり

評　紫にはあらで綠の朱を奪ふなり、

若葉して庭奥深くなりにけり

二つ三つ藪の浮く池や藤の花

行く春や人さま〴〵の物思ひ

夏の日　神奈川　由樹しづ子

麥長し日長し車の音緩し

評　蜻蛉などの我世顔に飛び交ふさまなどもほの見ゆるなり

若竹や揺れてすゞしき蟬の羽衣

都と鄙　東京　豐田とよ子

辻が花や都へやりしひな娘

評　行儀見習ひに行きてわるき事覚えぬやうにしたし、

三條は人のよるとて風薫る

墓殿は田一反の主かな

評　古句の「我はこの畝かげの墓にて候ふ」と對をなす名句なり

初夏の花　神戸　足立ゑい子

馬繋ぐ木も立てゝある牡丹かな

評　馬繫く仕掛け、富貴草だけに面白し

卯の花の雪かぶりけり雨の鷄

菘の野　　伊賀　菊山かね子

菜の花にうもれて女歩みけり
のしつけて京に送るや初わらび

評　あながちに京をケチな所と思ひてにはあらざるべし

夏四句　　讃岐　安藤光代子

島四國めぐり終へけり日の永き
蚊帳賣の隣の村へ廻りけり

評　暑さうなる田舍の夏先づ蚊帳よりは木陰なと思ふほどに

梅雨や京より新茶つきにけり
鐘の音や青葉の奥の札所哉

同　　常陸　岡田萬子

蝶鳥の夢も覺めたる若葉哉
玄海に波騷く夜や杜鵑
ゆかしさや京の女の單衣

評　加茂川の水にさらせし肌の色さへ見えて乎

蝙蝠や灯ともす市の柳かげ

明日知らぬ人の身にして花見かな　　羽後　鈴木しゆん子
花蔭を横顔して散歩かな

初夏や室の渚のかゝり船
初夏や山美くしき朝ぼらけ
着倒れは京の自慢や初袷
難波江のよしあし草も茂りけり
舟の灯の水にうつりて月凉し
鶯やいそぐ使の足をとめ
五月雨にかさの文字よむ二階かな
ほとゝぎすきけば此山このいほり
よそをみな闇にしてさく花うつ木
凉風の懐に入る樹陰かな
發句書いて一壷の新茶封じけり
昏前に蓋の蚊のよふ新茶かな
若竹や猢猻かけたる窓の外
河骨や雨の最中に田草取
春風や人のこゝろも草の上
千丈の瀑にすてたる團扇哉
蝶々ののぞきて行くや乳母車
なみならぬ御幸を拜す若葉かな
春の日や猫だく妹の袖あかき
敷島の民のたからや田植歌
巡禮の袖にうつるや花あやめ
夏近し野の色みても山みても
蓮の葉をころげ落ちたる螢哉
小流れや浮葉を舟に青蛙
さみだれの空には惜しゝ時鳥
老松の梢にさびし不如歸
降りやんだ後をまたふる時雨かな
鎌月にきられし聲かほとゝぎす
柳かげに人あらずして夏帽子

横須賀　高橋常子
能登　栗倉すみれ子
松山　上原のぶ子
同　野菊女
近江　室谷由加利子
東京　佐藤のぶ子
東京　堀田たけ子
新潟　岩本芳子
水戸　吉田靖子
大阪　田中靜子
尾張　野の花

蝉なくやせのひしてとる小供つれ
長閑さや鳶の輪を舞ふ檜皮屋根
蝶の舞ふだけはまちけり庵の庭
散かけて女の多き花見哉
傾城の心に遠く花見かな
螢火の消えてしと〳〵草の雨
金屏に夕日を畳む牡丹かな
春風や人に馴れたる都鳥
鳴水鶏声の丸家の小雨哉
厳島霞の中の鳥居かな
ほたる狩弟は六ッ姉は十
水門のほとり三ッ四ッ螢とふ
夏やせをかこち顔なる女かな
行水の嫗の口の達者さよ
いと古き幟建てけり人の家
船止め若葉の岸を登りけり
寺畑や茶摘男のうたもなく
呼び止めて人ちかひなり更衣
絵日傘やこましやくれたる隣の子
別荘や軒端に近く藤の花
秋にも香の残る新茶哉
夕立におとろく蟻の葉舟かな
花ちりて何処も青し麥の畑
湯あかりや裸ですゝむうら畑
海棠に蝶とひくるや雨のひま
温泉の宿の赤き小旗や春の風
青柳に出舟をまれく女哉
町中や櫻にかけし絹行燈
永き日やおうな日南に糸車

上毛　大竹しげ子
仙臺　山形幸子
神戸　水越美子
廣島　富樫てる子
東京　新城濱子
上野　綿ゆきよ子
讃岐　香川節子
香川　松永茂子
東京　永瀬茂子
長崎　秋山虎子

春園に宗匠お一人薄茶哉
振子にみとれて夢を結ひけり
化粧室や衣桁にそよく春の風
春雨やしめりがちなることの音
短夜の明けて下部のあくひ哉
うたゝねに夏の夜明けて鶏の聲
短夜や雨に更けたる旅まくら
五月雨や池に蛙のさゝめこと
長閑けさや蝶追ふ牛のうなり聲
晝かさ賤が伏屋に胡蝶舞ふ
墨堤のボートレースや春の雨
櫻散りて庭は眞白に春の雪
翡翠の眞菰刈る手を外れて飛ふ
落不落梅を考ふさつき雨
人住まぬ家を廻りて柿の花
蛙なく里はかしまし梅雨の空
初夏や夜市のはしの金魚賣
聲さへ地にも落さす初松魚
神殿に子供集まる春の雨
花ちると見れは蝴蝶のもつれ哉
蝶舞や小枝にかけし花はさみ
朧月加茂の堤を歩みけり
雛の巣を空に眺めて雲雀かな
孫連れて嫗と野に聞く雲雀かな

北海道　永富藤子
北海道　武小まち
水戸　友濟たゑ子
東京　野中雄三子
東京　小林よし子
神戸　藤木梅子
上毛　大澤筆子
神戸　足立あさ子
東京　永井ふさ子
京都　高丘春子
薩南　山崎絹子

◎和歌兼題

▽七月　夏月　筆
▽八月　朝顔　夕顔
▽九月　松虫　女郎花

新欄の開始

次號より『誌友』といふ欄を設け、左の方法により、讀者即ち誌友諸孃の便利を圖るべし、

▽本誌の讀者は、本誌に向つて諸種の問を發するを得。但し其問題は婦人必要の事にして、出問者は住所姓名を明記せられても差支なき範圍のものに限る而して其問は本誌に掲載し、更に廣く讀者の解答を求め、又大に必要を感ずる事に就てはそれ〴〵專門大家の説を聞きて掲載すべく、單に手近き問合せ即ち住所等の如き事は、直に其答を問に附記すべし、

▽本誌の讀者は、本誌の記事に就ての希望あらば、遠慮なく述べられたし、本誌は成るべく多くの希望に添ふやうに勉むべし、但し其希望は、本誌の品格を低下せぬ程度にありたし、

▽本誌は讀者諸孃が誌上に於ける交際に便すべし、而して互ひに徳を進め智を研くべく、却つて相互品格の低落墮たらざるやう心すべし、

▽本誌の讀者にして和歌俳句の添削を望まるゝ方は詞藻欄擔當記者に於て時間の許す限りは、無料にて其乞に應ずべし、

本欄は差當り前記の如き條件を置きたり、相成るべくは讀者諸孃の便利の爲に、極めて多く使用せられんことを望む、

新刊紹介

◎門の草　如山堂發行

本書は小山内八千代子女史の小品文をあつめたるものにして、裝釘の美と、文章の美と相俟つて、机上の珍とするに足る、細評は他日に讓る、定價五十錢、

◎ふところ日記　闌屋書房發行

川上眉山氏の紀行文なり、例の輕妙の筆を以て、一讀其境に遊ぶを禁ずる能はざらしむ、製本洒脱、旅行用に便也、定價十八錢、

◎冥途の飛脚　同

淸水橘村氏が梅川忠兵衛に同情をよせて歌ひたるもの也、定價五十錢、製本紐つきにておもしろし、

◎Beauty and the Beast.　同

次號の二大記事豫告

華族女學校改革に就て

華族女學校の改革は、教育界に於ける一大問題なり、隨つて議論百出、種々の魂膽說さへ擔出されて、寒心すべきものなきにあらず、

この改革に就ては利と認めるものにして、猶害の幾分を認むるものあらん、害と認むるものにして猶利の幾分を認むるものあらん、或は利多きか、或は害多きか、

早稻田大學教授福岡秀猪氏、及び子女の籍を今の學習院女學部に置ける名家數氏、全く同校に關係なき教育大家の說、此燒點に當れる同女學部長下田歌子女史の說を掲げ、烏の雌雄は讀者諸君の判斷に任せ、いさゝか教育上の一參考に資せんとす、

訟廷より得たる婦人觀

野口男三郎事件は、人憎むべく、事いまはしく、文字にするさへ筆の穢れを覺ゆるなり、されど男三郎の犯せし罪の訟廷に現はるゝや、其副產物として、世の家庭に一大注意を與へ、世の婦人に一大教訓を與へたり、實に男三郎は家庭と婦人問題に關係して、恐ろしき罪を犯せり、多くの家庭と婦人は、第二の男三郎事件を生まざる注意を要するなり、

この事件が生みたる婦人觀を、第一審に裁判長として評判高き今村恭太郎氏を初め、關係せる辯護士、其他教育大家宗教大家諸氏によつて、語らるゝ所を記し、大に人道に裨益する所あらんとす、

この二件を一つに記すは、いさゝか不倫の如き感あれど、等しく教育の立場より論ぜられたるなり

投書規則

▽一 投書者は歌文の側に、一々宿所姓名を明記せられたし、單に名、又は號のみのものは採らず、

▽二 字體は楷書にして、おくり假名は平假名にせられたし、雜誌への原稿を手紙でも書かれるつもりにては困る、草書に變體いろはの多きものは採らず、

▽三 文も歌も、題の改まる毎に、用紙を改る事、此規則によれば端書にても差支なし、相成るべくは半紙に認めて、開き封（第四種郵便物として）にておくられたし

兼題和歌は『はがき』にてもよけれど、一題づゝ別に認められたし、一枚に數人の作を記したる如きは採らず、

投書はすべて女子に限り、以上の規則も要するに女子らしき投書の仕方、所謂書生流にあらざるを、其人柄とゝもに採りたき也。

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貳冊	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年五月廿八日印刷
明治三十九年六月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社（電話新橋二六九三番）（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

島田佳矣・野口駿尾 共著 ◉ 女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價 松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢 郵稅各二錢

棚橋絢子 著 ◉ 女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子 著 ◉ 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子 著 ◉ 女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

磯部武者五郎 著 ◉ 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢

藤野天城 著 ◉ 女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

堀内新泉 著 ◉ 女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

松川覓州 著 ◉ 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢

堀内萩泉 著 ◉ 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢

女鑑編輯局 編 ◉ 編 ひめかゞみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

- 梅澤清一著 ● 清少納言と紫式部　全　定價金卅五錢　郵稅金六錢
- 鹽谷愛著 ● 萬國女子風俗　全　定價金二十五錢　郵稅金四錢
- 堀内新泉著 ● 少女讀本　全三冊　定價各金十八錢　郵稅各金四錢
- 大町桂月著 ● 常盤御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 小林雨搭著 ● 勾當の内侍　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 濱田廉著 ● 袈裟御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 國府犀東著 ● 靜御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 長田偶得著 ● 顏世御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢
- 杉谷正隆著 ● 家庭訓歌 修身百首　全　定價金二十錢　郵稅金四錢
- 高瀨眞卿著 ● 學校家庭 修身一夕話　全　定價 特六十錢 並三十八錢　郵稅 八錢 六錢
- 指原乙子著 ● 女子文章軌範　全　定價金三十錢　郵稅金四錢

◉學校生活　全　東京高等師範學校附屬小學校編纂　定價金廿錢　郵税金四錢

◉教育者と國家社會主義　全　樋口勘次郎著　定價金八十錢　郵税金八錢

雜書類

◉讀書と修養　全　登張竹風著　定價金三十錢　郵税金四錢

◉四季物語　全　幸田露伴編　定價金五十錢　郵税金四錢

◉クレオパトラ　全　佐藤天風著　定價金廿五錢　郵税金四錢

◉長曾我部信親　全　醫學博士森鷗外著　定價金十錢　郵税金二錢

◉泥舟遺稿　全　安部正人編　定價金四十五錢　郵税金六錢

◉王學指掌　全　伯爵副島種臣題辭　從二位尾崎忠治題辭　鹿川宮内默藏著　定價金一圓　郵税金十錢

◉天朝正學　全　從六位內藤耻叟序　故正三位文學博士栗田寛著　定價金卅五錢　郵税金四錢

◉名家修養談叢　全　文學士吉丸一昌編　定價金卅六錢　郵税金八錢

◉榎痴居士と市川團十郎　全　榎本虎彥著　定價金卅錢　郵税金四錢

◉腦力增進論　全　小崑幾次郎著　定價金卅五錢　郵税金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

清藤正輔謹編 ● 皇后陛下御略記 坤徳 上製 並製 定價 上製金卅五錢 並製金廿五錢 郵税各四錢

小島鐵次郎著 ● 國民力增進論 全 定價金四拾錢 送料金六錢

清藤正輔編 ● 西郷道 全 定價金廿五錢 郵税金四錢

清藤正輔編 ● 聖徳太子傳 全 定價金十錢 郵税金二錢

福本日南著 ● 筑前誌 全 定價金一圓廿錢 郵税金十錢

第五回内國勸業博覽會事務局御編輯 ● 第五回内國勸業博覽會 出品審査概況 全 定價金十五錢 郵税金四錢

宮崎滔天著 ● 卅三年之夢 全 定價金卅三錢 郵税金八錢

宮崎滔天著 ● 狂人譚 全 定價金二十錢 郵税金四錢

澁澤男爵題字 高瀨魁介編纂 ● 澁澤男爵 最近實業談 全 定價 上製金七十錢 並製金六十錢 郵税各金十錢

北海道廳拓殖課御編纂 ● 北海道殖民圖解 全 定價金八錢 郵税金二錢

宮田鐵之助題字 須田每六著 ● 銀行利用法 全 定價金四十錢 郵税金六錢

故品川彌次郎 平田東助 共著 ● 信用組合法提要 全 定價金五錢 郵税金二錢

獨乙大博士ウヰル、ヘルム、ロッシエル氏著 平田東助、平塚濶次郎、湯川寛吉共譯 ● 商工經濟論 全二冊 定價金一圓八十錢 郵税金十五錢

濱口吉右衛門、著 ● 財政と國力 全 定價金廿三錢 郵税金四錢

女鑑

明治三十九年六月一日發行　毎月一回一日發行　第拾六年第七號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

